
66% Attack!

麦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

66% Attack!

【Nコード】

N4186M

【作者名】

麦

【あらすじ】

三つ子の末っ子・葉介が、池の底の世界へ吸い込まれた！ 三つ子の真ん中・花奈も弟を助けるため勢いだけで異世界へ身を投じるが、葉介には家に帰れない事情が出来てしまっていたらしく…？ 科学の皮を被ってるだけの魔法理論と、人の意識から産み出される価値あるもの。ラスボスフェイスの刺青男、嘘つき策士にヤンデレ美少女。その他大勢それぞれ思惑も事情もありそうだけど、それはさておきおうちへ帰ろう！ お姉ちゃんの奮闘記。

弟が、異世界に呑まれた。

その時私は兄、弟と協力して三人、庭の掃除をしている所だった。昔から、ごきぶり退治でもおねしょを報告するのでも、気乗りしない事は三人揃って頑張る、ガルールだったからだ。何故そんなルールかというと、私達が三つ子だからだ。名前も私が長女で花奈、長男が幹也、そして次男が葉介という風に、三人仲良くコーディーネートされている。

長男幹也は、三十分違いの私の兄だ。おっとりしていて、少し線が細い。柔らかくて細い髪が将来のハゲを心配させるけど、色白でわりと美少年っぽい。トーマの心臓の主人公に、ちよつと顔が似てるかなと思う。大抵いつも本を読んでいて、ものすごく勉強が得意だ。世が世なら世界を掌握していたに違いない。多分今の世でも、ノーベル賞を三つ四つは取るだろう。と、私が言つと幹也は笑う。私のテスト対策は幹也がしている。

次男の葉介は、十五分違いの私の弟だ。すぐ『だるい』とか言つて昼寝ばかりしている。なのに何故か中の上の成績をキープしているし、小さい頃からやってる剣道でも、大会ではなかなか良いところまで行く。多分悪知恵が働くのだろう。顔も、少女漫画のヒーロー役と言つたら分かりやすいと思う。よく分からない。整ってるけど、あんまり特徴がない。特徴が無い割にはオーラがある、と私が言つと、葉介はちよつと嬉しそうにする。可愛い奴だ。私の補習対策は葉介がしている。

長女の私とは言え、とにかくひたすら愛嬌があるのが取り柄だ。つまりそういう事だ。二人の兄弟に手伝ってもらつても、何故か成績は伸び悩んでいるし、昔から取り組んでいる合気道には試合が無

いので実績もつかない。兄弟は『花奈はすぐ拗ねて諦めるからだ』なんて言うけど、とにかく察して欲しい。これが、私達三兄弟。

実は幹也が一番上なのは間違いないとしても、二番目が誰かという事は、物心ついた頃からの議論の種になっている。

うちの母さんが自宅分娩に挑んだ際、その時頼んだ助産婦さんがちよつと耄碌していて、最初に産まれたのが男の子。幹也だった事は確かめたのだけど、二番目が女の子だったかそれとも男の子だったか……つまり私だったか葉介だったか、確認するのを忘れたのだ。ちなみに私は絶対に私の方が葉介よりも上だと思っているし、お姉さんぶりもする。

今年十七になったけれど、私達は産まれる前から一緒だったし、これからもそうだろうと思う。何しろ、私達は三つ子なのだ。

私は葉介は、庭を掃いていた。いや、一応掃くのは掃き終わっていた。テニスコート一枚分は軽くある庭だから、落ち葉の量もそりゃあ相当の物だ。正直45リットルの可燃ゴミの袋を三つ作っただし、もうこのへんでいいだろうって私達三人とも思ってるけど、実はうちの庭には池もある。錦鯉は泳いでないから大した池じゃないけど、これが綺麗にならないと庭の掃除は終わらない。

というわけで、池の底をさらうのも三人でする事になった。志願者がいかなかったからだ。そりゃ当然だけど。幹也は今頃玄関の辺りと表を掃いているはずで、私達は幹也がこっちに戻ってくるのを、ぼーっと待った。私達は池の掃除という本番を前にして既にくたくただった。

「なあ花奈。もう俺と花奈でやつちまわない？俺、もう幹也を待つてるのもだるい」

私は小さなモンシロチョウを担ぐアリの行列を観察するのに忙しかったから立ち上がらなかつたけど、葉介はもう竹箒をぼいと投げ

捨てて、着ていたジャージの裾をぐいぐいまくっているところだった。

「花奈、ザルとアミ」

葉介は掃除を始める為に池の水源である地下水の蛇口をぎゅっと締めに行った。私は言われたとおり、ザルとアミを取りに行く。こうして、私と葉介が一度離れたのがよくなかった。葉介を、助けに行けなかった。

私のがのんびり物置を探っているちょうどその時、ざばーんという巨大な水音と葉介の悲鳴が聞こえた。なのに私はその時ただ、（あ、葉介の奴池に落ちたな）としか思っていなかった。かわいそうな葉介。私がザルとアミとタオルを持って池へ戻ると、私なんかが想像もしていなかったような事態が葉介を襲っていたのだ。

つまり、黒いうねりだった。池の水面が盛り上がって、ぬらぬらと黒光りしながら触手らしき物を伸ばしている。まるで塩をぶつかけられたミミズのような、もののけ姫のタタリガミのような、とにかくそういう感じのぬめつとした物が、葉介に襲いかかっていたのだ。もう水の出ていない蛇口を握りしめたまま、葉介はしばらくふんばっていたけど、サンがタタリガミになったおっことぬし様に飲み込まれていくように黒いうねりに吸い込まれ、葉介の姿は見えなくなつた。

「逃げる花奈！」

それが葉介の最後の言葉だった。駆け寄る間も無く黒いうねりは葉介ごと、池の底へ消えた。池には静寂が戻り、葉介は浮かんでこない。池の深さは30センチ程度だっというのにだ！！私はもう一人の頼れる兄弟に助けを求めべく絶叫した。

「みつ、幹也あーーーー！！！！葉介が池に落ちたあーーーー！！！！！！！！」

「拾ってやりな」

「幹也あーーーー！！！！ミミズがあーーーー！！！！！！！！」

「俺ちよつとお隣行つてミカン貰つてくるねー」

「幹也ああああー！！！！！！」

事態がよく分かつてない幹也の呑気な声が遠のいていく。

とにかく幹也の言うとおり、葉介を拾つてやらなくっちゃならない。私はザルを放り出し、アミで池を探った。

「葉介えー！ー！！ 葉介ええええー！！！！」

やっぱり、膝も浸からない程度の深さしかないはずの池は底なしになっていた。どんなに深くアミを差しても池の底には辿り着かないし、嫌がる葉介を引きずり込んだはずなのに、何故か私には黒いうねりは襲いかかつてこない。

「！！！！」

だけど、必死になれば良い事があるものだ。ほとんど半狂乱になりながら思いつきりアミでかき回していると、突然手応えのようなものにぶち当たった。何度かごんごん突いたけど、池の底という感じではない。何か、人と同じくらいの固まりだ。

もしかしたら気を失っている葉介かもしれない。でなければあのミミズかもしれない。とにかく私は思いつきりアミでその固まりのような物をつつき回した。途中で、何かに、がぶんつ、と引っかかった後、アミに何かが掴まったような手応えに変わる。私は思いつきり踏ん張つて、アミを引いた。

ぜえぜえ言いながらアミを引っ張っていると突然手応えがなくなつて、私は後ろにつんのめる。アミの先に葉介はいない。途中で力尽きて手を離してしまったのだろうか。うちの大事な葉介の代わりに、何か小さな物が引っかかっている。私はそれを確認した。

軍隊の記事のようだ。それも、めっきでない本物の金で出来ている記事。親指ほどのサイズなのにずっしりくるその記事は、ごく小さな宝石が幾つも幾つも埋め込まれていた。サファイア、ルビー、エメラルド、トパーズ、ダイヤモンド。そして真珠、アクアマリン、オパール。私が名前を知ってるのはこのくらいだけど、多分他のもの全部本物だ。絢爛豪華なのに悪趣味と感ぜないのは、記事そのもの

のデザインがネクタイピンみたいにシンプルなのと、宝石がごくごく小さい、１ミリくらいの物だからだろうか。でも勿論うちの池にこんなものが落ちているはずがない。それに、何でこの記章は濡れていないんだろう？

ひとまず記章を脇に置き、私はもう一回池をかき回した。すると、わりと浅いところで……多分１メートルくらいのところで、今度は、石っぽい感触の壁に当たった。もちろん、池の壁面ではないだろう。それを何度か突っついてみると、アミがくいくいと引っ張られる。私は今度こそ葉介が手を離さないようにじっくりゆっくり力を込めてアミを戻したけど、やっぱり葉介はくっついていない。代わりに、手紙のような物がかかっていた。私は迷わず広げた。

「……………」

よく読めない字だ。変体仮名の文書ならもしかしたら沈んでる可能性がなくなはないけど、明らかに日本語でもアルファベットでもアラビア文字でもギリシャ文字でもハンゲルでもない。紙も、紙すら普通じゃない。普通のA4用紙のような真っ白い紙ではない。うっすら黄みがかって、手触りはわら半紙に近かったけど、多分それよりもっと上等の紙だ。何より普通じゃないのは、池から引きずり出したのにやっぱりこの紙も、全然濡れていない事だ。

私はとうとう確信した。

「異世界だ……………」

うちの葉介は、異世界に呑まれたのだ。そうとしか考えられない。うちの池は異世界に繋がっていた。アンビリーバボー。つまり、弟が水死しているという最悪の可能性は消えたわけだけど、私はしばらくへたり込んでいた。ほっとするやら、混乱するやら、どうしたらいいか分からなくなってしまったのだ。弟が溺死してなくて本当に良かった。でも、弟が目の前で異世界に行っちゃった場合、姉は一体どうしたらいいんだろう。でも、いつまでもぼーっとしてるわけにはいかない。弟のピンチなのだ。

私はとにかく異世界で必要そうな物をこつちから仕送りしてやる事にした。私のモットーは備えあれば憂いなし、だ。今そう決めた。

まずは食べ物だ。芋虫ばかり食わされる世界だったら、葉介はやせ細って死んでしまう。私は縁側から家の中へ飛び込んで、まず目についたポテトチップスの袋を池へ投げ込んだ。浮力が強すぎるかなと思ったけど、ポテチの袋はちゃんとずぶずぶと池へ飲み込まれて見えなくなった。私はもう一回台所へ行つて、飴玉の袋やらバームクーヘンやら柿の種やらカップラーメンやら、とにかく手当たり次第にがんがん池へ投げ込んだ。ついでに賞味期限が切れそうになつてた卵のパックと牛乳も、ペットボトルのなっちゃんも池に投げ込んだ。野菜も摂らなくちゃいけないから、増えるワカメと、庭の家庭菜園ゾーンからナスとトマトとカボチャをたくさんもいで、それもぶつ込んだ。水しぶきが私にかかる。

物置で目に付いた、おじいちゃんの遺品である釣り竿もぶち込んだ。これで何か釣ってくれば、差し当たって飢える事はないだろう。釣り道具のボックスも、全部放り込む。おじいちゃんごめん。葉介の為なの。ついでにサランラップとアルミホイルも、アジシオコシヨーとうすくち醤油も入れてやった。持つておけば何かに役立つだろう。主に料理に。葉介一人でもちゃんと自炊してくれる事を祈る。

それから武器だ。まずは葉介の木刀と竹刀を投げ込む。防具も抜かりなくぶつ込む。防具は抱えるときちよつと……いやかなり臭かつたクワと、高枝ばさみも入れる。とりあえずはこれで凌いで欲しい。後は、後は……。私は救急箱を抱えてきて、池に入れた。ついでに家庭の医学も。乾燥するといけないから、リップクリームも投げてあげた。化粧水と乳液と日焼け止めも、多分葉介は使わないだろうな、と思いながら私を入れてやる。

そこでやっと思い出して、ブラシと洗顔フォームと歯ブラシとクリアクリン（アップルミント）も入れた。パンツとかの下着類と、

あったかい冬物の服と、涼しい夏物の服と、ついでにスニーカーをジップロックの袋にパックして、これもガンガン投げ込んでやる。あ、洗剤もいる。お歳暮でもらったアタックの詰め合わせも投げた。葉介一人でもちゃんと洗濯してくれると良いんだけど。夜冷えるかもしれないから、毛布も三枚入れてやる。

他に何か必要なものあるかな、と私は必死で頭を巡らせた。とにかく手当たり次第に入れてやらなくっちゃならない。

私はもう一回物置に戻って、今度は父さんが単身赴任中に使ってた、小さい冷蔵庫を引きずって来た。投げた食べ物の保存に困ってるかもしれないからだ。でも冷蔵庫を池へ蹴り込んだ後で気付いたけど、異世界で電気が使えるかどうか実に怪しい。私は考えた末、延長コードとキャンプで使う発電機も投げ込んだ。これで何とか色々頑張つて欲しい。色々。

お風呂に入れない日が続くかもしれないし、香水と制汗スプレーとすつきりパウダーシートも投げてやる。移動手段に困つてるとしんどいだろうから、三人お揃いのマウンテンバイクと、葉介がバイクとして買った原付も引つ張つて突き落とす。ヘルメットも忘れずに。

暇だとかわいそうだから、DSとiPodとその充電器もジップロックに入れて投げた。ちょっと考えて、私は葉介の携帯もジップロックに入れて池に投げ込む。それで、私の携帯から葉介へかけてみる。圏外だった。やっぱり異世界には電波塔が建つてないらしい。更に更に、もしかして葉介が異世界に行つて、モテモテになる可能性も否定出来ない。親の寝室へ行つて、コンドームを出してきてこれも投げた。父さん母さんごめん。コンドームの隠し場所娘が知つててごめん。

とにかく何でも入れた。テントセットとか、ビニールシートとか、腕時計とか、ピンセットとか、工具箱とか、ラジオとか、化粧品とか、ハンカチとティッシュとか、トイレトペーパーとか、手鏡とか、宴会用のマイクとか、メガネ拭きとか、コンタクトレンズの洗

浄液とか、ライターとか、扇風機とか、風呂敷とか、中華鍋とか、包丁とか、まな板とか、味の素とか、カセットコンロとか、日よけのよしずとか、ペンケースとか、リヤカーとか、ヨガマットとか、温度計とか、ハンターハンターの最新刊とか、思いつく限り全部入れた。

最後に家族写真を写真立てごと池へ投げてやって、私はせえせえと上がった息を整えた。それから、頬の涙をぐいっと拭いた。手が泥だらけだったから顔にも多分、ついただろう。

「葉介ー、葉介えー……」

幹也はまだ帰ってこない。隣のおばさんは話が長いからだ。私は池の側で腹ばいになって、右腕を思いつきり池へ突っ込んだ。水のような感触はするけど、濡れてない。私は思いつきり腕を動かして、何かに触らないか探した。

しばらく何にも触らなかった。でもいつまでも辛抱強く腕を回している、ふと私の手の平が、誰かに握られる。私は思わず叫んだ。「葉介!!!」

剣だこのついた、男性の手だ。私はその手を固く握り返し、今度こそ力の限りその手を引っ張った。だけど、葉介の手が私に答えてくれる事はなかった。ただ、もう片方の手で私の手の甲を優しく撫でただけだった。そして、私の掴む指を優しく剥がしていく。

「葉介！ 葉介っ!!!」

とうとう全部剥がされて、私の指はまた、何にも触らなくなってしまった。どんなに手をさまよわせても、何かに触れる事はない。

さっきまで葉介と握り合っていた右手を、私は見た。まだほんの少しぬくもりが残っている。たった今まで、弟と手と手がつながっていたはずなのに。

「……………」

私は起き上がって、木の枝を握った。たった一度振り払われたくらいで、こんな所でめげているわけにはいかない。拾った記事と手紙を引っつかみ、帰ってこない幹也へ木の枝で地面に伝言を残す。

『ちよつと葉介拾ってくる』

私は助走をつけて、池の中央へ飛び込んだ。何のためらいもなかった。弟がピンチなのにただぼーっとしているような奴は、姉ではない！

落ちている感覚は、ほんの一秒ほどもなかった。真つ暗な空間を抜け、足下から光が差す。

運動神経は悪くない方なので、大きな音を立てながらも着地もばつちり決め、私は辺りをぐるっと見回した。粗末な木の大きなテーブルがあつて、そこへ私は着地したらしい。

その私が立っているテーブルを四、五人の男達に取り囲んで座っていた。それに葉介は混じっている。葉介は、さっきまで着ていたジャージなんかじゃない、もっとしっかりした軍服のような物を着ていた。それに、ほんの一瞬でかなり日に灼けたようだった。別に栄養失調に陥つてるような様子はないけど、髪の毛も服も埃だらけだ。

「葉介！ 無事だった？」

私がテーブルに立ったまま葉介に聞くと、彼はあんぐり開けていた口を一回閉じて、また開き、こう言い放った。

「花奈？ お前何で来たの？」

「……………」

心配して来てやったのに、その言い草は無い。

The 1st Attack!! 1 (後書き)

トーマの心臓：1974年に週間少女コミックで連載された耽美系の少女漫画。なお、主人公はトーマではなくユーリといい、別の少年です。

もののけ姫：人間と自然の戦いを描いた1997年公開のアニメ映画。タタリガミは巨大なミミズが固まったような姿をしていて、触れると呪いをつけます。

アンビリバボー：1997年から放映され、心霊現象や事件事故などを検証するバラエティ番組。花奈はアンビリバボーと勘違いしています。

私は憮然とした。とにかくお行儀が悪いので、何はともあれテーブルを飛び降りると、私が今まで立っていた足元から地図や書類らしきものが色々広げてあったのが出てきた。でも、私のスニーカーについていた泥でぐちゃぐちゃになってしまっている。不可抗力という事で許して欲しい。

ここはテントの中のような。テントと言ってもよくあるピラミッド型のじゃなくて、地面を四角く布で囲ったテント。テント地は幌布みたいなごわごわして目の粗い生地で、それをつやつやした照りの、透明な塗料で塗り固めてある。質感が瞬間接着剤を塗った跡に似ているから、多分防水のためだろう。四隅を支えるのはアルミっぽい金属だ。広さはだいたい十畳くらい。天井全体が白く光っていて、テントの中は薄明るい。

葉介は、私が今まで立っていた足の細いテーブルを囲むようにして、テーブルと揃いの椅子に腰掛けていた。葉介の隣にはくりくりとした目で赤の猫っ毛の女の子が寄り添っている。十八、九くらいだろうが、非の打ち所のない顔立ちをしているけどやっぱり一番のチャームポイントはふっかふかふわっふわの髪の毛だろう。まるでキャンディキャンディのような。とにかく、撫で回したくなるような魅力的な髪の毛をした美少女だった。

もしかして葉介の彼女だろうか。たった今吸い込まれたばかりだったはずの葉介は随分、この異世界に馴染んでいるようだ。まるで葉介はもうかなり長い事ここで暮らしている風に。私は葉介にこそっと耳打ちする。

「今って何かの会議中だった？ ていうかもしかして、もしかしながらも、うちの庭とこっちとで時間の流れ違ってるよね？」

葉介は気まずそうに、一緒に席に着いていた人達を気にしながら私に返事した。でも何故か美少女の方は全く見ない。紹介してくれ

てもいいのに。

「まあな…それより花奈、よりによって何で今来たの？」

「今って言われても…私、葉介が落ちてからほとんどすぐ来たよ」

「お前が葉介の妹か」

ひそひそ姉弟同土話していると、地響きみたいな低い声がそれを止めた。テーブルの中で一番偉そうな人だった。何か顔の右側全体に蔭みたいなたトゥーが入ってるけど。葉介が着ているのとよく似た軍服を着ているけど、葉介のよりも数段豪華な感じだ。肩や胸にたくさん飾りがついていて見る所を見ると、かなり偉い人らしい。そして理由はよく分からないけど、この人は今、ものすごく怒っているように見える。すごい迫力だ。現実逃避したくなるくらい怖い。

「妹じゃなくて姉です」

一応訂正だけはしたけど、葉介はそんな事には全然かまってるないらしい。葉介はがたーん、と椅子を蹴って立ち上がり、テーブルに手をつけて思いつきり頭を下げた。

「悪い！！昔俺がこたつに閉じこめたせいでこいつの脳味噌はタルタルソース並にゆるいんだ！！見逃してやってくれ！！」

「ちよつと！」

いくらなんでもタルタルソースは言い過ぎだ。私は葉介の背中をどついた。それにまだ何もしていないのに見逃すも何も無いじゃないか。どついたらついでに、私は葉介が頭を下げてる相手をじつと見つめた。葉介が一体どんな人に世話になってるのか見定めてやろうと思ったのだ。

まず最初に目に付くのは、さっきも言ったけど顔のたトゥーだ。最初は蔭だと思ったけれど、ただの蔭じゃない。だまし絵のように鳥や、百合の花や、杯なんか紛れ込んでいるというかなり手の込んだたトゥーで、黒一色でこめかみから眉、ほっぺた、鎖骨、喉仏の更にその下までびっしり入っている。この分だと多分臉にも入っているだろう。間違いないかたぎの人ではない。まあ、軍服を着ているから軍人なんだろうけど。

タワーのせいで年齢はよく分からない。目鼻立ちも端正と
ていいし、肌も左半分の方は張りがあるようだけど、全体的な若々
しさとか目の輝きとかは無いから、だいたい二十七、八、と見た。
表情のこもらない冷たい目は藍色で、私を値踏みしているように見
える。それにうちの葉介の髪は埃塗れなのに、後ろで一つくりに
された目と同じ色の髪はつやつやして、エンジェルリングまで浮か
んでいる。きつと奴隷か何かに椿油でマッサージさせているのだろ
う。なんて奴だ。

まず間違いなく悪い奴だと見定めて、私はぐつと背を伸ばした。

「花奈です！ 葉介の姉です！ うちの葉介返してもらえますか！

！」

「誰が姉だ！」

葉介は今度はすかさず否定したけど、その一番偉そうかつ悪そう
な男は静かに席を立つ。思ったよりも背が高い。百八十は軽く越え
ている。何だヤキでも入れに来るのか、と私は思った。何度も言う
けど、とにかく悪そうだ。一挙手一投足に迫力があって、今にも何
かしでかすような雰囲気を出している。ゲームで言うなら間違
いなくラスボスだ。三段階に分けて変身するに違いない。

頭を下げたままの葉介がぐくりと喉を鳴らすのと同時に、何故か
どこかで、からからきん、という金属同士がぶつかり合うような音
が聞こえる。

「おいジュノ…俺の妹だからな…なんかしやがったら今度こそマジ
で亡命するからな……………」

「……………亡命？ 今度こそ？」

葉介は妹発言以外にも聞き捨てならない事を言っていたけれど、
まずは目の前の脅威に立ち向かわなくちゃあならない。

私は葉介の代わりに背筋を伸ばして、その悪の親玉の視線を真正
面から受け止めた。見上げていると首が痛い。

「……………」

「……………」
よくぞここまで辿り着いた…でも何でも良いから、何か言って欲しい。こちらとらわざわざ日本から出向いて来てやっているのだ。ただただ見つめ合う時間を漫然と過ごした後、とうとう親玉は私から目を逸らし、口を開いた。

「……………」今日の会議は中止だ。今回の件はまた日を改めて検討する。葉介、お前の妹をどこかに連れて行け。こいつが投げた物を全てリストに起こさせろ」

少し、頭痛をこらえるような仕草を見せて、親玉はふいと背を向ける。…………私と睨み合っていたのに台詞が明らかに私向けの物ではなかった。それに挨拶も無しに追い出そうとするなんて失礼すぎやしないか。

私は唇を尖らせたけど、親玉はもう動かない。葉介は安堵のため息をつきつつ頭を上げて、私をぐいぐい引っ張る。

「ほら花奈、こっちだよ」

しゃくに障る事は障るけど、葉介が部屋から出たがってるのに無理に残る事もない。葉介に引っ張られて、小走りに私はテントを出た。赤い髪のキャンディもふわふわーっと軽やかに後をついてくる。紹介して欲しいのに、葉介はキャンディを完全に無視したまま私に言った。

「本当にさあ、ちょっとは色々考えるよな…特に原付!! お前さ、人のバイトの成果に何してくれてんの!？」

「役に立たなかった？」

「立ったよ! ムカつくぐらい役に立ったよ!! ありがとな!!」
悔し紛れだろうか、葉介が私とつないだ手をぎゅぎゅ握りしめる。痛い。

テントの外は荒野だった。砂埃を巻き上げて風が渡る。背の低い茂みのようなものはところどころにあるけれど、他は岩と石と砂ばかりだ。その土地に、さっきまでいたテントと同じようなのが大小いくつも整然と並んでいる。今ちようどお昼時なのだろうか、風に

乗ってお肉とタレっぽいおいしそうな匂いがした。そのへんをうろつろしているのは男の人ばかりで、皆葉介が私達をびっくりした顔で見ている。葉介は一体ここでどんな人間関係を築いているんだろうか。

ふと、少し遠いところでわっと歓声が上ががる。私は音の出所へ目をやると、そのまま口をあんどぐり開けた。

テントの群れの外れに小さなサーキットのような所があつて、そこを三頭のサラブレッドが疾走している。騎手達は皆、馬の背中で立ち乗りだ。馬の背中には鞍の代わりに丸い板のようなものがついていて、手綱も私が知るものよりもずっと長い。わあわあど騒ぎ立てる観衆なんか視界の端にも入っていないみたいだ、騎手達は躍動する馬の背中で上手くりズムを取つて、優雅にサーキットを周回していた。つまり、ものすごくかっこよかった。

「すごい!!」

思わず私も歓声を上げると、その瞬間ふつと騎手の一人が一瞬だけこちらを見た。……まさかとは思つけど、あの蹄の音と歓声の中で、私の声が聞こえたんだろうか。いやいや、聞こえたわけがない。私は気を取り直して葉介の手を引っ張つた。

「ねえあれすごい! 私もやりたい!!」

「あれ? 花奈に出来るわけないだろ。俺だつて練習中なのに」

葉介はちらつとサーキットを見やると、呆れたように肩を竦めた。

「そもそもあれは花形。終戦記念式典の時の出し物の練習だからなマジにすごい奴だと同じ事を翼竜でやるよ」

「翼竜!??」

「いるんだよ、プテラノドンみたいなのが」

葉介は事も無げに言つて、またずんずん歩き出す。

「……………異世界だあ……………」

葉介に引きずられながら、私は呟いた。今更だけど、ここは異世界だった。

The 1st Attack!! 2 (後書き)

キャンディ・キャンディ：1975年よりなかよしで連載された少女漫画。活発な孤児キャンディが偏見と戦いながら成長していく物語です。

「葉介！ まだ見て回りたい！！」

「後でな、後で」

めんどくさそうに葉介は言つて、テントの群れの、一番端つこのテントに引きずり込んだ。キャンディも一緒にするんとテントに滑り込む。

ここは、葉介一人に与えられたテントらしい。テントにしてはけっこう広かったけど、何故か傷だらけになつて原付やマウンテンバイクやリヤカー、冷蔵庫、扇風機、釣り竿なんかかなり場所をとっていたし、こつちで調達したらしいベッドと机があるから、もうほとんど立つていられる場所はなかった。

「まあ適当に座れ」

私は遠慮無く靴と靴下と汚れたジャージの上着を脱いで、ベッドの上にあぐらをかいた。脱いだ物はリヤカーの手すりにひっかけておく。葉介は私に半分背を向けるみたいな格好で机についた。キャンディは優しい微笑みを浮かべたまま突っ立っている。なんだか一人だけハブつてるようでかわいそうだ。

「キャンディは？ 立ってないでこつち来なよ」

私が座っている隣をぼすぼす叩くと、キャンディはきよとんとした。しまった、ついうっかりキャンディって呼んでしまった。

「キャンディってこいつの事？」

葉介がボールペンの先でキャンディを指した。多分私が投げたペンケースに入っていたのだらう。役立っているようで良かった。葉介は呆れた顔をして、肩を竦めた。

「何勝手にあだ名付けてんの」

「紹介してくれないからじゃん。ねえ、この子って葉介の彼女？」

「何でそうなる……」

葉介は呆れた顔のまま、机に伏せかかるようにぐったりする。キ

ヤンディはにこにこしてその場に立ったままお辞儀した。

「葉介の妹君の、花奈様でいらっしやいますね。私はナルド。葉介のしもべ、ナルドリングでございます」

「ぐ」

「何でそうなるっ!!」

葉介のしもべ…だと？　こんな可愛い子が？　聞き捨てならない言葉に私が思わず絶句しているのを尻目に、葉介が思いっきり突っ込んだ。キャンディもといナルドは、申し訳ございませんと呟いてますます頭を下げる。

「葉介…：こつちに来てそういう趣味が開花…」

「してねえ!!」

良かった。葉介も不必要な大人の階段は上つてないらしい。葉介は疲れた顔で黄色っぽい紙の便せんを取り出した。…：…：そういえば、ペンケースは投げたけどノートを投げてあげるのを忘れた。失敗した。まあ何とかなってるみたいだから良いだろう。

「まあ…：話せば色々長くなるから、先にこつちの用済ませるからな。ジュノが怒るとマジこえーの」

「ジュノつて、あのラスボス？」

ナルドを私の隣に座らせてあげながら、私は葉介の背中を見つめた。

「あの刺青の奴だよ。見かけほど悪い奴じゃないけど、花奈はほとぼりが冷めるまで近づかない方が良さげ」

「ほとぼり？」

「後で全部話すから」

そう言つて葉介は、ジュノとやら言うラスボスに言われた通り、私の投げてあげた物をリストに起こし始めた。

「出来るだけ投げ込んだ順番通りに言えよ」

私は肩をすくめた。

「順番通りつて…：難しい事言わないでよ」

「何でだよ！ お前にとつてはついさっきの話なんだから！！」

何だか葉介、いつもよりツツコミに勢いがあるようだ。こっちに
来てから修行したんだろうか。私は出来るだけ正確になるように、
さっきの事を思い出した。

「まず食べ物入れた。カップ麺と、バームクーヘンと、飴と、柿の
種と、牛乳と、なっちゃん。ぶどうパンとー、鮭フレークとー、ソ
ーセージとー、バナナとー、後はアレだ、ふえるワカメ。他は、カ
ボチャとトマトくらいかな。あ、お醤油と味の素も入れたわ。サラ
ンラップとアルミホイルと、塩コショウと。食べる系はそのくらい
かな」

「……………卵も投げただろ？」

「あ、投げたわそういえば。賞味期限大丈夫だった？」

「賞味出来てねー…………。他は？」

「次ねー、武器入れた！ 葉介の剣道用具一式！ クワと、高枝切
りバサミも！ 役に立った、武器？」

「ほとんど立ってねーよ。ていうかまず高枝切りバサミがなんで武
器になると思っただよ！」

「リーチのある刃物、そのくらいしかないじゃん。それから…………」
葉介に請われるままに、私は出来るだけ正確に投げ込んだ物を思
い出した。でも、パニック状態だったから既に記憶があちこちあや
ふやだ。何で冷蔵庫なんかぶちこんだのか、自分でも全く理解出来
ないもの。父さんのお古の冷蔵庫がここに鎮座しているのを見てや
つと入れた事を思い出せたくらいだ。

最後にコンドームも投げたよ、と言うと（ちよつと恥ずかしかつ
たので言うのを後回しにしたのだ）葉介は目の色を変えて怒り始め
た。

「そんなもん入れてたのかよ！！ 何でそういうデリカシーのねー
事するわけ！？」

「え？ え？ だって、だって、無いと困ると思ったから」

「無くて困ってねーよ悪かったなくそつたれ！！」

葉介の怒りっぷりが尋常じゃないので（やっぱりデリケートな問題らしい）おろおろしながら私が言い訳していると、ナルドは無垢な表情で首を傾げた。

「葉介、コンドームとは何ですか？」

「……………」

葉介はぐつたりして、しんどそうにナルドを見つめた。

そうか…ナルドとは使えなかったんだな…………。

思わず生暖かい目になってしまった私を葉介がぎっ、と物凄い形相で睨む。葉介は怒るとめちやくちゃ怖い。私は及び腰になりながらも、一応気になってる事を聞いておく。

「ゴム、届かなかったの？」

「ああ…多分、時空の狭間を彷徨ってるんじゃないかな」

葉介は一応返事をしてくれたけど、まだいらつとした感じの声をしていた。

「こうしてリストにしてみても分かったけど、結構まだこっちに届いてない品物がちらほらある。中華鍋とか、テントセットとか。俺は大体半年くらい前にこっちに來たけど、その半年の間でちよつとずつ届いてる感じがな」

「……………」

私は思わずぞつとした。考え無しに飛び込んで来てしまったけど、運が悪ければ私も葉介の元に辿り着けずに時空の狭間とやらを彷徨ってたかもしれないのだ。たった半年のズレだけで無事こうして葉介に会えたのは、ものすごい幸運だったのかもしれない。

私が怯えたのに気付いたんだろう。葉介はキレてた目をちよつと優しくしてくれた。

「それにしてもよく來たよな、花奈。幹也はどうしてる？」

「どうしてるも何も、別れたのついさっきだし」

「あ、そうか…そうだよな」

葉介はふつと遠い目をした。三人同時にスタートしたはずの人生なのに、いつの間にか葉介だけ半年リードしている。私も何だか寂

しくて、ちよつと俯いた。

「おーい葉介え。いるーう？ いるよねえー」

「……………」

突然、思わず空気読め、とほとんど喉元から出かかると、脳天気そうな男の子の声がテントの外からした。と、同時にテントの垂れ幕が勢いよく跳ね上げられる。

「お前の妹、来たってほんと？」

ずかずか入り込んできたのは同い年より少し上、くらいの年頃の男の子二人組だった。

金髪を後ろで五センチくらいの三つ編みにした、つり目気味の男の子がまず入ってくる。顔は良いけど残念なことに、猫背だ。でも、それでも背が高い。猫背でもまだ背が高いつて事は、しゃんと立ったら一体どのくらいになるのか想像も……いやあ、気持ち悪いくらいに背が高くなるだけだろう。多分これが外から声をかけてきたK Y野郎だ。その後に緑がかった髪を短く切った、タレ目の男の子が続いてきた。この子は逆に童顔気味で、かつ小柄で、百六十センチあるか無いかというところだった。個人的にはチビの方が好感が持てる。私もチビめだからだ。

とにかくただでさえ定員オーバー気味だったテントの中だったから、更に二人も増えたとなると明らかに人口密度が高くなりすぎている。私を顎で指す。

私が酸欠で倒れる前に出て行け、という私の心の声が聞こえたのか、それとも普通に用を済ませただけなのか、三つ編みの方が垂れ幕を顎で指す。

「司令官が呼んでる。さつさとリスト持って来いって。なんか、また新しい道具が来たらしいぜ。使い道がわかんねーのが色々鞆に詰まってるって」

「お、まじか」

葉介はリストの紙を二つ折りにして軽やかに立ち上がった。おい

おい置いていくつもりか、という私の無言の訴えも、気付いていないはずはないのに完全無視だ。

「ちよつと行つてくるわ！ 良いか花奈、俺が戻ってくるまで勝手にうるうるすんじゃねーぞ！ ナルド、花奈見張ってる」

「はい」

「え、ちよつと葉介！」

で、葉介は引き留める間もなく出て行ってしまった。テントには、私とキャ…じゃない、ナルドと、二人組が残された。

……きまずい。

デカイ奴はわざわざ机の上の写真立てを手に持って、あからさまに中の写真と私を見比べた。

「ふーん。へー。写真の方が可愛いな」

そりやあ今がすっぴんだからである。写真撮る用のメイクしてる顔とすっぴんを比べられてもどうしようもない。にしても、初対面にもかかわらずあのボスキャラといいこのウドの大木と言い失礼きわまりない。

「……ナルド。誰こいつ」

そついうわけだから、私も負けじとこいつ呼ばわりしてやった。デカイ野郎は目をすがめて不快そうな顔をする。

「ミュゼです。後ろの人はベル」

ナルドに紹介されて、緑の髪の……ベルは首を前にかくんと倒した。ぎこちないけど、これは多分おじぎだろう。ベルには私も会釈を返した。でも、金髪三つ編みのウドの大木……ミュゼの方は、一言の挨拶もなくべらべらしゃべり始めた。意地悪そうな目つきだ。

「……で？ 花奈だっけ？ お前何で来たの？」

「……」
「お前が投げるゴミのせいで俺達けつっこー迷惑してんだけど」

「……」
「お前の荷物がかさばるせいで葉介のこのテントだってこのありさまだし、上からぼろぼろぼろ唐突によくわかんねー物が降ってくるせいで司令官の機嫌も最悪だし、この上お前本人？ この忙しい時に、いい加減にしろよ。邪魔をするにも程があるだろ。つーかお前なんか来て何か出来ると思ってたわけ？」

「……」

うんたらかんたら。まだまだ続きそうだったので、私はささくれをいじり回す事で暇を潰した。親指の左横はすぐ剥けてくる。ひどいと、剥いて治りかけたところがまた剥けて、三重のささくれが出来てしまう事もある。

ところで私達三兄弟には、それぞれ尊敬されるべき美徳がある。幹也は賢明さと判断力、葉介は適応力と決断力、そして私は度胸とスルースキルである。

……である、なんて偉そうに言ったけど、要は聞き流すって事だ。わざとではないのだけど、私の集中力にはかなりムラがある。この話長くなりそうだなとか聞かないほうが良さそうな話だなと感じたり、更に言えば悲しすぎたり辛すぎたりすると、不可抗力でがらがらと無意識のシャッターが降りていって、ぼーっとしてしまうのだ。葉介達は私のこの癖の事を『花奈が遠い目をする』と言っている。

私は今も、その遠い目をしていたんだろう。ミュゼは、私の肩を乱暴にゆすぶった。

「おい……おい!？」
「ん」

ちよつとぼーっとし過ぎたらしい。私はさりげなく口元を触ってみてよだれは垂れてない事を確認した。のに、ミュゼは何だか気味悪そうな顔をして私から少し距離を取る。

「ごめん最初のとこしか聞いてなかった」

「聞けよ折角言ってたんだから」
ミュゼは変な事を言った。人の悪口を言つといて、話は聞いて欲しいとは甘えた男だ。

親指のひりつき加減からして、結構長い間ぼーっとしてたようだった。目がしばしばする。まばたきするのも忘れていたらしい。目をごしごしこすって瞳が潤うのを待ちながら、私はミュゼに言った。「もう私達、二人で帰るから。荷物も引き上げればそれで良いですよ?」

ミュゼはほんの一瞬苦しそうな顔をした。でもまたすぐに、意地

悪そうな顔になって、猫背のまま私を見下ろした。

「……いや、葉介は帰せない。帰るならお前一人で帰れ」

呼びに行かせたナルドから、私が決闘する事になった、とちゃんと聞いたらしく、葉介が血相変えて駆け寄ってくるのを私はのんびり迎えた。

「おい花奈！！ 何……」

「大丈夫大丈夫。私に有利なルールいっぱいつけたし、相手はこのでっかい猫背じゃなくてベルだから」

葉介は何か言おうとしたけど、私は無理やり口を挟んだ。何しろ口では葉介に勝てない。

「そういう問題じゃないだろ！！ つーかミュゼよりベルの方が危ねーし！！ それにお前が得意なの合気道じゃねーか！ ……じゃなくってだな、何で決闘なんか……」

「ベルの方が？ ベルの方が小柄なのに？」

私はわざと話をそらした。私の正面の方向、少し離れて、何を考えているのかよく分からない顔のベルが立っている。眉の辺りでベルの前髪が風に吹き乱されていて、ちらちらと白い額が覗いた。さつき葉介の着ている服がほこりっぽいと感じたのは、この荒野の風のせいだろう。周りで私達のどちらが勝つか賭けている男達の多くが、頭を刈り上げにしているのも砂埃対策のはずだ。葉介はしかめつらしく言った。

「まず言っとくけど、ベルを甘く見ねー方が良いぞ。ベルはベルでもティンカーベルじゃなくてベルセルクのベルだからな」

……ベルセルクってどういう意味だったっけ。マンガのタイトルだったっけか。私は首を傾げたけど、葉介はそんな事どうでも良い、と言って話を元に戻した。

「で、何で決闘って話になったんだ？　しかもミュゼなら分かるけど、よりによってベル！？」

「だって、ミュゼが葉介は俺のだから帰さないって言うから……」

話を逸らしきれなかったふてくされて私が言うと、人垣の中にまぎれていたミュゼが悲鳴を上げる。

「そこまでは言っただねえ！」

そうか、そこまでは言っただねえか。ミュゼには悪い事をした。でもとにかく、趣旨としてはそういう事だ。

「だから、決闘で話つけようと思って」

「……………花奈…そうか、お前、俺の事連れ戻しに……？」

葉介は何故かきよとんとした顔のままこう言った。私は唇をとがらせて答える。

「さつきからそう言ってるのに、なに、その反応は。当たり前ですよ」

「いや……………なんか勢いで来ちゃったものかと……」

気まずそうに葉介は言った。気持ちは分からないでもないけど、失礼してしまう。ラスボスとデカブツから悪い影響を受けたに違いない。

ちなみに、決闘の相手にミュゼじゃなくてベルを指名したのは…正直、このでつかいの相手に、怪我させないで技をかけられるか、自信がないからだ。

葉介がやってるのは剣道だけど、私がやってるのは合気道。合気道は相手の動きを読んで受け流す武道だから、投げが基本になるけど、足下はもちろん畳じゃない。目立つ石は拾ったけど、こんなところで身体を地面に叩きつけたら大げがするかもしれない。

「でもな花奈、俺はまだ……」

葉介は、言いにくそうにしながらも何か言いかけた。でも、聞かなくて良い事のような気がすごくする。私はぎゅっと握った拳を突

き出して、葉介を押しやった。

「いいーのー！！　良いから葉介は見てて！　お姉ちゃん絶対勝つから！！」

「妹。…じゃなくてだな、ほら、いや、でも…。…っかお前、実戦どころか試合すらやった事ねーのに…。…平気かよ？」

「お姉ちゃん。…大丈夫、落ち着いてやれば何とかなる…。…はず！」
確かに自信はなかった。けど、声に強く出すと、それだけで元気が湧くものだ。私は更に葉介を人垣の方に押しやって、ベルとまっすぐ向き合った。確かに、無造作に見えるけれど隙の無い立ち姿をしている。すくと肩を落として、軽く首を傾げて、こちらの様子をばーっとした目で眺めている。右手にはバターナイフ。これが、使っても良い事にした唯一の武器だ。私はバターナイフなんか持つても邪魔にしかならないから、素手のまま。

私はもう一回拳を作り直し、ゆるめた。それからベルに叫ぶ。

「…よし！　ベルが使える武器はバターナイフ一本！　お互いに目を狙うのは無し！　私も股間は狙わない！」

「別に…ねらっても良いけど」

相当自信があるのか、ベルは顔色を変えずに言った。これが葉介だと、ちよつととつくみあいになった時なんか股間を狙うだけで本当に怒る。寸止めでも怒る。股間を狙われるだけでこっ、ぞわつと来るそうだ。相当痛いんだろう。関係ないけど、私はこの台詞で初めてベルの声を聞いた。寡黙なタイプらしい。

まあどつちにしる合気道だから、狙う狙わない以前の問題だ。合気道は、自分から技をしかける事はない。襲ってくる相手のエネルギーを利用して技をかける。それを無視して私から股間を蹴りに行ったら、まず間違いなく負けるのは私だろう。

葉介は私の得意技についてベルに話をしただろうか。したとすると、戦う前から私の負けは決まっているようなものだ。小さなバターナイフを指先でくるくる回しながら、ベルは何度かまばたきをし

た。

「……………いい？」

まあ、仕方ない。ここで負けてもなんだかんだ難癖をつけてやればいいだけの話だ。私は両手を前に出して身構えた。

「いつでもオツケー」

「ん……………じゃあ、いくね」

と、言ったが早いか、ベルは動いた。腰を低く落として、びゅんと風を切ってこちらへ向かってくる。相手の姿勢が変だから上手くとれるかは自信がないけど、一瞬が勝負だ。私は決死の覚悟で手を伸ばし、ベルのバターナイフを持った手を取……………

「取った！」

取ったとなればこっちのものだ。技がかけられる。私はベルの手を一度下へ下ろした後、握った手を捻りあげながら上へやる。

合気道経験者同士でこれをやると、捻り上げられた相手は受け身を取るために、自ずから空中を舞う事になる。もちろんだけど、ベルは捻り上げられたまま苦悶の表情を浮かべた。

「ね！ 私の勝ち！」

宣言してから私はベルの手をほどいた。ベルは辛うじて取り落とさなかったバターナイフをどこかにしまい込んで、捻られた手を軽くさすった。

「……………いまの……………どうやったの？ 葉介の柔道とちよつとだけ似てる……………」

葉介はこっちで、プロレスごっこでもやったんだらう。葉介が段位を持つてるのは剣道だけだけど、受け身くらいはとれるはずだ。私を上目遣いで見つめるベルの目が、前髪の隙間かららんと輝いている。負けて悔しい顔というよりは、興味津々、次に生かす気満々、って感じの顔だ。

「ああ…ベルがますますベルセルクに……………」

遠いところから葉介の声が聞こえたかと思つたら、彼は人垣をかき分けて私達の所へ戻つてきた。

「ベル！ もう決着着いただろ！ 花奈、ベルに同じ手は二度は通用しない。次やったら負けるから、今日はもうやめとけ」

「じゃあ葉介！ うちに帰ろう！ 幹也も多分心配してるから！」
私が葉介の手をぎゅっと握つてぶんぶん振る。でも葉介はそつと私の手を握り返して、言いにくそうに言った。

「いや…あんな花奈…。折角で悪いんだけど、俺、もうしばらく家には帰れないんだ……」

…… たつた一人に一度勝つただけでは、葉介の解放は認められないという事だろうか。私はため息をついた。

「……しょうがない、じゃあ次はのど自慢対決で……」
「せんでいいわー！！ ……じゃなくてだな……」

間髪入れずに葉介のツツコミが入った。ほんとに、こっちに来てからツツコミのキレがよくなったみたいだ。

にやつと私は笑つたけど、葉介はますます握る手に力をこめて、吐き出すように言った。

「花奈、ごめん。まだ本当に帰れないんだ。…俺、下手したら一生こっちにいる事になるかも」

The 1st Attack!! 4 (後書き)

ティンカーベル：ピーターパンの相棒である妖精。かなりのやきもちやきで、トラブルを招くことはありませんが、根は良い妖精のようです。

ベルセルク：北欧神話に登場する戦士達。英語ではバーサーカーとなります。花奈が言っているのは、1989年から発表されている、三浦健太郎氏の著作のことです。

The 1st Attack!! 5

葉介は私を自分のテントへ引きずって行って、また元通りベッドにあぐらをかかせた。さつきと違うのは、今度は葉介自身もベッドの上に私の真つ正面であぐらをかいて、私との間に大きな地図を広げた事だ。ナルドは椅子に腰掛けた。

葉介は私に、この世界の事をそれはもう懇切丁寧に説明してくれた。

この世界の名はグラナアーデ。この国の名前はゲルダガンド。もっと細かく言うと、ここは西の雄フォーステア公の治める領土の中でも最西端の国境付近、荒野シュツルク。

葉介はこつちに来た後、あのラスボス野郎の下について隣国サングリアとの戦争をやっていたそうだ。戦いは概ねゲルダガンドの優勢で進んでいたけれど、占領してもうまみの少ない土地でもある事もあって、そろそろ和平条約を結んで戦争を終わらせるため、皆で下準備に奔走している、というところらしい。

じゃあ戦争が終わるなら帰れるね、と私は言ったのだけど、葉介はやっぱり首を振った。

別の世界から迷い込んでくる人はたまにいるけれど、葉介には葉介だけの役割があつて、特別にこのゲルダガンドへ召還されたい。

葉介に与えられた称号は、『紅玉鉾脈』。この国では葉介は、なんと心の動きに応じてルビーを生み出せるという、特別な人間なんだそうだ。実際葉介が出したっていうルビーを見せてくれたけど、現実味なんかまるでない。でもせっかくだから一個貰っておいた。やったね。…いや違う、ルビー一個で喜んでる場合じゃない。

葉介ににこにこしながらついて回ってる女の子、ナルドの本名は、

ナルドリंगा。ナルドリंगाっていうのは、そのまま『紅玉鉱脈の九十八番目の従者』っていう意味で、紅玉鉱脈に……つまり葉介にお仕えするためだけに産まれてきて、生きているんだそうだ。……デビューだ。葉介がこっちに来るまでナルドは何をやって暇を潰していたんだろうか。

私が何てコメントしようか迷ってる間に、葉介はベッドの上の地図を指さしながら、これがゲルダガンド、と更に説明する。ゲルダガンドという国の形は、羽根を広げて佇む大鷲の姿によく似ていた。「良いか花奈、バカのお前には難しいかもしれないけどよく聞けよ」「その前置きいらないんだけど」

私の文句を、葉介はまるっと無視した。

「今のゲルダガンドには即戦力として使えるような資源があんまりないんだ。東のワムージャ大森林は聖地で木材その他の採取が御法度、南の海のリユーナはほら、リアス式海岸になってるだろ？ 良いい港になるんだけどさ、ほんとに、小さな入り江が多すぎるんだ。その入り江一つ一つが海賊の温床になってて、漁や貿易がなかなか育たない。北のマナーナはほんの十年前までは大穀倉地帯で豊かな土地だったらしいんだけど、サンテリアとの戦争であらかた焼けた西のここ、シュツルクは見ての通りの荒れ地だ。石材は良いのが採れるけど、ほんの二、三ヶ月前まで紛争地域で採掘どころじゃなかったし」

「……………」
私が口をへの字にして、話聞くのやめちゃおっかどうしようかと悩んでいるのに気付いたらしく、葉介は私の尖った唇をむぎゅつとつまんだ。

「むぐむ」

やめれ、と言いたいところだけど、つままれているのでしゃべれない。仕方なく目で語る私に、葉介は真顔で言った。

「こっからが大事だから、ちゃんと聞け。あのな、ゲルダガンドは戦争が長引いたせいでどこもかしこもへ口へ口なんだ。戦死者の遺

族には補償をしてやらなきゃならないし、壊された建築物の再建、傷病兵の社会復帰支援、孤児もいっぱい出た。マナーナの復興、リユーナの海賊退治、ワムージャの神官どもともそろそろ一度きちんと話をしなきゃだし、ここへの補給線も維持するだけでかなりコストがかかる。首都の『黄金鉱脈』も……黄金鉱脈って分かるか？ 紅玉鉱脈の俺と同じ要領で砂金をじゃらじゃら出す最終兵器だぞ？ その黄金鉱脈も頑張ってるらしいけど、それこそお金はいくらあっても足りない。コストゼロで出てくる俺のルビーが無きゃ、ゲルダガンドは潰れちゃうんだ」

「……………むぎゅー」

「……………花奈、分かる？ 俺の言いたい事」

葉介はやつと私の唇を離れたけど、私には結局、葉介に言ってやれる言葉を探し出す事が出来なかった。

……………だって、ディーブ過ぎる。せめて葉介が勇者とか魔王とか賢者とか、いつそ龍神の神子とか、そういう分かりやすいのになつてくれれば指さして笑えたのに、こんな、こんな、『なにしろ九十八代も続く慣例ですし、うちも大変な時期ですから、お前の弟は貰っていききましたからね』みたいな、決定事項みたいに扱われても、困る。その事を伝えてきたのが他ならない葉介本人だって事も、私にはしんどい。だって私にとって葉介はゲルダガンドの紅玉鉱脈様じゃなくて、我が家の大事な三兄弟の一人なのだ。大変なのは分かっただけど、だからって無関係の葉介を巻き込まないで欲しい。

お家に帰ろう、と葉介に言いたかった。幹也が待つてる。大掃除だって途中だ。でも葉介は優しいから、少なくともこの国がしゃんとなるまでは帰らないつもりだろう。だってさっき葉介は、一生帰らないかも、って言った。

黙り込んでしまった私を前に、葉介は途方に暮れた顔をした。涙をこらえてあげたのは私がお姉ちゃんだからに他ならない。泣いた

らきつと、葉介は困るだろうから。

気まずいばかりの時間がしばらく過ぎた頃、テントの外からまた、知らない人の声がした。

「葉介？ クラージュです。入っても良いですか？」

「…クラージュ？ どうした？ 入れよ」

「……………」

正直泣きそうだったから、入ってきて欲しくなかった。勝手に入れないでよ、今家族の大事な話してるんじゃない、とも思った。葉介の視線が逸れた隙に、私は両目をそれぞれぎゅっとこする。

入ってきたのは、綺麗で優しげなお兄さんだった。歳は、多分二十の半ば頃。背は葉介よりも少しだけ高い感じだから、175前後つてところか。アーモンド型をした金色の目が印象的だ。鎖骨あたりへ金茶色の髪の毛がゆったり落ちかかっている。なんとなく、私の知っている何かに似ていると思っただけで目を凝らすと、前からちよつと気になっていたスーパードルフィーというお人形によく似ているのに気付いた。綺麗で優しそうな顔ではあるけど、いい人そつうな顔じゃないな、と感じるのは多分そのためだろう。

「家族水入らずのところ、すみません」

「あ……」

まずお兄さんは私に一言断った。マイナスだった好感度がプラス30くらいして、『あ、この人ちよつといい人かも』になった。家族同士大事な話をしてたところ、つていうのをちゃんと汲んでくれたからだ。まあ、出来たら出直して来てくれた方がもつとありがたかつたけど、あんまり贅沢も言えない。お兄さんは葉介に言った。

「ジユノがお呼びですよ。また、異界よりの贈り物だとか」

「また？ 今日は多いな……。花奈が来た日だからかな」

置いて行かないで欲しいな、と思った。今度はけっこつ、切実に。でも葉介はベッドから立ち上がって靴を履いている。私はひっそりため息をついた。一応、テンションただ下がりの私の様子は葉介から見てもほつときがたかつたのか、葉介はふと振り返つて机からあ

るものを持ってきて、私に渡してくれた。

「これ、さっき落ちてきた奴。お前のだろ」

「あー……」

ピンク色のでっかい化粧ポーチだ。でっかすぎるせいで持ち運びはしづらいけど、とってがっついていて、蓋の裏に鏡も貼り付いていて、大変重宝なものだ。そういえば、これもさっき投げた気がする。葉介がこっちの世界で、女装しなくちゃならなくなった時に使えると思って。…と、言う間違いなく葉介は怒るだろうから、私は黙って受け取った。

葉介はまたどこかに行っちゃって、私はまた、ナルドと取り残された。まあ、ぼーっと暇を持て余しても仕方ない。ミュゼにすっぴんを笑われたのが実はひそかに気になっていたし、それに化粧をフルでしてしまえば何が何でも泣くわけにはいかなくなるから、私はナルドに鏡を貸してくれるように頼んだ。金茶の髪の毛の綺麗なお兄さんは、何故かまだ出て行かない。

The 1st Attack!! 5 (後書き)

龍神の神子：2000年からコーエーからシリーズ発表されている『遙かなる時空の中で』での、主人公の役割です。主人公は、龍神の神子として異世界『京』に召還されます。

スーパードルフィー：ボークス社が1999年から発表している、球体関節人形。儂く妖しい雰囲気があります。

また、なんか気まずい。私とあなたは友達じゃないけど、私の弟とあなたは友達。だいたいそんな感じだった。無視するわけにもいかないし、かと言って馴れ馴れしくお話なんかしたら葉介に怒られそうだし。綺麗なお兄さんは、深々とお辞儀をした。異世界でもお辞儀の風習があるのかあ、と私は思った。

「こんにちは、花奈さん。クラージュ・コフユ・グラジットです。お兄さんには本当にお世話になっています」

「いえ、兄じゃなくて弟です。でも、ありがとう。弟が褒められるのは事情がどうでも嬉しいです」

「弟…ですか」

クラージュは難しい顔をして、机の上の家族写真をちらっと見た。多分葉介からは私を妹として紹介されていたんだろう。まったく、弟ながら姑息な真似をする。

「葉介と花奈さんは、三つ子なんでしたね」

「クラージュさんが葉介の事を呼び捨てにしてるんなら、私の事も花奈って呼び捨てにしてください」

「では僕の事もどうぞ、クラージュと。敬語もなくていいですよ。葉介は僕とそうやって話しますから」

クラージュはにっこり笑った。うちの庭に咲く、白い芍薬の花のような艶やかな笑みだった。つるつるぴかぴかで穢れないのに何故か色っぽい。さすがスーパードルフィーに激似なだけの事はある。まあ、ため口きくのはやめておこう。なんだかこの人、怖いから。
「……」

そういえばナルドも、葉介の事を呼び捨てて私の事を花奈様と呼んでいたなあと思い至って、私はナルドの脇腹を突つついた。

「はい。では、花奈ちゃん」

ナルドは空気を読むものにもすごく長けていた。私が何か言う前

に、さつさと様付けを改める。ちゃんもいららないよ、呼び捨てで良いよ、というつもりでもう一度脇腹を突っついたら、それだけでほんのり顔を赤らめてナルドは言った。

「失礼ながら、私が呼び捨てで呼びするのは、葉介だけと決めているのです」

ナルドは空気を読むのものすごい長けていた。何にも言えないから交渉の余地すらない。私はいつそ感心して、じゃあそれで良いよ、とだけ返事した。

クラージュはしばらくの間、物憂げに俯いていた。芍薬だからかどうか知らないけど、入り口のところ立ちつくしたままだ。何か私に言いたい事があって、それで帰らないんだろう。仕方ないので私は葉介の椅子を勧めた。

「立ち話もなんなので」

「ああ…ありがとう」

椅子を引いて、クラージュは腰掛けた。

どうせ、私が聞きたくないような嫌な話をされるのに決まっていた。

「お化粧しながらでも良いですか？」

クラージュは一瞬驚いた顔をした。育ちが良い感じの物腰の人だし、そもそも初対面だから当たり前前だろうか。でもクラージュはすぐに私に微笑み返した。

「もちろん、どうぞ」

私の方と言うと、兄弟が二人もいるから、男の人の前でお化粧する事にあまり抵抗がない。顔の右半分左半分を使ってお化粧ビフォーアフターを見せてあげてもいいくらいだ。いやこれはちよつと嘘だ。

化粧水も投げたはずだけど、届いてるかなー、と物置状態になっ

てるリヤカーの中を探ると、底の方で私の化粧水と乳液と、日焼け止めがひとまとめになって埃を被っていた。結局葉介は使わなかったらしい。まあ、折角なので活用しよう。クライジユは机と椅子を譲ってくれようとしたけど、そうするとクライジユはベッドに座らなくちゃいけない。もしかしてナルドは、葉介以外の男の人とはベッドで一緒に座ったりしないんじゃないかなー、と何となく思ったので、私はいえいえ、とクライジユには遠慮して、葉介には遠慮せず、ベッドの上で化粧する事にした。

正面に腰掛けたナルドが壁かけ式の鏡を、私の顔が映るように手に持って構えていてくれる。辛うじて顔全体が映る程度の大きさのサイズの鏡だ。でも、何とも不思議な鏡だった。どう不思議かという、iPadとかiPhoneみたいな感じなのだ。いやiPadもiPhoneも持ってないけど、多分こんな感じだと思う。つまり、にゆるにゆるぶにぶにした感触の鏡に指をくつつけてつまんで広げると、広げた部分がぐいーんと拡大されて映る。つまんで縮めると何故か全身が映る。大変かしこい、えらい鏡だ。一応私のポーチの裏についてる鏡は、アイメイク用に少し拡大して映る鏡で元々は便利に使っていたのだけど、ぶっちゃけこれさえあればポーチの裏の鏡出る幕なくね？ という感じだ。科学大敗北とはこの事だ。日本にぜひ持って帰りたい。ついでに話の分からない葉介も簞巻きにして持って帰りたい。

私はコットンは使わない派だ。貧乏性なので。それで、手の平でペとペと化粧水と乳液をはたく。下地代わりの日焼け止めを塗り伸ばしている間に、クライジユは口を開いた。クライジユは机にまっすぐ座って、私達には背中を向けている。遠慮してるんだろ。まあ、遠慮してくれるんならそれはそれでいい。

「仲の良いごきょうだいなんですな」

「はい、ものすゝく」

私は即答した。日焼け止めは塗れたから、ポーチの中からコンパクトを引っ張り出す。

「『写真』を見ていて、そうなんだろうなと思っていました。葉介はこれを、とても大事にしていましたよ」

クラージュは、机の写真立てを手にとつて見下ろした。私はちょっと伸び上がりつてクラージュの手元を覗き込んだ。これは去年の父さん母さんの結婚記念日にみんなで撮つた家族写真だ。去年亡くなつたおじいちゃんが、蔵から出してきた昔の鎧甲を着てにっかりピースサインをしている。その隣に母さん、父さん。その前に三人並んで、幹也、私、葉介が座っている。幹也はおっとり微笑んでいて、葉介はちよつと不機嫌そうだ。くそじじい、鎧甲なんか着て恥ずかしい、つて怒つてたのを思い出す。でも結局飾つてるんだから、葉介も多分気に入ってたんだろう。私は幹也と葉介の真ん中で、二人の手を握りしめて満面の笑みだ。

私はファンデーションを伸ばす作業に戻った。

「葉介は、あなたと幹也君の事を、毎日のように話していました。花奈ならもつとおいしい食事を作るとか、幹也がここにいたら喜んだだろうとか。二人には本当に感謝しているといつも言っています。あなたがよこしてくれた贈り物は、色々使わせてもらっていますよ。ありがとうございます」

このクラージュのお礼の言葉に返事したら、なんだか取り返しのつかない事になりそうな気がした。それで、なんとか話をそらそうと思って、さつさとコンシーラーをぺとぺとやる作業に移行しながら言った。

「えーと、えーと、何で私が投げたつて分かつたんですか？」

さつき、私が池に手を突っ込んだ時だろうか。それとも、どうでも良い物ばかり投げ込んだから幹也じゃないな、つて思われたんだろうか。

「花奈じゃなきゃこんな物投げてよこさない、つて」

言いながらクラージュはくすくす笑つて、机の上から何か取つた。それで、取つた物を背中を向けたまま自分の肩越しに私に見せてくれる。ハンターハンターの最新刊だった。こんな物投げたつて。よ

く覚えていない。まあ何にしる、どうでも良い物ばかり投げ込んでたから説で確定した。

「このふわふわの髪の毛のキャラクターがナルドに似てるって盛り上がった事もあるんですよ」

「ピトーか…」

確かに言われてみればナルドは、キャンディっていうよりピトーかもしれない。ピトーの王ラブな所がナルドと被るし、ナルドのキヤラからして、キャンディだとちょっと元気すぎる。コンシーラーが終わったので、今度は眉とアイメイクだ。これはちょっと手間暇かけなくちゃいけない。

「サランラップも、使わせてもらいました。あれは便利ですね。葉介は、食べ物を含むのに使っていたけど」

「ふつう、食べ物包むものなんですけど…」

異世界人からサランラップって言葉が出てきたのが何か変だった。登録商標なのに。私がかよんとしていると、クラージュは何か勘違いしたらしく、苦笑したような気配で返した。サランラップの使い道を、クラージュは教えてくれなかった。

「花奈さん」

代わりに、私の名前を呼ぶ。関係ないけど、結局クラージュも私を呼び捨てにしていない。お互い様か。

「あなたの心づくしの贈り物を、葉介は楽しみにしていましたよ。口ではきつい事を言っていたかもしれないけれど、許してあげてください」

何となく、釈然としなかった。私の方が絶対葉介の事を知ってるのに、私は葉介の家族なのに、どうしてこの人から葉介を許してあげて、ってお願いされなくっちゃいけないんだろう。まるで、私より自分の方が葉介とは親しいと言わんばかりじゃないか。私は拗ねた気分だった

池の傍にいたのが私じゃなくて幹也だったら。そしたらもっと上手く葉介に、一緒に帰ろうって頼めただろう。少なくとも幹也だっ

たら、よく知らない人に葉介の事をお願いされるような事はなかったはずだ。多分クライジユは葉介から、こいつはバカだとか思慮が足りないとか頼りないとか、色々吹き込まれているんだろう。確かに葉介から見て、私は頼りがいのあるお姉ちゃんじゃないかもしれない。でも、私にだってプライドがあるのだ。十七年間、葉介のお姉ちゃんをやってきたというプライドが。

メイクは全部すんだ。アイシャドウの色は緑色にした。出来るだけ大人っぽく見えるように。これ以上舐められてたまるか、と私は思った。

いつまでもクライジユが核心に触れようとしないので、私はとうとう焦れて聞いた。

「葉介の事、帰さないつもりですか？」

クライジユは、背中を向けたままだった。私は、目を合わせないまま一息に言う。

「葉介にも、葉介の人生があるんです。今から和平を決めたとしても、ゲルダガンドの復興に、どのくらい時間がかかるんですか？一カ月？それとも半年？ そんなんじゃすまないんでしょう？ 葉介はまだ十七歳なんです。このままゲルダガンドで時間を過ごし続けるような事があつたら、ほんの三年くらいでもう、日本に葉介の居場所がなくなっちゃいます」

するとクライジユは振り返って、フルメイクでジャージを着て、ベッドにあぐらをかいている私を見下ろした。私の顔を見るなり彼は、とろけそうな笑顔を浮かべて言う。

「ああ…素顔も愛らしかったけれど、さすが綺麗ですね」

クライジユが言うのと嫌味だ。さつきからプラス30の位置からじわじわ下がってた好感度が、『この人やだ』の位置で下げ止まった。私の敵意を、クライジユは感じ取ったんだろうか。彼は笑顔を困ったようなものに変えて、立ち上がった。

「少し、歩きましょうか。さっき、馬を見ましたよね。あなたに、今のゲルダガンドを見てもらいたい。葉介がこれからどうするかはともかくね」

The 1st Attack!! 6 (後書き)

私とあなたは友達じゃないけど…：2000年から少年ジャンプで連載されていた『ギャグマンガ日和』がアニメ化された際の、OP曲の歌詞の一節のパロディです。

ハンターハンター…：1998年から週刊少年ジャンプで連載されている、少年漫画です。ピトーはネフェルピトーという猫人の姿をした敵役の愛称です。

私達……ナルドとクラージュと私、三人連れだってテントの出入り口をくぐりかける。くぐりかけたけど、先頭だったクラージュがすぐ立ち止まったので、私は危うくクラージュの背中に顔面から突っ込みそうになる。あつぶね。マジギリセーフだった。顔面衝突事故なんか起こしたら間違いなく、

「あぁっ花奈さん大丈夫ですか?」

「お気づかいなく! お気づかいなく!」

「鼻血出てますよ」

「すみませんすみません! どうかお気づかいなく!」

みたいな、ぐだぐだでハートフルな感じになってしまふ。和むのはだめだ。和んだらますます葉介を連れて帰れなくなる。

クラージュの背中から5センチしか離れていないところで、私はこっそりばくばくする心臓を抑えた。

クラージュが立ち止まったのは、出てすぐのところでもベルとミュゼが待ちかまえていたからだ。何でだかは知らないけど。目の前のクラージュは私を振り返りもしないまま、一言「驚かせてすみません」と謝った。このスーパードルフィーには後頭部にも目がついてるらしい。不良品だから返品しろ。

「ミュゼ、ベル。もう休憩時間はもう終わっているはずですが?

訓練に戻りなさい」

クラージュが静かに問うと、クラージュよりも背の高いミュゼが、真っ青になって直立不動の体勢になった。

「申し訳ありません、副司令!」

ミュゼの代わりにベルが言う。

「クラージュ様。おれを花奈の護衛にして」

ベルが言ったけど、一体何が言いたいのかは分からなかった。護衛って何の事だ。私は葉介と今すぐ帰りたいんだから護衛もいらな

い。

クラージュはゆったり、穏やかな口調で言った。

「まず一つ。副司令って呼ぶのをいい加減にやめていただけませんか。次に呼んだら今度こそ処罰します。二つ、僕は訓練に戻れと言いましたよ。そもそも時間通りに行動しない事は、明確な軍規違反ですよ。三つ、何を先走っているのかわかりませんが、花奈さんは単なる葉介のご家族として一時的に訪れていらっしやるだけです。護衛が必要かどうかは、これから判断します。四つ目、ベル、あなたは葉介の護衛ですよ。任務を投げ出すのですか？」

クラージュの穏やかなのは口調だけだった。他人事の私ですら背筋に嫌なものが這うくらい怖い。ミュゼもベルもたつた一言ずつしか言っていないのに、四倍以上になって返ってきている。ミュゼはますます青ざめて全身を固く強ばらせたけど、ベルは何故か怯まない。「葉介も守るし、花奈も守る。おれが護衛につけば、花奈もここにのこれる」

「…君は、花奈さんから合気道を習いたいただけですよ。」

「それも。でも、花奈はぜったい葉介といっしょにいたいはず。家族なんだから」

後ろで聞いていた私は感動して、ぐつと拳を握りしめる。

誰も…葉介すら私の気持ちを汲んでくれなかった異世界で、ほとんどおしゃべりもしていなかった上にベルセルク呼ばわりされていた（ベルセルクって何だかわからないけど）ベルだけがたった一人、私の気持ちを分かってくれるなんて思ってもみなかったからだ。

まあ、方向は微妙にずれてるけど。私は葉介と帰りたいのであって、葉介とここに定住したいのではない。

「……………」

クラージュはベルに言われたきりしばらく黙り込んだ。その隙に私はクラージュの横からぴよこんと顔だけ出して、ミュゼの顔をまっすぐ見た。言っただけの事があったのだ。

ミュゼは…こうして見ると、本当に大きい。まるで巨人だ…。近

くにいると首が痛い。多分190越えている。ここまで高いとちよつと気持ち悪い。私は意地悪な気分になったので、つんと顎を上げて遙か頭上のミュゼに言った。

「どう？ 写真より可愛いでしょ」

ミュゼはクラージュに叱責されているのも忘れたように、私の顔をまじまじ見つめた。

「……お前……なんつーか、ほんっと自信満々だな……」

明らかに呆れられていたけど、まあ溜飲は下がった。すっぴんをバカにされたのがさつきからものすつごく、気になっていたのだ。

私はますますつんと顎を上げてそっぽを向いた。ミュゼががつくり肩を落としたのが視界の端に映る。クラージュは、私とミュゼがけんかしているのを黙って聞いていたけど、やがて言う。

「護衛の件は、考えておきましょう。とにかく二人とも訓練に戻りなさい」

二人とも、それ以上食い下がろうとはしなかった。ミュゼはほとんど直角90度のおじぎを、ベルは私にさつきしたのと変わらないような角度の浅い会釈をして、どこかへ走り去っていく。それにしても、ベルはともかくミュゼは一体何しに来たんだろう。

クラージュは二人の後ろ姿を少しの間見送った後、さりげなくこちらへ手を伸ばす。それが本当にあんまりさりげなかったせいで、私は思わずその手を取ってまんまとテントから出るのにエスコートされてしまった。クラージュの仕草はいちいち洗練されているのだ。私は、この仕草は鼻につくんだ、嫌味なんだ、こいつは悪い奴なんだ、と自分で自分に言い聞かせる。

「背の高い方がミュゼ・トスカ・ブランネイド。背の低い方がベル・ラグランジュ。どちらも葉介の友人なんです。花奈さんの事も写真で知っていましたよ」

「はい。さつき、実物はブスだって言われました」

「あれ、おかしいな。ミュゼは花奈さんの事、可愛いって褒めてたんですよ。さすが葉介の家族だけあるって」

「……………」
ほら、息をするようにお世辞を言う。私には、直接褒めるよりも兄弟と一緒に褒める方が効くって事も多分もう既に見抜いていてこう言ったんだろう。やっぱりクラージュは悪い奴なんだ。すぐだまされる自分の性格をよく知ってる私は、何度か深呼吸した。クラージュは多分、息の深い私の様子は知らんぷりしているんだろう。
「葉介は、ミュゼヤベル以外にも友人が多いんですよ。皆の様子を見てやってください。あなたから贈られる珍しい品物を楽しみにしていたのは葉介だけじゃないんです。本人が来たと知ったら、皆驚くだろうな」

「……………」
葉介を褒めるふりをして私をおだてている。だまされてたまるか。私は何度も何度も深呼吸をした。まったく、過呼吸になりそうだ。

その後クラージュは私の手を引いて、長い時間をかけて駐屯地を大体ぐるっと一周した。

荒野シュツルク。どこを見ても、岩と、砂と、西部劇に出てくるようなぼさぼさでみすばらしい茂みしかない、殺風景な場所だ。

でも、ここには人がいる。大勢の人ががやがや騒ぎながら、テントの周りをうろつろついたり、剣と剣とで訓練試合らしき事をしていたり、食事の準備をしていたりした。いちおう、意味深な視線を送ってきたりする、葉介の友達らしい人はあちこちで見かける事が出来たけど、ちらちらと視線をやるばかりで、何故かあんまり近寄ってこようとはしなかった。クラージュはまあまあ偉い人らしいから、近寄りがたいのかもしれないし、仕事の時間で手が放せなかったからかもしれない。気になる事は気になるけどまあ、どつちでもいいや、と私は思った。大事な友達なら、葉介本人が紹介してくれるだろうから。

葉介の友達の存在を匂わせただけで、紹介しようとしもないクラ

ージユは代わりにこのへんの土地の説明をのんびりと始めた。

「ご覧の通り、何もありませんが、国防上大変重要な意味合いを持つ場所です。隣国サンタリアとの国境地域ですから。現在我々はここにジユノ・リブラン・コルトワールを指揮官として、約三千人規模で駐屯しています。このあたりが交戦地域でなくなったのはほんの一ヶ月ほど前の事ですが、その頃は約一万人揃えていました。ああ、葉介を前線に出した事はありませんから、ご心配なく」

それは何よりだ。葉介はものすごく剣道が上手いけど、さすがに実戦で通用するようなものじゃないだろうから。心配事が、一つだけだけ解消されたので私はふうつとため息をついた。でも、心配事はこれだけじゃない。

なんでそもそも葉介が軍隊となんか一緒にいるんだろうか。前線に出されなくても流れ矢やら流れ弾やら、もしかしたら流れ魔法やらに当たる事もあるだろうし、それに戦場でビタミンCはちゃんと取れてるのか、お芋ばかり食べさせられてるんじゃないだろうか、ていうか葉介はあのミュゼとかいう性格の悪いデカにいじめられるんじゃないだろうか。初対面の私に対するあの態度を思い返すと、ありえない事じゃないはずだ。

そういう事を考えると、手が震えるほど恐ろしい。

クラージユは私の思い悩みに気付いたんだろうか。手を繋いだままだったから。彼はさりげなく歩き出した。私も手を引かれて歩き出す。

「見ての通りの荒れ地です。村も森もありません。水は辛うじて少し湧いています。庇護すべき、鉾の……」

クラージユは鉾の……と何か言いかけたけど、ふっと微笑んだ。そして言い直す。一体何を言いかけたのか知らないけど。

「本来なら、手厚く庇護すべき対象を連れてくるべき土地ではありません。しかしこと紅玉鉾脈に関しては、このシュツルクが大変適した環境なんです」

「どうしてですか？ 葉介はあなた達にとって、金のなる木みたい

なものなんですよね？ どうして、せめて、危なくない所に守っておいてくれなかったんですか？」

握る手にも力が入る。怨恨も入る。葉介を帰してくれない上に危ない目にも遭わせてたんだとしたら、許せなさすぎる。

「鉱の……」

クラージュはまた何か言いかけてやめた。ますます感じが悪い。

「何ですかその鉱のうんたらって」

「……いえ。言うとな葉介にきつと怒られますから」

クラージュは何故か思わせぶりに微笑んでいる。悪い奴オーラを放つスーパードルフィーとはまたなんとも珍しいものを見てしまった。さすが異世界だ。ちよつと引いた私はクラージュから少し距離を取ろうとしたけど、クラージュの手は離れない。

「とにかく、紅玉鉱脈に限らず、黄金鉱脈、遊玉鉱脈、翠玉鉱脈、真珠鉱脈、他の者も皆心の動きに応じて宝玉を産み出しますが、それぞれ『産み出す事に向いた』感情というものが決まっています。黄金鉱脈は『充足感』、真珠鉱脈は『よろこび』、翠玉鉱脈は『安らぎ』……」

「……………」

出来れば、葉介と関係ない話はあるまいしなくて欲しいな、と私は密かに思った。なにしろ私の集中力といたらハムスター並なのだ。このままだと、さりげなく大事な話をされても聞き流してしまいかもしれない。

ていうかクラージュは私をどこに連れて行くつもりなのか。まさか体育館裏に連れてってボコにした上で私一人を日本に叩き帰すつもりじゃないだろうな、と私が疑い出した頃、クラージュはどこからともなく、赤に透き通って、昼の太陽光を受けて輝く小函を取り出した。蓋といい側面といい、優美な鳥の彫刻が施されていた。じつと観察すれば分かる。これは、継ぎ目一つ無いルビーで出来ている。

一体どうやって作ったのだろう。元々は、多分とても大きな大き

な、ひとかたまりのルビーだったのだらう。それを薄く削りだして文様まで彫り込むなんて、並の技術ではないはずだ。確かルビーっていうのは、ダイヤモンドほどじゃないとしても、二、三を争うくらい固い宝石のはずだし。

更に驚くべき事に、クラージユがそのルビーの小函の蓋をそつと開けると、後から後から真つ赤なルビーが湧いて出ているのが見てとれた。私が葉介からさつき貰ったのと同じルビーが。からからきん、と涼やかな音をたてながら、小箱の底から一粒一粒湧き出すルビーは小函の縁まで盛り上がり、溢れる、と思つた瞬間、いずかたへか消え去る。多分、葉介を水底からで違う場所へ連れて行つたのと同じような魔法が、この小函にもかかっているんだらう。

クラージユは小函の蓋を静かに閉めた。

「紅玉鉱脈は『熱情』です。怒り、正義感、反骨心、感動。葉介が激しい火炎で心を灼くほど、この『紅の函』からはルビーがこんこんと湧き出する」

そうして、行く先にあるものを視線で指す。私もクラージユの視線を追つて、前方を見た。

そこにいたのは、葉介達だった。葉介が木刀をふりかざして、ベルに挑みかかっている。ベルとミュゼは鍛錬の時間だつてさつき言つてたから、葉介もそれに参加しているんだらうか。鍛錬つて言つても、素振りとかじゃない。周りはもう木刀を素振りする事もしないで、ベルと葉介の試合に見入っている。見稽古みたいなものだらうか。

ベルは強かった。さすがベルセルクのベルだ。ベルセルクって何なのか分かんないけど。葉介が何度斬りかかっても、十合以上打ち合う事はない。ベルはすぐに葉介の木刀を絡め取り、葉介の身体をはじき返してしまう。葉介は何度も強く地面に叩きつけられ、砂埃を巻き上げた。でもすぐに、葉介は起き上がってまた木刀を構え直す。

「……………」
もう、見てらんないくらいだった。全国大会で優勝し（かかった）時の勇姿はどこ行っちゃったんだろう。とうとう葉介が起き上がらなくなると、ベルは器用に木刀を腕で大車輪みたいに回しながら軽く首を傾げた。

「もうおわり？」

「『もう』じゃねーよ……『まだ』だよ……。もう鍛錬の時間とつくに過ぎてんじゃねーかよ……」

荒野の大地に仰向けになったまま、ぶつぶつ葉介が言っている。ベルはしばらくそれを見下ろしていたけど、ふと葉介から視線を外して私をじっと見つめた。私はびっくりしてまばたきを繰り返す。見物している人混みに紛れていたから、私とクラージュに気付いているなんて思いもしなかったのだ。しばらく私と視線を通わせた後、やがてベルは葉介の顔の上へ屈み込み、何事かをぼそぼそと呟く。効果はてきめんだった。一瞬にして葉介は起き上がる。ベルは跳ねるような動きで軽やかに葉介の頭突きを避けて、また間合いを取った。葉介は砂埃も払わずにぼろぼろの身体で木刀を振りかざして叫ぶ。

「まだまだああああッ！！ 花奈を引き合いに出すなあああッ
こんのくそつたれえええッ！！」

裂帛の気合いと共に、クラージュが手に持つルビーの小函からじやらじやらじやらじやら、ととめどない音が漏れ聞こえ出す。前に幹也と葉介と三人で聴いた、熱情ソナタも真つ青の勢いだ。大決壊だ。大瀑布だ。今がちょうど、『葉介が激しい火炎で心を灼』いている最中なんだろう。

…………… それにしてもベルは一体何言っただろう。『お姉ちゃんが見てるよ、かつこいいとこ見せなくていいの？』みたいな事だろうか。でも、残念ながら葉介のかつこいいところは見られそうもない。ベルはそれだけ強かった。ベルは、下から切り上げられた木刀をいとも簡単になぎ払い、その勢いそのまま葉介の肩口へ打ち込む。

辛うじて葉介がそれをかわしても、ふくらはぎをしたたかに打たれて葉介はまた崩れ落ちた。でもまた、すぐに起き上がって叫ぶ。

「負……け……て……！たまるかあああああッ！」

「一度も勝ったことないくせに態度おおきいよね、葉介って」

言葉だけはけだるげにベルはため息をついたけど、その唇はにっ
と形の良い弧を描いている。

「次こそ勝つつつつってんだろぅがあああッ！！！」

「次っていつ？」

「明日って今だああああッ！！！」

ふざけてるわけでもないのに漫画の台詞が混ざっちゃってる所をみると、今の葉介はかなり錯乱してる感じだ。明らかに頭に血が上っている。打たれ、倒され、また起き上がる。受け身の練習してるんじゃないんだから、って突っ込みたくなるくらいだ。

「……ナルド、止めなくて良いの！？」

「葉介から、いかなる場合でも決して止めないようにときつく言い渡されておりますから」

負けっぱなしの事も心配だけど、このままじゃ葉介は、頭の大事な血管を切っちゃいそうだ。真っ青になって私はナルドを振り返ったけど、ナルドは伏し目がちに、こうとだけ言う。

さっきの私は、一体どうやってベルに勝ったんだっつたらう。私の大事な葉介を叩きのめしてるベルを、どうにかして止めてあげられればいいのに。

でも今の葉介は、弱いのに、負けっ放しなのに、私が知ってる葉介よりずっとずっとかっこいい。葉介はいつの間、こんなに大きくなっちゃったんだらう。擦り傷だらけになっても戦い続ける葉介は、私が知ってるよりずっと凜々しい。

「……………」

なんか、情けなくて泣けてくる。

よわよわなのへこたれない葉介も、葉介を助けてあげらんない自分も。

The 1st Attack!! 7 (後書き)

明日って今だ：1987年から週刊少年ジャンプで連載されている『ジョジョの奇妙な冒険』での台詞です。本来は「明日って今さ」となっています。

もう、駄目だ。見てらんない。私はどうしても離れないクラージュの手を、仕方ないのでぎゅぎゅ引っ張ってその場から離れる。クラージュは、私がこんな最後まで見ていられないって分かかって、ここに連れてきたんだろうか。だとしたら最低だ。クラージュは私に引っ張られながら、ナルドに言った。

「ナルド。あなたはここに残ってください」

「はい、クラージュ様」

ナルドが静かに返事したのも聞こえないふり、誰かの声が私達の背中にかかったのも聞こえないふりだ。

誰もいない所に行きたいのに、誰もいない場所なんてどこにもなかった。怒ったような顔をして涙をこらえる私の背中に、無情なクラージュの声がかかる。

「ご覧になって、分かってくださったと思いますが」

「……言わないで」

私の気持ちなんてクラージュにはどうでもいい事らしかった。クラージュは私が止めるのも聞かずに、言いたい事だけ言い続ける。「葉介から責任とやりがいを奪う気ですか？ 弟を縛る権利なんてどんな姉にも無いはずですよ。葉介はゲルダガンドに来て変わったでしょう？ きつと、あなたが知るどの葉介より生き生きしているはずですよ」

「……何、言ってるのか分かんない」

私は辛うじてそれだけ言った。クラージュが一体どんな顔をして私に話しかけているのか、まるで想像出来ない。

「葉介はいつも君と幹也君の間に挟まれていたんだそうですね。君はいつも自分のしたい事だけをしていて、のびのびとしていて、幹也君はご両親の期待を一身に受けている。自分はこれと言って才能

が無いから、居心地が悪かったと言っていました」

「……………」
頭を後ろから思いつきりぶん殴られたようだった。そのくらいシヨックだった。

でも、でも、でもそんなの、嘘だ。だって、みそつかすはいつだって私だったのだもの。葉介は要領が良くて、剣道が上手くて、無気力だけど私と幹也にはいつも優しくて……………。それに、それに、あんなに私達、仲の良い兄弟だったのに。

ほんの、たった、一時間前までそうだったのに。

私の弟の葉介が、私の知らない所で友達を作って、私の知らない所で将来を決めてしまつて、私の知らない所でずつと暮らしていく決心をするはずがない。

私が必死で奥歯を噛みしめて耐えていたのに、クラージュは優しげに聞こえる声音で囁く。

「葉介の気持ちは分かったでしょう。もう葉介も君も十七歳でしたね。そろそろお互いに自立すべき年齢です。あんまりお姉さんがべつたりくっついていては、葉介がかわいそうですよ」

「……………」
もう私には、返事をする元気もない。

「あなたは帰りなさい、花奈さん。もう葉介を困らせしないで。葉介は帰りたくなつた時には自分で帰ると思いますよ。…僕らも、全力で引き留めますけどね」

「……………！！！」
もう限界だった。私は無理やり、クラージュの手を振り払う。私に手を振り払われて、クラージュはびっくりしたようだった。多分手に剣だこの一つも無いような女の子に、力で負けるとは思ひもしなかつたんだろう。どっこい私は合気道の達人である。いや達人つてほどじゃないけど、合気道の「あ」の字も知らない相手の腕を振り払うくらい、朝飯前の齒磨き前だ。

「うるさい！ あんた達のやり口は卑怯だ！ ばかやろう、死んじ

まえ！」

口から出た罵倒の言葉はそれつきりだった。もつとありとあらゆる言葉で貶めてやりたいのに、私の口からはそれ以上言葉は出てこない。

私は全速力でその場を駆け去った。誰もいない所へ行きたい。

「花奈さん！」

クラージュの声が私の背中を追いかけてくる。クラージュは、私を呼び止めたとして一体何がしたいんだろう。ますます私の事を傷つけないだろうか。だとしたら最低の底が抜けてますます更に最低だ。私は立ち止まらないで、ただひたすら人気の少ない方へ少ない方へと走っていった。

「花奈！ クラージュ！！」

花奈とクラージュが葉介の所から去っていったその時、ちょうど葉介は十二度目にベルに突き飛ばされた所だった。葉介はまたすぐに起き上がったが、しかし十三度目にベルに挑みかかる事はしない代わりに人垣から逃げるように去っていく妹とクラージュの背中に叫ぶ。妹とクラージュの、尋常ならざる雰囲気を感じ取ったのだ。

折しも強く吹きだした風のせいで葉介の呼ぶ声は弱められてしまつたらしい。やがてクラージュ一人だけが疲れた面持ちで戻ってくる。

「…変だな。痛む良心がまだ残ってたなんて」

一人つぶやきながら衣服の胸を軽く押さえていた彼に、葉介とベルは詰め寄った。

「おいクラージュ、花奈は？」

「クラージュ様。花奈に何言つたの？」

「本当の事を、少し脚色して」

クラージユはただそうとだけ答えた。いや、だけ、ではなかった。クラージユは美しい相好をほんの少しくしゃっとさせて苦笑する。

「しかし、言い過ぎてしまいました。嫌われてしまいましたね、あれでは」

ミュゼは葉介の背中についた砂をはらってやりながら言った。

「いやー俺の見た限りじゃ、あの葉介妹、葉介のテントから出てきた時点で既にもうかなり副司令の事嫌いになってたと思いますね」

「君が言えた義理ですか。どうせ、君も花奈さんの事を無理に挑発したんでしょう」

「挑発した事はしましたけどお、でも葉介妹、ぜんっぜん聞いてなかったらしい」

「……二人とも、俺のいない所で、花奈に一体何をしたんだよ？」

ぼんぼんと言い合う二人に割って入るようにして、葉介が自分より頭一つ半ほど背の高いミュゼと、それより少し低いクラージユをそれぞれじろりと睨み上げると、ミュゼは決まり悪そうに言った。

「ごめん、葉介。でも俺も、お前の妹によかれと思ってさ……」

「謝るなら花奈にだろ」

葉介は冷たくミュゼをあしらって、擦りむいた肘の砂をはらった。その肘を、さりげなく近寄ってきたナルドが丁寧に捧げ持って口元へ近づけていったが、葉介はそれを振り払い、代わりにナルドのふわふわした髪を乱暴に撫でてやる。クラージユは苦笑したまま言う。「仕方無いでしょう、葉介。花奈さんには帰って貰うしかないんです。我が軍の結束がどんなに堅くても、三千の数がある。それだけいけば、よからぬ事を企む者がいるものです。ナルドにちよっかいを出せるほどの猛者は少ないから良いとしても、花奈さんのように可愛い女の子がその辺りをうろちょろしては、嫌な目に遭う事があるかもしれません」

クラージユは息でもするようにさりげなく花奈の事を褒めたが、花奈とは違って葉介は、自分の妹が褒められても渋い顔をするだけだった。話が彼にとって看過出来ない問題を孕んでいたからだろう。

「だから俺が葉介ごとまもってやるって言ってるのに」
機嫌悪そうなベルが呟いたが、
「それに」

と、クラージュは続けた。

「サングリアがこちらに探りを入れだしているようです。単なる和平交渉にあたる為の下調べであるなら良しとしても、どうもきなくさい」

クラージュは、深い深いため息をついた。

「また、戦いが始まるかも知れませんが」

駐屯地はほんとに広がった。五分後、息が切れて私がせえせえ言いなから歩き始めた時も、まだ周りに人がいたくらいだ。私は、今どこを歩いているのかも分からなくなっていたけど、構わずん歩いた。

見慣れないかつこうの女の子がいたのが物珍しかったのか、それとも不審人物だと思われたのか、厳しい目で近寄ってこようとす人もいたにはいたけど、大抵の人は私の事を放っておいてくれた。多分、瞳孔が開いているからだろう。それに堂々としていたのも良かったはずだ。競歩なみの早歩きも功を奏していたかもしれない。

歩いている間ずっと、『今私を見る人たちは皆、葉介の友達で私の事を葉介を連れ戻しに来た敵だと思ってる』という考えがちらちら脳裏をよぎったせいで、視線がちよっぴり怖かったけど、それならそれで良いとも思った。どいつもこいつも皆ぼこぼこのぎったんぎったんにして、葉介を引きずってでも日本に帰りたい、と思うぐらい、私は頭に血が上っていたのだ。出来るはずのない事を本気でしたい、と思う程度には。

しかしとうとう私は人気の少ない所を見つけ出した。地面が3メートル盛り上がっただけ、みたいなそっけない丘だ。砂色のテントと、駐屯地をぐるりと囲っているらしい石造りの壁と、それにくつついた十メートルほどもある高い物見櫓が建っていた。私は、その丘の斜面に猛然と穴を掘る。落ちていた枝の先がすり減ってブラシみたいになっても、爪の間に砂が入って痛くても掘り続けた。

そして、やっと出来た洗面器と同じくらいの大きさで、それより少し深いくらいの穴に顔を突っ込んで、私は叫んだ。

自分の叫び声が小さな穴で反響する。鼓膜がびりびり不愉快だったけど、私は喉が枯れるまで叫んだ。

やがて気が済むと、私は顔を上げた。穴の中は私の息で蒸れている、顎から髪の毛の生え際まで軽く湿っていた。それを、荒野の乾いた風が冷たく乾かしていく。

泣いたって叫んだって誰も慰めてくれやしないのだという事が、ここでは逆に、救いだっただ。

私はもう一度穴に頭を突っ込んだ。もういい加減疲れたから、叫ぶのはなしだ。代わりに、呟いた。

「……………死んじまえて言っちゃった……………」

思い返すと、胸が潰れそうだった。どんなにムカついててもどんなに傷つけられても、軍隊にいる人に死んでしまえなんて、口が裂けたって言って良い言葉じゃなかった。あれは明らかに逆ギレだ。もちろんこの世界の何もかもが許せない事には変わりないけど、その中でも一番クラージュが許せない事にも変わりないけど、でも、日常的に死の恐怖に晒されるような人を相手にして言っていい言葉では絶対無かった。

自分の事が恥ずかしくて、消えてしまいたかった。

葉介が悩んでる事なんて何にも知らなかった。我が家の天才である幹也の事はともかく、葉介が一体私の何に対してコンプレックスを感じていたのか、まるでわけがわからない。悩んでたって事を勘定に入れても、葉介が私達のいないどこか違う所を居場所に決めてしまったって事もものすごくシヨックだった。でも確かに、日本にいた頃、葉介はいつもつまらなそうな顔をしていた。口癖は『だるい』『めんどい』『やりたくない』。葉介はいつも私が幹也の後ろで、冷めた目をしていたのに。

つまり私は、弟離れ出来てなくて、葉介の事を上っ面しか見ていない、だめなお姉ちゃんだったのだ。今までそんな事にも気づけなかった。

でも。

私の心の弱い部分が、救いを求めて言い訳をする。

私達は、もう十七歳。その通りだ。

弟離れしなくっちゃ。まったく、その通りだ。

楽しんでる葉介の邪魔をしちゃいけない。本当に、返す言葉もない。

でも、でも、でも。

世の中の姉というものは、みんなもつとマシな方法で弟離れをするはずだ。これじゃあんまり、ひどいじゃないか。

The 1st Attack!! 9

「また、戦いが始まるかも知れません」

クラージュの言葉に、やっと終わらせたはずの戦争の残り香を感じ取り、葉介の間には重苦しい沈黙が落ちた。

「……そうか。そういう事なら、しょーがないな。……じゃあ、危ないよな。花奈を迎えに行つてやらなきゃ」

その沈黙を割るように、ふうと葉介はため息をついて、埃塗れの髪をがりがり掻いた。クラージュは気遣わしげに少し眉をしかめる。「……もうすこし、一人にしてあげたいものですが。そもいかないでしょうね」

クラージュはついさつき、花奈に思い切り手を振り払われたばかりだ。しかし、葉介は軽く口元を緩ませた。

「良いんだよ。あいつ意地っ張りだし、どうせ一人じゃ戻つて来れないからさ。花奈、俺が迎えに来るの絶対待つてるはずだ」

「とにかく、手分けして探しません？俺が見つけても、葉介妹、ついてこねーかもしれないけど」

ミュゼがかたをすくめると、今度は葉介は、わずかに眉をひそめた。

「俺以外の奴が見つけると面倒だな。花奈に説得されちまうかも」

そんな密談がなされた事は知るよしもなかった私はと言うと、ちよつとトマト農家に思いを馳せていた。後悔するのにもしょんぼりするのにも飽きていたのだ。私の集中力の無さはごくまれに役に立つ。なんでトマト農家について考えていたのかというと、この時私

は、葉介の今後を憂っていたのである。

最近珍重されるトマトで、小振りだけれど甘くて実が引き締まっているフルーツトマトっていうものがある。別にそういう品種がある訳じゃない。栽培法が特殊なだけの普通のトマトなのだけど、その栽培法っていうのがもう、本当にもう、変態的なのだ。

詳しくはノウハウの問題だからよく知らないけど、とにかくそのトマトは雨も風も当たらない温室で、手を尽くし、いとおしまれ、一滴の水も与えられず、惨いほどいじめ抜かれるって事だけは知っている。トマトという植物は、過酷な環境に置かれるほど、実は甘く引き締まり珍重される。しかしその価値も、人間から見るとの話だ。トマトにしたらたまったものじゃない。葉も茎もおれて、からからに乾いた地面にうなだれて、這々の体で実を付けさせられるんだから。

まあこんなところでトマトについて語ってもしょうがないけど、トマトを育てるにはまあまあ良さそうな場所だけど、ここは（問題は、クラージユ達がトマトにも家族があるって事を今まで深く考えてなかったんじゃないか、って事だ。

葉介本人が気にしてないのにつけ込んで自分の国の復興支援を恥ずかしげもなく任せちゃってるし、私達家族を過去の物にしちゃってる感じがひしひしとする。

『熱情』だかなんだか知らないけど、あんな過酷な訓練を課せられて、更には戦場まで連れ回して、何様のつもりだ。葉介の事を生かさず殺さずの危ない目に遭わせて、それでたくさんルビーを手に入れようって言うんなら絶対許せない。

何よりも、まだ十七才の男の子の退路を断って自分達の都合の良いように使っているって、どう考えてもフォローのしようがない、悪い奴らだ。葉介がどう考えていようと、ミュゼみたいに『帰すわけにはいかない』って宣言するのは絶対におかしい。

私は葉介の事が好きだ。幹也と自分自身、それと同じくらい好き

だ。それはつまり、誰よりも大好きだっという意味。

だから葉介が決心した事なら、結局私はそれに逆らえない。きっと葉介のしたいようになるのだろう。

でもせめて、クラージユがさつきちらつと言っていたけど、『葉介が帰りたい時には帰してあげる』って事と、葉介の身の安全をきちんと確約してもらわなくちゃ困る。絶対困る。

だってこれじゃ葉介、まるつきり家畜だ。

私はまた一周してふつふつと湧き上がってきた怒りに任せて、胸の中で死ぬ、以外の罵り言葉を山ほど並べ立てながら、私は荒野をぎっと睨んだ。石材が採れるなんて言ったら、多分耕作にも向いてない土地柄なんだろう。見晴らしが良くて、壊して困るような物も少なくて、地盤もしっかりしてて、まさに戦争やるにはもってこいつて感じの場所だ。

葉介を苦しめるために選ばれたこんな土地なんか、緑で埋まれ、水に溢れる。小鳥は鳴いて、子ヤギが跳ねろ。

私は葉介が迎えに来てくれるのを待ちながら、さつき穴を掘るのに使った棒で、地面に絵を描き始めた。

……もし、葉介がこの土地に残るなら。私は、これからの事を考えた。

その時はぜひともこのへんを辺り一面牧草地にしたい。そしてヤギや羊をいっぱい飼おう。で、その糞をクラージユに踏ます。

もし、葉介がこの世界に残るなら。

怨念をこめてうんこを踏むクラージユと、ヤギと、高笑いする私の絵を地面に描いていると、なんだかちよつとずつ気が晴れてくる。そうだ、やっぱり気晴らしは必要だ。あんまりごちゃごちゃ悩みすぎるのはよくない。

良い気分になってきた勢いで、鼻歌を歌い出すと、ふと突然、私の背中に呼び声がかかった。

「……何をしている？」

「わあっ！！」

振り返らなくても誰が私の後ろにいるのか分かる。さっきのあの、黒いタトウで、重低音で、明らかにかたぎでない、ラスボスオーラ出しまくりで、司令官の、ジュノ・なんとか・なんとかーるだ。わあ、上の名前覚えてた。私的にはこれはかなりすごい事だ。

……なんて言ってる場合じゃない。私は慌てて両手の平で地面の落書きを消した。

わーかっこつかない。あんなにシリアスな感じでクライジユを振り払って来たのに。

私は、自分に集中力が無い事を心から残念に思った。ともかく、この世界に「まきぐそ」が伝わっていない事を祈ろう。今描いた絵の事をクライジユに知られたら、なんだかとっても怖い事になる気がする。

ヤギが一匹消えずに残っていたけど、丹念に消してる暇はないので私は適当なところで振り返った。妙に近いところにジュノは立っていたので、しゃがんだまま見上げると首が痛い。

「どうして、ジュノがここに？」

「…お前こそ、何をしていた？」

「ジュノがなんで、ここに？」

「……………」

ごりおしだったけど、ジュノは黙った。もう一回『答えろ』って威圧されていたら、おしっこ漏らして全部白状していたかもしれない。

「……………」

ジュノは、どうしても上目遣いになってしまつ私の表情をどう読んだのか、眉間の皺を僅かに深くした。そして両腕を組む。

「……………先ほど、ベル・ラグランジュと決闘したらしいな。葉介を帰せと」

「…まあね」

私はしぶしぶ頷いた。

「そして今、お前は駐屯地を離れ、個人行動して憚らない。いずれも軍規を乱す行いだ。お前自身は違つても、葉介は既に軍属の者としてここにある。兄の立場を悪しくするのは、お前とても不本意だろう？」

兄じゃなくて弟…なんて、言える雰囲気じゃなかった。私は一歩後じさりそうになるのを懸命にこらえる。

後じさりそうになつたのは、怖いからだ。クラージュに対して感じる得体の知れない怖さとは違う。もつと直接的な、威圧感というか、息苦しさというか、そういう怖さだ。

後じさるのを我慢したのは、私が葉介のお姉ちゃんだからだ。弟を誘拐した犯人に対して一歩でも退いたら、私はこれからきつと後悔する。テロには屈しちゃいけないっていうのは、よく聞く話だし。ただ、私は、テロに屈するつもりはなくても、弟の主張を聞き入れる事は出来る。

「……………軍規を乱す人間は、ここには置いておけない？」

私は出来る限り落ち着いて答えた。いや、実際は『落ち着いて見えるように』答えた。実際は必死だ。私よりずっと歳も背も上の、人の上に立ち慣れていそうな男の人に立ち向かうために。

拳を作つて踏ん張っている私を見下ろして、ジュノは少し眉を上げた。意外だ、という意味らしいけど、やっぱり何だか、威圧感がある。

「……………先ほどとは、随分気が変わったようだな」

先ほどってというのは、多分あの会議室で向かい合った時、『葉介を帰せ』って怒鳴った事を言っているんだろう。あの時は、葉介の気持ちも知らないで随分偉そうな事を言ってしまった。私は血が上った頬を砂で汚れた手で押さえた。

拗ねて、叫んで、怒り終わった時からもう、私の心は決まっていた。

この国を、早く平和にしよう。葉介が心おきなく、私達の家に戻るように。

私は立ち上がって、何故か三十センチの近さに迫って立っているジユノを見上げた。立ち上がっても視線を合わせようとすると首が痛いのは相変わらずだ。

「……ジユノ。お願いがあるんだけど……」

ジユノが私の言うのを遮って首を振る。

「葉介恋しさにここに残る……と言いたいのならやめておけ。……後悔するぞ」

「……なんで？」

言う前から否定されて、私は唇をとがらせた。考えを読まれた事よりも、有無を言わず却下された事の方がかちんときている。

私の気持ちを値踏みされたのが嫌だった。葉介のためだと思って決めた事で、後悔なんて絶対にしない。私が葉介の事がどのくらい好きなのかも知らないくせに、いい加減な事を言わないでほしい。

私はまじまじとジユノの顔を見上げた。ジユノは腕を組んだまま、微動だにしない。

そもそもジユノはあの、ベルと葉介の稽古の様子も、私とクラールジユが喧嘩になったところも見ていないはずだ。なのにどうして私

の居場所を知っているんだろう。ここに来る前に葉介達と合流したんだろうか。だとしたらどうして、葉介本人が私を迎えに来てくれないんだろう。

私はあんまり考えるのが得意ではない。だから、ストレートに本人に聞いた。

ジユノは長衣と暗い色の髪を風になびかせながら、静かに答えた。「お前達のいた『日本』よりゲルダガンディアは…特にこのシユツルクは、過酷な環境にある。葉介はともかくお前では保たないだろう。体力も精神力も、ここでは砂と風とが削り取る」

「…！ 葉介はともかくって、何それ！！」

私が保たないなら、葉介だってしんどいはずだ。私が日本に帰った方が良いのなら、葉介だって日本に帰った方がずっと本人のためになるはずだ。

思わず食ってかかった私を、ジユノはいなしもせずにいる。ただ立ったままでいて、続ける。

「葉介は男だ。体力がある。お前は女で、見たところ葉介ほどの胆力も無い。それにお前には決定的なものが欠けている」

「決定的なもの？」

「庇護者だ。葉介にとってのナルドリング。従者という名の、絶対的庇護者」

「絶対的…庇護者？ 葉介を、ナルドが守ってるってこと？」

ジユノは頷いた。

ただの護衛って意味じゃなさそうだ。どういう事だろう。あんなに可愛い女の子が、絶対的に葉介を守っている？ 支えとして？

「なんだかよく分からないけど、いらないよそんなの！」

「いや、必要だ。この世界で生きるといふ事は…今まで持っていた総てを失うという事は、異世界人にとって耐え難い苦痛だ。従者を保たない『鉾の姫』は数多いが、その多くが心を病んでいる。異世界人は、絶対的な味方を必要とするのだ。己を捨てても葉介を助ける、ナルドリングのような絶対的庇護者の存在を。葉介にはそれ

がある。お前には無い」

『鉾の姫』。一体何のことだか分からないけど、とりあえず聞き流した。今何よりも重要なのは『耐え難い苦痛』。これだけだ。耐え難い苦痛。葉介にそんなものが降り掛かっているっていうのか？

「 例えば」

私が何とか言ってみようと思ってもう一回口を開くと、それを押しとどめるようにジユノは話し出した。

「例えばこの荒野の中央でお前と葉介が遭難したとする。水も食料も無い。お互いが飢え、渴き、意識朦朧としている。そんな時、たった一滴、夜露を枯れた葉の先に見つけたとしたらお前は どうする？」

一滴の夜露。 たった一滴？

「……………」

一滴なら、分け合う事は出来ない。それにたった一滴口にしたところで、苦しみが癒えるわけでもない。でも葉介は苦しんでいて、私も苦しんでいる。たった一滴。私が飲むか、葉介にあげるか。私は答えに窮した。

するとジユノは冷たく言い放つ。

「即答出来ないのなら、お前は葉介の絶対的庇護者にはなりえない」
「……………だつて、一滴じゃ……………」

「ナルドリंगाならば苦しみの片鱗すら表面にはせず、すぐに葉介に分け与える事が出来る。それが『紅玉鉾脈の九十八番目の従者』という名のついた、我々とは別種の生き物の本質だからだ。いや、苦しみをすらしないかもしれない。葉介にその一滴を与える事が、ナルドリंगाの生きる意味であり、価値であり、活力になるからだ。葉介はそれを知っているから、何の気兼ねもなくその一滴を口に出来る」

「……………」

絶句する私に、ジユノは初めて哀れむような目を私に向けた。

「恥じる事はない。重ねて言うが、それが『鉾の姫の従者』であり『ナルドリング』なのだ。だが、その存在が異世界人によるべとなる。葉介にはナルドリングがあり、お前にはそれがない。他の何かで替えが効くようなものでもない。」

たとえばベルは葉介の護衛だから、その一滴の水を葉介に与えるだろう。軍人の任務とはそういうものだからだ。ベルでなくてミユゼでもクラージュでも、俺でもそうする。

だが、葉介は必ず気付く。俺達の苦しみと、葉介に対し負う俺達の義務に気付き、葉介も苦しむ。それでは意味がない。

お前でも同様だ。お前がその水を口にしては葉介は渴いたままだし、葉介が口にしてもお前が渴いたままでは葉介は苦しむ。葉介を苦しめずにいられるのは、ナルドリングだけだ。ナルドリングだけが、葉介を絶対的に庇護出来る」

ジユノが一体、何が言いたいのかわからなくなってきた。私にとって苦しすぎる話だからだ。私は苦しすぎると、心にシャッターが降りていって、もう何も聞こえなくなってしまう。私は必死で降りてくるシャッターを支えながら、ジユノの話聞き続けた。

「異世界人にとって、このよるべなき世界でよるべとなるのはそういった絶対的な庇護者のみだ。」

この者ならば、自分を絶対的に守る。この者ならば、絶対的に頼りに出来る。そういった存在が、よるべなき異世界人には必要なのだ。

葉介にはナルドリングがある。お前にはない。葉介ではお前のよるべにはなりえないし、俺もお前の『それ』にはなってはやれない」

「……………」
その時強く吹いた風で、一度ジユノは口を閉じた。その風が吹き止むのを待って、また話し出す。

「よるべなき世では、お前は苦しむ。お前が苦しめば、葉介も苦しむ。葉介を苦しめるな。お前の居場所はここにはない」

「……居場所なんか」

私は言った。

「居場所なんか無くて良い。私が苦しい時葉介も苦しいなら、葉介が苦しい時私も苦しいって分かってよ。居場所なんか要らないよ。」

ただ、私は葉介だけが要るの。絶対要るの。私達、三つ子なんだもん。ジュノは…あんた達は、身体の三分の一をもぎとられて生きていろって言ってるんだよ。」

無理だよ、そんなの。苦しいよ。葉介がいない所で、葉介の事心配しながら生きていくなんて私には出来ない。私が苦しい思いして帰ったら、葉介だって苦しいんだよ。ねえ、お願いだから」

言いたいだけ言い終わると、私は手の平で一度だけ目をぎゅっと押さえた。押さえた後の掌を見下ろすと、案の定黒い跡が少し残った。ウオータープルーフのはずのマスカラだ。

「お願い。私と葉介を引き離さないで。私は、葉介を一人で大人にしたくないの。ここで葉介と一緒に歳をとってあげたい。それが半年でも一年でも、十年でも二十年でも。葉介がここで一人で大人になっちゃったら、本当に葉介、日本に帰れなくなっちゃうから。そんな事になったら、私生きていけないよ」

私の泣き言を聞いた後、ジュノはずっと黙っていた。私にとっては永遠にも等しい時間だったけど、実際には大して時間は経っていなかったんだろう。やがて、ジュノはぽつんと呟いた。

「…肉親の情とは、すさまじいな。」

その言葉を聞いた瞬間、一体何を意味しているのか分からなかった。ぽかんと開いた私の口を、それこそラスボス級の冷たい視線で閉じさせると、もう一度言った。

「……………執着し合う相手がいるのは、良いことなのかもしれん」

言ってジュノは、私の額に爪の先で触れ、何か一言呟いた。その瞬間、かっと体中が熱くなつて、ぎゃつと私は悲鳴を上げる。

「大声を出すな、見苦しい。……………ただの印と、保険だ。お前がここで暮らすための」

「……………」

あっけに取られていられたのも、一瞬の事だ。私は目をまん丸くして、ジュノに叫んだ。

「……………え！？ なにそれ！ どういう事！？ 私バカだから分かんないよ！？ ここにいていいって事！？ 駄目って言ったら葉介担いで逃げるけど！」

「二度は言わん」

言ったきり、ジュノは長衣の裾を翻して私に背を向けた。それと同時に、私に風が強く吹き付けて、私は乱れた髪を耳の所で押さえた。

……………近すぎ、と感じたジュノと私の距離はもしかして、私を風から守るためだったんだろうか。昼過ぎてから傾きだした太陽は、草木の無い荒野の温度をダイレクトに下げ、風を強く吹かせたらしい。ジュノは私には全くかまわないで、すたすた歩いていく。目に入った砂埃をまばたきして追い出しながら、私はふらふらジュノの後ろ姿を追いかけた。

ジュノは私をちらつと振り返つて、冷たく言う。

「お前に情けをかけるのはこれが最後だ。惨い目にも遭うだろう。……………覚悟しておくが良い」

「……………ジュノって、ツンデレ？」

私が思わず呟くと、ツンデレって言葉を理解したわけでもないだろうに、ジュノは眉間に濃く皺を寄せて、歩く速度を速くした。

「花奈！」

「葉介！」

私達が遠目にお互いを発見したのは、ほぼ同時の事だった。私達二人とも、連れがものすごく目立つ人間だったからだ。

葉介の傍には、今は髪が長いおかげでキャンディキャンディだけ、髪を短くするだけであっという間にマクドナルドの愉快なキャラクターのコスプレになっってしまう真っ赤な髪のナルドが寄り添っているし、（そっぴいや名前も似ている）私の斜め前では言わずもがなの、ラスボスカリスマ野郎ジュノが長衣の裾を翻してずんずん歩いている。

葉介は相変わらず砂まみれの格好で私達の所まで駆けてきて、慌てた様子で私の肩を掴んだ。

「何でお前ジュノといえるの！？ 皆でお前の事探してたんだぞ！」

「何でってそりゃ……あれ？ 何でだろ」

そっぴいえば、さっきもジュノに同じ事を聞いたけど、軽く無視されたのだった。私と葉介が二人揃って（ナルドは葉介しか眼中に入っていないみたいだ）ジュノを見上げると、ジュノは軽く眉を動かした。あんまり表情豊かなタイプじゃないように見えただけど、こういう皮肉っぽい顔のレパトリーはかなり持つてるようだ。意外と、というか、案の定、というか。

「…覚えていないのか、葉介」

「何をだよ？」

聞き返しながら、葉介は『何か嫌な予感がするぞ』の表情を浮かべた。傍目にはほとんど変わっていないけど、私には分かる。ジュノにはそれが読めなかったのか、それとも読みはしたものの敢えて流したのか、涼しい顔のまま続けた。

「花奈は、お前が最初の晩に天幕から逃げ出して泣き暮れていたあ

の丘で見つけた。やはり兄妹だな」

「……！」

あつという間に、葉介のほつぺたが真っ赤に染まっていく。多分クラージュのあの函がここにあつたら、またナイアガラな勢いでルビーをざぶざぶ湧き上がらせていただろう。でも私に取っちゃそれどころじゃない。私は慌てて葉介の身体をぎゅっと抱きしめて、ほつぺたをぐいぐい擦ってあげる。

「葉介、泣いてたの!？」

「泣いてねーし!! お前こそ何だ花奈! そのパンダ目!! 化粧バリツバリ落ちてんじゃねーか!!」

「私だつて泣いてないよ! 葉介こそ何さ! なんで私のいない所で泣いたの!!」

「無茶言うなつて……ちょっと……おいこら花奈! 離れるバカ!」

折角慰めてあげたのに、葉介はものすごく困った顔でもがいて、私をあつという間にふりほどいてしまった。一步、二歩とよろけた私を、傍のナルドが支えてくれる。

小さい頃はいつもこんな風に、涙で濡れてる兄弟のほつぺたを拭い合っていたのに、いつの間にか葉介は私の手を必要としなくなつてしまっていたらしい。

でも、今から一緒に歳をとってあげる事は出来る。いつか日本に帰った時、葉介を一人つきりにしない事は出来る。

私は葉介の手をぎゅっと握って、自分のほつぺたに当てる。さすがに葉介も、それを振り払おうとはしなかった。その姿勢のまま、私は葉介に笑った。

「あのね葉介、私もここにいる事になったから」

「……は……は? ああ? ……は!？」

順応力と決断力の葉介にしては、かなり動揺を見せた感じだった。何しろ聞き返すまでにかなり時間がかかった。

「何でだよ!? 俺まだ帰れねーから、せめてお前だけでも帰って

もらわねーと……」

食ってかかる葉介を軽くないしながら私はにっこり笑う。

「葉介を一人に出来ないよ。あつちは幹也が残ってるから、絶対幹也が何とかしてくれるって」

「ああ……確かに幹也なら……って、そういう問題じゃねーし」

じゃあ、どういふ問題なんだろう。葉介が何を渋ってるのかまるで理解できない。私は改めて首を傾げた。

「葉介が危ない目に遭うのに一人で帰れるわけないじゃん。それとも葉介、私が冥王星人にさらわれて脳味噌だけの状態で筒の中に入られて、宇宙空間を旅してたとしても助けに来てくれないの？」

「助けてやるけど何だよそのわけわからん絶望的な状況。それとこれとは話が違うだろ」

葉介は私の肩をぐつと掴んだ。痛いぐらいの強さで私の両肩を握りしめて、葉介は真剣な顔で言う。

「あのな、さつきも言ったけどここ、戦争中なんだよ。お前を危ない目に遭わせたくねーの」

「分かってるよ、さつき聞いたもん」

葉介が分かんない事を言うので、私はちよつと目を怖くして葉介を見た。葉介は私の不機嫌な顔くらいでは怯まない。葉介も怖い顔をして言った。

「守ってやれないかもしれないだろ」

「……あのね、葉介。私、守って欲しいなんて思っただけよ。私が葉介を守るんだよ」

葉介の私の肩を握る手に、ますます力がこもる。ぎつと私の目を睨む、葉介の目がきつい。

「意味分かって言ってるのか。戦争なんだぞ。もう数え切れないくらい人間が死んだんだよ！」

話していくうちに、だんだん葉介の声が大きくなった。最後はほとんど怒鳴っていた。私も負けじと怒鳴り返す。

「宇宙人にさらわれたのと何が違うのよ、今の状況は！ 自分の事しか考えてない人達にさらわれて、身動きとれない状況で、命の危機にさらされてるんじゃない！ 葉介はそういう時、私を絶対助けに来てくれるんでしょ！？ なんで私が葉介を助けに来たんだって思っただけなの！？」

「俺の友達を悪く言うな！」

「話を逸らすな！！ 私は葉介が好きなの！」

「おっ… お前突然何言ってるんだバカ！」

私が怒った顔をした時にも怯まなかった葉介が、何故か今怯んだ。照れてるらしい。

なんにしる今がチャンスだ。私は葉介の首にとびついた。腕をぎゅっと絡めて、一生離さないつもりで抱きついて、叫んだ。

「心配なの！ 私達姉弟でしょ！ ずっと一緒だったでしょ！ 一卵性三生児でしょ！」

「お前が妹な。一卵性とかねーよバカ」

別れた半年の間も、やっぱり葉介は葉介のままだったらしい。間髪入れずに二カ所に突っ込んだ後、葉介は黙りこくった。私の腕をふりほどこうともしないでいて、やがてその末、深いため息をついた。

「こうなると幹也が心配だな…」

その一言が、私のことを認めてくれたと教えてくれた。私はますますぎゅっと弟を抱きしめて、こいつを守って家に帰ろうと誓う。

さて、ここまでが私がグラナアーデという世界に受け入れられるまでのお話だ。

この時点ではグラナアーデに受け入れられただけで、ゲルダガンドという国に迎え入れられたわけではなかったのだけど、この時の

私は知るよしもなかった、というやつだ。

The 1st Attack!! 10 (後書き)

冥王星人にさらわれて〜∴クトウルフ神話では、冥王星にミ∥ゴとよばれる菌類が住んでおり、人を花奈が言う方法で持ち運ぶ事があるとしています。

登場人物（前書き）

ここまでの登場人物です

登場人物

森見谷花奈

三つ子の兄弟の真ん中（と本人は言い張る）で、紅一点の長女。高校二年生で17歳。

度胸とスルースキル、集中力の無さ、喉元過ぎて熱さを忘れるスピードに定評がある。

兄弟思いの性格で、二人のためなら死ぬ以外の事は何でもする。

黙っていれば美少女。が、KY気味の性格と広く浅く型のオタクが災いして、モテた事がない。

ある恐るべき『才能』を持っているが、幸いにして花奈自身は自覚していない。

森見谷葉介

三つ子の兄弟の真ん中（と本人は言い張る）で、次男。

適応力と決断力、突っ込みの素早さに定評がある。三つ子の中では一番モテる。

異世界グラナアーデに引きずり込まれ、紅玉鉾脈としてゲルダガンドの為に尽力する事に。

『紅玉鉾脈』の異名が『紅の鉾の 姫』である事は花奈には内緒。

紅玉鉾脈の従者・ナルドリंगाにラブラブ光線を出されまくっているが、受け流している。

森見谷幹也

自他共に認める三つ子の長男で、IQ『平均』190。そのため、あだ名はいつきゅー。

賢明さと判断力に優れる三つ子の頭脳だが、おっとり浮世離れた性格で、花奈以上の不思議系。

えり好みしない性格で、オールマイティの天才。何に対してもさほどの興味を持たないが、
弟妹に対する愛着はすば抜けており、好きな女の子のタイプは『
花奈みたいな子』。

現在お隣のおばさんからミカンを貰いに行っているところである。

ジュノ・リブラン・コルトワール

ゲルダガンド最西端『荒野シユツルク』において、隣国との防衛
戦中の黒曜軍指揮官。階級は大佐。

本来なら西の領主フォーステア公が統べるべき土地で軍を率いて
いる理由は…？

公の部下というわけではないらしい。花奈いわく、『いけ好か
いカリスマラスボス野郎』。

藍色の長髪、藍色の目、曰くありげなタトウを顔の右側にびっ
しりと入れている。その正体は謎。

ツンと見せかけてデレたり、デレと見せかけてツンツンだったり
する。その真意も不明。

クラージュ・コフユ・グラジット

金色の目、金茶の髪を鎖骨まで伸ばしている、人間離れた美貌
の持ち主。

物腰柔らかな態度で、敵を作りやすいジュノと他との緩衝材にな
っているようだ。

ミュゼとは軽口を叩き合う仲で、部下からも慕われているようだ
が、花奈は苦手意識を持っている。

ずば抜けた馬術を生かして、花形である騎兵隊を率いている。黒
曜軍の副司令で、階級は准佐。

花奈の身の安全のために敢えて厳しい事を言った…ように見せか
けて、実はわりと素で言っていた。

ナルドリング

真つ赤な大きい目に真つ赤な猫っ毛の髪を持つチャーミングな女の子。

通称はナルドだが、マクドナルドのドナルドさんとは関係がない。花奈はキャンディキャンディだと思った。

愛らしい外見とは裏腹に老成した雰囲気彼女の正体は、『紅玉鉾脈の従者』ことナルドリング。

紅玉鉾脈である葉介のためだけに生まれ、生きてきたという紅玉鉾脈の九十八番目の従者。

葉介に対する好きっぷりは常軌を逸しており、常に付き従う姿はストーカーの方がまだマシなほど。

ベル・ラグランジュ

緑の髪にとろんとした目の少年。身長150センチ。十五才なのでこれから伸びるかもしれない。

葉介からはベルセルク（狂戦士）呼ばわりされているが、今のところその力はまだ見せていない。

階級は曹長だが、部下はおらず、好き勝手に戦場を走り回っている、らしい。

花奈の合気道の技に興味津々で何かとまとわりつき、葉介に嫌な顔をされる。

実家は宿屋で、姉が5人、妹が4人いる。彼が無口ながら我を通す性格なのはそのせいかもしれない。

ミュゼ・トスカ・ブランネイド

金髪を後ろで三つ編みにした、つり目の少年。ベルとは反対に大柄で、190センチは越えている。

貴族のぼんぼんのため階級は伍長扱いだが、さほどの功績をあげたわけではない。

一応ベルの護衛兵らしいが、駐屯地ではベルを子分のように連れ

回す姿がよく目撃されている。

誰に対しても物怖じせず、クラージュに対しては特に馴れ馴れしいが、一応二人は親戚同士。

面倒見の良い性格でもあり、ノリがよく、葉介のよき友達であるらしい。

「あーもう避けるとか考えなくて良いから！ 突撃しろ！ 食らわせろ！ ！ 連打！ 右手の上のボタンだよ！ よしおっけい！ もいっぱつ！ もいっぱつ！ あ、避けて！ ああつ、避けてって言ったじゃん！」

「避けなくて言いつつたのお前じゃねーか！」

「ギアノスくらい倒しなよバカ！ 今時小学生でももうちよっと上手くやるよ！」

「小学生がなんなのかはわかんねーけどバカにされてる事は伝わったぞコラ！」

「いいよもうボタン連打してれば倒せるから！ 突撃！」

「突撃！？ 冗談きついでこれもうヤバいだろ！？ 上の長い棒どんどん短くなつてくじゃねーか！ これ短くなるとヤバいんだよな！？」

「そうだよ命だよ！ もう二回死んじやつてるからこれゼロになったらもう最後なんだよ！」

「何だこれ呪いの道具だったのか！！ よくもやつてくれたな！！」

「よくもつて何言つてんの！？ 何その勘違い！ 死ぬのミュゼ本人じゃなくてMyuzeってキャラだから！ このかわいそうなマツチヨだから！」

「俺が殺すのか！？ さつき俺が髪の色まで決めてやったこの妖精を、俺が殺すのか！？」

「妖精じゃないよ！ ていうかこんな妖精やだよ！」

「どーすんだよ！ こいつ死なすのやだぞ俺！」

ミュゼが私が貸してあげたPSPを握りしめたまま青ざめる。ずっと黙りこくつたままだったベルがどこからともなく針を一本取り出して、PSPの中のギアノスに突きつけ、平坦な声で言った。

「花奈、これつぶすよ」

「やめて、潰さないで！ 高かったんだからこれ！！」

……どっから突っ込んで良いか分かんなくなってきた。グラナアーデにモンハンはまだ早かったんだらうか。私はベルの針からPS Pを庇いながら首を傾げた。

モンハンっていうのはモンスターハンターの略で、慣れるまで操作がややこしくて苦勞する事と、1000時間プレイする人もザラだという大変中毒性の高い事で知られるゲームシリーズだ。男の子を相手にするなら多分これをプレイすれば友情が育まれると思ったのだけど、さすがにゲーム画面の中のキャラクターを妖精と勘違いする人がいるとは思わなかった。ファンタジーの世界恐るべし。

とにかくマツチヨな妖精 Myuze を助けてやらなくちゃいけないので、とにかくまずはマップの隅っこに行かせて、私はミュゼに応急薬の飲み方を教える。アイテムを使うのにもコツがあるのだ、このゲームは。具体的に言うと、まずLボタンを長押ししつつ、何か視点キーを兼ねている方向キーを左右に入れ、ペこぺこという効果音と一緒に流れてくるアイテムを一個ずつ確認しながら、よっこいしょと武器をしまつて、やっと見つけた応急薬をおもむるにボタンで飲まなくちゃいけない。この説明に30秒かかった。えらいこつちやだ。

そういうめんどくさい作業を幾度も経て、ザコ筆頭であるギアノスを三匹なんとか倒せると、マップの中で動くものは Myuze だけだ。つまり、窮地は脱したということになる。私はミュゼの背中をばんばん叩いた。

「ミュゼおめでとう！ おめでとう！ マジおめでとうー！」

「おう！ なんかコツ分かったわ俺！」

ミュゼは素直に私に背中を叩かれながら、ギアノスの上でセレクトボタンを連打した。セレクトボタンを押すとキック出来るのだ。ギアノスに限らずモンスターは死ぬと当たり判定が無くなるから、すかさず空振ってるだけなんだけど。そんな暇があるならギアノスから素材を剥ぎ取って欲しいけど、さすがにそれを言うのは贅沢だろう。

「あんだだけ苦戦しといてよく言うわー」

よく言うわーと言いつつ、私はにやついた。

どういう理屈かは知らないけど、私がこっちに来るなりこの世界の文字を読めるようになったのとは裏腹に、ミュゼ達は日本語が読めない。

しかしそのせいで教官クエのチュートリアルも理解できないし、アイテムを選ぶのに失敗して視点をぐるぐる回してた事や、剥ぎ取らせようとしたり代わりに肉を焼き始めた事、そもそもPSPを握るところからダメダメだった事、色んな事が走馬燈のように蘇った……っていうのは大げさだけど、子供がやっと歩き始めたようなそんな気分でしたからだ。何より、ギアノスごときを倒した程度で自信満々になっているミュゼが微笑ましくて仕方ない。

「……………」
…ティガレックス見たら、どんな顔するんだろこいつ。確か弱体ティガが出てくるクエがあったなあ…。

私の黒い思惑も知らずに、ミュゼは消えていくギアノスの死体の上で無駄なキックを続けている。

「で、次何やんの？」

「…いったん雪山草集めてクエスト終了しよ。そのさ、草生える所でx押して。そしたらしゃがめるから…」

また元のように、黒、緑、金色と色の違う頭を三つ付き合わせてPSPを覗き込んだ時、ちょうどテントの幕が勢いよく跳ね上げら

れた。

「お前ら俺のテントで何やってんの？」

「あ、葉介。ちょっとね、モンハンをね」

挨拶も無しに入ってきたのは葉介とナルドだった。まあ、ここは葉介のテントだからいつどんな風に入ってきてても良いんだけど。私とミュゼとベルは、さっきから全員狭いベッドの上であぐらをかいて、ゲームに興じていたのだ。葉介は呆れたように雪山草をいそいそと摘む Myuzee を覗き込んで言う。

「何で異世界来てまでモンハンやってんの？」

「うんまあ、そうなんだけどね……」

言葉を濁す私の隣に葉介が座ると、ナルドもミュゼの正面から PSP の画面を興味深そうに覗き込む。人口過密だ。しかも暗い。私は PSP に手を伸ばして、画面の明るさを調節した。

「なに、お前そんなに暇なの？」

「暇っていうか……うーん、暇だなあ……」

「何かやれよ。俺のために残るってあんなに大見得切っという二ー
ト生活じゃ、幹也が泣くぜ」

「うーん……」

私は口の中でもごもご言いながら、机の上をちらっと見た。机の上にはハンターハンターと、家族の写真と筆箱、ノートというより帳面と呼んだ方が良さそうな紙の束の他に、分厚い革張りの本が何冊も積んである。

あの本は全部、私が流し読みすら出来ずに挫折した魔導書だ。

私も、池の中から拾った読めない文書が、こっちに来た途端読めるようになった時はびっくりしたけど（ちなみに余計な真似をするな、というような事が書いてある手紙だった。大きなお世話だし読めなかったから全く意味がない）多分ミュゼ達が仮に日本に来たなら、日本語が読めるようになるのだらう。異世界人にはそういう力が働くらしい。

そういうわけでせつかく文字が読めるようになったのだしと、一応、私もグラナアーデに馴染む努力をしなかったわけじゃない。葉介のお守りだけじゃ暇だし。異世界なんだから魔法の勉強でもしようと思つて、ジユノに交渉さえしたのだ。ジユノは一言も口を効かないまま視線だけで私を追い払いやがったけど。

その後、私が魔法を勉強したがっているのを知ったベルがクラージユに交渉してくれて、クラージユから渡されたのがあの本だった。

本ではまず、基礎の基礎として自然界の四つの力についての話が載っていた。

四つの力。さもありませんって感じた。どうせおおかた、『火』『水』『土』『風』とかそういうんだらう。で、隠し球的に『光』とか『闇』とかがあるんだらう。火と水を組み合わせると草とか。土と風を組み合わせると雷とか。全然まったく問題無い、むしろどんと来い。

…と、私は全部使いこなしてやる気満々でいたのに、出てきたのは次の四つである。

電磁気力

重力

強い力

弱い力

……………。ね。無理だよね。

この中でなんとなく分かるような気がするのは重力だけだ。でも、グラビデとかそういうのじゃあない事は何となくおぼろげに察している。私もKYじゃない。

ていうか電磁気力って……電磁気力!? レンジでチンを司る

力か！？ ピンポイント過ぎる！ 無いだろ！ それは無しの方
だろ！ ていうか強い力と弱い力ってどういう事だ！？ 強いとか
…弱いとか！？ 少なくとも魔法じゃない！ 多分これは物理だ！
！ 私物理取ってないのに！

日本では読めなかった文字がこつちに来た途端すらすら読めるよ
うになったのはとつてもありがたい事だけど、かといって内容まで
頭に入ってくるわけじゃない。

私に読み取れたのは、クオーク、レプトン、ハドロン、ニュート
リノとかいうよく意味の分かんない単語ばかりだ。分かんない単
語を調べるために索引を引いているのにまた分かんない単語が出て
くるといふ負のスパイラル。そして意味不明なグラフと図形と数式
と専門用語。

もう、どつという事なの……としか言いようがない。

ナルドが、魔導書を手にとつて恭しく葉介に差し出す。それを受
け取った葉介は、ページをぱらぱらめくりながら、軽く眉を顰めた。
「あー、これな。俺もちよつとだけ読んだわ。あんま向いてねーな
ーって気がしたから、ロウソクに火がつくようになった時点でやめ
たけど」

「マジで！ 葉介チャツカマンになったのか！ 良いなー良いなー
！ 私もさくつと実技から入りたい！！」

「チャツカマンって…お前な。仕組みが頭に入っていないといつまで
経つても火い付かねーぞ」

葉介はポケットからボールペンのような物を…というかどうか見て
もボールペンだった。ボールペンを取り出して、お尻の部分が上、
ペン先が下になるように、私の目の高さに掲げた。本当に、無造作
な仕草だった。

「よく見てるよ」

葉介が言つなりお尻の部分をノックする。

するとボールペンの表面を電子回路のような編み目が覆ったのと同時に、葉介の指先からばちつと火花が散った。火花はゆつくりと回路を伝わってペン先に到達し、ペン先から小さな火を噴き出させた。火は根本のペン先側は太く、下にゆくにつれて細くなるという逆さまの涙型の形をしている。

「……………」
それきりだった。火は逆涙滴型を保ちながらゆらゆら揺れ、そしてゆつくりと細くなり、消えていった。

「…………… こんだけ？」
「こんだけ」

葉介は頷いた。ミュゼとベルは相変わらずPSPに夢中になっていて、こつちを見向きもしない。

…………… これは何て言うか、これが勉強の成果だとしたら、ライター持ってきた方がなんぼかマシじゃないか…？

…………… ん？ …… 『逆さまの涙型』？
確か、上昇気流だか重力だかの影響で、ロウソクの炎って普通上を向くはずだけど、どうしてこの火は下向きに伸びていたんだろう。私はその事を指摘すると、葉介は、

「お、観察眼はあるんだな」
と言いながら、火を消したボールペンのペン先で私のほつぺたを突こうとする。

「ひゃっ」
さっきまで火がついていたペン先だ。火傷を覚悟して私は身を固くしたけど、すぐに目をぱちぱちさせる。ペン先は、全然熱くなかったのだ。葉介は説明してくれた。

「これは普通のボールペン。今のは上昇気流なんかの影響を考慮しない形で火をつけたから、ああいう形になる。空気の循環が無いからすぐ消えるよ。そういう細かい反応まで考慮に入れるとしんどいからしなかったけど。一応こつちにも火打ち石みたいなものはあるから、そっちの方が主流みたいだな。クラージユみてーにすげーや

つになると兵器並の魔法も使えるけど、それでもお前が思ってるような魔法はちよつと使えないぜ」

「どついう事？」

「お前がやりたいのは、何も無い所から呪文を唱えるだけで水が出てくるとか、炎が出てくるとかそういう魔法だろ？　そういうのは無理だつて事。その魔導書に書いてあるのは、魔法っていう仕組みを扱うためのハウトゥー本つてとこだな」

「……………」

葉介からみて、私はまだいまいぢ分かってない顔をしていたんだろう。葉介は困つた顔で説明を続ける。

「あー…例えばさあ、『ちよつと今から科学してみろ』つて言われても困るだろ？」

「へ？」

「それと同じで、『ちよつと今から魔法使つてみますね』つてわけにはいかないんだよ。魔法つていうのは、いわばこの世界の法則だ。俺達に出来るのは、その法則をよく把握して、その法則を完全な形で頭の中で再現する事だけ。法則を一部の隙も無く把握し、それに矛盾しないものを構築出来れば、その通りの事象が現実起きる」

「……………」

「それつてめちやくちや大変なんじゃない？」

葉介が言っているのは多分こついう事だ。魔法つていうのはプログラムのようなもの。頭の中で完璧にプログラムを書ききることが出来れば、プログラムは発動して、その通り動き出す。

でも本当にプログラムに似ているものだとしたら、ごく簡単な事をさせるだけでも何行もプログラム言語を書き連ねて、更にデバッグを重ねなくちゃいけない。だつていうのに、魔法を使うためにはそれを頭の中だけ、しかも一瞬で構築しなくちゃいけないとしたら、相当大変なんじゃないだろうか。

私がそう聞くと、葉介は事も無げに頷いた。

「うん、めっちゃ大変。お前はバカにしたけど、さっきの火もかなり頑張ってた。だから通常、そのプログラムを埋め込んだマジックアイテムを使う。魔具とか何とか言うんだったかな。だから傍目には、あんまり魔法っぽくない。普通に機械いじくってるように見える。よってお前が期待している魔法はほぼ使えないと思って良い。以上」

想像を絶する悲しみが私を襲った。いやそこまででもないけど。

あまりの事に私がぼったりベッドに倒れ込むと、ミュゼから悲鳴が上がった。

「やめる揺らすな！」

「やかましい！」

揺らしてどうにかなるようなモンスターはもう狩り尽くしたわ！
ガウシカー一匹残ってないわ！！

崖から落ちて動揺したらしいミュゼに膝蹴りを食らわしながら私は叫んだ。

「いやだ！ どうせならFFかドラクエの世界が良かった！ 何ならグランディアでもとモノでもマジバケでも良い！ こんなわけわかんないのやだ！」

「無茶言うな」

「私も炎魔法とかやりたい！ 水魔法とか！ 時間魔法とか！ 空間を操るとか！ 何か抜け道は無いのか！！」

「…分かりました。じゃあさしあたり電磁気力からお勉強しましょうね」

「ぎゃおおおん！！？」

なんだか聞きたくない声を聞かされた気がして、私は思わず絶叫した。今、不穏な声が聞こえた。具体的に言うところクラージュの声だ。思わず、跪くナルドに抱きつくように防御態勢を取った私をにっこり見下ろして、たった今声もかけずに入ってきたクラージュがに

つこりと凄艶な美貌に笑みを浮かべた。

「夢に出るまでその本を読めば、丸暗記でも何とかなると思いますが」

「やだー!!! そんなのやだー!!! 助けて幹也ー!!!」

「おいやめるよ花奈。呼ぶと幹也ほんとに来るぞ」

「幹也ー!!!」

「失礼ですね、花奈さん。僕は親切で本を貸してあげただけなのに」
クラージュはちよっぴり悲しそうな顔で微笑んだ。初対面だった
ら多分騙されてたけど、今なら分かる。クラージュは私の精神を摩
耗させて家に帰らせようとしてるだけだ。

ほんのりピンク色に頬を染めたナルドを立てせて、私は膝に乗せ
て背中からぎゅっとした。軽い。柔らかい。こうするとちよっとな
ち着く。ナルドも嫌がらないから別に良いだろう。

やっとポポノタンを集めるのに飽きたらしいミュゼが私の脇腹を
突つつく。

「花奈、元ん所に帰って来たぞ」

「じゃあ特産品とネコタクチケット納品して終了ー」

返事をしたのは葉介だ。狭いベッドの上で、私の背中をすり抜け
るように葉介がPSPを覗き込む。

「ネコタクチケットってどれ？」

「その白いやつ」

「あー幹也ー!!!」

グラナアーデに留まると決めてから早三日。

私は迷走していた。

The 2nd Attack!! 1 (後書き)

想像を絶する悲しみが…2002年から運営されているMMORPG『FF11』での名物プレイヤー・ブロント氏の2ちゃんねる上の書き込みです。本来は『想像を絶する悲しみがブロントを襲った』という言い回しです。

FF、ドラクエ、グランディア、ととモノ、マジバケ…全て魔法の出てくるRPG作品です。

ぎゃおおおん…2009年発表『THE IDOLM@STER Dearlly Stars』に登場する秋月涼のくちぐせです。

The 2nd Attack!! 2

あの後、時間にうるさいクラージュに休憩時間の終わりを告げられ、ゲーム大会は終了した。

ベルとミュゼは何かの訓練、葉介とナルドはクラージュとどこかに行ってしまった。多分また、ルビーを出す為にストレス負荷を受けに行っただろう。あの、思い出すのも苦しくなるような剣術訓練とか、あるいはジュノに睨まれながら戦術会議とか。

私もついて行くと言っただけ、クラージュも葉介も、ナルドにすら私に付いて来ないように説得されたので、泣く泣く諦めた。

で、私かというと。クラージュに計算尺とかいうよく分かんない物を押しつけられ、ほとんど半泣きになりながら一人で問題を解かされる羽目になっている。

計算尺はFF12にも出てきた武器：ではなくて、そのまま計算に使える物差しみたいなもの。構造としてはこうだ。

上下に分割された透明の物差しに目盛りがみっしり振ってあり、それぞれの物差しは左右にスライドさせられるようになっていて、その上下の物差しをスライドさせて、更に物差しに噛ませる力、カーソルを自分の計算したい数値にそれぞれ合わせると、計算結果がぱんと出てくるのだ。

この計算結果を公式に当てはめて色々うにやうにやるのだけど、どの公式を使ってどう計算してどこに当てはめればいいのかもよく分かっていない私にはもう、脳味噌が筋肉痛になるほどの苦行だ。

ちなみにこの計算尺は、普通に線も引けると思いきや、カーソルが邪魔で引けない。殴り武器としてももちろん使えない。正直、ローラスケートになる分そろばんの方がまだ上等だと思うのだけど、持ち主のクラージュが怖くて言えていない。

葉介が嫌な思いしてるんだから、私も少しくらい頑張らなくちゃいけないとは思いつけど、これは、なんていうか、多分今まで経験した中でも一番しんどい勉強だ。なにしろ、分かりやすく解説してくれる幹也と葉介が傍にいないんだから。もしかすると、自分の力だけで勉強するのは今回が初めてかもしれない。

今私がいるのは、居候させてもらっているナルドのテントだ。葉介のテントの傍にある。

葉介やナルドだけじゃなくてジユノやクラージュ、ベルとミュゼのテントも、全部駐屯地の中心部に固めてある。夜中も人の気配が絶えないのが難点だけれども、一応、斥候や夜襲に備えた安全地帯である事は間違いない。偉い人の居住スペースってところだ。

葉介の身の安全の事を考えれば当然の事だけど、紅玉鉾脈の事に関してのごく一部の高官しか知らない、超極秘事項らしく、葉介はジユノの遠い親戚として扱われているらしい。便宜的に与えられた階級は少佐。准佐であるクラージュの更に上である。ざまあみろ。

……というのとはかく。葉介だけなら、美少女のナルドが常にうやうやしくかかずにいるおかげで、まだ何となく偉いところの御曹司として周りの一般兵達も納得していたらしい。

が、『そまつな格好をした（掃除用のジャージだけど）年端のいかない女の子が、見張りの目もかいくぐって会議の席に乗り込み、あまつさえ葉介の姉を名乗った』という噂が広がって、葉介やナルド、私をうさんくさいと感じる人がちらほら出たらしい。

まあ葉介は、私が来るまでの半年間で八面六臂の大活躍をしたらしいおかげで、さほどの風評被害はなかったんだけど、私の方は、葉介の実家が秘蔵していた（という設定の）魔具　ゲーム機とか中華鍋とか制汗スプレーとかそういうのだけど　を、我が物顔で惜しげもなく使うとか、クラージュと仲が悪いとかいう様々な

理由のせいで、あまり良い眼で見られていないらしい。

お腹が減ってきたので私はシャーペンと参考書と、書いてるとペン先が何度も引っかかって破れそうになる帳面を閉じて思いつきり伸びをした。

そしてタッパに入れて冷ましておいたご飯の残りを、昨日地球から届いた中華鍋に入れてテントを出る。お昼ご飯を作るためだ。真っ昼間の駐屯地は、兵のほとんどが訓練や哨戒に出ているので閑散としていた。

ちなみ、駐屯地、駐屯地って皆が呼んでいるから私も駐屯地って呼ぶけど、実際はほとんどもう、簡素な砦だ。石造りでかなり頑丈な囲いもあるし、畑もあるし、井戸もある。テント暮らしをやめて塔を建てれば完全に砦だ。昼と夜で気温変化が激しいから、それを防ぐためにもテントをやめて石で家を造っちゃえば良いのに、なんでそれをしないんだろう。謎だ。

ついでなのでこの際、私達が今住んでいる駐屯地がどういう構造をしているのか説明しよう。

駐屯地は、

(^ o ^)

このオワタのAAと同じような構造をしている。いや、冗談でなく。より正確に表すなら、

(^ o ^)

と、ちょんまげがついて、がにまたのオワタになる。この事に気

付いたとき、私はニヤニヤが止まらなくてミユゼにビビられた程だ。葉介に報告したら『なんで五芒星って言えないの？』って呆れられたけど、見えちゃったものはもうどうしようもない。第一五芒星と呼ぶには、ちよつと横に潰れすぎているし物見櫓の角の部分が表現できないじゃないか。

ちやんと言葉で説明するとしたら、こうだ。駐屯地を取り囲むように石の壁が立っている。そして、その石の壁から突き出す形で五つの物見櫓がある。

物見櫓は直角に折れ曲がっていて、ちょうど角のところに人が立つようになっている。梯子はついていない。セキュリティチェックみたいなものがあって、登録された人だけがワープ用の魔法陣をで櫓を上り下り出来るようになってるらしい。実際上った事はないからここらへんは曖昧だ。まあいい。

その物見櫓と、石の壁にに囲まれた部分が駐屯地だ。駐屯地は三重の円構造をしている。

一番外側の円のエリアは第一エリアと呼ばれていて、訓練用に使われるエリアだ。皆が走り込みをやったり馬に乗ってはしゃいだり、あるいはベルが葉介をポッコポコにしたりする場所だ。畑もここ。家畜はもう一つ内側のエリアで飼っている。

その一つ内側の円が、第二エリア。一般兵が住んでいるエリア。ここに厩舎とか調理場とかがある。武具庫もここだ。厩舎はオワタの右目の部分、武具庫はオワタの左目の部分。

更に、さほど重要でない会議ならここで済ませてしまおうらしい。実はジュノ…つまり最高責任者だけど、彼が普段のデスクワークをしているのもこのエリアだ。ラスボスが一番奥のエリアで引きこもってる！ と私は思うけど、この方が一般兵との距離が近くて風通しが良いんだそうだ。命令もよく届くし、一般兵の緊張感も保たれるのかなんとか。私が最初、突撃してしまったテントもここにある。

そして一番内側の小さな円が、第三エリアで、要人達の居住エリア。オワタで言うところの部分で、ジユノやクラージュは元より、葉介とナルド、私もここに住んでいる。

本来ならミュゼやベルは、階級的に言って一般兵の居住エリアにいなきやいけないんだけど、葉介の護衛任務があるとかなんとかで、このエリアにテントを張っている。ちなみにミュゼの話によると自爆スイッチもここに備えてあるんだとか。ロマンだ。多分嘘だろうけど。

一つ一つの円は、実際その場に立ってみても壁やなんかで明確に区切られているわけじゃないんだけど、いざ万が一かちこみをかけられた場合には、円ごとに境界が発動してそれぞれ区切られるよう、要所要所に魔具が埋め込まれているらしい。見えない防火シャッターってところだろうか。

もし、発動した時にその結界の境目のところに立っていたらどうなるんだろう……想像するとちょっと怖い。

ちなみに、私がクラージュを振り切って物見櫓のところまで歩いていった時の話だけど、あの時私は、駐屯地をほとんど真横に突っ切っていたらしい。昼間は皆訓練に行くから、外側のエリアが一番賑わう。

だからつまり、あの時の私は人の少ない方へ少ない方へ進む事で、駐屯地の外れを目指したつもりだったけど、実際は一番外側のエリアから中央を突っ切って、また更に外側へ、とすごい遠回りをしていたらしい。

あの時クラージュは私を追おうとはしなかったけど、多分反対側に歩き出していたらあのいかげしい計算尺でストップ魔法をかけてでも止めてただろう。駐屯地の外に出たら危ないもの。止められてたらかっこつかなかったから、結果オーライってところだろうか。

ちなみに調理場は一般エリアにある。調理場は多分駐屯地の中で一番良い造りをしている。何せ、石造りだ。多分料理の中に砂埃が入らないようにだろう。駐屯地の中で石造りの建物は、この調理場の他、防壁しかない。

調理場では、横幅は葉介二人分、縦幅はベル二人分……これは言い過ぎか。とにかく縦にも横にもでっかいおっちゃん、業火を吹き上げるかまどの前で、ぐらぐら煮立つ二メートル幅くらいの大鍋を、ぐるんぐるん引っかき回している。夜中に見たらトラウマになる事間違いなしのものすごい光景だ。

そのそばでは新兵らしき人たちが十人くらい集まって、何かを切ったり練ったり、金属のお皿を積み上げたりしている。その騒がしさと言ったら、訓練中の一個小隊にも相当するだろう。

「すみませーん!!」

騒音に負けないように声を張り上げると、鍋の前の巨人は私をじろつと見下ろした。こうして視線を合わせると、おっさんの目つきの悪さがよく分かる。リアルで眼が三角形をしている人、初めて見た。しかも白目が大きい。こわい。

怖いおっさんはためつすがめつ私のことを上から下まで見下ろした後、ふうとため息をついた。

「おいおいお嬢ちゃん、ひでえ格好だな」
言われて、私も自分の格好を見下ろした。

上は葉介の首が伸びちゃったTシャツ、下は中学の時のあずきジャージ。三年着たやつだから、これもくたびれている。それに、くくったままの髪、スニーカー。確かに、よれよれだ。

でもこれは不可抗力だと言いたい。私自身の服は掃除用のジャージ、その下に着てたキャミソール、ブラジャーとパンツ、それぞれ一枚きりしかない。さすがにこんなほこりっぽいところで三日も同じ服は着続けられないので、ブラジャーは夜の間に手洗いして、パ

ンツはナルドのを貰って、上の服は葉介のTシャツを奪って、と我ながら涙ぐましい努力で着る物を調達しているのだ。

出来れば下に履くものも借りたいところだったけど、ナルドのスカートはコルセットを締めて履く事を前提にしているらしくてウエストが全然入らないし、葉介のジーンズはお尻の部分がぱつんぱつん、お腹の部分はぶかぶかで、こっちも使えたもんじゃなかった。しょうがないから、下だけはジャージを履き回している。で、下着と一緒に夜中にこっそり洗っている。

その他、葉介のトランクスの履いてないやつを洗濯してる時と部屋着用にもらったけど、前に穴が空いてるパンツじゃ全然くつろげない。

「洗濯してますから、見た目ほどは汚くないです」

「何でも良いが俺の鍋には近づかないでくれよ」

「……………」
なんか悲しい事言われたけど、まあ気持ちは分からないでもない。とにかく中華鍋が重たいので、私はさっさと用件を話し出した。

「あの、お昼ご飯作りたいんですけど」

「ああん？」

おっちゃんの語尾が上がった。ぎろっ、と三白眼が睨めつける。

「見て分かんねえのか！ まだ調理中だ、出直してこい！」

「あの、チャーハン作るだけなんです。このご飯は朝の残りなんで、具をちよつと……………」

「葉介に残り物食わせる気か！？」

「……………」
話のわかんないおっちゃんだな。色めき立つおっちゃんを見上げて、私は言った。多分眉間に皺が寄ってただろう。

「葉介の好物なの。ほつといてよ」

「葉介の好物は塩肉とアボカドのサンドイッチだ」

……………うまそうだな、それ。

おっちゃんが自信満々に言うから一瞬気が逸れたけど、ここは引つ込めない。同じ釜の飯を食った歴なら、おっちゃんより私の方がよっぽど長いんだから。

「確かに葉介の好物は炭水化物だけど、ほんとにパンよりお米派。おにぎり作れって言われた事あったでしょ」

「……………」

「で、作れなかったんでしょ。炊飯器の使い方とお米の水加減が分かんなくて。葉介、お米研いだことすら無いから当たり前だけど」

多分、握るところか素手で触るのも無理なくらいの、どろどろのおかゆが炊けちゃったはずだ。手を真っ赤にしながらそれでも何とか握ろうとするナルドと、それを必死で止めるおっちゃんと葉介の姿が目に見えかぶようだ。

「……………」

「……………」

しばし沈黙のみで見つめ合う時間が流れた末、おっちゃんは大鍋の方に視線を戻し、ぶっきらぼうに言った。

「…………… 適当に持ってけ」

「ありがとございまーす」

勝った。私はひそかにほくそ笑みながら、調理場をきよろきよろ見渡した。さすがに新兵さん達が下ごしらえした中から持つていくのは気が引けるからと、私は床に置いてある銀のポウルに手を伸ばした。謎のお肉の切れっ端と、謎の野菜のみじんぎりが入っているチャーハンの良いところは、得体の知れない具を入れてもしっかり受け止めておいしいものに仕上がるころだ。

中華鍋に油を引いて、いざ謎のお肉を炒め始めると、大鍋の方から野太い悲鳴が上がった。雑巾を引き裂くようになって言えば詩的な表現になるだろうか。おっちゃんは大鍋の前から駆け寄ってきて、私のお鍋を無理やり火から下ろさせた。

「嬢ちゃん、そりゃ騎獣の餌だ……………」

「騎獣と言つと」

「ドラゴンが食うもんだ」

ドラゴン。ぜひとも見せてほしいものだ。思考を別の所に飛ばしてる私の肩に手を置いて、おっちゃんは小さな子供に言い聞かせるような口調で言った。

「あんな嬢ちゃん、俺達もあんたが憎くて辛く当たるわけじゃないんだぜ。…でもな、葉介にドラゴンの餌を食わせようとすんのはな、さすがにな…」

「……………」

ドラゴンの食べ物とはいえ、ちゃんとした肉っぽくておいしそうだ。でも、やめとけって言われる肉なら、やめておこう。お腹を壊されたらいやだ。それに辛く当たられたとは思わないけど、私は出来るだけしおらしく見えるように、小首を傾げて言った。ここが交渉のしどころだ。

「じゃあ、普通のお肉と、出来たら卵も欲しいんですけど」

「……あーびつくりした」

まさかあんなおいしそうなお肉がケモノの餌だなんて思ってもみなかった。うらやましい。出来たてのチャーハンをお皿に盛りつけながら、私は首をひねった。

補給線の維持が大変だつて誰かが…確かクラージュが言ってたよ。うな気がするけど、あれは嘘だったんだろうか。汚い嘘をつきやがるものだ。

汚れた中華鍋に水を張りながら、私はあたりをきよるきよる見回して、誰にもなく問いかけた。

「ねえ、葉介どこにいるか知ってる？」

「葉介さんですか？ 多分この時間ならちょうど訓練にキリがついた頃でしょうから、第二訓練場の近くにいますよ」

答えてくれたのは、傍でフライパンを洗っていた、柔和な感じのお兄さんだ。顔立ちは二十四…いや、二十三歳くらいに見えるけど、口元に浮かべたアルカイツクスマイルが妙に落ち着いた雰囲気醸し出していて、彼を年齢不詳にしている。髪を一筋残らずターバンで覆い隠しているのが奇妙と言えば奇妙だけど、砂埃避けだろうか。それともハゲてるんだろうか。ハゲだとしたら、折角綺麗な顔をしているのに気の毒だ。額には緑色の宝石が貼り付いているけど、色白だからインドっぽくはない。

「ありがとう」

「どういたしまして」

短くお礼を言うと、彼からも微笑みと短い返事が返ってきた。お盆に載せたチャーハンは三人分だ。私と葉介、それにナルドの分。

行く道々で色んな人からチャーハンをものごく不審そうに見下るされながらも、言われた方へ歩いていくと、ナルドの真っ赤な髪が遠くに見えてくる。葉介は、ターバンのお兄さんの言っていた通り、駐屯地の一番外側のエリア、南西側の第二訓練場にいた。人気の少ない日よけのテントを選んで、ナルドの膝枕でうとうと昼寝している。訓練は朝早くから始まるから、どうしても眠くなってしまおうだろう。私が近寄っていくと、ナルドがやんわり葉介の頬に指で触れて、葉介を優しく起こす。……私的には、ナルドをいまずぐ妹にしても全然かまわないのに、葉介はどうしてナルドを口説かないんだろう。不思議だ。あんなに可愛くて優しくて尽くしてくれるのに。

葉介は浅い眠りから目を覚まし、とろんとした眼で私を見る。私が二人の隣にぺたんこ腰を下ろすと、葉介は腹筋で身体を起こしてお盆の中身を見下ろした。

「あ！ チャーハンじゃねーか！！ 花奈が作ったの！？」
「もち。お昼ご飯までまだ時間かかるらしいから、これでも食べてつなぎなよ」

そう答えると、葉介は満面の笑みでお皿の中身を見下ろして、嬉しそうに言った。

「やっぱり中華鍋で作ったチャーハンが一番つめーよな！」
「普通のフライパンだと気兼ねして熱く出来ないもんね」

それに葉介じゃお米を炊くところからつまづくもんね。とはさすがに言わないでおこう。ナルドの前で葉介をバカにするとどうなるか分からない。

しよせん残り物だから二人前程度しかない。葉介に1.5人前、私に0.4人前、ナルドに一口、というぱつと見イジメに見える配分のお皿を回して、私達は黙々とスプーンを動かした。いや、ナルドは優しい微笑みを浮かべたまま、がつがつ食べてる葉介の様子を見ている。この分だと、葉介が食べ終わった後に自分の一口分も葉

介にあげてしまうつもりだろう。

ナルドは文字通り小鳥の餌くらいしか食べないし、あのでっかいおっさんが作ってくれるお昼ご飯もあるから大丈夫っちゃあ大丈夫だけど、折角だからナルドにもチャーハンを食べさせて欲しい。ついでに、お米の味を覚えて葉介においしいご飯を炊いてあげて欲しい。ついでに私にも味噌汁を作つて欲しい。葉介とナルドのお皿の具合を見ながら、私もお皿の隅に一口分残しておく。このへんが未来の小姑娘の気遣いってやつである。

結局葉介はナルドの分まで食べちゃう事はせず、ナルドも私も冷めたチャーハンを一口ずつ食べた。

相変わらず埃っぽいけど、それを除けば良い日だった。葉介が眠くなつちやつたのも分かる気がする。からっぽになつたお皿をお盆に重ねておいて、私達はさっきまでやつた勉強の話とか、ミュゼがスプーン曲げを会得している話とか、つまりどうでも良い話ばかりをして過ごした。

不思議と、葉介が今まで何をしていたかの話は出なかった。聞かれない出来事もあつたんだと思う。私も、無理には聞かなかつた。

ナルドが涼しい顔でスプーンをへし折つたのを真似しようと、私と葉介二人でスプーンを睨んだり親指であつためたりしていると、遠くから何かを両手に抱えた人がやつて来る。

「誰だろ、あれ？」

「…クラージュだな。おいナルド、スプーン」

私が眼を細めても、金茶色の髪が太陽に透けてきらきらしているのしか見えない。でも葉介は素早くスプーンをチャーハンの空き皿に戻し、ナルドはスプーンをまつすぐに戻した。スプーンも軍の備品だから、クラージュにバレたら怒られる。

やって来たのは、葉介の言った通りクラージユだった。抱えていたのは鶏ガラスープの匂いのお鍋で、カップを重ねて持っている。クラージユは微笑んで、テントに憩う私達に歩み寄る。

「こんにちは、花奈さん。お勉強はやめてしまったんですか？」

開口一番にそれか。しかめっつらをした私を、クラージユは完璧な造作に完璧な微笑を浮かべたまま見下ろしている。クラージユのなにか怖いつて、私に嫌味を言いながらも笑顔が一ミリたりとも崩れないところだ。こういう時のクラージユは、まばたきもしてないんじゃないかと思う。確認する勇気はないけど。

クラージユは、私が返事をしないつもりだって事をすぐに感じ取ったらしい。顔を3ミリ分歪めて、困り笑顔に一瞬だけ造り替えてから、笑顔を元に戻して葉介に向き直った。

「葉介。それだけでは足りないでしょう？ 昼食までにはまだ少し時間がかかるそうですよ。何でも、主計兵長のプライドが誰かさんに刺激されたせいで、シチューがなかなか完成しないんだとか」

しゅけーへーちよがそもそも分かんないけど、話の流れからすると、多分あのおっさんの事を指すのだろう。…一瞬どきとしたけど、そりゃ私のせいじゃないな。私は知らんぷりでチャーハンの空き皿を目立たないところに引っ込めた。

「ナルドも、花奈さんもどうぞ。スープですから、いまのうちに、前菜がわりに」

「いえ、私は」

ナルドは慎ましく目を伏せて見せたけど、クラージユは構わないで私達の傍に腰を下ろし、カップを分ける。葉介はクラージユの脇からナルドの分のカップを取って、お鍋から勝手にスープを注いだ。「食つとけよ、ナルド。昼飯も余ったら食ってやるから」

「はい、葉介」

相変わらずナルドは、葉介の言うことは素直に聞く。お腹減ってなければ無理して食べなくても良いのに。多分、ナルドはお昼ご飯も葉介次第なんだろう。葉介がまだ食べ足りなければ、どんなにお腹が減っていても自分の分をあげてしまつて、葉介がお腹いっぱいだったらお腹が破裂しそうでも何も言わずに平らげてしまつてしまわない。

………なんだか痛々しい。本人は何とも思つてないみたいだから、なおさらだ。可憐な仕草でカップの縁に唇をつけるナルドを、葉介も見ている。葉介の口が、への字だ。

葉介も、葉介なりにナルドのことを考えているんだろう。ナルドがカップの中身を空けてしまうと、葉介はぴよんと身軽に立ち上がつて、ナルドの手を引つ張つて立たせた。

「よし、ちよつと散歩するか、ナルド！ 昼飯までの腹ごなしにな」
「はい、葉介」

葉介が言うと、ナルドは幸せそうに葉介に寄り添う。葉介はへの字口のまま、さっき自分で握つたナルドの手を振り払つて、私を見下ろす。

「花奈も来いよ。ゲームと勉強ばつかですつと引きこもつてた。動かないと太るぞ」

「一言と言わず三言くらい多いよ、葉介。あとナルドにちゃんと優しくしなよ」

「あの花……」
葉介は何か言いかけたけど、それを遮つたのは隣に座つたままのクラージユだ。

「僕と花奈さんは、もう少し休んでから行きます。ついからですからお鍋を返してきてくれますか？」

………なんで私の予定をクラージユが勝手に決めるんだろう。でもまあ確かに、ナルドの邪魔はしたくない。私は今回だけは抵抗しない事を決めて、手をひらひら振つた。

「そうしてよ。ついでにしゅけいへーちよのおっさんにさ、ごちそうさまでしたって伝えといて」

「主計兵長な。それだと大阪のくしゃみだからな」

「はいはい」

葉介は鶏ガラスープのお鍋とチャーハンの空いたお皿を持って、すたすた歩いて行ってしまった。その後をナルドがしずしずと、かつ小走りで追いかけていく。…歩く速度くらい揃えてあげたって良いのに。

「……………」

…………ナルドのこと、何とかしてあげたいなあ。私はその二人の後ろ姿を見つめながら思った。

ジュノは言っていた。ナルドは葉介のためだけに生きている生き物だつて。葉介の事しか頭に無い、葉介の事が大好きな生き物だつて。葉介がいつか地球に帰った後、ナルドはどうすれば良いんだろう。生き甲斐も存在価値も無くなって、ナルドが辛い思いをするのが目に見えている。

葉介達の背中が見えなくなつてから、私はようやく視線を自分の近くに戻す。と言つてもクラージュを見たわけじゃない。こいつは無視だ、無視。手の中のカップを見下ろしたのだ。

「よく冷ましてから飲んだ方が良いですよ。時間はたっぷりありますから」

「分かつてます」

言われなくてもそうするつもりだった。なかなか冷めなくて、私には飲めたもんじゃない。

カップを持っている事すら大変で、長袖Tシャツの袖を伸ばして手袋代わりにしたりと苦労していると、隣でクラージュが穏やかな口調で言う。

「…花奈さんは熱いものが苦手なんですな」

「私が猫舌だとクラージュさんはなんか困るんですか」

ほんと、ひたすら熱い。沸騰直後なのかなこれ。ぶっきらぼうに答えると、クラージュはくすりと笑った。

「いえ、かわいらしいなと思って」

「……………」

本当に、思ってもいない事をまことしやかに言う奴だ。自分が嫌にならないんだろうか。思わず私の全身から力が抜けてぐったりしてしまうのを見計らったかのようなタイミングで、クラージュはさりりと言った。

「あなたが葉介に、残飯を食べさせたと噂になっています」

「……………は？」

あんまりにもあんまりの事に、一瞬反応が遅れた。私は意味もなききよるきよるしたけど当然周りには、何が起こってるのか説明してくれる人は…具体的に言うとは幹也は、いない。

「は！？ え！？ そんな事してないよ！！」

もしかして残飯って、あれか！？ あのおいしそうなドラゴン用の肉の事か！？ 慌てて否定する私とは裏腹の落ち着き払った態度でクラージュは小首を傾げる。

「おや、違いましたか。では、馬の餌を」

「違っつてば！ ちゃんと普通の材料もらったつてば！」

「事実はどうでも、噂ではそのように広まっています。残念ながら花奈さんは素行が少し悪すぎるようですな」

素行ってそんな、ただちよつと決闘やったりゲームやったり起床時間に間に合わなかったりしてるだけなのに！！

「誰なのその変な噂を広めた人は！」

私はクラージュに食ってかかったけど、クラージュは軽く肩を竦めただけで教えてくれない。

「さあ。でも、もう出所を押さえてもむだでしょう。しばらく大人

しくなさっているのが賢明かと」

「……………むきー！！！！」

「本当にむきーって言う人、初めてみました」

「……………！！！！」

……………一から十までむかつくわー！

クラージュの口の端は微笑ましそうに上を向いているけど、お腹の中では何を考えているか分かったものじゃない。というか鶏ガラスープもナルドと葉介を散歩に行かせるための小道具だったんじゃないだろうな！　なんかありそうな話で嫌だぞ！！

「だからね、花奈さん。あなたは少し人の目を……………あ、待って！」

私はむかつきに任せてカップの中身を煽る。何故か何かを言いかけたクラージュの制止の声がかかるけど、知った事じゃない。

「…あつっ!？」

……………保温に優れたカップだったのか、まるで冷めてない。あつという間に口の中をたぎったスープが焼き尽くす。焼き肉で言うところかツラミのところまでひりひり痛い。喉元過ぎればと言うけど、熱さを忘れるどころかお腹の底まで熱い。これ、ほんとに葉介とナルドは平気だったんだろうか。

「……………！！！！」

言葉にならない悲鳴をあげて口を押さえた私を、クラージュはいかにも心配そうに覗き込む。

「大丈夫ですか？　すみません、さすがに熱すぎましたね。唇が腫れてしまっかな。治してあげますからちよつと見せて……………」

「だが断る！！」

さすがに熱かった……………って、つまりわざと熱くしたって事だろうか。よく分かんないけど、敵の情けは受けない。クラージュは肩を軽く抱いて私を上向かそうとしたけど、私はその手をふりほだいて勢いよく立ち上がった。唇は片手で覆ったままだ。

「待って花奈さん！」

「待たぬわ！」

「どこに行くんですか？」

「お水飲むの！」

口の中を冷やすべく、私は大股でクラージュのところから去っていく。

「……完全に避けられてるな……無理もないけど」

その後一人残されたクラージュが何を呟いたのか、私は知らない。

The 2nd Attack!! 3 (後書き)

へーちよ：1999年から『月刊コミック電撃大王』で連載されたあずまんが大王の人気キャラクター・大阪は、へーちよといつてくしゃみをします。

ほとんど全力疾走なみの早歩きですつたかすつたか歩いていった
先は、水飲み場じゃなくて葉介のテントだ。

実は私が口に入れても良い水は限られている。普通の人たちは調
練場のそばの水飲み場の水をがぶがぶ飲んでるけど、あれは日本
人には飲めたもんじゃなくクオリティの水らしい。葉介がくどくど
と飲むな飲むなと言うから、多分葉介は一度痛い目にあつたんだろ
う。まったく、浄水設備くらいななんとかしとけよ！ と思うけど、
現地民に影響が無いならことさら必要を感じないっていう事情も
まあ、分からないでもない。

だから私は、水が飲みたくなつたらちゃんと葉介のテントまで戻
る。テントまで戻れば電源不要の魔改造施工済みの冷蔵庫があるか
ら、そこから、よく漉して煮立ててある水を出して飲んでる。

ちなみに湯冷ましは葉介や私が寝静まつた真夜中にナルドがそつ
と用意しているらしい。やまとなでしこか。

「それにしてもほんつつとに感じ悪いやつだな！」

あの熱さはわざとか。そうとしか思えない熱さだった。それにチ
ヤーハンだ！ さっき作つたばかりなのに、たった一時間で噂に
なるつてすごいな！ どいつもこいつも暇だな！ ついでにそんな
噂をそつこいで報告してくるクラージュも相当暇だな！！

胸の中でぶつぶつ文句を言いながら、きーんと冷たく冷えた湯冷
ましを舌に乗せ、ゆっくり口の中で転がす。あー、気持ちいい。ほ
んと、死ぬかと思つた。

ナルドが水にレモンを絞ってくれていたらしく、柑橘系の爽やか
な香りが喉を抜けていく。私は大きく深呼吸して、その香りを楽し

んだ。そして、人心地ついた私はこっくり首を傾げた。
……………葉介がさっぱり分からないのだ。こんなに気の利くナルドを、ああも邪険にする理由が。

例えばこの前みたいにベルにぼっこぼこにされた後帰ってきた時、こんなにおいしい水が用意されていて、あんなに可愛い女の子にあんなに優しく差し出されちゃったりしたら、石や木でなければ間違いない恋に落ちると思うんだけど。

つつい飲み過ぎてしまうおいしい水をコップにもう一杯注いでからベッドにごろんと寝そべって、それを片手にさっきの魔導書を読む。別にクライジユに勉強してないって言われたのが悔しかったわけじゃない。ただ単にやる気が復活しただけだ。

でもさして時間が経たないうちに、誰かがこのテントへ駆け寄ってくる気配を感じる。私は慌ててエロ本を隠す中学生よろしく、魔導書を枕の下に突っ込んだ。繰り返すけど別に何かやましいところがあったわけじゃない。クライジユに言われて勉強再開したんだなあ、と人に思われるのが嫌なだけだ。

結果的には隠して正解だった。入ってきたのは葉介だ。ナルドも遅れて入ってくる。

「うわっ。こぼすなよ」

葉介はお行儀の悪い私を一言注意したけど、私に注意を向けていたのは入ってきたその一瞬だけだった。葉介とナルドはすぐに私から目を放して、テント中ひっくり返し始める。何を探してるんだろっ。

「……………あ！ 葉介！！ ねえ、さっきのスープめっちゃ熱かったよね？」

「別に？ 普通だけどー！」

「そんなあほな」

「うそじゃねーよ。むしろちょっと冷めかかった」

一体どういふ舌してるんだよ…。呆れて絶句した私の様子にかまわず、葉介は大声で聞いた。

「それより花奈！！ 俺の風防ゴーグルとグローブしらね！？」

「ゴーグルとグローブ？」

「今日は翼竜に乗せて貰えんだよ！ 今日クラージュが飛行訓練出ない日だからチャンスなんだ！！ だからゴーグルとグローブ！」

「え、何、翼竜！？」

「良いからゴーグルとグローブ！」

さっきからゴーグルとグローブとしか言っていない。今の葉介は翼竜がどんなのかも教えてくれる気が無いらしい。けちだ。確かプテラノドンみたいなのがあるって言うたのは覚えてるけど。私はくちびるをとがらせて不満の意を表したけど、葉介は全く堪えた様子が無い。私は仕方なく教えてあげた。

「昔の戦争映画で見るようなあのゴーグルでしょ。さっきたまねぎ刻む時に使っちゃった」

「アホか！」

葉介が目をとんがらせて私を怒鳴る。私は首を竦めて、その降り注ぐ怒声に堪えた。

「だって棚で埃かぶってたし」

「ありや隠してあったんだよ！！ で、どこ！？」

「洗って干してある。多分洗い場の脇。中華鍋の傍」

「うっわーマジ許さんぞ！ もう使っちなよ！」

「わかったわかった」

だって埃だらけだったんだもん、って言って葉介を挑発するのは簡単だけど、今の葉介はマジに忙しいみたいだから勘弁してほしい。葉介はリヤカーを探るナルドの背中をつついて合図する。

「ナルド、先に行ってゴーグル取ってきてくれよ！ 俺はもうちょっとグローブ探してくから！」

「はい、葉介」

ナルドはいつもよりも優しい微笑みで葉介を見つめながら、あわただしくテントを出て行く。今のナルドはやまとなでしこって言うよりお母さんっぽい。

ナルドを送り出した後も相変わらず葉介は引き出しを開けたり閉めたり、閉めたりと言ってても半開きのままだったり、床に這いつくばってリヤカーの下まで探ったり大騒ぎしていた。

こんな状況でまだのんびりしているほど鬼じゃない。私はむっくり起き上がって、ナルドの代わりにリヤカーの中をこそこそやった底に白い布の固まりがあったので、それを引っ張り出してベッドに置いた。広げてみると、思った通り軍手だった。

「ねえ葉介、軍手は？」

「軍手で竜に乗れるかよ！」

わがままな。私は肩を竦めて、軍手を葉介のポケットにねじ込む。「とりあえずこれ持って行きなよ。厩舎にグローブの予備くらいあるでしょ？」

「絶対あれじゃなきや駄目！」

葉介は軍手を放り出し、大声で叫ぶ。なんだかめんどくさくなくなった私は、茶化してやるつもりでこう聞く。

「なに、ナルドの手作りとかそういうなの？」

「何でナルドが出てくるんだよ！！ちげーよ！！！」

私は一個ため息をついて、今度はベッドの下の収納を漁る。ついでに、かねてからの疑問を葉介に投げかけてみた。疑問というのはもちろん、ナルドのことだ。

「ねえ葉介、ナルドの事大事にしてるの？」

「…何だよ急に」

葉介は眉間にめいっばい皺を寄せて苛立たしそうにしている。多

分もつこれだけ散らかしても見つからないところを見ると、ここには無いんじゃないだろうか。私はほとんどグローブを諦めながらも葉介のTシャツの山をかき分け、続ける。

「ナルドの事すっごいぞんざいに扱ってるように見えるよ。ナルドは何にも言わないけど、もうちょっと優しくしてあげても良いんじゃない？」

「良いんだよナルドはあれで……」

葉介は何か思うところがあるような顔でぼそっとつぶやいたけど、もちろんそれで良いわけがない。私は発掘したカシミアの手袋を葉介にぺんと投げつけ、腰に手を当てた。

「ていうか女の子にキツく当たるのってそれだけでちょっとアレだよね！！ この前私が池のそこから手伸ばした時もさあ……」

この前っていうのは、私がせっかくあのえんがちな池に腕を突っ込んで葉介を引っ張り上げようとした時だ。その時も葉介はその手をほどいて行ってしまった。お姉ちゃんと手をつなぐのが恥ずかしい年頃なのは分かるけど、空気を読めと思う。切実に思う。あの時葉介が手をふりほどこきさえしなければ、こんなややこしい事態にはならなかったはずなのに。

私は色々言っつてやろうと、大きく息を吸い込んだけど続きを言うより早く、葉介は訝しげに肩を竦めた。

「お前と手？ 何それ」

「……………は？」

……………なん…だとお！？

The 2nd Attack!! 4 (後書き)

なん…だと?…週刊少年ジャンプで2001年から連載されている
漫画作品BLEACHで、多用される台詞です。『何……?』『何
だそりゃ…!?』など、多くの亜種があります。名物です。

「……………!?!?」

私は呆気にとられて口をあんどぐり開けたけど、私の様子なんか目に入らない様子で葉介はペーン、とカシミアの手袋をベッドの上に放り出した。いらつときた時の仕草が私と似ている。どうでもいいか。ほんとどうでもいい。今の私のびっくり加減に比べたら。

「やっぱここじゃねえな。じゃあ俺ナルドのテントも探してくるかー! 花奈、悪いけどもーちよい探して! で、グローブ見つけたら厩舎まで持ってきてくれる?」

「……………え? え?」

「返事!」

「う、うん?」

「よし!」

私に無理やり返事をさせて、葉介はまたテントを飛び出していった。せわしないやつだ。もうちょっと細かく説明してくれた方がいいのに。一瞬呼び止めようかと思ったけど、多分葉介は帰ってこないだろう。葉介は私達三つ子の中でも、テンションの浮き沈みが一番激しい。やる気のない時は何をさせようとしたって駄目、やる気に満ちあふれてる時は止めたって無駄だ。

しかし、何をして良いのかわからない。とりあえず私は枕の下から魔導書を引っ張り出して、またそれをばらばらめくった。さっきまで読んだはずのところさえ、全く読んだ気がしない。これは、また最初の演算から始めるしかなさそうだ。でも、何回読んでも頭に入ってこない。とうとう魔導書はぱたんと閉じて、葉介の机に戻す。ちよつとぬるくなったレモン水もぐいつと干して空のグラスを隣に置く。ちよつと落ち着いた。

「つまり…え？ どういう事だ…？」

つまり…つまりつまり！？ あの時泣いて縋ったあの手が、葉介の手じゃなかったって事か！？

まさかまさか！ それはまずい！ 何がどうまずいって、あの手は葉介とはぐれた私がどんなに焦って、怖がったかを知ってる！！ 私が兄弟無しじゃどうしようもない甘ったれの泣き虫だと知ってる！

それは何というか、恥ずかしすぎる。ただでさえそろそろ兄弟離れしなくちゃいけない年なのに。

いやそれより、もしあの手の主がジユノか誰かにあの事を告げ口したら、やっぱりそんな甘ったれは家に帰れって追い出されるかもしれない。

そうなるとほぼ最悪の事態だ。私は言い訳出来ないし、食い下がること出来ない。何しろ今の私は評判が悪いらしいからな！！

そういうわけだから何が何でも是が非でも白が黒でもあの手の主を見つけ出して、口止めしとくなり1・2のポカンできれいさっぱり忘れてもらうなりしなくっちゃいけない。

もうグローブを探すどころじゃない。私はぐちゃぐちゃに放り出された葉介の荷物を避けながら、おろおろテントの中を歩き回った。どうしよう。どうやって口止めしよう。しかもよくよく考えてみると、あの手の手がかりがまるで無い。どうしよう。ほんと、どうしよう。

おろおろしながら、手持ち無沙汰のために魔導書を前から後ろまでばらばらめくる。あー読んだ気がしない。この挿絵すら初めて見た気がする。

………ん？ 私は表紙まで戻って、タイトルを見直した。『初級魔法 二』。…二？

「…つわあ」

どうも読んだ覚えが無いなあと思つたら、ほんとに読んでなかった。さつきまでやってた魔導書とは違う本だ。うっかりだ。テンパつてたにも程があるな。そういえば魔導書は、ナルドのテントの方で読んでいたんだつた！

私は葉介を追いかけて、ナルドのテントへ移動する事に決めた。ここでやれる事なんか一個も無いって事が分かったからだ。葉介はまだナルドのテントの方でグローブを探してるんだらうから、もっと何か細かく話が聞けるかもしれないし。

とにかく足下の葉介の着替えを蹴散らして、ベッドから道を作りながらテントを出ようとするとする私に立ちふさがって突然ぬりかべのように現れた人がいる。

「うひゃっ」

「おっと。大丈夫ですか？」

「……………」
クラージユだった。片手に何か黒い荷物を抱えている。

正直、またかよって感じた。どうしてクラージユは私の行く先々に現れるんだらう。ストーカーか。軽くよるめいた私の腕を片手で支えながら、クラージユは首を傾げた。普段なら絶対、この程度の事で転んだりしないのに。散らかっていて足下が悪いせいだ。

しかしクラージユにかまっている暇は無い。

「ごめん！ 私ちよつと用事が出来たからっ！」

私はクラージユを押しつけて外に出ようとしたけれど、クラージユの手が私の腕から離れない。

「待って！ 逃げないでください。意地悪したことは謝ります。お願いですから話を聞いてください」

「……………」
マジでか。急いでるんだけどな。まあ、冥土のみやげに話くらい聞いてやってもいいかな。

私はじれじれしながら頷いて、もう一度テントの中へ戻る。

まるで空き巣に入られた後のようなテントの惨状については何も

コメントしないまま、クラージュは私をベッドのへりに座らせて、自分は片手に抱えていた謎の黒い布を、机の上に置く。

…さりげなく、出口をふさがれたようなかつこうだ。まあいいけど。いざとなったらどうとでもやりようはある。

まずクラージュは、クラージュは私の手をとって、ひんやりした紙包みを握らせた。

「これを召し上がってください。火傷の薬です」
「…………お薬？」

私、薬嫌いなんだけど。病気と同じくらい。嫌な顔をした私が何か言うより前に先回りしてクラージュは言う。

「苦くはありません」
「うーん…………」

気乗りしながらも包みをほどくと、ほのかに甘い香りがある。中には飴が入っていた。見た目はハイチュウに似てるけど、普通のハイチュウの五倍はあるし、薄黄色をした表面に白い霜がついている。霜は、指でつついても溶けない。不思議だ。

それを言われた通り口の中に放り込むと、私は目を白黒させた。まずかったからじゃない。今まで食べたどんな食べ物とも違った味と食感だったからだ。

近いのは、ガムとアイスキャンディーだろうか。味はハチミツで、アイスみたいにひんやり冷たいそのキャンディーを噛むと、しゃりしゃり歯の間に音を立てるのに、そのくせガムみたいにねばっこくて、なかなか砕けないし、溶けない。舌に乗せているとやけどでひりひりしていたところの痛みが和らぐ。

思わずほころんだ私の表情をクラージュはじっと見ていて、まるでお母さんのように注意した。

「あんまり噛まないでください。口の中で、舌で溶かすようにして」
「あい」

言われた通り口の中でゆっくり転がしていると、クラージュはやつとほつとしたような表情を浮かべた。

「あなたがあのとき、火傷するなんて思ってもみなくて。これで許してくれるでしょうか？」

一体クラージュが何を言っているのか分からなくて、私は軽く首を傾げた。

すまなそうに笑っているクラージュの顔を見ていつと思い出す。

つまり、クラージュが言っているのは多分あれの事だ。さっきの熱いんだかぬるいんだか分からないコンソメスープの謎。

クラージュは私とサシで話をしたかった。でも私はほとんどいつも葉介達と一緒にいるから、まずは引き離す必要がある。それで、まずは小食のナルドにスープを飲ませた。そうすると葉介達は腹ごなしに散歩に行く。で、私のスープだけ何かの魔法で熱くして、なかなか飲み終わらないように細工しておいたんだろう。まさか私が勢いであんな煮えたぎったスープをぐいっと飲むとは思わなかったから。

頭良い奴は策を弄しすぎて失敗する、のお手本だ。ざまあみろっ
て言いたいところだけど、今回痛い目を見たのは私だ。でも私はこ
つくり願いた。もちろん許してあげる、の意味で。

そのくらい、謎のキャンディはおいしかった。溶けたキャンディの滴をちゅつと口の中で吸っていると、クラージュは姿勢と表情をいつものリラックスしたものに替えて、椅子に座った。椅子を引くにも困るような散らかり具合だったから、私が足下の色々を片付けてあげる。クラージュは短くお礼を言った。そして、話し始める。

「花奈さんとは、一度ゆっくりお話をしたいと思っていました」

「あい」

ゆつくりしてる心の余裕は、残念ながら今の私には無いんだけど。
「花奈さんには、小細工が通用しない事がこの前の事と今日の事と
でよく分かりましたから、率直に申し上げますね」

「あい」

「何か困った事があるなら、一人で何とかしようと思わず、誰かに一
声かけてほしいんです」

「……………」

私は首を傾げた。別に、困った事なんて無い。いや、今はあるけど、少なくとも三日前までは無かった。

よく分かんないって顔をしていたらしい私に、クラージュは机の
黒い布を差し出した。

「あなたの服です。あなたがみすばらしいかつこうをしていると、
主計兵長から相談を受けました。実はシチューが遅れたのも、本当
は僕にその事を談判していたからなんです。あなたに予備の軍服を
支給させてくれと」

言われてそれを広げると、確かに服だった。葉介達が着ているの
と同じ、黒い軍服の上下だ。さすがにブラジャーとパンツは無かつ
たけど、下に着るカットソーみたいなものもちゃんと添えてある。
クラージュは続けた。

「あなたはよく工夫してここで過ごす術を身に着けているようです
けれど、僕らに一言言ってくれば服くらいきちんと差し上げます。
気付いて差し上げられなかった事はこちらの落ち度ですが、花奈さ
んにも、これから我々と暮らす以上、何でも相談して欲しいんです。
この前の決闘の事もそうですし、そもその始まり、あなたが幹
也さんを残して、ここへと一人で飛び込んできた事もそうです。あ
なた一人で為した事が、果たして良い結果を産んだでしょうか？」

「……………」

私は慌てて反論しようとしたけれど、口の中の飴が邪魔で口が開
けられない。クラージュは口元を押さえて俯く私を制止して、更に

続けた。

「大丈夫ですよ。帰れという話をするつもりではないんです。ここに留まると決まったからには、もう花奈さんも僕たちの仲間です。でも、だからこそ起床時間も守って欲しいし、勉強も出来ればもう少しだけ頑張つて欲しい。何か困った事があるなら頼つても欲しい。分かっていただけませんか」

「……………」

確かに、クラージュの言うとおりだった。学校だつて遅刻したら怒られるし、勉強もおろそかにしちゃいけない。制服が無いからつて自分勝手な私服で登校したら、周りの人がびっくりするのは当たり前だ。

私は靴を脱いで、ベッドの上に正座した。そして両手を揃えて頭を下げる。

「はいへんよくわかいまひた。いままれふみまへんえしあ」

「顔を上げてください。それに、食べていて良いんですよ。お話を聞いていてくださるだけで」

「あの、すみません」

クラージュが私の顔を上げさせたちょうどその時、タイミングを見計らつたようにナルドがテントの垂れ幕をくぐつて入ってくる。

多分本当に見計らつていたんだろう。テントは防音がなつてないから。

「ナルド。どひた？」

私は口を押さえてテントの出入り口に立つナルドを見上げる。

「すみません、花奈ちゃん。お騒がせしました。私の指輪、ちゃんと見つかりました」

「ふみわ？」

「はい」

ナルドはそう言いながらほんのり微笑んで、手首をさする仕草を

した。多分葉介のグローブが見つかった、という符丁なんだろう。私も慌てて頷いた。

「あ…あ、ほーなの。良かったね」

「はい。それだけ伝えに来たのです。では私、葉介のところに戻りますね。クラージュ様も、失礼いたします」

「ええ。…ご苦労様、ナルド」

しかしナルドのとっさの機転もむなしく、ご苦労様と言ったクラージュの様子からして全部バレてるんだろう。クラージュもほんのり苦笑っぽい笑顔で深々と頭を下げ去っていくナルドの背中を見送った。

ナルドの気配が十分遠ざかった頃、クラージュはまた話し始めた。「僕がここに来た用件はこれで以上です。ここからは、話の続きとして聞いてくださいね」

「あい」

まだあるのか。

「ね、花奈さん。さっき、どこへ行くこうとしていらっしやっただけですか？」

「へ？」

そういえば、どこに行くこうとしてただっけ……ああ、ナルドのテントに行こうとしてたんだ。あの手の主を捜すために。

急ぎの用事を思い出してそわそわし始めた私を、クラージュは笑顔度を三割増しくらいにしてじっと見据える。

「何か、困っていらっしやるようにお見受けしましたよ。あなたの困っていらっしやる顔も可愛らしいのだけど、あなたを助けて差し上げる役目も下されると、今、お約束しましたよね」

……卑怯だ。たった今説教されて、反省してしまっただけ以上、私に黙秘権は無いも同然。しかし、質問されても、口の中が片付かない以上返事が出来ない。という建前で、もうしばらく黙っている事は出来る。

その間に何か良い言い訳を考えようと、私は目を泳がせたけど、クラージュの笑顔が今度は五割り増しになった。まぶしい。ひたすら眩しい。まっくろくろすけくらいなら一匹残らず消し飛ばす勢いの笑顔だ。

「きつと僕は、花奈さんのお役に立つと思いますよ。そろそろその口の中の物、嚙んでしまっても結構です」

怯む私にも動じず、クラージュは駄目を押した。

The 2nd Attack!! 5 (後書き)

1・2のポカン!... ポケットモンスターシリーズで、ポケモンに技を忘れさせる時、この言葉が出てきます。

まっくろくろすけ...宮崎アニメに度々出てくる、煤の妖怪です。となりのトトロでは、明るいところが苦手に見える描写があります。

謎のおいしいキャンディは溶けにくいとはいえどんどん小さくなつていくし、いつまでも黙つていても仕方ない。とうとう私は白状する羽目になった。

葉介に仕送りと称して色んなものを池に投げ込んだ時、ついでに手も突っ込んでみた事。その時、誰かが私の手を掴んだ事。その手の持ち主は、葉介では無いらしい事。

手を振り払われて泣いた事は言わなかったけど、クラージュは多分察しただろう。

私の話を聞くにつれ、クラージュは笑顔の雰囲気を変えていった。今のクラージュの笑顔は、笑い出したいんだけど相手に遠慮してて困っている、という時の幹也の顔によく似ている。

「……………笑いたきゃ好きなだけ笑えばいいじゃないですか」
「言わなきゃ良かった。私がやさぐれてあらぬ方向を見ていると、クラージュが咳払いする。」

うるんな目で見やると、クラージュの眼差しからはいたずらっぽい輝きは失せて、いつも通りの穏やかな笑顔に戻っていた。

「……………いえ。花奈さんはその手の主を捜したいのですね」
「……………まあ、できれば」

まだ私の事をからかうつもりだろうか。私はいやーな顔をしたまま答える。すまし顔でクラージュは、こほんと軽く咳払いをした。

「ならば、僕に一つ策があります」
「マジですか」

「はい。きつとお役に立てると思いますよ」
「すごいじゃないですか」

「でもお聞かせする前に、僕の言った通りにするとお約束ください」

ますか」

…ええいまだるっこしい。私は軽くいらつとした。

「いいよ。早く言つてよ」

「ありがとうございます。耳を貸してください」

クラージュは片手をそつと口に寄せて声をひそめた。私も首を傾けて、クラージュの口元へ耳を近づける。

「花奈さんが地球からこちらへ手を差し出した時と同じように、皆に握手して回つて下さい。それで全て解決するはずですよ」

「……………」

なにそれマジで言つてんのか。

期待してなかったはずなのに、ため息が漏れかかる。

「……………」。いや、それじゃ分かんないと思うよ…ますよ」

さすがに失礼なのでため息は押し殺したけど、言つちや悪いけど、この人バカじゃないのか。国中の女の子に片っ端から靴を履かして回るといふアホ手段で人捜しした人に通じるものがあるぞこれ。クラージュの口から耳を離して、ますますうるんなものになった私の眼差しを、まっすぐ受け止めてクラージュは笑った。

「それが、分かると言つたらどうなさいますか？」

クラージュが言うには、ここの訓練では、剣を両手で握らないのだという。

右手に武器、左手には防具。それが基本装備。両手剣はあまり使わない。攻撃に特化して守りを度外視した両手剣を無理に使わせては、軍隊は怯えて働かないからだ。

もちろん軍の中でも、趣味で両手剣を使う人もいる。でもそれは、剣道で二刀流をやりたいがる人ぐらいしかいない…つていうのは大げさだけど、例えば良いところのぼっちゃんや、教養としての古い剣術を習っていた人とか、あるいはゲームっぽく表現すると、片手剣

スキルを上げるのに飽きて両手剣のスキル上げに勤しんでいる物好きとか、そういう少数派だ。

だからふつうの人は、左手に剣だこは出来ない。出来るのは盾をしつかりと握って衝撃を受け流す事による、肘と手首、更に中指の付け根の位置の痣とマメ。

一方、葉介のやっているのは剣道で、左手の薬指と小指の付け根にマメがある。このマメは竹刀を両手で力強く握って振り下ろす動作で出来るものなので、盾を持って出来るものとは位置が全く違う。これは大きな手がかりだ。

握り合わせた手の形からして、池の中で取った人の手も多分左手。手の感触は葉介にとても似ていたから、左手の薬指と小指にたこがある人を探せば良い。そうすれば三千人いる軍隊の中でもかなり絞れてくるはず！ 多分マンモス校一つ分から、一クラス分くらいにはなるだろう。

これはすごい。コナン君もびつくりのアイデアだ。しかも、あつぱらぱーの私は握手しながら『あれれー？ 左手のところにマメが出来てるぞー！ おじさん、すごい！ お名前おしえてー！』って言えば良いだけというお手軽さ！

私は勢いよくベッドから立ち上がって、向かいのクラージュの手をぎゅっと握った。もちろん彼の左手には剣だこは無い。右手の方も、白魚のような優美な手だった。

「クラージュ！ さん！」

「呼び捨てでいいんですよ」

「クラージュさん！！」

「はい」

「これはすごい！ 尊敬した！！ ました！」

「無理して敬語使わなくてもいいですよ」

幹也より頭良い人なんてこの世に存在しないって思ってたけど、

いた。グラナアーデにいた。幹也が地球ナンバーワン、クラージュはグラナアーデナンバーワンだ。これはすごい。今歴史が動いている。

クラージュは私に握った手をぶんぶん振り回されながらも、眉一つ動かさず更にアドバイスをしてくれる。

「今から捜すなら食堂でするのが良いでしょう。人目がありますから、突然握手を求められても断りにくいし、何より皆休憩中で暇なはずです」

「なるほど!!」

「もし不審がられたら僕の名前を出しなさい。そうですね、易の勉強を言いつけられたとでも言えば良い。よりきちんと手の平を確認出来ます」

「なるほどなるほど!!」

一から十まで納得できる。ここの駐屯地の中でもかなり偉い方らしいのに人の神経をむやみに逆撫でするから、ダメな上司タイプと思いきやかなり頭がキレる方らしい。一体何だったんだ、あの私に対する空回りっぷりは。

「分かった。じゃあちよつと行ってきます!!」

私がかっこくり頷くと、クラージュは何故か堪えきれなくなったように口元を軽く押さえて、俯いて肩を震わせた。

「……か、花奈さんは、素直でかわいらしい人ですね……」

「……………」

よく分かんないけど、褒められたと思って私は愛想笑いを浮かべた。するとますますクラージュは笑う。

The 2nd Attack!! 6 (後書き)

今歴史が動いている…NHK番組『その時歴史が動いた』のもじり
です。

グラナアーデの孔明ことクラージュがテントを出て行って、私もそれを追っかけるように食堂を目指す事にした。さつさと行かないと昼休憩が終わる。終わってしまった後だと、確かにクラージュの言う通り、握手して回るのが面倒になる。

……と、その前に、どうしても片付けものだけすませておく事にした。はつきり言って今のテントの中は、葉介が竜に乗った後疲れて帰ってきてても、ベッドに倒れ込む事すら許されない惨状だ。

まずは、よっこいしょ、とずるずるよろよろとお米のでっかい袋を元通りの部屋の隅まで引きずって行って、私はきちん封をし直す。ベッドの下を確認するのに邪魔だったから、部屋の中央まで持ってきていたのだ。

うちは幹也も葉介も大食らいだしお客さんも頻繁に来るから、ちよっと珍しい二十キロ入りの袋をどかんと一気に買っただけど、こっぴどって運ぼうとするとかなり大変だ。うかつに持ち上げようとしてようもんなら、腰でも痛めそうな程重い。

「……………」

……その時ふとなんとなく、違和感が私の脳をよぎる。しかし、何がおかしいのかいまいちよく分からない。

「……………」

何か忘れてたかな。さつき何考えてたかな。私は三秒だけ頭を捻ってみたものの、しかし何と言っても深く考えないのが私の良いところだ。葉介あたりだったらかんしゃくを起こしかねないような違和感も軽く流して、私はすぐ片付けに戻った。テントの入り口からベッドまでの道を作っただけだけど。つまり、ベッドの上に広がっていた葉介の服を全部いっしょくたに山にして、床の本や釣り具や洗面器なんかを何も考えずに積み上げてどかしただけ。でもまあこれだけやっとならば、とりあえず生活は出来るし、葉介が気になるな

らナルドがていねいに片付けてくれる事だろう。いや葉介が気にならなくてもナルドは片付けるだろう。自主的に。むしろ嬉々として

未来の義妹に感謝して、私はテントを飛び出した。そして、早速目の前を通りがかつた二人連れの兵士に駆け寄っていく。

「すみませんっ 握手してくださいっ」

「……は？」

行きずりの人に握手を求めるのはちよっぴり勇気がいったけど、ここで怯んだ姿を見せでもしたら、相手は絶対に握手なんかしてくれない。

「握手！ シェイクハンド！ よろしく！」

更はずいっと一步踏み込むと、お兄さんとおっさんの狭間って感じの兵士その一は、気圧されたように右手を差し出した。ふふふ、勝った。

私はその手を両手でぎゅっぎゅっ握った。確かに、右手の薬指小指の下には剣だこがあるのが確認出来る。では左はどうだろう。兵士その一のだらんと下ろされた左手も、無理やり奪い取るようにしてぎゅっぎゅっ握る。

念のため手の平を揉みしだくようにもしてみたけど、やっぱり怪しいタコは無い。

「隣のお兄さんもよろしくどうぞ！..！」

「え？ え！？」

私はその一の手を放り出して、その二の方の手も確かめた。その二は一步後じさって私を避けようとしたけど、無理やり手を取って思う存分手の平をこする。やっぱり無い。二人ともシロだ。

「な…なんだ？ どうかしたのか？」

「いや、何でも無い！ ありがとう！」

呆気にとられた風の二人を放って、私はスキップするみたいに駆け出した。

「午後も頑張れ！」

しかしふと振り返って、大きく手を振ると、二人も戸惑いがちに手を振り返す。

よし、まずは二人だ！残り二千九百九十八人！！

私は食堂のテーブルを挟んで向かいに座った兵士の左手の平をしげしげと眺めた。

「ああ…こりやダメだ」

「ああ！？何がダメだつて！？」

「結婚線無いよ。見事に無いよ。つるつるぴかぴかだよ」

結婚線も問題の剣だこも無い。生命線がそこそこ太くてしっかりしているところしか褒め所が無い手相だ。

「結婚線！？無いってどういう事だ！？」

向かいの兵士その三は青ざめたけど、私もそうそう、なぐさめの言葉が上手く見つかるもんじゃない。

「……まあ…なんつーのかな…ご愁傷様というか男で探せというか……」

「…おとつ…おい、嘘だろ…！！！」

「あの…逆にさ、プレイボーイも無いらしいから気にしない方が良いよ。でも性病には気をつけてね…」

「結局どういう意味なんだよ！はっきり言えよ！慰めるのか落とすのかどつちかにしやがれよ！！」

「はい次の方」

「おおいいいい！？」

これで残り二千八百三十四人。いや、四十四人だったかな。今のところ、左手に剣だこのある兵士には会えていない。

クラージュに言われた通り、最初は食堂でかたっぱしから握手し

て回っていたのだけど、これまたクラージュの危惧通り、確かにただ握手するだけでは、一応握らせてはくれるものの、不思議そうな眼差しがかわしきれない。

ので、またまたクラージュに言われた通り、手相を見ていますという設定にしたら、これがいやにウケた。その結果が、今のこの大賑わいである。大の男が占い大好きとか。あんたらは女子高生か。でも本当に、クラージュの言うとおりにして良かった。この方法なら全然イケる。占い大好きのおっさん達は喜んで手を確かめさせてくれる。

『あの葉介の妹、見かけによらず毒舌だな！ ……ひでえな！』

『女の子に手え握って貰えると思って行くとひどい目に遭うぞ……！』

『やっぱりあの噂は本当みたいだな…あのSっぶり！』

遠くの方でなにやらごちゃごちゃひそひそ言ってる人も多いけど、まあ、私も手相の事は生命線、頭脳戦、感情線、ついでに結婚線と運命線、ぎりぎり財運線くらいしか読めないからお互い様だ。

「俺は多分あるぞ結婚線とやらが！」

私は新しくよきつと差し出された左手を取ったが、目を落とすまでもなく悲鳴を上げた。

「ちよつとおじさん、読めないよ！ 手の平がさがさじゃん！ クリーム使いなよ…！」

「俺はまだおじさんじゃない！ ……つて、クリーム？ そんな女の子が塗るようなもの……」

「メンソレータムデイスつてんのか！ 後でうちのテントに來い！ ハンドクリーム塗ってあげるから…！」

「ハンドクリ……つて、ちよつ、塗ってくれるの…？」

「結婚線云々は皮が復活してから出直して來い！ マメのある無しすら確認出來んわ…！」

マメは確認出來なかつたけど、握った手はあんなにガサガサじゃなかつた。却下だ。

「女の子に塗って貰えるのかハンドクリーム！」

「あいつやりやがった……」

「飴とムチだ……」

もう済んだ人たちが、まだごちゃごちゃとやかましい。

一人三十秒くらいしかかけてないとはいえ、このペースだと三千人はけっこう大変だ。今日一日で終わりそうもない。一日五百人を目標にするか。

私は疲れた手をぶらぶらさせて声を張り上げた。

「さあ次こーいー！」

「盛り上がっているところ申し訳ありませんが、次の前に空いたお皿を下げさせてくださいね」

かかった声は、優しい感じのテノールだった。どつかで聞いた声だ。

きよろきよろ周りを見回すと、頭にターバンを巻いて髪をぎっちょりしまいこんだ若い男の人が、人だかりの向こうからこつちを覗き込んでいた。

柔和な雰囲気醸し出した、アルカイックスマイルのお兄さんで、額に緑色の宝石が一つくつついている。確かさつき、チャーハン作っている時に葉介の事を教えてくれた人だ。

皆がぎゃあぎゃあ騒いでいる中、彼は一人で黙々とテーブルの上の物を片付けていたらしい。周りを見渡すと、私が食堂に入ってきた頃に食べていた人たちはもうほとんど全員食べ終わっていて、私の周りに集まっている。今席に着いているのは後から入ってきて今から昼食、の人たちばかりだ。皆、食べ終わるやいなや私の周りに集まってきているから、席が汚れたまんまなかなか空かないんだろう。

「ええと、さつきの……」

ハゲ疑惑の。とは言わなかった。私も一応、空気らしきものを読むのだ。ターバンのお兄さんはまたアルカイツクスマイルを浮かべた。

「アジュといます。よろしく、花奈さん」

「よろしく、アジュ。ごめんね、邪魔しちゃって」

「いいえ。皆楽しんでるんですから。お気になさらずに」

アジュと名乗ったターバンの人は、軽く私に返事をしながら左手を伸ばし、私の目の前の大皿を取ろうとする。

「……うわっ！ ちょっと待ったあ！！」

「え？」

私が突然大声を上げたので、アジュはびっくりして左手を引っ込める。

「や…ごめん、いきなり大声出して。ちょっとさ、アジュの左手見せて」

「え…手相ですか？」

アジュは戸惑いを隠さなかった。無理もない。ちょっと唐突過ぎただろうか。でも、私にはちらつと見えたのだ。伸ばしたアジュの左手の薬指のあたりに、剣だこらしきものが。

「人助けだと思って、一つ！ 時間はとらないから、お願い、アジュ！！」

ぱん！ と両手を合わせてアジュを拝んだ。今までの人はこういう風にちよつと頼めばすぐ見せてくれたけど、何故かアジュはためらう。

「いえ、その…勤務中ですから」

「時間とらないって言ってるじゃん！ 何かダメな理由でもあんの？」

「…いえ、そういうわけでは……」

そういうわけでは、と言いつつアジュはまだ見せてくれない。しかし、私も百六十四…いや、六十五？ そのくらい見続けてやっと

出会えた容疑者候補だ。引き下がれなかった。

「じゃあ、良いじゃん！ それとも秘密で魔球を開発してて手がマメだらけで見せらんないとか？」

「私は投手じゃなくてライパチの方が得意ですね」

私はぐいぐい押したけど、アジユは柳のようにボケ被せて逃げる。プロならまだしも草野球でライトで八番って言うと、そりゃ得意とは言わないんじゃないだろうか。しかも今時ライパチなんて、死語にも程がある。この言葉を知ってるのは、多分私といい年したおっさんくらいだ。

『ライパチ？』『ライパチってなんだ？』という周りのざわめきを、恥ずかしげな咳払いで誤魔化してからアジユはやっと観念したように白状した。

「恋人が待っているんですよ。その人はとてもやきもちやきなので、私が他の女性の手に触れたと知ったらきつと怒るだろうなあと思います」

「……何だのろけか……」

虚脱感と戦いながら私は無理やりアジユの左手をとって、彼の手の平を確認した。そして内心、おおっと歓声を上げる。

やっぱり、あった。薬指と小指の下にうっすら、剣だこがある。でも角質化はしていなくて、ふにゃつと頼りない、小さなたこだ。私が捜しているあの手のものとは何だか違う気がする。

剣だこをよく確かめようと目を凝らしたけど、私は確たる証拠よりももつと興味深いものをアジユの手に発見した。

「……生命線なっつ……が……！！」

アジユの生命線は長かった。どのくらい長いかというと、上と下の先端がくつついちゃってるくらいだ。

全体的に薄くはあるけど、親指の脇から手首へ、更に裏に回って手の甲へ行って、生命線の先と先がべったり繋がっている。なんだこれ。永久に生きるって事か！？

あんまり珍しいのでついつい手の平を「ごしごし」とすると、アジユの手はぴくっと震えた。かなり嫌そうだ。仕方なく私は手を離してあげた。よっぽどその彼女の事が好きなんだろう。

しかし、アジユは剣だこがあっても容疑者から除外していいことが分かったただけ大収穫だ。ちよっと手相を見るだけの事でも拒否反応が出るような人なのに、得体の知れない手を優しく撫でるなんて芸当をするはずがない。

私はもうアジユが気の毒になっちゃって、彼の左手を放り出し、さらっと見立てを言った。

「アジユは細く長く大変な長生きするでしょう。良かったね、それが一番だよ」

「……それが一番……でしょうか」

「一番に決まってるじゃん！ そのラブラブの彼女と一緒に縁側で猫でも撫でて白髪を数え合いなよね」

「……ああ……そうですね。その通りです。……ありがとうございます」

アジユは静かに笑い、今度こそお皿を持って行ってしまった。私はその後ろ姿を十秒くらい見送る。

「……………」
去り際の一瞬の表情は読みづらかったけど、あれはいつも、苦笑したように見えた。

……まさか、白髪って言ったのがまずかったんだろうか。本当にターバンの下はハゲ頭で、白髪もクソもない惨状なんだろうか。

同情してしまった私の眼差しを避けるように、アジユはそそくさと洗い場へ引っこ込む。

……まずい、あれは凶星っぽい反応だ。悪い事をした。しかし、頭がハゲでもあれだけ整った顔をしていれば、彼女も多分髪の毛の事なんか気にしないと思うんだけど……。

思わず考え込んでしまった私に、またしても遠くから声がかかった。

「あれ？ そこにいるの、お前じゃん」

「……………」

お前じゃんって言われても、お前は誰よ。

私は突っ込んでやるうと思っできよるきよるした。声の主はすぐに見つかる。黒山（…）とはいえない、こっちの人の髪の色は色とりどりだから（）の人だかりの向こうに立っでいても、それでも周りより一回りも上の位置に首を乗っけているからだ。

ミュゼだ。

The 2nd Attack!! 7 (後書き)

ライパチ：野球用語で、「ライトで八番」を意味します。プロなら
まだしも、草野球では大変暇で出番の無いポジションで、確かのび
太くんもライトで八番ばかり守っていたように思います。

ミュゼの金髪めがけて私は背筋をぴんと伸びあがった。人垣にかこわれて、ミュゼの首から下は見えない。

「おっ、ミュゼじゃん。ミュゼがいるんなら、ベルもそこにいるんでしょ?」

「うん」

その、囲われているミュゼの首の下のすぐそばあたり、下の方からベルの声はしたけど、姿は見えない。ミュゼとは逆に、周りより一回りちっちゃいからだ。凸凹コンビもここに極まわりって感じがある。

「こっちきなよ。私今ね、手相見てるの。二人の事も占ってあげる」私は二人を手招きして、向かいの席に座らせた。先に手を差し出してきたのはミュゼだ。私はその手をとって目を凝らす。

「手相? もう俺ら葉介にも見てもらった事あるぜ」

「いいじゃんいいじゃん。手相って変わるんだよ。これが頭脳線で、生命線で、感情線。うっはーミュゼって頭脳線うすーいみじかいよれよれー」

「何だと!? よく分かんねーけど悪口だって事は伝わったぞコラ」

「嘘だよ。普通だよ。わりと長い方なんじゃない? 才能豊かそうな良い手相だよ」

「おお…ピンとは来ないけど嬉しいな…」

「ま、結婚は出来そうにないけどね」

「褒めるとして落とすな! バカみてーじゃねえか俺が!」

残念ながら赤ペンがないので、具体的にどの線がどう、って教えてあげられないのが残念だけど、小指の脇のところは細かい線がも

やもやしていて、これ！ というものがない。これは、まだ結婚系統の運命が定まってないって意味らしい。

占いは自信を持って こうなの！ って言っちゃえば、相手もそうかな？ という気分になってくるもんだ。私は自信たっぷりに決めた。決めた。

「ミュゼってぶっちゃけ好きな人いないでしょ」

「……………だから？」

「結婚する気も無いでしょ」

「……………」

「ていうか一生独身が良いなあ〜って感じでしょ」

「うはっ」

「なぜならミュゼはぶっちゃけ幼女が」

「それはちが……………！！」

適当に言った事がばんばん凶星をついたらしく、ミュゼは何度か呻いて動かなくなった。……………やばいな、面白いな。

「おい花奈……………この事俺の実家には言わないでな……………」

絞り出すようにミュゼは言ったけど

「だいじょぶだいじょぶ。私ミュゼにもミュゼの実家にも興味無いから。でもロリコンはまずいよ」

「だからひでー事言うのよせよ！！」

私の正面の席からいつまで経ってもHPゲージが真っ赤になってミュゼがどかないので、私の方から隣の席にずれた。ミュゼの隣に座っているベルの手相を見るためだ。

「ベル、左手ちょうだい」

「あげる」

ベルは素直に私に左手を預けてくれた。私はベルの手の平を確かめる。いつも剣を握って葉介を叩きのめしているとは思えないほど綺麗な手だ。傷も無いし、爪も割れていない。ささくれすら無いほどだ。

しかし、代わりにって言ったら変だけど、びっくりするほど生命

線が短い。いや、生命線だけでなく頭脳線も感情線も普通の人の半分くらいの長さしかない。でも仮にも軍人を相手にしてあなたは生命線が短いから早死にしますよなんて口が裂けても言えないので、私は他のところを褒めた。

「ええと……そうだ、なんとか言う漫画家はね、達人はペンだこなんか無くてふわっふわの手の平をしているもんだって言ってたよ。ベルは達人だね。何のだから知らないけど」

「おれはつよいから」

ベルは控えめな口調で静かに言った。言ってる内容は不遜だけど、ベルはベルなりに謙遜してるんだって事は何となく分かる。だって、他の人の訓練も横目でちらっと見たけど、少なくともベルほどの剣の使い手はいない。おれはさいきょー、って言わずにつよいって言うてるんだから、これはやっぱり謙遜だろう。

いちおう、ベルの頭脳線のおそろべき短さについてはきちんとコメントし、使わないと脳細胞は劣化する事について講釈を述べた。まあ、ほとんど幹也の受け売りだけど。

しみじみとした風情で頭脳線の先を爪で引っ搔いて伸ばそうとしているベルがまた、私の正面の席からどここうとしないので、私は再度隣の席に移動しようとして腰を浮かせる。するとミュゼが突っ伏したままの格好から私をちらっと見上げて聞いた。

「で、お前何やってんの？」

「は？ 何って、だから手相を……」

「突然、また、何のために？」

「……………!!!」

私は傍目にも愕然とした表情を浮かべたんだろう。周りがまた、ざわざわっとした。

…………… 目的を見失う所だった！ 手相を見るのがちょっと楽しすぎて、惑わされていた。危ない危ない。私の集中力の無さは、こう

いう時にも發揮されるから始末に困る。役に立つこともあり、邪魔になる事もあり。

私は照れ笑いを浮かべて、また座り直した。

「ごめん、ミュゼ。左手もつかい見せて」

タコの手を忘れているのだ。

「花奈、おれのは？」

「ベルのは別に良い」

ベルの手は印象的だから、確かめ直すまでもない。タコなんか絶対無い。私はぐったりしたミュゼの左手を奪い取るようにしてもう一回チェックした。……よし、無いな。

「はい、もう良いよ」

「花奈……おれのは？」

「……………」

ベルがさみしそうに言うので、私は仕方なく、ベルの左手もチェックする。……はい、ありませんでした！。

「何？ どうかしたのかよ？」

ミュゼの時にしたよりはもう少し丁寧にベルの左手を放り出して、次の人の手をチェックしようとする私を、ミュゼがさりげなく視線で止める。

「なんか、こまってるの？」

ベルもゆったりした動きで首を傾げ、真摯な様子で私を見つめる。

……ベルとミュゼはもう、容疑者から外せるし、口も固そうだ。何よりも、知らない仲じゃあない。

「うん、まあ話せば長くなるんだけど……………」

私は仕方なく、ベルとミュゼの耳を片方ずつ引っ張って、ひそひそと事情を話し始めた。

しかし、かくかくしかじかと全て聞き終わると、驚異の頭脳線の短さを誇るベルは心から気の毒そうな顔をしてこう言い放ったのだ

った。

「花奈ってさ、だまされやすいよね。おれはそれがしんぱい」

私の通った後には多分砂埃がもうもうとたっていただろう。私は、私を出せる全速力で食堂を飛び出し、全力疾走した。飛び込んだのは、第二エリアのジュノの執務室……という名の、簡素なテントだ。後からは、何故かついてきたミュゼとベルも一緒だ。多分面白がつてるんだろう。

「…………げふっ」

しかし、私はテントに入るなり、むせた。テントの中は、金色の粉が霧のように濃くたちこめていたからだ。別に小麦粉みたいに煙たいものじゃなかったけど、考えてもみてほしい、何の気なしにテントの中に入ったら、目の前全部が金色の粉でぴかぴか光っていた時のことを。

テントの中には、机について山のように積み上がった書類をばっさばっさと切り回している（比喻表現だよ）ジュノと、それとほとんど同じぐらいの速さで決裁済みらしい書類を、なんていうか……板状の不思議な機械で不思議な処理をしているクラージュがいた。金の粉はクラージュの不思議な装置から吐き出されているらしい。

不思議な板は透明で、かつ、てらてらした金属光沢を放つという謎の素材で出来ていた。形は円。厚みは多分1センチ程度にも無い。大きさはちょうど横メートル幅くらい、縦幅はその半分くらいで、クラージュの胸の高さあたりでぶかぶか浮いている。

何が不思議かっていうと、金の粉よりも素材よりも何よりも、一体何を目的にした装置なのか見当もつかない所だ。

私知っているものの中でこの装置に一番似ているのは星座早見盤だろうか。というか星座早見盤と全く同じ構造のようだ。外側の板の内側にほとんど同じ大きさの板がはめこまれていて、それが回

転するのを外側の板に何力所か空いた窓から覗けるようになっていく。……うん、星座早見盤だ。円周には細かい目盛りもついていることだし。

ただしこの星座早見盤は星座ではない何か他の文様が表面で光っている。文様はナスカの地上絵とミステリーサークルを足して、さらにもう一つ何か足したような幾何学的な形をしていた。

それらの文様は……鳥や、羊や、仔馬や剣、月やら蜘蛛やら、色んなシンボルがクラージユの手の動きに合わせてそれぞれ入り組んで乱れ、浮かび上がっては消えていく。葉介がボールペンで火を付けて見せてくれた時の、あの電子回路にちよつと似ているけど、あれよりももつとずつと複雑な動きだ。

クラージユがその星座早見盤の上を撫でるような仕草をするだけで、早見盤はくるくる回転し、ぴたりと止まる。その指し示されたシンボルをクラージユの繊手がそつと弾くと、シンボルは光りながら空中に浮かび上がる。

たとえば、現れた羊のシンボルをクラージユが撫でたなら、羊は命を吹き込まれたように動き出す。羊であることくらいしか分からないほど象徴化されたされた羊は、その姿のままのびのびと星座盤の表面を駆け回った後、星座盤から浮き上がり、どこか遠いところへ駆け去っていく。鈴でも打ち振るっているような涼やかな音と、金色の粉と一緒に。

その金の粉が空中をゆつたりと漂ってまだ消えないうちから次の文様がぶつとんで行くので、結果、テント中がまっきんきんになるという事らしい。風通しの良いところでやれよ。

言いたいことは山ほどあったんだけど、正直、この光景には怯んだ。

私が顔をひきつらせている間に、クラージュがふと早見盤から顔を上げて、これ以上は無いつてほどの笑みを浮かべる。

「こんにちは、花奈さん。先ほどぶりですね」

「あ……こんにちは」

私はうつかりつられて返事した。……いや、違う違う。そんなんじゃないくてだ……。

クラージュは何か言っていてやろうとした私を押しとどめるように自分の目の前に浮かべている不思議装置を指し示した。

「不思議ですか？ これも花奈さんにお渡しした、計算尺の仲間ですよ。熟練すれば花奈さんもこのくらいのもも操れるようになりますから、頑張ってくださいね」

「え？ 計算尺！？ これが!？」

これが計算尺って……まさかだろ!! 私の使ってるのとは電卓とスパコンほどの差がある。ていうかこれは計算尺じゃなくて、どう見ても星座早見盤……

って、そんな事はどうでも良い!!

私は金色の霧をかき分けてクラージュに詰め寄った。

「クラージュ……さん！ 私のことからかったですよ!？」

辛うじて私はクラージュの名前の後ろに『さん』をつけた。正直、外しても良いと思う。クラージュはふふふ、と笑って悪びれない。

「ああ、二人から聞いたんですね？」

「聞いたよ！ 全部！ 信じてたのに!!」

「すみません。あんなに素直にやってくださるなんて思っても見なかったから」

「なにをー!!」

ここでやっとになるけど、私がベルとミュゼから教えてもらった

真相について話そう。

ベルはさっき、食堂のテーブルで気の毒そうに私を見てこう言った。

「花奈。ここには三千人ぴったりいるわけじゃない。おれもくわしくは知らないけど、たしか三千人よりもっといる。ぜんぶさがして回るのは、花奈がおもってるよりずっとたいへん。それに、花奈のいう『手』の人なら、たぶんおれもう分かった」

「へ？」

ベルが言うには、時空の穴は固定されている。うちの池からぼんぼん投げ込んだものが、こっち側の世界の好き勝手なところに飛び出してくるわけではないらしい。穴の反対側から何かが投げ込まれると、パイプのようにぴったり決まったところから吐き出されてくる。

で、その、肝心の、うちの、池の、パイプは！！　ことも！　あろうに！　この！　この！！

このジュノの！！　陰険カリスマラスボス野郎の！！　ぴったり頭上に繋がってるらしいのだったー！！

「うわああああああん！！！！」

回想終了と同時に色々耐えきれなくなった私は頭を抱えて全力で叫んだ。そうでもしないと死んじやいそうだったからだ。

「あ、取り乱した。大丈夫ですか、花奈さん」

クラージュが全然心配そうじゃなく、むしろにこやかに言った。

「お前のせいだー！！！！　お前と、ジュノのせいだあああああ！！！！！！」

ジュノの真上に繋がってるなら、まず間違いなく、私が伸ばした手はジュノに掴まれたんだろう。

「……うわああああん!!!」

「恥ずかしすぎるー!!! 弟の敵に! ラスボスに! 手を撫でられていたとか! しかもそれで慰められてたとか! 極めつけには引つ張つて家に連れ帰ろうとしたとか! 泣ける! 死ぬる! 穴掘つて埋まりたい!

私は半泣きになりながらクラージュに食つてかかった。

「だましたな! 知つてたならなんでも言つてくれなかつたのさー!!!!」

「まあまあ、良いじゃないですか」

「全然よくないわ!!! マジゆるさんぞ貴様!!!」

「……クラージュ。何事だ?」

「ぎゃーぎゃー騒ぐ私とからかつて遊ぶクラージュに挟まれて、さつきから嫌そうな顔をしていた人がこの時やっと言葉を発した。さつきまでばりばり書類を裁いていた、渦中の男こと、ジュノだ。」

「ぐふっつ!」

正直、今の私にはジュノと真正面から向き合うだけの気力がない。ジュノの声を聞いただけで変な声が出た。動悸もする。ジュノは飛び込んできた私とミュゼとベルを順番に絶対零度の眼差しで見つめると、ぱっさり切り捨てた。

「とにかく邪魔だ。失せろ」

「……くっ、さすがラスボスのプレッシャー……!!!」

「……花奈、たしかめなくっていいの? おいだされちゃうよ」

「さつきまで黙っていたベルが、私の服の裾を引つ張つて首を傾げた。痛いところをついてくる。」

しかし、しかしである。周りに人もいる上に、仮に今『この前私の手握つた?』なんて聞いたとして、ジュノがなんて返事するのか

が恐ろしくてたまらないのである。 うん握ったよ！ なんて返事されても反応に困るし、さっさと帰れって言われてもますます困るし。でもジユノに言われたとおり、素直に外に出たとしても、折角勢いをつけて飛び込んできた手前、どうなの？ って感じもするし……。

相変わらずものすごい圧力をかけてくるジユノに気圧されながらも、取るべき態度を決めかねていると、何故か突然興奮で顔をぼつと赤らめて期待に充ち満ちた笑顔で葉介が飛び込んでくる。後からついてくるのはもちろんナルドだ。

「おいジユノ！ クラージュ！ 乗ったぞ！ ステイルに乗ったぞ！ これであるタマゴは俺があつたためて良いんだよな！？」

味方だ。味方が来た。やっと、この世界でただ一人頼つて良い人が来た。

葉介はなんかよく分かんないことを叫んでいたけど、私はそんな事にはかまわず、弟にすがりついて泣いた。思いつきり遠慮無く力の限り泣いた。

「わああああん！ 葉介！ 葉介！！ もうこの世界やだ！ お家帰ろうよおおお！！」

「うわっ 花奈！ どうかしたのかよ！？ ていうか離れる！ みんな見てるから！！」

抱きつく私の手をどうにか振りほどこうともがく葉介に絡みつきながら、私はますます泣いた。

「どいつもこいつももー信じらんない！ 帰りたい！ 幹也！ 幹也に会いたい！！ 今なら掃除もちゃんとするからあー！！」

「だから何があつたんだよ！？ あと幹也呼ぶのやめろ！ 話がややこしくなる！」

「だってクラージュが！ あとジユノが！！ みきやーみきやー！！」

「だから呼ぶとマジに来るからやめろ！ あいつならやるから！ クラージユとジユノがなんだって!？」

私は葉介の軍服の肩のところで遠慮無く涙を拭いた。

もはやカオスである。私は泣いているし、葉介は焦っているし、ナルドは切なそうな顔だ。クラージユは笑っている。ミュゼとベルは困った顔だし、ジユノはものすごい怖い顔だ。

しかし、收拾がつかなくなってきたところに、ふと、ジユノの頭上から、ころんとオレンジ色のものが落ちてきた。

手の平に収まるほどの、小さなものだ。他の人たちには、何の価値も無いものだったろう。でもこれは、私にとって、救いになるものだった。

ジユノは慣れっこなのか、（！）かつたるようにそれを避け、片手ではしつと受け止める。

「あ、花奈！ 来たぞなんか！ ほら離れろって!!」
私を引きはがすのに必死の葉介は私の注意をオレンジ色の何かに逸らそうとする。仕方ないので私も片目でちらっと見た。

そして、唾然とした。喉から思わず、泣き声以外の声が漏れる。

「あつ……」

事情が分かったのは私だけだ。葉介は、

「なに？ これもお前が投げ込んだ食料？」

なんてとんちんかんな事を言ってる。しかし、それも無理ないことだ。これの事を言っていたのは、葉介がこの世界に引きずり込まれて、いなくなった後だもの。

「貸して!!」

私は葉介から突き飛ばすほどの勢いで離れると、ジユノからその

オレンジ色のものを奪い取った。そして、つぶさに観察する。観察するまでもない。これは、まさしく、

「ミカンだ!!」

私の叫びに、葉介が頷いた。

「ミカンだな。それがどうかしたのか？」

私は間髪入れずに叫ぶ。

「幹也だ!!」

「……は？」

「幹也のミカンだ!!」

「……え？ なに？ どういうこと？ 幹也がそれを投げたってこと？ なんて分かんのか？」

葉介は呆然として呟く。葉介の台詞は疑問符ばかりだ。芳しい香りを放つそのミカンを両手で握りしめ、私は思い出した。

あの時。葉介がこの世界に飛び込んだ時、幹也は私達二人から離れて、一人だけお隣さんのところにミカンを取りに行っていた。

そのせいで私は幹也と合流できず、やむなく地面に簡単な書き置きだけ残して、葉介を追って池に飛び込んだのだった。

地球とグラナアーデとの間は時空が歪んでいるから、幹也はたった今、お隣さんからミカンを受け取ってきて、庭に残された私の書き置きに気付いてくれたんだろう。

そして、とりあえず状況を確かめるのに、手近にあったミカンを投げ込んでみたのに違いない!!

必死で呼んだら、幹也が来た!!

唖然とする周囲をよそに、私は全力でジュノの頭上めがけてミカンを投げ返した。

「幹也ー！！ みーきやー！！」

ミカンを受け取った私のテンションの上がりっぷりときたらもう、尋常ではなかった。

私がミカンを投げ返すと、またミカンが落ちてくる。私はそれを受け止めて、また勢いよく投げ返す。

しかし、ただキャッチボールするだけじゃ、らちがあかない。そのうち幹也は何か考えたらしく、ミカンに工夫して投げ下ろすことを始めた。

まず最初に幹也は、剥いたミカンを三等分にしたのを投げ下ろしてくる。

私はすぐさまピンときた。なんてったって生まれた時からずっと一緒の三つ子だからね。私はそのうち二つをとって、残り三分の一を投げ返す。

そして次に幹也は、ミカンを山ほど投げ下ろしてきた。具体的に言うと、二十四個だ。多分貰った分全部、池にぶちまけたんだろう。さすがに降り注ぐミカン全部は避けきれなかったジユノが眉間に深い皺を刻んでいたけど、私は構わずミカンを拾い集め、次から次へとぶん投げて、十七個を幹也に返した。手元には七個残した計算になる。

ミュゼは私のするのを見ながら、葉介の脇をつついて言った。

「……花奈は何がやりたいんだ？」

「さあ？ さっきの三つに割ったミカンは、俺と花奈が一緒にいるよって意味のはずだけだ」

「……………」

最初のしか分からないんじゃ、本格的にだめだな。こりゃ。私はさっさと葉介に見切りをつけて、次の幹也からの合図を待つ。

次のミカンは、剥いたのが二個、それから剥いてないのが五個だった。計七つ。幹也も急いでたらしく、筋はほとんどとってない。幹也が私の返事の意図に気付いてくれたか不安だったけど、IQだいたい200の天才は格が違った。幹也はちゃんと分かってくれていたらしい。私はこっそり安心のため息をついた。

しかしこれの意味を読み取るのは、ちょっとだけ難しい。私は考えてから、さつきの中から剥いてないミカンを一個足し、剥いてないのを六つ、剥いたのを二つ投げ返した。

「これは？」

「さあ？」

葉介も首を傾げるしかない。

さあ、どうなる。私は幹也の返事を固唾を呑んで待った。

私と葉介、同じ三つ子でも、幹也の言いたい事が分かるか分からないか、その明暗を分けたのはたった一点の違いにある。

すなわち、このグラナアーデという世界が、友達の住む居心地の良い場所か、それとも大事な家族を奪った敵地であるか。

幹也は、この池の底にある世界が『敵地』であるという前提で私にコンタクトをとってきている。となると当然、聞きたい事もかなりしぼられてくるわけだ。

葉介と私は無事であるのか。飢えていないか。こっちに味方はいるか。命の危険は迫っていないか。酷い目にあわされていないか。

幹也はいつもおっとりしてるように見えて、実はかなりの心配性だ。人の十倍は私達妹、弟をいつくしんでいる。今の幹也は時空の穴の向こう側で、うっかりすると心臓マヒを起こしそうなほど、私

達の事を心配しているはずだ。

この世界が既に第二の故郷みたいになっちゃってる葉介じゃ、そういう危機感つてもものも頭から無くなってる。

そんな状況じゃ、そりゃあ幹也の言いたい事が分かるわけがない。

ほんとは、ジュノから一枚紙をもらって、手紙を書いてあげた方が安心するんだろう。こっちの世界の人には日本語が読めないから、好き勝手な事も書ける。でもそれじゃあ、葉介にバレる。葉介はグラナアーデに残る気満々なんだから、『今すぐ助けに来て』なんて書けない。葉介にバレないように、幹也に私の気持ちを伝えなくちゃいけない。でなきゃ、葉介が私の時みたいに、幹也の事も説得しにかかってしまう。

私の気持ちは、ミカンの投げ合いをしてるうちに幹也もなんとなく察したんだろう。だから私達二人だけに通じるミカンの暗号を、即興ででっちあげてくれたのだ。

すなわち。

三等分のミカンは、私達三つ子。葉介の言った通りの意味だ。私と、葉介と、幹也。私達二人とも、無事。今ここに、幹也だけがない。だから幹也のぶんの、三分の一だけを投げ返す。

大量に投げ込まれたミカンは、その場にいる人たちだ。その場に何人、人がいるか。私は十七個投げ返して、手元に七個残した。つまり、私と葉介を含めて五人……ジュノとクラージュ、ナルドとミユゼとベルの五人がいる事を表している。

そして剥いたミカンは、味方の数だ。ちょっと難しかったけど、これは多分、『その人のためにミカンを剥いてあげても良いなと思

う人は、その場に何人いますか。』って事だ。つまり、この場に
いる七人のうち、味方だと思つて良い人数を指す。

幹也は、当然葉介も家に帰りたいがってるものだと思つて
いるから、七つのミカンのうち、二つを剥いてよこした。幹也がミカ
ンを剥いてあげても良いと思つている人：つまり味方は、私と葉介の二人。

しかし状況はそうじゃない。葉介は完全にゲルダガンドの人
たちに肩入れしてしまつている。もはや、葉介自身も、家族全
員揃つて地球に帰るための敵だと言つて良い。だから私は、剥
いたミカンを一つにして、幹也に投げ返した。

「……あー、大丈夫かなー」

これで分かつてくれていると良いんだけど。後は幹也の灰色
の脳細胞に賭けるしかない。私は祈るような気持ちで、ジユノ
の椅子のすぐ傍に膝を突き、彼の頭上を見上げ続けた。

私を今にも蹴つ倒さんばかりの目で睨みつけているジユノ
は、この際、無視だ。ミカンを集める時に踏んづけてそのままに
なっているジユノの長衣の裾も無視だ。

「……………」

……私は無視のつもりだったんだけど、そういうわけには
いかなかった。ジユノは冷酷にも長衣をぱさぱさ翻し、上に乗
つた。私の事を完全無視で……というか、私が乗つてるからば
さばさやっただんだけども、私を乱暴にどかす。

「……ふぎっ」

私は情けない悲鳴と一緒に呆気なく転がつて、どかさ
れた。テントの隅まで転がつていきそうになつた私のおでこに、
ぺちよっ、と冷たいものが着地する。

幹也の返事だ。さっき私が投げ返した、ミカンの残り三分
の一だ。私はテントの端で丸くなつたまま、その三分の一をじ
っと見つめる。
「……………」

とつても、とつても、とつてもとつても惜しかったけど、それをまた思い切り振りかぶって、幹也に送り返す。みきやだいすぎ、と小さく口の中で呟きながら。

さすがに、最後のミカンの意味はちゃんと分かったんだろう。葉介は私のことを助け起こしてくれながら怪訝そうに言った。

「あれ、幹也がこつちに来るか？　って意味だろ？」

「多分ね」

たぶんって言うか、そうとしか考えられないけどね。

「良かったのかよ？　…いや、俺は別に良いけど。幹也にはあつちでしてもらわなきゃいけない事、色々あるし。でも、ちらつと顔見とくくらいは……」

まさしく。幹也にはあつちでももらわなきゃいけない事が色々ある。お母さんに事情を説明するとか、私と葉介がちよつと年を取って家に帰った時のための根回しとか、後はついでに掃除の後始末とか。幹也は最後の手段として取っておかなくちゃ。

でも葉介は私のやせがまんを敏感に感じ取った。葉介は私の唇を親指と人差し指で上下に挟んでつまんだ。知らないうちにとがっていたらしい。子供っぽいくせだから、いい加減やめなきゃいけないだけだ。

「むぎー」

葉介の手を振り払って私は唇を自分でおさえた。葉介は心配そうに私の顔を覗き込む。

「お前、なんか心細そうにしてるし」

「そりゃ……幹也が来てくれれば心強いけど。仮にこつちに来て貰っても、それがいつのこつちになるかとか、そもそも帰った後の地球がいつになってるか、分かんないし。どうなるにしろ、地球側での幹也のフォローは絶対いるから」

三つ子全員が一度にいなくなったら、お父さんなんか失神しちゃうかもしれない。ワイドショーには、『IQ200の天才高校生、

妹弟らと失踪！』なんてばばーんと出ちゃったりして、お隣のおばさんが重要な証言者として『やあねえ私ったらあの時幹ちゃんにおミカン渡したのよおー』なんてコメントしてるのが朝からお昼までテレビに出ずっぱり、高校では臨時集会をやったり、警察は百人体制で捜索に当たったり、巨大掲示板で人肉検索されちゃったり。そんな事になったら、終わりだ。日本に私達の居場所は無くなる。私達は絶対に、日本に帰らなくちゃいけないのに。

そこらへんの事情はさすがの葉介も察してるんだろう。家族全員でゲルダガンドに移住しちやえば良いのに、的無神経な発言は慎んだ。

多分、時空のパイプがまたどこかで歪んだんだろう。幹也からミカンが投げ込まれる事はもう無かった。さっきまでの大騒ぎの間も、私を長衣の上から退かす時も席を立たずにいたジュノは、眉間にものすごい皺を寄せながら私を睨んだ。

「……………花奈。軍服を支給したはずだ。速やかに着替える。見苦しい」

それが、お開きのしるしだった。私達は三々五々にジュノの執務室……テントだけど、テントを後にした。

The 2nd Attack!! 10 (後書き)

三つ子の力関係は三すくみ状態をなしています

花奈は葉介に弱く、幹也に強い

葉介は幹也に弱く、花奈に強い

幹也は花奈に弱く、葉介に強い

登場人物（前書き）

二人だけです

登場人物

主計兵長

主計兵とは経理、衣糧などを担当する兵種であるが、彼らをまとめる

クマみたいなおっさんが彼である。腕っ節が強いので誰も敢えて逆らおうとはしない。

本来、食事の用意などは下っ端が行うが、彼は煮炊きの鍋を明け渡そうとはしない。

見た目は強面だが、情に厚く、花奈が駐屯地内で苦勞の無いよう気遣う優しい面もある。

彼は密かに新兵のお母さんの役割を目指しているのだが、誰も彼をお母さんと呼ぶ者はない。

が、花奈はひそかに「へーちよ」と呼んでいる。

アジユ

主計兵その一。穏やかな印象を与える、端麗な青年。鏡のように輝く美しい長剣と枝毛切りバサミを持っている。らしい。

二十を少し越えた頃に見えるが、幼くも年寄りにも感じられる言動をとり、実年齢は不明。

頭をターバンで覆っており、ターバンの下がどうなっているのか誰も知らない。ハゲなのか？

柳のようにボケ逃げる癖を持っており、花奈をしばしばイラっとさせる。彼女がいるらしい。

The 3rd Attack!! 1 (前書き)

読みたくない人もいるだろうなあというネタがしばらく続きます
以後やべっと思われたら読むのを中止してください

3・6くらいから描写が柔らかかめになります

あれからどうなったかというと、だ。

私の居場所は、ナルドと葉介のテントから、ジユノのテントに移った。いつ、幹也から連絡があるか分からないからだ。

今更だけどよく考えてみれば、おかしい点はいくつもあった。PSPでモンハンやって遊んだけど、私が投げ込んだのはDSとiPodだけだった気がするし、20キロ入りのお米の袋なんて、私には持ち上げられない。いくら火事場のバカ力が働いていたとしても、あんな重たいものを投げていたら記憶に残ってたはずだ。きっとPSPもお米も幹也がしてくれた仕送りだったんだろう。なににせよ、これで幹也も向こうで色々考えてくれているということが証明されたわけだ。私も心おきなく葉介を地球に連れ戻す作戦を練れるってもんだ。

そうそう、いつまでもナルドのテントで寝ているのもいい加減不便だということで、一応私のためのテントも新しく張られたけど、そこにはほとんど寝るときぐらいにしか戻らない。

ジユノは私がテントの隅っこで魔導書を読んでいるのがたまらなくうっとうしいらしく、たまに私を物言いたげに見る。けど、知るもんか。その程度のことか我慢できないなら、私は今すぐ葉介を引っ張ってあの時空の穴から帰っていくまでだ。

私が魔導書を読んでいるのは、ジユノのテントでゲームをするわけにもいかず、しかしなにもせずにいるのは空気が重々しすぎて耐えられないからという、何もしてないよりはマシ程度に選んだ苦肉の策だ。

ではあるものの、継続は力なりというのか（私はこの言葉嫌いだけど）なんとか、とりつくしまもなかったこの世界の魔法について

も、ちよつとずつ分かるようになってきた。

インコ並の集中力しかない私が必死こいて理解したところによれば、自然界の四つの力…あのいまわしい、電磁気力、重力、強い力、弱い力の中のうち、強い力と弱い力はほとんど無視して良いらしい。というのも、この世界の魔法のほとんどは電磁気力と重力で出来ているかららしいのだ。というか、私たちの身の回りの運動や事物、現象は、ほとんど全部、電磁気力と重力が仕事をした結果、と言って良いらしい。よくわかってない私が、よくわかんないなりに説明しよう。

まず重力。重力はいわずもがな、重力だ。以上。

……じゃあちよつと味気ないから付け加えるけど、ミジンコから光、ついでに時間まで、ありとあらゆるすべてのものを引っ張りつける力で、『ものごとのマクロな構造を支えている』。太陽の周りを星が回るのも、私が空へ果てしなく落っこちていかずにすんでいるのも、全部この重力のおかげだ。一番理解しやすいのはこれなような気がするけど、残念、ゲルダガンドの魔法は電磁気力を操る物が多い。

電磁気力は、電気のと磁石の力をさす。一見違うこの二つの力は、実のところまったく同一の物、らしい。

この電磁気力は、レンジでチンするのを司るのにくわえ、原子の中の陽子と電子をくつつけている力だ。というか、私が知ってる重力以外の力は、全部この電磁気力らしい。……おいおい嘘でしょ、って私も思うけど、そうらしい。物を燃やしたときのエネルギーも何かをぶん殴ったときのエネルギーも、表面張力も電磁気力。…ほんとかな。どうも納得いかないから、家に帰ったら幹也に聞いてみよう。

幹也は一時期、永久機関に凝っていたから私も聞いているだけ

ど、かの有名なマクスウェルの悪魔はこの電磁気力が操っている電子を好きに仕分けすることによって、無限のエネルギーを生み出せる。つまりグラナアーデは（というかゲルダガンダは）エネルギー問題からはほぼ完全に解放された場所らしい。じゃあ寶石くらい自分たちで作れよ、と言いたいところだけど、これがそうもいかない。その理由が、次に紹介する強い力だ。

強い力は、陽子と中性子同士をくっつけあっている力。これがほんとに、名前からして強い力というだけにものすごい力で、電磁気力のだいたい百倍は強い。核爆弾みたいなものを想像しとけばだいたいあつてるらしい。こんなものを自由自在に操るといふわけにはいかないのは当たり前だ。

たとえば金を作り出そうとしたとする。そのためには金の原子とよく似た原子をつれてきて、そこから陽子や電子、中性子を足したり引いたりしなくちゃならないけど、この足したり引いたりには莫大なエネルギーが必要になる。金のネックレスを一つ作ろうとするなら、たぶん、世界がそっくり焦土に変わるぐらいのエネルギーがはつきり言つて、現実的じゃない。そんなのを現実にする技術を開発する暇があるなら、異世界から葉介みたいのを拉致ってきた方がまだ楽だ、つてことになるらしい。理屈は分かるけど、まったく身勝手な話だ。

最後に残った弱い力、これは中性子が崩壊するときにはたらく力。どこからかとりだしてきた中性子単体をばんとおいておくと、軽い食事をとり終わるぐらいの時間で中性子は自ずから壊れる。つまり、中性子は陽子と電子とニュートリノに分解しちゃうのだ。この時中性子をバラバラにするのが弱い力：らしい。おそろしい。

専門用語が多くてこれはまだよくわかんないけど、まあ私は中性子じゃないし、今のところは考えなくても良いだろう。魔導書にこれは使わないって書いてあるものなら、遠慮なく切り捨てるまでで

ある。

まとめると、実用に耐えうる便利さがあるのは電磁気力と重力で、残った強い力と弱い力に関しては目下研究が進められている真つ最中ということらしい。

電磁気力、重力、それに加えて強い力と弱い力が掌握できれば、錬金術も死者蘇生もありとあらゆることが思いのままになる、と言われているけど、それができる人は今のところ、いない。魔導書には今のところと書いてあつたけど、いつか本当にできる人が出てくるかもしれない。なにせグラナアーデは電磁気力と重力を、実際に意志の力でねじ伏せているとんでもねー世界なのだから。

もちろん、ありとあらゆる人がそれをやれるわけじゃない。ミユゼみたいな根性無しは意志の力をコントロール出来ないし、ベルミtainなバカは電磁気力をねじ伏せるだけの知力が足りない。まあまあ頭が良い葉介だって、あんな小さな火をつけるだけで精一杯だ。

この前クラージュが金の粉をばらまいて喜んでたけど、あれだけの何か（なにをやったかは知らない）をやれる人間は世界全体でも少ないとかなんとか。ふつうはほとんど、葉介みたいに何も無いところから火種を作るくらいの魔法を覚えた時点で、魔法をあきらめてしまうらしい。あまりにも難解だから。

その気持ち、すつごくよく分かる。死ぬほど努力すれば百メートルを十秒くらいで走れるって分かってても、そんなの試す気になる人は少ないっていうのとたぶん同じだろう。出来たら良いけど、出来なくても別に良いや、っていう。

東京都知事が『地球とコンタクトをとれるほどの高度な文明が滅びていないはずがない』とか何とか、以前言っていたような気がするけど、これだけの力を意のままにする人間がぼこぼこ住んでいるグラナアーデがなぜ滅びていないのか、その答えは簡単、さっき言

つた『お勉強が大変すぎること』と、相手も同じ力で防衛し、相殺してしまふことらしい。このグラナアーデに大量破壊兵器は存在しない。作れるけど、無意味なのだ。だから、戦争はどここの国でも日本の合戦みたいに兵士が剣と剣で戦う一騎打ちを基本系にしているらしい。ま、さすがに名乗りあつたりして相手の名誉を重んじるなんてことはしないらしいけど。それどころか不意打ち闇討ちなんでもありらしい。

いろいろとすごい魔法があるのに、戦争の仕方が原始的なのはそれこそバカみたいだと思う。無意味なんだから、戦争なんてやめればいいのに。

話はそれ続けるけど、そういう状況だから、この世界の外交上でもっとも重要なのは、『バカだと思われぬこと』だ。バカだと思われたら……つまり相手の攻撃を防げないと思われたら、速攻で国土が消滅するほどの電磁気力や重力をたたき込まれるかもしれない。

だから、少なくともゲルダグランドには選挙なんてものはない。王族も貴族も存在するけど、昔の中国であつた科挙みたいに、みんなひたすら死ぬほど勉強して、治世に励むらしい。

もしここが地球なら、魔法が得意であることと政治が得意であることはイコールにならないから、高卒で大統領、なんて人も出たりするかもしれないけど、なにしろここは電磁気力を掌握することによつてエネルギー問題を解決した世界だ。その人個人が有能な魔法の使い手であることは、直接的によりよい政治につながる。だから何よりもまず魔法を自在に操れることが、為政者の絶対条件。そして魔法を自在に操るためには、幼い頃からの英才教育が不可欠となり、更にその英才教育を受けさせるには結果的に高い身分と財力が必要になるのである。

だからデモクラシーとか選挙とかがこのグラナアーデでは必要視されないのも無理らしからぬことなのだ。市民にとつても貴族にとつても気の毒なお話に聞こえるけど。

そういえばこれはミュゼから聞いたけど、ゲルダガンドの伝統として、『ジユ』あるいは『シユ』の音が名前に入る人はほぼ全員、相当に身分が高い人間だと 思っ て良いらしい。つまり、幼い頃から高度な教育を受けていて魔法の力も相当にある人間だから、社会的にも肉体の安全的にも逆らわない方が良いとかなんとか。平民も『ジユ』や『シユ』を使えない訳じゃないけど、本当に身分が高い人に目を付けられるといけないから、あえて避けることが多いとも。たとえばゲルダガンドの王子はオン『ジユ』、その兄はラ『ズ』ウ。ラズウという人が王族なのにジユの音が入らないのは、お母さんの身分が低かったので、いずれ生まれてくる弟に遠慮して、あえて『ジユ』の音と似て非なる『ズ』の音を入れたらしい。同じ理由で、このへんを：荒野シユツルクを治めている領主、フォーステア公の名前も『シグ』ルド。ややもすると王にもなれてしまうほどの身分だったフォーステア家は、まだふさわしい世継ぎを持たなかった王家に対して叛意の無いことを示すため、シユの音から少しずらした音の子に名乗らせた。しかしシグルドに妹が生まれた時には既に王子が立っていたので、後顧の憂い無くエヴァン『ジエ』リンの名を付けた。ゲルダガンドの首都、ゲルダガンディアを納めている女性の名は『シエ』ーラで、彼女もエヴァンジェリンと同じ経緯をたどって名付けられたという。

ええいややこしい。参考になるんだかならないんだかわかんない判断材料だ。つまりミュゼが言いたかったのは、『ジユ』ノにもクラー『ジユ』にも逆らうんじゃないぞということだったのだろう。残念、今更である。

脱線に脱線を重ねたお話もこれで終わりだ。やれやれ。

まあ何にせよ、私がいま何とすべきなのは電磁気力だったことだ。一番簡単なのはやっぱりレンチン：お湯を沸かすことみたいだ

から、私はある程度魔導書をおさらいしたあとは、早々にコップに入れた水を全力で睨みつける作業に入った。私は習うより慣れる派なんである。

レンチンでお湯を沸かす方法は簡単、水分子をひたすらかき回し、水分子同士をこすりあわせることである。すると水分子同士の摩擦熱で水全体があつたまる。ちょっとでもあつたまりだしたらしめたものだ。あつたかい分子はすなわちすばやく動いてる分子ってことだから、さらに大きな摩擦熱を生み出す。私はひたすらコップに念じて、すばやく動いている水分子を応援し続けていればいい。

ちなみにクライジユが私だけに煮えたぎったスープを飲ませたからくりはこれだ。クライジユぐらいになるとお湯を沸かす程度のこと、息をするより簡単だつていうから恐れ入る。

しかしクライジユには簡単なことでも、私にとっては大変なさわざだ。水分子が素早く運動するのを応援する、と一口に言っても、水分子なんてものは肉眼で見えるようなものじゃない。

コップの水面がさざ波みたいにふるえてるうちはまだ良いとして、ちよつと気を抜くとコップの中の水はあつと言う間に洗濯機の中みたいになって、お湯を沸かすどころじゃなくなる。

つまりこういうことだ。コップの水をぐるぐるんぐるんかき回すと水の表面積が増える。すると水はより多く気化する。そして気化熱によつてせつかくためた摩擦熱が奪われ、いつまでたつてもお湯はわかない。というかむしろ外気温にさらされて冷たくなる。

レンチン式でお湯を沸かすコツは、一気に、しかも水面に異常が出ないほど細かく水分子を振るわせまくるしかないのだ。

何度も言うけど、私の集中力ときたら生まれたての子猫なみなので、これはものすごくキツイ。

ずっと勉強しているせいか、下っ腹がずきずき痛む。私の体は根本的に勉強に向いていないと見える。

おなかをさすりさすり魔導書を眺めたりコップの水をかき回した

りしていると、ふと目の前に座っていたジュノが顔を上げ、眉間に皺をぎつちぎちに盛り上げつつ言った。

「……花奈」

「ん、なに？」

生返事をした私をじろつとにらんだ後、ジュノはふいつと目をそらした。

「どうしたの？」

ジュノは返事をしなかった。目をそらしたまま、ジュノは肩に掛けていた長衣をぐいっとないで、私の頭にぶつかぶせる。

「わぷっ」

コンパクトに体育座りをしていた私をすっぱり包み込むほど、ジュノの長衣は大きかった。生ぬるいコップの水をちよっぴりこぼしながら私がかくのを長衣の向こう側でジュノは見えていたんだろうか、凍り付くほど冷たい平坦な声音で私に命じた。

「速やかにナルドリンガの元に行き、指示を仰げ。問題が解決されるまで戻ることは許さん」

「前が見えないっ！！ 前が………問題？」

ジュノの長衣の中で空気が密閉されたせいで、私もやつときづいた。

血の臭いがする。しかも、自分の体から。

いやな予感がしてちよつと身じろぎすると、案の定というかなんというか、下着の中でどろつとした感触。

「……………！！！」

私はすぐみあがり、へっぴり腰ながら勢いよくたちあがった。ズボンの方まで汚れてるんじゃないだろうな。…いや、たぶん汚れてるんだろう。でなきゃ『情けはかけない』宣言をしたジュノが私に自分の上着を貸してくれるような気遣いをしてくれるわけがない。

「い、いいいいってきますー！！！」

私は宣言するなりジュノの上着を頭からかぶってテントを飛び出した。ジュノの顔は恥ずかしくて見られない。

……だれか助けて。

The 3rd Attack!! 1 (後書き)

明けましておめでとうございます。

去年のうちにアップしようと思ったんですがすっかりしました。

The 3rd Attack!! 2

まずトイレで応急処置をすると、私は全力疾走…には多少へっぴり腰で、ナルドの元へ急いだ。

行く途中、あの手相見以来、ちよつと仲良くなれた人たちから、私がひつかぶつてる長衣について何度か聞かれたけど、私はそれを蹴散らすようにして第二エリアの厩舎へ向かった。ナルドはもちろん葉介といつとも一緒にいるけど、葉介はこの前から、念願だったらしい翼竜の騎乗訓練に入っているのだ。

聞くところによると翼竜とは、目玉が飛び出るくらい高価で、度肝を抜くくらい気位の高い生き物なのだそうだ。しかもサングリア…絶賛戦争中の、敵国が原産。敵国であるゲルダグンドにサングリアが翼竜を売るわけもないので、ゲルダグンドは秘密裏に他国から転売してもらうしかないのだけど、その他国とやらが横流しのリスクがどうたら理由で、ものすごい仲買料をとるらしい。おかげで葉介のルビーが大活躍だそうだ。……翼竜につられてだまされてるんじゃないだろうな、葉介。

繰り返しになるけど、翼竜が稀少である理由は、めちゃくちゃ高いこと、そして気位が高く、調教がものすごく難しいことにある。葉介も、翼竜に騎乗させてもらうにはかなりの苦勞があるらしく、ごはんを食べる時も寝る時も翼竜の厩舎で過ごすという徹底ぶりだ。

とまあ、今は翼竜について長々話してる場合じゃない。ナルドだ。ナルドは巨大な厩舎の中の日当たりのいいところに立っていた。そばでは葉介が大まじめな顔で、象より大きな翼竜に肉の塊を差し出している。それを彼女は幸せそうに眺めていた。羨ましそうにしているようにも見える。

「ちょっと葉介、ナルド貸して!!」

ナルドと葉介の変な関係にも十分慣れたものだ。私は二人に駆け寄るなり、ナルド本人に今良いか聞くより先に、葉介に許可を求めた。葉介がよいよって言わないと、ナルドは梃子でも葉介から離れたりはしないからだ。しかし葉介はそんなところが分かってないのか、翼竜から目をそらさないまま上の空で言う。

「俺は良いけどナルドに聞けよ」

ほんとに真剣みたいだ。私がジユノの長衣にくるまって、裾をずるずる引きずっているという異様な格好をしているのにすら気づかない。

「ナルド、ちょっと来て!」

「はい……」

ナルドは葉介から許可が出ちゃった以上、我を通すことはない。たとえば自分が葉介のそばにいたくても。ナルドは若干切なそうな顔で、葉介から引きはがされていった。

「ごめんね、すぐ済みますから」

ナルドを厩舎から連れ出して、炊事場の裏のあたりまでつれてくると、私はナルドの形のいい耳に口を寄せた。

「悪いんだけど生理用品をちょっと分けてほしいの。あと、使い方も教えてほしい」

ゲルダガンドの人たちががどういう風に生理を乗り切っているのかわからないけど、文明がかなり発達してるらしい国だ。まさか部屋に閉じこもって一週間息をひそめてるわけじゃないだろう。きっと何か便利な道具を作り出してるはずだ。できたらナプキンがいいんだけど。

しかし、ナルドの返事は私の想像を超えていた。

「花奈ちゃん。生理とは一体なんですか?」

「……………」

いや、ええと、その、なんだ。……どう答えたものか。

今までナルドは同じ年だと……つまり十七歳くらいだと思ってたけど、外人は実年齢より上に見えるってことはよくあるし、遅い子ならまだ来てないってこともあるかもしれない。それにしたって、知識くらいはあってよさそうだけど。

まさかとは思いつつも、私は遠慮がちに聞き返した。

「もしかしてナルド、まだ来てない……………」

ナルドもまた、にこやかに聞き返す。

「来るとは？」

そこからか。小学校の時にどう教わったのか思い出しながら、私は遠回しに遠回しに説明した。

「あの……ええと、女の子のお腹の中には赤ちゃんのベッドがあってですね、月に一度お掃除を……」

しかし言い終わる前に、ナルドはああ、とうなずいた。

「月経のことですね」

「……………」

分かっているなら言わせんな恥ずかしい。私はきまわずくうなずいた。しかし、恥を忍んだにもかかわらず、期待していた返事は返らなかった。

「でしたら、私はお役に立てません」

ナルドは答えながら私の手を取って自分のお腹に……おへその下あたりを当てさせた。

触らされたナルドの胸は、コルセットで締めあげられているせいかものすごく固い。

私の手のひら越しに下っ腹を押さえながらナルドは、普段通りの笑顔でこう言い放つ。

「今の私には子宮がありません。そして、近いうちにペニスと精巣が発達するでしょう。私は男に変異するのです」

「.....」

な、なんだって——！！！！！！

The 3rd Attack!! 2 (後書き)

な、なんだってー : 1990年から週刊少年マガジンに不定期連載されていた『MMR』というマンガ作品内で多用された台詞です。漫画『PAPUWA』、『ハヤテの如く』、アニメ版『GTO』などでもパロディされています。

The 3rd Attack!! 3

……なんていうか、白昼堂々、そういう言葉を聞くとは思わなかった。それも、ナルドみたいな美少女の口から……いや、美少女じゃなくて実は男の娘だった、ってことでいいのか？ 両性具有……無性？

ちよつと現実逃避気味の私をよそに、ナルドは珍しく饒舌に話しかけた。

「そもそも鉦の姫の従者というものには、必要となるまで月経も精通も無いのですが、せっかくなのでお話しておきます。葉介には内密にお願いしたいのですが、花奈ちゃんにはいつか手伝いをお願いすることがあるかもしれないので、この機会に」

なんで？ 必要になるまで生理が無いつてどういうこと？ 身体の成長に伴って生理が来る、ってことではなく？ なんで葉介には内緒？ ていうか私は何を手伝えれば良いの？

おろおろするばかりの私の手を自分のお腹にあてさせたまま、ナルドは両手を暖めるように上に重ねた。

「鉦の姫の従者は、鉦の姫のためだけに存在します。恋の出来る生き物ではない。しかし、血は残さねばなりません……」

「あ、ちよ、ちよつと……ちよつと待って」
なんかややこしい話が始まりそうだ。今ちよつとそれどころじゃないのに。

私はひたすらおろおろしているばかりだったけど、ナルドは突然、ぴたりと話すのをやめた。

そして、ナルドはそのルビーみたいな眼をぱちぱちとまたたかせながら、私の肩越しに何かを見つめた。ナルドのお腹の上に乗せられていた私の手がゆるっとした動作で解放される。私も、それに合

わけてナルドの視線の先を追った。ナルドは、炊事場の方を見ていた。

「ええと、あの……。……。気にしないで、続けてください」

視線の先ではアジュが立ちすくんでいた。どこから聞いてたんだか知らないけど、アジュは気まずそうな苦笑を浮かべている。おちんちんがうんたらってところは聞いてないことを祈るけど。アジュは鶏ガラみたいなものを山盛りにしたバケツを両手に一つずつ提げていた。たぶん、出汁をとった後の鶏ガラを片づけに出てきたころだったんだろう。

「ちょ、ちょうど良いところに!!」

しかし私はアジュに叫んだ。この雰囲気打破するには第三者の介入が不可欠だ。

たぶん今、ナルドはものすごく大切な話をしてくれようとしたんだろうけど、ちょっと今はそれどころじゃない。ギャルゲーだったら今、完全にフラグが折れた感じだけど、でも、ちょっと、今だけは!!

「ごめん、ほんとにごめん、あの、もう一回あとでゆっくり……良い？ あとで絶対聞くから」

ナルドに向かって拝むようなポーズをとると、彼女は……彼女でいいのか、ナルドはやっぱり笑顔のまま、はい、と答えた。

とにかく、頼みにしていたナルドに生理が来ていないとなると、よその奴に聞くしかない。

葉介には聞けないし、ジュノは知らないからナルドに聞けって言ったんだろうし、ミュゼとベルは論外、クラージュに弱みを握られるのは絶対嫌だ。

その点アジュは彼女がいるそうだし、ふつうの男に頼むよりはまだハードルが低い。

私はジュノの長衣のあわせをぎゅっと掴みながらアジュにつめよった。大きな声では言いづらい。私はひそひそ怒鳴った。

「あのさ……頼みがあるんだけど」

「はい、なにか？」

アジュは軽く首を傾げた。立ち聞きしてしまった気まずさが残っているのか、軽く笑顔が引きつっている。

「あのさ、生理の時の手当ての仕方ってアジュ知らない？」

「……………」
アジュの、引きつってた笑顔が凍り付いた。

「……………えーと」

長すぎる沈黙に、やっぱりダメか、と思いかけた瞬間、鶏ガラのバケツを手に持ったまま、アジュは輝くような笑顔で言った。

「…それなら、止める方法を知っています」

「は？」

「私は手伝ってあげられませんが」

「ん？」

「しかも十月十日しか持たないんです」

……………。

「セクハラか！…期待させやがって！！失せる！！」

「はい、では」

アジュはあからさまにほっとした顔をしていそいそと逃げかかったので、私はあわててアジュの服の背中をひつつかんだ。

「待て待て待て！！マジに行かないで！！」

するとアジュは無念そうに振り返る。

「……………失せるって言ったじゃないですか……………」

「撤回！！」

「撤回だなんてそんな、遠慮しないで」

「やかましいわ！！」

おちよくるだけおちよくつといて逃げるなんて絶対許さない。私の恥ずかしい事情を知られたからには、手伝ってもらわなきゃ割に

合わない。私はアジュの服の襟を掴んで、彼の耳を私の口の近くまで引きずりおろしてきた。近づいた耳に、大声でささやく。

「へーちよからなんか布もらつてきて！ できれば固くないやつ！ 汚してもいいやつ！ 台拭きでもこの際我慢するけどできればきれいなの！」

結局自分でなんとかするしかないらしい。私は覚悟を決めた。アジュはパシリに決定だ。これ以上人目につきたくないし、へーちよに会うのはためらわれる。

なにせへーちよは常時十人以上の兵隊を切り回す、鍋と雑貨と医薬品の魔人だ。どんなに人目を忍んで行こうとも、ジュノの長衣にくるまった私がへーちよのところに行けば、下手をすると生理用品を要求したことがよそまで漏れ伝わるかもしれない。

その点、アジュは元からへーちよの手下だから、へーちよのところへいそいそ行っても全く不自然じゃない。

我ながら良い考えだと思ったけど、アジュは渋い顔をした。

「セクハラですよ」

「……………」

おまえが言うな。という気持ちを目にこめてアジュをにらみつけると、アジュはちよつと黙った。こほん、と控えめな咳払いで仕切り直し、彼はまだうだうだと文句を言い連ねる。

「……………へーちよって主計兵長のことですよね？ 主計兵長に直接頼んでもらえませんか……………」

「やだ！！ 私まだなんだかんだでへーちよに軍服ありがとうございましてお礼言えてなかったもん！ お礼言う前から汚しちゃうなんてもう顔合わせらんない所業！」

「主計兵長はそんなことで目くじらをたてる人じゃありませんよ。汚したのもわざとじゃないんですから、またお願いすればきつと助けてくれます。言いくいのは分かかりますけど、自分で行ってきた方が良いでしょう。今後のためにも」

「くそっ……………いちいち正論を……………」

私の完璧な計画の、唯一の欠点がそこだ。まだへーちよにお礼を言っていない。

できるだけ早いうちにお礼を言わなきゃ不義理になるけど、普段はジユノを（というか、ジユノの真上に空いてる時空の穴を）見張るのに忙しかつたし、私がお昼を食べにいくときとかでちよつと体が空くと、今度はへーちよの方が怒濤のように忙しかったりで、言うタイミングがなかったのだ。

言葉に詰まった私に、アジユが口ごもりながらも追い打ちをかける。

「それに失礼ですけど、花奈さん、これが初めての、その、『それではないんでしょう？ 今まで通りに手当てすれば良いじゃありませんか」

「……………」

痛いところ突きやがって！

ジユノの遠縁という設定でここにいる以上、たぶんそれはへーちよにも言われるだろうけど、私のロリエは遥か彼方地球に置き去りである。今まで通りに手当てするのは、はっきり言って不可能だ。天才の幹也もさすがにそこまで気が回らないだろうし、仮に気を利かせて送ってくれたとしても、届くのがいつになるか。ていうかやつぱ、そんな気がきく幹也、やだし。

「……………」

五枚重ねただけのポケットティッシュの戦闘力はさほど期待できない。時間がないのは分かっているけど、私は途方に暮れてしまった。

そのときである。アジユはちょっと考え込むそぶりを見せた後、私にこう問う。

「何か事情があるんですね？」

私はうなずいた。

「のっぴきならないのがね」

何せ異世界トリップだからね。

するとアジユは、私の肩から落ちかけたジユノの長衣を引っかきなおしてくれながらこう言った。

「でしたら、クラージュ様に相談したら？」

「……クラージュに？」

私は露骨にいやな顔をした。クラージュって、借りを作りたくない人ナンバーワンなんだけど。この前も手相を見てやれとか言っておちよくられたばかりだし、ミカン騒動のせいでそのことをなじり損ねたから、私の中でクラージュへのわだかまりが残っているのだ。

私は口をとがらせたけど、しかしアジユは言い募る。

「クラージュ様が花奈さんのことを気にかけているのは確かですよ」

「なに、アジユはクラージュの肩持つの？」

「いえ、私はクラージュ様のこと嫌いですけど」

「うおおおい！？」

ここは尊敬してますって言う流れじゃなかったか！？

とっさに変な声が出た私を、アジユは涼しい顔で見下ろした。

「困ってるときはこういうものであると利用すべきだと私は思いますよ。彼は尊敬すべき人物ではありませんが、曲がりなりにもこの駐屯地で一番の魔法の使い手なわけですから、何かしら方法を見つけてみましょう」

今まで完全に空気と化してたナルドもおっとりとうなずく。

「クラージュ様ならば、何か手だてをご存じでしょう。最悪でも、必要なものを取り寄せてくださるはず」

「うーん……」

確かに、『何かあったらどんなことでも頼ってほしい』って言ったのは確かだ。これが『どんなことでも』の範疇に入っているのかどうかはちょっと怪しいけど。

しかし、時間がないのも確かだった。私はええいと思いきり、アジユに言った。

「分かった。クラージュのところに行ってみる。ごめん、アジユ。」

巻き込まれ損だったね」

「いえ。幸運を祈ります」

まるで私が死地に赴くような口振りでアジユは私に言った。あなたがち間違ってるわけでもない。

そういうわけで、私はまたジユノの長衣をかきあわせ、あてどなくクラージユを探すことになったのだった。

……家に帰りたい。

The 3rd Attack!! 3 (後書き)

男の娘：性別は男性でありながら傍目には女性にしか見えないキャラクター属性です。シヨタであることが多いようです。『THE IDOLM@STER Dearlly Stars』(秋月涼)、
『おと×まほ』(白姫彼方)など、元は男の人向けの属性でしたが、
『ミントな僕ら』(南野のえる)、『うそつきリリイ』(篠原苑)など少女漫画の中でも描かれます。

そろそろ心細さも頂点に達しそうだったけど、まさかナルドやアジユにつれシヨンよろしく『クラージュのところまでついてきて』なんて言えたもんじゃない。私はまた一人になって、クラージュを探す羽目になった。

クラージュはほんとに尻の軽い…失礼、バイタリテイに溢れてる人で、ほとんど一カ所にとどまっているということがない。

クラージュは、彼のたった一人の上官であるジユノがほとんど第二エリアの執務室から出てこない代わりに、駐屯地中を駆け回って（ほんとに走ってるわけじゃないけど）いるらしい。

朝は太陽が昇るより早く起きてへーちよとお茶を飲んでるらしいし、夜は私がぐうぐう寝てる間にもナルドがレモン水を用意するのが地面の下にいる間は、自分のテントから出ちゃいけないって言われてるから知らないけど。

もちろんそういふのどかな仕事のほかに、物資の搬出入や戦闘訓練の指導もそう、人事のことも偉い人と連絡を取り合うのも、国内外とのネゴシエーションも、果ては駐屯地内で禁じられてる賭博行為の捜査まで、なんでそこまでするの？ ってことまでやってるらしい。ありとあらゆる雑務を、クラージュは一手に引き受けているのだ。

そういふわけだから、駐屯地の中でクラージュの目の届かない場所、足の及ばない場所はないと言って良い。裏を返せば、

『クラージュ今どこにいるか知ってる？』

って聞いても、

『さあ、どっかにいるんじゃない？』

という返事しか期待できないってことでもある。今の私は長い距

離を出歩けないのに、まったく弱った。

変な格好をしてる私は、やっぱりめちゃくちゃ目立つらしい。どろっとした感触がしたので思わずぎくっと立ち止まると、そのへんにいたおっさんが…もっと具体的に言うと、四十目前ぐらいで、髭成分多めの…たぶん警備のおっさんだけど、その人が私を不審そうに見下ろした。

「あんたさつきからなにしてる？」

「……………」

知らない人が私の名前を知ってることにももう慣れた。おっさんは、私がうろつろつろしていることに気づいて声をかけてくれたらしいけど、はっきり言って今はありがた迷惑ってやつだ。私はおっさんの顔をまっすぐ見るだけの元気もなく、おっさんの足下を見ながらつぶやいた。

「悪いけどほつといて……………」

あーあんまり立ち止まってたかないんだけどな。私は思わずジユノから借りた長衣の前を、片手でかきあわせた。

しかし、その仕草がいけなかったらしい。おっさんはますます不審そうに目をすがめて言った。

「……………あんた、何か隠し持ってるんじゃないだろうな？」

「えー!？」

なにこのおっさん鋭い。私はひるんだ。

そういえば、私は寝坊やら魔法の勉強をぶん投げたやらクラージユに平気で楯突くやらで、あんまりこの人たちから信用されてない。葉介が実家から持ってきた(という設定の)稀少な魔具(冷蔵庫とかPSPとか)を我が物顔で濫用してるって噂が流れてるからおっさんは私が何か盗もうとしてると勘違いしてるんだろう。こんなところから何か盗むほど私不自由してないのに。ていうかどこへ何を持ちだそうっていうんだ。

「なにも持ってないよ……………!!」

嘘は言っていない。隠してはいるけど。あわてて私はおっさんから

距離をとり、長衣の合わせをますます強く握りしめる。おっさんが、今にも長衣をひっぺがしかねない目の色をしてたからだ。ひっぺがされたら色々終わる。

しかし、おっさんの目にはそれがますます不審に映ったらしい。

「じゃあその服を開けて見せてみる」

「やだよー!!」

「やましいところがないなら見せられるはずだろう。だいたい、その長衣はジユノ様のものじゃないのか」

「やだったらやだ!!」

「……話にならない」

おっさんはため息をついた。話になんないのはこのおっさんのほうだ。くらくらしてきた。

服がどのくらい汚れちゃってるか、自分の目では確認してない。

黒の軍服だから目立たないはずだけど、仕事の合間にちらっと見ただけのはずのジユノが気づいたくらいだから、注視されたらすぐばれちゃうだろう。走って逃げたい。すぐ捕まるだろうけど。

「……」

うわー、うわー、これは万事休したかもしれない。私はぎゅっと目をつぶった。

助けてお母さん。助けて葉介。助けて幹也。ついでにジユノ。もうやだ。もうやだ。私がいったい何したって言うんだ。なんでこんな時にこんなところでこんなことになるの。やだって言うてるのになんで分かってくれないのこのおっさん。

「……チーズ蒸しパンになりたい」

「……あんた今なんつった？」

心底呆気にとられたような声を出したおっさんをよそに、私はしばらくうつむいて黙った。

こうなったらもうどうしようもない。楽しいことを考えよう。どいつもこいつもセクハラ野郎だとか洗えばなしのブラジャーとか

ナルドのちんちんのこととか、そういう辛いことはもう忘れよう。
楽しいことを考えよう。

「……………」

「…………い、…………おい!!」

「んぐ」

修学旅行で行ったデイスニーランドのことを思い出していたのに、目の前のおっちゃんが無理に私の肩を揺らしてくる。現実逃避も自由になさしてくれないのか。

よだれがたれてないか顎のあたりを確かめながら、私は再度交渉した。

「ごめん、生活態度は改めるから今はほんとに勘弁して」

「悪いがこっちも仕事でな、そういうわけにもいかん」

「それを言うならこっちだって事情つてものが…………」

「だからその事情を言えつちゅうのに」

「だからそれが言えんつちゅうのに」
もうらちがあかない。そろそろ一回トイレに行つとかなないとたぶんまずい。時間がないのに。おっさんを無理にでも突破しようか。

「何事ですか？」

くらくらしながら私とおっさんはにらみ合つてたけど、突然その私たちに割つて入る人がいる。

「クラージュ! ……さん!」

「クラージュ様!」

「呼び捨てでかまわないですよ、花奈さん」

クラージュだった。私がさっきから探してたクラージュ。金茶の髪をなびかせて、彼は少し離れたところから小走りに駆け寄ってくる。そして、目をまん丸にしている私たち二人と一度ずつ目を合わせてからにつこり笑った。

「タンジも花奈さんも、ひとまず落ち着いてください。こんなところで喧嘩するのは、あまり見た目の良いものではありませんよ」

「だってこのおっさんが!!」

私はすかさず食ってかかった。先に因縁つけてきたのはこのおっさんの方だ。クライジユは、うん、と私にうなずき返す。

「事情は分かりました」

「マジで!?!」

かくかくしかじかとすら言っていないのに本当に分かったのか!

おののく私を、クライジユは優しい目で見下ろした。

「大丈夫ですよ、花奈さん。全部、分かっていますから」

「……………」

本当に全部分かったっていうんだろっか。うさんくさいものを見る目をしてる私の視線をもともせず、クライジユはおっさんに向かってこう言った。

「タンジ。職務に忠実で大変結構なことです。ですが、花奈さんのことは少し大目に見てあげてください。天真爛漫なところが、花奈さんのかわいらしいところなのですから」

「……………」

「……………」

タンジっていう名前らしいおっさんと、私の心は一つになった。聞いているこっちが恥ずかしいわ、という照れ。私にはそれに、天真爛漫とか言ってる場合じゃないわ、という焦りも加わるけど。

勢いを殺がれたらしいおっさんから、今度は私に向きなおり、私の耳に口を近づける。

「花奈さんは、テントに戻っていてください。僕もすぐ行きます。五分だけ待てますか?」

「……………」

「……………」

クライジユが心配そうに私の顔を覗き込む。私はこっくり、小さくうなずいた。

「ん……待てる……………」

「良かった。かわいそうに、心細かったでしょう。もう、大丈夫ですよ。心配しないで。ね？」

クラージュは私の肩にかかったジユノの長衣ごと、私を一度抱きしめ、すぐ放した。私はもう一度うなずく。

私はそのままおっさんとクラージュから離れ、お腹をかばいながらとことごと第三エリアの自分のテントを目指した。立ち去りながら振り返ると、クラージュはおっさんと一言二言話した後、足早にどこかへ去っていくところだった。おっさんも、私の方をちらっと見て、ばつが悪そうな顔をした後、また警備の仕事へ戻っていく。

なーんだ。クラージュはちゃんと分かってた。助けてって言わなくても。あんな、何度もは言いたくない事情をわざわざ説明しなくても。

私は、不覚にも目にたまってた液体を手の甲でぐいぐい拭いた。とにかく、助かった。これで何とかなる。

ズボンの下は太股までべたっとしてるけど、とにかくこれで、助かった。

The 3rd Attack!! 4 (後書き)

チーズ蒸しパンになりたい…2003年より週刊少年ジャンプで連載されている『銀魂』単行本の作者ページにて、作者が記した謎のコメントです。アニメでもネタにされました。

もう一回トイレに行ってから、私は与えられたテントに戻った。

脱いでみるとズボンはどろどろで、しょうがないから、下だけまた、薄汚いと大不評のジャージにはきかえる。パンツはテントの隅に隠して、新しいのを出してくる。ティッシュも交換して、このパンツが汚れないうちにクラージュが来てくれるのを祈った。だってこれ、ナルドから借りたパンツだもん。

不幸中の幸いというか何というか、ジュノの長衣はほとんど汚れていなかった。ジュノは汚れるのも覚悟して貸してくれたはずだけど、やっぱりね。これ、高そうだからね。

タイミングを測っていたわけじゃないだろうけど、クラージュは服を履き換えたのとはほぼ同時くらいに来てくれた。クラージュはテントの外からそっと私に声をかける。

「花奈さん、お湯を持ってきました。手だけ出せますか？」

「うん」

私と言われたとおりテントの隙間から手だけ出すと、その手にガラスのでっかいポットと洗面器が握らされる。ポットは食事の時、テーブルごとに設置されているのと同じやつだ。ヘーちよのところにも寄ってきたんだらう。たったの五分で、すばやい仕事だ。

「落ち着いたら教えてくださいね。ゆっくりで良いですよ」

ゆっくりって言われても、血はKYにもだくだく出続けているのである。それにクラージュをテントの外にたちっぱなしにさせとくわけにもいかない。

私はそのお湯を洗面器にあけて、急いで足のあたりを拭いた。汚れた布と洗面器は、パンツとズボンと一緒にしてまた隠す。これでちよっとすつきりできた。

「クラージュ…さん、もう入っても大丈夫」

「では、失礼します」

クラージュは音もなくテントに滑り込み、またぴつたりと隙間なく入り口をふさいだ。手には救急箱がある。彼はそれを私に渡して、促した。

「開けてみてください」

救急箱の中には、マキロンも正露丸もバンドエイドも入っていない。あるのは、ひし形の布が二枚と、痛み止めらしい粉の包み、そして謎の物体が三つ。謎の物体は三つ合った。みんな同じ形で、大きくても七センチくらい、小さいのは四センチくらい。半透明の袋に小分けされていて、袋は指で強く摘むとシャボン玉みたいにはじけて消えた。袋の中にはなんか……指ぬきみたいな形の、ぺによつとしたものが入っている。……すつごいいいやな予感がする。

「取り寄せていたものです。使い方はわかりますか？」

クラージュの口振りから察するに、この謎物体は生理用品らしい。私は首を左右に振った。形状からして、たぶん使用方法としてはタンプオンに近い。女子高生の感覚として、入れる型の生理用品はちょっと、遠慮したいところだ。しかし、救急箱の中にはこれとひし形の布、それから薬のほか、何も入ってない。ひし形の布は肌触りは良いけど、薄い。明らかに血を受け止める用にはできてない。うわーいやな予感だ。この謎物体を使わなきゃいけない予感がするぞ。

しょうがないからこのぺによつとしたものの形状を、きちんと説明しよう。保健体育の授業で気持ち悪くなっちゃった人はちよつとよしといた方がよいよ。

形はさつきも言ったように、指ぬきみたいな形をしている。逆さまにひっくり返したお寺の鐘の形にも似ている。いやな予感マックスだ。手触りはゴムとかシリコンみたいにつるつるで、猫の肉球を1ぶにとしたら0.7ぶにくらいの固さ。ちよつとつまむとすぐゆがみ、力を抜くとすぐ元の形に戻る。薄ピンク色のファンシーな色

合いが逆に衛生用品っぽさを醸し出して、なんだか怖い。

私は言いくいのを我慢して、クラージュに聞いた。この人だつて聞きにくいのを我慢してくれているのである。

「せつかくなんだけどさ、あの……入れないやつないかな。使い捨てで……ええと、この」

一緒に入つた、ひし形の布を引っ張り出す。かなり横に長いひし形で、縦側の角と角には二本ずつ、細いサテンのリボンがくっついている。

「形はこれに似てて、綿かなんかできてて、使い捨てで、こつ、縦にまるめて捨てられる……」

クラージュはええ、と相づちをうってくれたけど、返事は芳しいものじゃない。

「ええ、ここが普通の場所ならそれでも良いと思うんですが……」「だめなの？」

「花奈さんのおっしゃる方法だと、どうしてもゴミが出ますから。これは、使い捨てではないそうです」

「……………」
「ゴミを漁る変態が存在する可能性を示唆された私は、ますますテンションが下がった。」

「……分かった。じゃあこれを使うことにする」
人間切羽詰まると、細かいことはもうどうでもよくなるらしい。

「ありがとつ。手紙を書いてもらいました。その使い方が書いてあるはずですよ」

クラージュは、封筒を一通、救急箱の上においた。その封筒は固くて重くて分厚い紙できていた。私がいつも勉強に使ってる紙とは根本的に材料から違う気がする。

その封筒は真っ赤な蠟を丸く垂らして封がしてあった。オペラ座の怪人の映画でやってるのを見たことがある。これは封蠟ってやつだ。蠟には驚だか鷹だか、猛禽類のはんこが押してある。ひっくり返すと、シエーラ、と封筒の隅っこに署名もしてあった。

私はその封をペリペリ剥がして中の手紙を読んだ。これを用意してくれたらしいシェーラという人は無駄を嫌うタイプなのか、それとも突然変なことをクラージュから頼まれて困惑していたのか、手紙は箇条書きで必要なことだけ書いてあった。つまりこうだ。何度も言うけれど、保健体育の授業で気持ち悪くなっちゃった人はよした方がいい。私もぶつたおれそうだ。

すばまっている方を下にし、広がっている方は軽く指でおりたむ。

上方を少し入れたら、あとは底面を指で押せば良い。この時必ず、上方が中できちんと広がったのを確認すること。

ごく浅いところで止めておけば十分。しかし、底まで埋めておくこと。

難しかったら鏡を床に置いて試すこと。

小さい方を多い日に使う場合、三時間程度が限界だと思いなさい。大きい方は半日保つが、できるだけこまめに様子を見ること。

慣れないうちはさらに布を当てると気が楽になると思う。一緒に入れたものがそれだ。布は下着の中に入れ、サイドのひもを下着に結びつけて留める。

薬は鎮痛剤だ。うちの自慢の薬師の処方だから君の体にもきつと合うだろう。副作用で眠くなることもあるらしい。どんなに痛くても、飲むのは食後に一包みずつ、三時間以上時間をあけて、だそうだ。処方箋も書かせたから、薬が切れたらクラージュに取り寄せさせなさい。

以上、健闘を祈る。落ち着いたら兄妹そろってゲルダガンディアまで遊びにおいで。

シェーラ・ゲルダガンディア

「……………」
文面からは直接的な表現を避けなかつた。いさぎよさが感じ取れる。わかりやすさを重視したんだろう。いつそ男らしい。私は普通なら書かなくていいことを書かせちゃった申し訳なさでいっばいになった。

私はたぶんめちゃくちや情けない顔をしてたはずだ。だって、このへんなの、見れば見るほどペットボトルのふたに似ている。さもなければマツキーのふたか、圧力鍋のてっぺんにつける圧力抜き用のふたか……まあなんにせよ、ふたに似ている。ていうかまあ、用途的に言っても、ふただし。

私は不安なのを我慢してクラージュに言った。

「とりあえず、がんばってみる……………」

「はい。また何かあったら呼んでください。この近くにいますから」
クラージュはすぐにテントを出て行って、私を一人にしてくれた。私はもう一回シェーラって人が書いた手紙を読み返して、使い方を確認する。……鏡を探さなくちゃいけないな。

それにしても、差出人の名前がなんかすごい。シェーラ・ゲルダガンディア。ゲルダガンディアって確か首都じゃなかったっけ。で、首都を治めている人の名前がシェーラじゃなかったっけ。

クラージュ、なんて人になんて物を用意させてるんだろう。人脈の無駄遣いだな。しかもこんなものにわざわざ署名が入ってるのもすごいな。なんでだろうな。

「……………なんて」

あんまり長いこと現実逃避しているわけにもいかない。

「……………はあ」

よし、死ぬか。

色々すませて、私はテントを出た。だいたい三十分くらいかかったらうか。もう疲労困憊である。うんざりである。それにはつきり言ってこんなものじゃ落ち着かない。動きたくない。でもたぶん、クラージュは心配して待つてるんだろうし（ナルドやアジュはぜんぜんそんなことないだろうけど）。肩にはジュノの長衣がかかっている。下がジャージだから隠さなきゃいけないのだ。果たしてクラージュは、テントの出口すぐそばに立っていた。まるで見張りみたいにだ。

「クラージュ……さん」

声をかけると、クラージュはとろけるような優しい顔をして答えた。

「呼び捨てでかまわないんですよ」

「いやいやそういうわけには」

「大丈夫でしたか？」

「なんとか……」

ほんと、ぎりぎり、なんとか。歩く姿のぎこちない私をクラージュはいたわしそうに見下ろす。

「こればかりは、慣れていただくほかありませんが……」

「そのうち慣れるから、大丈夫……たぶん」

私は首を振った。ほんとに、クラージュの言うとおり慣れるっきやない。

「それより、なんかあの……ありがとう。何から何まで……。ごめんね、全部頼っちゃって。迷惑かけたでしょう」

「いいえ、役得でしたよ。二人だけの内緒のお話ができましたからクラージュは肩をすくめておどけたけど、私は真剣に言っている。あんな丁寧な説明書をわざわざ書いてもらうのなんて、どう考えたって絶対五分じゃ間に合わない。前々から準備してあったはずだ。

そのことを指摘すると、クラージュは大したことじゃありません、と軽く首を振る。

「届いたのはほんの数日前ですよ。その軍服を用意したのと同じ日に手配しましたから」

「……………」

一を聞いて十を知るとはこのことか。おののく私をよそに、クラージュは悲しげな表情を浮かべる。

「手に入れた後すぐ、渡せば良かったのです。あなたがこちらにもう少し慣れて、気持ちの落ち着くのを待とうと、そういう浅はかなことを考えずに」

よく回る口だ。悲しそうな顔は演技だな、と私は見当をつけた。しかし、クラージュの思いやりはよくわかる。確かに、生理でもないにおっそろしいものを渡されていたら、マジにクラージュのことが嫌いになっていたかもしれないからだ。

「女性の体のリズムは、待つてはくれないのにね。あなたには辛い思いをさせてしまった。許してくださいさるでしょうか」

「リズムっていうか……………」

私は、どう説明したものか迷って、軽く首を傾げた。

私がこうまで生理のことを忘れ去って油断しきっていたのは、まだ来るはずの時期じゃなかったからだ。

「ちよつと、疲れてみたい。やっぱり環境が変わると変になるみたいだね」

「お察しします」

クラージュが言葉少なに相づちを打つ。

「ミュゼとかさ、クラージュさんとかがさ、あんなに帰れ帰れって言ったの、こういう事だったんだね。こういう普段だったら全然何でも無いような、くっだらな事だめっちゃくちゃ苦労するよっていう」

まさか十七歳にもなって、生理で苦労するなんて思ってもみなかった。今日一日だけで、一生分恥ずかしい思いをした気がする。私はますますしおれたけど、クラージュは追い打ちをかけるみたいに言った。

「帰りたくなりましたか？」

「……」

正直なことを言うと、今この瞬間もめっちゃ帰りた。せめて生理が終わるまで日本で生理休暇をとりたい。でも、それじゃ葉介と一緒に年を取ってあげられなくなってしまう。

「まさか。そんなわけないじゃん」

帰りたいなんで言ったって引き留めてくれる人はここにはいない。私は精一杯強がって見せた。それ以外に出来ることがない。

するとクラージュはにっこり笑ってたった一言、

「良かった」

とだけ言った。言葉をむやみと飾りたがるクラージュにしては、率直な物言いだ。ま、お世辞だからだろうけどな。

「……」

「……」

その後ほんの一瞬、会話に隙間が空いた。外国ではこういうのを天使が通り過ぎた、っていうらしいけど、おしゃべり好きらしいクラージュはその去り際の天使を蹴り飛ばすみたいな勢いでまた話し始める。

「花奈さんがここにとけ込むための協力は惜しんでいないつもりですよ。ミュゼも僕もね」

「……何それ、いつの話？」

ミュゼと、クラージュが？ 私は本気で首を傾げた。ミュゼとクラージュが、私になんかしたんだろうか。思い返してみるとミュゼは暇な私のためにけっこう頻繁に遊びに来てくれてたけど、クラージュは何だろう。私の素行が悪いつて教えに来た時のことを言ってるのか？ まさか、軍服と救急箱を用意したことじゃないと思うけど。私のぴんときてない顔を見て、クラージュはくすくす笑った。

「いやだな、僕だっただだ意地悪しようだとかからかって遊ぼうだとかだけ思って、皆の手相を見るなんて言ったわけじゃないんです
「よ」

「……………手相？」

あれがどうして私への気遣いになるんだろう。あと、『だけ』が超気になる。ちょっとは思ってたってことじゃないか。

すっとんきような声を出した私を見て、クラージュはまだにこにこしている。ほんとによく笑う人だ。

「ほら、花奈さんみたいな可愛い人に手をとられたら、どんな人でも優しい気持ちにならずにはいられないでしょう？」

「……………」

なんかお腹だけじゃなくて頭も痛くなってきた気がする。こめかみを人差し指でぐにぐにしながら私はかろうじてこう突っ込んだ。

「……………そういうのはセクハラに含まれるんじゃないのかな……………」

今日の出来事の後で今更セクハラがどうこう怒るつもりはないけど、そこんとこどうなんだ。しかしクラージュは悪びれるということをしなない。

「あのことで花奈さんが可愛らしい女の子なんだと皆に知れ渡りましたから。後は、花奈さんが手料理でも振る舞ってくださいれば士気も上がりますし完璧なんですけど……………」

「ははは、ご冗談を」

手相見がまるでデビュー直後のアイドルの営業活動みたいに扱われてて、私はちよっと憚然とした。あの時私は私なりに焦ってたし困ってたし、クラージュの言うことを心底から信頼してたのである。それを、まるで関係ないことに利用されて、結果オーライって言われても納得いくわけがない。

しかしここまで世話になっという……………って気がするし、やっぱり飲み込むしかないらしい。この不満。

「……………」

「……………花奈さん？」

ふとクラージュが私の顔をのぞき込む。視線は私の唇だ。私のいつもの悪い癖が出てたらしい。つまり、不満が唇に出てたらしい。

クラージュはすつと指を伸ばして、私の唇を縦に挟む。

「……ぎゅむっ」

……ほんとに、この人何がしたいんだ。

冷たい目をした私に、クラージュは短く言ってほほえんだ。

「葉介の真似をしてみました」

……ほんつとーに、何がしたいんだろう。

The 3rd Attack!! 5 (後書き)

花奈を震撼させたアレの名前は月経カップというものをモデルにしています。全然ぐぐらなくて大丈夫です。

読んでてしんどい箇所だったと思います。お疲れ様でした&大変失礼しました

まだもうちょい続きますが描写は相当減ると思います

クラージュに付き添ってもらいながら、ヘーちよに軍服を用意してくれたお礼と速攻で汚しちゃったお詫びを言いに行った後、私はまた第二エリアのジユノのテントに戻ってきていた。

だって、気まずかろうと何だろうと時空の穴は待つてくれない。生理だから見張るのやめます、なんて言ったら、ジユノの無言の重圧に耐えながら時空の穴を見張り続けてた今までの苦勞が全否定だ。

ジユノの長衣でジャージのズボンを隠しながら帰ってきた私に気づくと、ジユノは眉をひそめた。

何でだ。私まだ何もやってないのに。……と、最初は思ったけど、もしかしたらクラージュと一緒にだったからかもしれない。

執務用の机から石化の腫で私達を睨んでくるジユノを涼しげに見下ろしてクラージュはほほえんだ。

「相変わらず、花奈さんに椅子の一つも用意して差し上げていませんですね、ジユノ」

「……………」

それは今に始まったことじゃない。そんなどうでも良いことを今更あげつらって、ジユノの機嫌を悪くするのは避けてほしい。この後は私とジユノと、この密室に二人つきりにならなくちゃいけないのだ。私はおろるとジユノとクラージュの二人の顔をうかがった。ジユノは案の定眉間に皺を深く刻んで、こう言う。

「……居着かれては迷惑だ」

「そんな、心にも無いことを言うのですね」

「……………単なるお前の願望を、事実であるかのように口にするな」

「いえいえ、あなたの心のことは、あなた以上に詳しいつもりです」

「お」

「…話にならん」

ジユノはそれきりむつつりとおし黙った。

「……………」

今ここで『私のために争わないでー』って叫んだらどうなるだろう。好奇心はうずいたけど、あいにく私はマゾでも破滅主義者でもないなので、やめといた。葉介が見てたらきつと成長したなあって褒めてくれただろう。

私は神妙な態度でジユノに近づき、肩にかけてた長衣を差し出した。これが無かったら、ナルドを探すのもままならなかった。

「ありがと、ジユノ。ほんとに助かった」

でも、ジユノはちらつと私を見るとすげなく言った。

「いらん。着ている」

「え、でも」

敷いて座つたり巻き付けたりしてないから、汚れてはいないはずだけど。私が困っていると、ジユノはもう一言付け足す。

「見るに堪えん」

「……………」

もしかして、軍服の下がジャージになっていることを言ってるんだろうか。そこんところは、不可抗力だと思ってもらわないと困る。だって、汚れたズボンは今洗って干してるところなんだもの。

ちよつといやな雰囲気になった私とジユノとを見かねた感じで、クラージユが口を挟んだ。

「いけませんね、ジユノ。そういう時は見るに堪えないじゃなくて、見ていると心配ですって言うんですよ」

「……………」

黙つたままのジユノを軽くたしなめて、クラージユは私にまた、ジユノの長衣を巻き付け直す。

「花奈さん、そのまま使っていていいそうですよ。お腹を冷やすといけませんから。何か花奈さんにも、外套になるようなものをあつ

とジユノのだろう。デザインは単なる長方形でわりとそっけないけど、宝石が山ほどついていて高そうなものだし、何よりどんなものであれ借りパクはよくない。

「これ、返す。ジユノのだよ、これ」

今まできれいさっぱり忘れてて悪いことをした。なくて困ったりしなかったらうか。

ともあれ私が差し出した記事を見ると、しかしジユノはものすごく苦々しい顔をした。なんか思い出さたくないことを思い出したらしい顔だ。私は首を傾げた。

「なんかあったの？」

「いいえ、何も」

くつつと、誰かの喉が鳴った。その後、輝くような笑顔で返事をしたのはジユノじゃなくてクラージュだ。さすがにこれは私にもわかる。これはごまかそうとしてる時の態度だ。

「なんかあったんでしょ？」

「詮索は無用だ」

笑いをかみ殺すクラージュをジユノはじろつとにらみ付ける。

「クラージュ。用が済んだなら出て行け」

「はいはい。それでは、花奈さん。また、後ほど」

……あの記事が一体どういう謂われを持つてるのか、気にならななくてもないけど、命は惜しい。ジユノと二人きりになった状態で深く突っ込むのは、無理だ。最低でもリレイズをかけてからでないと。

「……………」

しばらく沈黙の時間が続く。クラージュが一人でテントを出ていき、その気配も消えた頃、ジユノはようやく口を開いた。

「なぜ、クラージュと来た。ナルドリングはどうした」

「へ、ナルド？」

突然のことすぎて、一瞬何を言われてるかわからなかった。ジユ

ノは静かに続ける。

「ナルドリングにお前を任せた。ナルドリングが葉介恋しさにお前の世話を放棄したなら罰する必要がある」

「は……!?!」

放棄？ 罰する？ 一体何言ってるんだろこの人は。私は目を丸くした。ジュノは当然のように続ける。

「正規の兵士でないとはいえ、お前もナルドリングもこの駐屯地に暮らす以上、俺が下した命令を無視する事は許されん」

「……………」

さすがの私も一瞬絶句した。言いたい事はわかる。わかるけど、お役所仕事にもほどがある。私はあわててナルドをかばった。

「ナルドのせいじゃないよ!!! ナルドね、まだ生理が来てなかったの。それどころかね、あの……………ええと」

うっ。私は口ごもった。やばい、ちゃんとと言わないと私もナルドもこのラスボス野郎にスーパーノヴァ食らわされる。

しかし、おちんちんが近いうちに生えてくるんだって！ とはとも言えない。さすがに言えない。今日のこいつ下ネタばっかだな！ って思われるのはつらい。終わる気がする。女子高生として。

さんざんごによごによ口ごもって、出てきた台詞はこれである。

「……………お、男の娘になってきてるらしいよ……………」

「……………」

「……………」

……………ジュノに萌え用語が分かってもらえるだろうか。いや、分かってもらわなくっちゃならない。ジュノと私の間に緊迫した空気が流れる。私のすぐる目を真正面から受け止めながら、ジュノは一言つぶやいた。

「……………ユウセイカしているのか」

一瞬漢字変換出来なかった。郵政化。優勢化？ 優性化……………雄性化……!

「……そう！ それなの！ たぶんそれなの！！」
たぶんそれだ！！ 私感動のあまりジュノの両手を握ってぶんぶん振った。

それだよ、雄性化！！ クマノミみたいに元々メスだった個体が環境によつてオスになつちやうことを生物用語では雄性化といいます！！ そういうわけでファイディング二モのパパは実を言うと元々はママだったんだよ！！ 勉強になったね！！

「で、どうしよう！？ ていうかどうということ！？？」

「騒ぐな。……驚くべきほどのことではない」

ジュノは私の手を軽く振り払い、静かに言う。

「言ったはずだ。ナルドリングは『紅玉鉾脈の九十八番目の従者』と名の付いた、我々とは別種の生き物だと。鉾の姫の為ならば、従者はどのようにも自らを変える。性別を変える程度のこと、たやすく行はずだ」

「……………」

「……………」

「ええと、ちょっと待ってね……………」

……………もうだめだ、世界観についていけない。私は途方に暮れた。順応力のある葉介ならもつとこう、きぱつと気持ち切り替わるんだらうけど、私には無理だ。紅玉鉾脈とか、その従者とか、その従者がメタモンのように姿を変えるとか、そのメタモンの一人は私の友達兼葉介の彼女候補であるナルドであるとか。もういい加減、ついていけない範疇を超えている。

しょうがないので私は私の美德を生かすことにした。つまり、スルースキルを發揮したのである。

「……………で、私はどうしたらナルドのことを助けてあげられるの？」
肝心のこつて結局、これだけだ。

あんなに葉介のことを好きでいてくれるのに、どうしてナルドが男になるなんてことになつちやうんだらう。

おちんちんが後から生えてくるなんて聞いたことも無いけど、せ

めて女性ホルモンを注射するとか、そのおちんちんの元になるものを切除するとかの方法で、それをくい止めてあげることが出来ないんだろうか。

私はじつとジユノを見た。でも、ジユノは私をちらりとも見ない。ずつと手元の難しそうな書類に目を落としたままだ。

「何もする必要はない。ナルドリングはあれで幸福なのだ」

「あれでって……でも」

唇をとがらせた私を、この時やっとジユノは見上げる。口からこぼれた言葉は、とても冷たい。

「放っておけと言っている。ナルドリングが葉介の為にしている事に横から手を出されることほど、ナルドリングの気に障ることはない」

「……変」

私が短くつぶやくと、ジユノが言い返す。

「歪みも世界の一部だ」

私も言い返した。

「誰が何と言おうと、変」

葉介のために、女のナルドが男に変わる。

理屈も理由も分からないけど、そんなの、葉介の姉として、ナルドの友達として、見過ごせるわけがない。

だって、ナルドは葉介のことが大好きなのに。あんなに恋する乙女してるのに。

ナルドが男になるってことは、ナルドが葉介の恋人になる可能性を、完全に捨てるってことだ。自分の恋を諦めて、ただただ葉介に身を捨てて尽くしきるってことだ。

ナルドが、そうまでして果たしたいことって、一体なんだ？ その何かをナルドは私に手伝えって言っていた。

考えるのは苦手だけど、考えなくちゃいけない。何を考えれば良

いのか分からないけど、考えてればいつか何か閃くかもしれない。

集中力の足りない私なりに、ぼーっと頭の中にかかる霞を追い払いながら必死で考えてると、ふと手元の書類を読み終わったらしいジユノが顔を上げる。

そして本当にふと、なんとなくなくなって感じの態度でこう言い放つ。

「お前には明日から謹慎を命じる。俺が許すまでここにも来るな。

テントから一歩でも外に出ればお前の命は無いと思え。期限は特に設けない。」

………そんな突然、ごむたいな。

The 3rd Attack!! 6 (後書き)

リレイズ：ファイナルファンタジーシリーズの中での魔法の一つです。対象一体が戦闘不能状態になった際、自動で復活させます。

スーパードラゴン：同じくFFシリーズの中で、1997年、スクウェア（現スクウェア・エニックス）より発売された『ファイナルファンタジーVII』のラスボスの必殺技の一つです。

突然の謹慎処分の真相はこうだ。さつきジユノが見てた書類は、駐屯兵の増員要請が通りましたよ、っていうお知らせの紙だったらしい。ただし、シンプルに『要望が通ってよかったね』で済ませるわけにはいかない。

だって、増員規模がハンパない。その数なんと、三千人である。つまり今のちょうど倍だ。素人の私の目からしてもこれは異常すぎる。これは完全に戦争の下準備だ。もう一回戦争やる気満々だ。

葉介の大活躍のおかげでせっかく和平が結べる寸前まで行ってたって聞いてたのに何でこんな事になっちゃったのか。

実はこの駐屯地には、007とマタハリに共通する職業の人がサングリアから潜り込んでいるらしい。

……言っとくけど、これは極秘である。スで始まってイで終わってパが間に入る言葉なんか使ってるのを誰かに聞かれてもしたら、そいつは完全に身を隠して……あるいは逃げ出して、もう二度としばをつかませることは無いだろう。

はつきり言ってゲルダガンドの圧倒的軍事力の前ではスパイの一人や二人、屁でも無いらしいんだけど、重要なのは、紅玉鉞脈である葉介とそのコードネーム『すだこ』が、同じ釜の飯を食べてる状態だってことだ。

『ゲルダガンドが産出する豊富な宝石のどころ』については、ゲルダガンド国内の有力者にすらその存在が秘匿されている。

だから今まで、ゲルダガンドの国力の源である、超重要人物である葉介がこんな駐屯地なんかでふらふら翼竜の世話なんか出来てたんだけど、スパイがいるとなったら別である。ゲルダガンドの秘密の鉞脈の正体に、何かの拍子にサングリアが気付かないとも限らな

い。

それに、その『すだこ』が一体どういう情報を流してるんだか分からないけど、和平を取り結ぼうという方向でこれまで進んでいた雰囲気完全破壊で、突如サンタリアは軍備を強化し、この荒野シユツルクに兵隊を集め直しているらしい。

こりやもうのんびりしてる場合じゃない。ジュノやクラージュが首都のお偉いさんとも相談した結果、これ以上サンタリアが調子づかないようにここで一発ボッコとこうとうという事になったらしい。そりやもう、スパイが意味をなさなくらい、ボッコボッコに。

そういうわけで葉介はすだこが何とかなるまで謹慎措置という名の避難、ナルドはそのお守り、私もそれに付き合っつて謹慎である。

ただし交戦中は謹慎を解かれ、クラージュ達と行動を共にする事になるらしい。だつてスパイがいる駐屯地に葉介を置き去りにする方がよっぽど問題だからね。

何にせよ謹慎の間は時空の穴も見張れないけど仕方ない。テントから外に出られないのも仕方ない。

でも、また戦争が始まるとなれば葉介の帰宅が遠のく。そう思うと、私はひたすら憂鬱になつちやうである。

「花奈！！ お前また寝坊したのかよ！ 早く支度しろつて！ そろそろ行く時間だぞ！！」

「行つてらっしゃい」

翌朝、葉介は私のテントに飛び込んでくるなり元気よく叫んでくる。それを私はすげなくあしらつた。葉介は朝っぱらから元気だなあ。日本での無気力さが嘘みたいだ。

私はちようど、ベッドに寝つ転がって、質の悪い紙にひたすら『タチコマ』を描いて遊んでるところだった。

葉介はそれが不満らしく、葉介は私からペンを取り上げて眉をひそめた。ナルドはその後ろで大人しやかに佇んでいる。

「なんでだよ。今日外出とかねーと次いつ出られるか分かんないんだぞ」

「今日は外出たくない気分」

私はペンを取り返そうとしたけど、葉介は高いところにペンを持ち上げてしまった。寝っ転がったままでは取り返せない。起きあがるのが面倒だったので、私はそのままにして、葉介が自分から返してくれるのを待つことにした。

「前から言ってるけど何で異世界に来てまで絵描いてるんだよ…出るよ外に。ていうかお前が描いてるそれなに？」

「書いてあるじゃん」

私はあんまり絵がうまくない。ちゃんと分かってもらえるように、タチコマの脇にちゃんと『わたしのかんがえたさいきょうのタチコマ』って書いてある。その説明を読むと葉介はちよつと青ざめた。

「……悪い冗談にも程度つてもんがあるだろ」

「…まあ、確かにちよつとグロいかもしれない」

私も素直に認めた。タチコマは上手に描かないと横死したエチゼンクラゲみたいになってしまう。このタチコマは私が独自にアレンジを加えてるからなおさらだ。

「そんなひでー絵描いてないで俺と来いって」

「また今度ね」

葉介は『つまんねー奴だな』って顔をした。けど、私にも私なりに理由がある。何しろ二日目だ。あの生理用品の能力が未知数なのに、元気よく運動しに行けるわけがない。というかむしろ1ミリたりとも動きたくないと言うのが本音だ。私はため息を付いた。

「まったくこの弟ときたら察しが悪いんだから」

「兄。言わなきゃ分かんないだろ」

私も負けずに言い返す。

「姉。もう良いじゃん！ 行ってきなよナルドとさあ！ これでサ

ングリアのことボコボコに出来たらちゃんとまた外出ても良いよってなるんでしょ？」

「そりゃなるだろうけど……………」

葉介は物思わしげにそつと視線を逸らした。

「お前一人で置いてくの、心配だろ」

「……………」

葉介がデレた。やばいかわいい。不覚にもちよつと萌えた。葉介は私から視線をそらしたままぶつぶつ言う。

「ミュゼもベルも俺と一緒に行動することになってるし、ジュノもクラージュも忙しいし………… ナルド、お前花奈といてくれる？」

「葉介のお願いでしたら」

ナルドは口ではそう言ったけど、明らかに残念そうかつ心配そうだ。戦場に向かう葉介と離ればなれになりたくないんだろう。私は慌てて遠慮した。

「良いって、ほんとに。ここから出なきやいいことだもん。まさかスパイが私のテントに入ってくるわけないでしょ。行くならジュノのテントでしょ」

「けどさ……………」

まだ言いたいことがありそうだったけど突然テントの入り口の、上から下がってる幕………… いつも思うけどこれ、正式には何て言えば良いんだろう。とにかく幕がはねのけられた。また誰かやってきたのだ。

「三人とも、ここにいたんですね」

「お、クラージュ」

「クラージュ……………さん」

「呼び捨てでかまいませんよ、花奈さん」

ほんとに毎回良いタイミングで現れるな、クラージュって。私はちよつと呆れた。変な顔をした私を、クラージュは時価百万円相当の微笑で見下ろす。

しかし、今回私がクラージュの名前を呼ぶのに苦労したのは、ク

ラージュにさんをつけるかつけまいか迷ったからじゃない。クラー
ジュがものすごい格好をして現れたからだ。

クラージュは、いつもの軍服の代わりに真っ黒な服をつけている。
軍服と共通しているのは色が黒いことだけで、他はまるで違う。

クラージュが着ているのは通常の三人分は布を使っていそうな、
かさばりまくりかつ華美なシルエットの服で、何よりも装身具が多
い。服の布地が見えてる部分より装身具がついてる部分の方が多い
かもしれないぐらいだ。いやそれはちょっと言い過ぎだ。でも一瞬
そう思えるぐらいつけている。

直径三センチくらいの、シンバルみたいな形の金の板の両端に穴
をあけて、それを五つ、鎖骨の下あたりで左右に並べたネックレス
が一番目立つ。その他、ネックレスとお揃いのベルトを巻いて、指
輪をいくつも指にはめ、おへそのあたりまである長い鎖でつるした
メダル、金糸らしきものを細かく織って作られたバッジ、いろんな
合金を組み合わせたアミュレット、ルビーの目を持つうさぎがぴよ
ーんと跳ねているっていうデザインのチョーカーとか、いちいち拳
げているとキリがないほどとにかく色とりどり、様々な金属を身に
つけている。

服の袖口には薄いコインがぐるっと縫いつけてあって、クラージ
ュが少し身動きするたびにしゃらしゃら鳴った。その袖に隠れてい
る素肌の手首にも、もちろん山のようにブレスレットがついている。
たぶんピラミッドの中のもの全部つけたらこうなるんじゃないか
な。

アクセサリーには下処理がしてあるらしく、少し曇っているもの
が多かったから目に厳しくないのが救いだろうか。装身具をいかに
多くくつつけるかを考え抜いてデザインされたらしいその衣装は、
真っ黒く染め抜かれていた。

「すごいね、その服。真っ黒。じゃらじゃら。重たそう」

悪趣味とは思わないけど、はつきり言っちゃちょっと悪者っぽい。

いやかなり悪者っぽい。

私の視線を受け止めて、クラージュは困ったような微笑みを浮かべた。

「この軍には『黒曜軍』と名がついているものですから、鎧も黒いものを使っているんです。加えて僕は魔導兵としての役割もあるもので、こんな状態に」

「こんな、悪の大魔王みたいな状態に。」

感覚的に何となく察していたのと同じ理由だったので、私は素直に納得した。

電磁気力の魔法をより効率的に扱うには、電気電導率の高いものを多く身につけていた方が得つてことらしい。でもドラクエとかだと魔法使いは基本、金属製品は身につけちゃいけません設定だからここでもちよつとカルチャーショックだ。この国の魔法のことを考えれば、すぐ分かる理屈なんだけど。

「知ってるか花奈、クラージュはこんな格好してるから『鴉』っていうのが異名なんだぞ。普通の電磁気力系の魔法使いは『鵲』だからちよつと降格されてるよな」

「ひどいな」

クラージュは苦笑いしたけど、否定しない。自分でもちよつとはそう思ってるってことだろう。まあ、カラスもカササギも似たようなもんだ。

「それで、どうしたんです？ あと二十分で進軍を開始しますよ。」

「僕らはジュノたちとは別行動ですから、多少余裕がありますが」

「あ、そうそう。見てよこれ」

私は意気揚々と『わたしのかいたさいきょうのタチコマ』の絵をクラージュに見せた。

「これ何に見える？」

「……………ええと、ですね……………」

さすがのクラージュも絶句した。おもしろい。

「……………隅に描いてあるのは、文字ですよ？ その絵に描かれてい

るものの、体の一部などではなくて……」

「そーだよ、文字だよ。これが読めたらネタバレになっちゃうからね」

「そうですよね……」

グラナアーデ人は日本語が読めない。私たち被召還者がこっちの文字を読めるようにしてくれてる謎の力が働いていないためだろう。絶対わかりっこないのに、けっこう真剣に考えてくれてるクラージュが大変ほほえましい。にやつく私をよそに、葉介が眉をしかめて話を戻した。

「花奈が行かねーって言うんだよ」

クラージュもなんとか言ってみてやれよ、ってニュアンスがひしひしともっている。私は口をとがらせた。

「だって行きたくねーものは行きたくねーんだもん」

「ああ……」

事情を知ってるクラージュが、私に頷いて見せてくれた。

「そう言うことなら仕方がないでしょう。花奈さん、ここから絶対に出ないとお約束いただけますね？」

「もち」

トイレ（つばい）ものもこのテントの中に用意してもらってあるし、おやつと飲み物もへーちよから貰ってる。PSPとDSの充電も万全、気が向いた時用の魔導書も持ち込んで、三日は余裕で籠城出来る。私は安く請け合った。

「おい、クラージュ……」

葉介はものすごく不満そうだけど、クラージュは肩をすくめる。

「花奈さんの首に縄をつけて引きずって行くわけにもいかないでしょう？ 本人の意志を尊重しましょう」

葉介は、私がクラージュのことを苦手に思ってるって知ってるから、クラージュに促されたら私も動くって思ってたんだろう。残念、私の中でのクラージュの株は中の上くらいに上がっている。昨日のこと嘘もガンガンつくけど、わりと気遣いの細やかな人だって分

かったのだ。クラージュが無理強いしないってこともちゃんと知っている。

私のふぶん、って顔を葉介は忌々しげに見下ろす。が、次の瞬間には私の首がギリギリと葉介に力いっぱい絞め上げられる。とうとう実力行使に出やがった！

「ちょ、葉介、ギブギブギブっ」

「…誰か来てもぜったい中に入れちゃだめだからな!? 居留守使えよ!？」

「……………」

葉介がかけてきたのはプロレス技じゃなくて抱擁だった。びっくりだ。

さすがの私もおちよくりすぎたことをちよつと反省して、葉介の腕をとんとん撫でてやった。お姉さんにはこのくらいの懐の確かさが必要なのだ。

横たわったまま葉介に絞められて顔が赤黒くなっている私の、そのかたわらにクラージュはひざまずいて視線を合わせる。

「食事は、主計兵長に運んでもらえるよう頼んでおきますから」

「んぎゅ」

私が頷くのも苦労しているのに気づくと、ナルドが優しく葉介の腕をほどいてくれる。気をつくいいい娘だ。ほどいた手を自分の首に回させて、さあどうぞ絞めてくださいって顔さえしなければ。ちよつとほんとにナルドのことどうにかしたいんだけど。

「本当は、主計兵長のところに直接かくまってもらえればそれが一番安心なんですけど、僕もちよつと目をつけてる人がいて……………」

「目をつけてる人？」

私は自由になった首を傾げた。スパイが誰なのか、目星がついてるんだろつか。クラージュはしかし、名前を出すことはしない。いつもの微笑を浮かべ、私の赤くなってるほっぺたを撫でる。

「絶対にここから出ないとお約束くださいね」

「分かった」

「本当のことを言うと、とても名残惜しい。ほんの少しだって目を離したくない。でも、あなたの美しい瞳が涙で潤むところばかり見ている気がするから、僕はここにあなたを置いていくのです。冬の花に囲いするようにね」

ここまで念を押されちゃしょうがない。私は頷いた。私だって命は惜しいし、葉介もナルドも、みんないなくなるとなったら、さすがにちよつと心細い。

「早く帰ってきてね」

私が言うと、三人は皆一斉に頷いた。

The 3rd Attack!! 7 (後書き)

タチコマ：2002年から日本テレビ系列で放送されていた『攻殻機動隊 STAND ALONE COMPLEX』に登場する、人工知能を備えた戦車です。見た目はクモに似ています。

ドラクエ：1986年よりスクウェアエニックスから発売されている、人気RPGシリーズです。魔法使いが金属製品を装備出来ないという設定は、他のRPGシリーズにも多く見られます。初出は見つかりませんでした。すみません。

無事、葉介たちを送り出して後、私はこころゆくまでタチコマを強そうにカスタマイズし続けた。タチコマを好きな人が見たら怒られそうなくらい、原型をとどめなくなってもひたすら全力で描き込んだ。暇だったからである。

さらにはDSで脳トレし、アイルルーを連れて採掘に勤しみ、魔法の練習をし、おやつをちよっとつまみ、ヨガのポーズをいくつかとった。とにかく暇だった。

「……………」

思ってたよりも早く暇になっちゃって、私は途方に暮れた。さすがにお昼寝する気にはなれない。葉介たちは今戦場にいるのだ。

仕方ないから、私はWii-Fitで練習したのを思い出しながら肩立ちのポーズをとって遊ぶことにした。肩立ちのポーズというのは、Wii-Fitの中でも一、二を争うぐらい過激なヨガのポーズだ。

まずベッドの上に仰向けに寝転がる。で、心の準備が済んだら、手でベッドに踏ん張りながら足を勢いよく跳ね上げ、頭の上までもっていく。つまり身体で直角三角形を作るわけだ。頭と首が底辺、背中とお尻が高さ、斜めの部分が足。つま先がまくらに当たったら、腕を『気をつけ』する時みたいにまっすぐにし、両手の平を組み合わせてる。そしたら、踵で枕を踏みながら、太腿がまっすぐになるように踏ん張る。ここでしばらく休憩だ。

この時点で既にもう相当アグレッシブなことになってるわけだけど、まだ完成じゃない。踏ん切りがいたら、組んでいた両手の平を解いて、背中を支える。で、三角になってる身体をお尻からぐいと、天井に向けてまっすぐにする。これが肩立ちのポーズが完成だ。形としては、途中でくじけちゃった逆立ち、っていうのが近い

だろうか。戻るときは、上の順序の反対で戻らなくちゃいけない。

無理な体勢をとってるわけだから当然だけど、苦しい。実はこれ、けっこう危ないポーズだ。うかつにやると頭の血管とか首の骨とかがやばいらしい。私も出来るだけ息を止めないように気をつけながら、深呼吸を繰り返す。

「……………」
しかし、あのクライジユがくれたぶにぶにしてるやつ、けっこういける感じだ。こんな風になりに暴れてもびくともしないらしい。もしかしたら、むしろ日本でいつも使ってるのより安心できる設計になってるのかもしれない。見た目のグロさにさえ目をつぶれば。今日みたいに誘われた時、次は断らないで葉介たちと行こうかな。

そろそろ戻ろうかどうかどうしようか、逆立ちしたまま悩んでいると、ふとテントの外から声がする。

「花奈さん、アジュです。失礼します」

「あ！ ちよっ、待っ…」

制止する暇もなかった。外から声をかけるのと同時に、アジュがテントの幕を跳ね上げて姿を現す。アジュの手には、ほこりよけの布巾をかけたバスケットがあった。

「……………」

肩立ちのポーズをとったまま何となく動けない私と、テントの入り口のところで立ちすくむアジュはしばし見つめあった。砂埃がちよつと眼に入る。

正直反応に困っていると、やがてアジュは軽く視線を逸らし、静かに呟く。

「……………」女性の部屋には入り慣れていませんから、入る時は緊張する

のですが……」

「ですが？」

「ここはそうでもないです」

「帰れ！」

突然入って来といて、なんて言いざまだ。憤懣やるかたない私をよそに、アジュはにこにこしている。

「そんなに暇なんですか？」

「暇だよ。枝毛でも探す以外にもうすることがないよ」

もう人が来ちゃったからにはヨガもやれない。邪魔だ、とさりげなく嫌みを言つたつもりだけど、アジュは私の冷たい視線もものともせず、何か小さいものをポケットから取り出す。

「じゃあこれをお貸ししましょう」

見せられたのはちっちゃなハサミだった。しかし、アジュが裁縫道具を持ち歩くようなマメなタイプにはどうしても見えない。私はおそろおそろ聞いた。

「……これ、もしかして枝毛専用」

「ええ。ここではなかなか入浴できませんから、私もけっこう苦労してまして」

私はアジュの顔をじーっと見つめた。正確にはアジュの頭を。アジュは相変わらず、ハリポタのクイレル先生並にがちがちにターバンを巻いている。私は思わず呟いた。

「……アジュってハゲじゃなかったのか……」

「前から思っていましたけど、花奈さんってけっこうひどいですよね」
「………そっぴやあんたほんとに何しに来たの？」

アジュがごにゃごにゃ言っただけ、私は聞かなかったことにして、足をおろして起きあがった。アジュにはストレートに聞かないと、あつちのペースに巻き込まれっぱなしになる。アジュもさほど気にしてないみたいで、手に持ってたバスケットを軽く持ち上げしてみせる。

「これ主計兵長からです。塩肉とアボカドのサンドイッチですって」
「サンドイッチ!!」

アジユへのイライラは、手みやげのおかげで一気に消えた。私はアジユに飛びついて、バスケットを奪った。

「葉介さんの好物なんですよね?」

「らしいね! わー聞くだけでよだれ出るわ!!」

塩肉とアボカドのサンドイッチといえば、主計兵長が発掘したらしい葉介の好物だ。チャーハンを作りに行った時にへーちよからちらつと聞いたのを、私は思いだした。

「アジユも食べてく!? 食べてくでしょ!!」

「良いんですか?」

「良いよ! 一人で食べるにはどう見ても多いし。これ」

一抱え以上もあるバスケットには、ジブリ映画に出てきそうなくらい大きなサンドイッチが九つも入っている。もしかしなくても葉介が帰ってきた時に一緒に食べなさいって意味の量なんだろう。葉介とナルドと私で三つずつ。お皿も三枚入っている。

「私とアジユで一個ずつ食べて、後は残しとこう」

私はアジユにサンドイッチを一つ乗せたお皿を渡し、椅子を勧めた。私はベッドに座って食べよう。

「狭いだろうけど、適当にどかして」

机は魔導書の山と紙の束、さつき描いたタチコマの絵やルビーの文鎮、PSPの充電器や放り出してある髪ゴムなんかでごっちゃんこちゃだ。ちよつとスペースを空けないと食事はできない。

アジユには自分でスペースを空けてもらうことにして、お皿に自分の分のサンドイッチを取り分けていると、ふとアジユが困ったような声で問いかけてくる。

「……………花奈さん…これは?」

「どれ?」

私はアジユの肩越しにのぞき込んだ。アジユの視線の先には、ル

ビーの原石と一緒に置かれてることです。神々しいオーラすらまとっている私のタチコマがいる。私は胸を張った。

「それ、タチコマっていうの。いいでしょそれ」

「……………いえ、このぜんぜん強くなさそうな最強生物のことは心の底からどうでもいいんですけど」

「生物じゃなくて多脚戦車だよ」

「あ、そういう細かい設定はもつとどうでもいいです」

全然細かくないのに。私は軽くむっとしたけど、ここにこだわってるといつまでも話が進まない。

「もしかして、そのルビーのこと？」

「他に何かあるって言うんですか？」

「ですよー」

アジュが言っているのは、私がこつちに来てすぐの時、葉介が『紅玉鉱脈』だって説明された時、その証明のために渡されたルビーの原石だ。ゴルフボールぐらいのサイズがあるから、文鎮に使っている。完全に持ち腐れてるけど。

アジュは眉をひそめ、私の顔をうかがうようにしながら聞く。

「こんなに大きなルビーは初めて見ました。これは花奈さんのものなのですか？」

「そうだよ。ほしい？」

「いえ、別に」

アジュは答えた。にべもない言い方だ。確かにちよつと大きすぎて使いどころがないけど。うかつに使うと一体どこの王様だよ、っていう惨状になるだろう。

「彼女がいるんでしょう？ プレゼントしたら喜ぶんじゃない？」

正直言つてこのルビー、私も持て余している。原石だからアクセサリーにはならないし、なにより大きすぎる。葉介に返しても、多分葉介だって困るだろう。クラージュに渡すのもなんとなく癪だ。

アジュの彼女が使ってくれるならこのルビーも喜ぶだろうと思っ

て言ったけど、アジユはとりつくしまもない。

「彼女の髪と目は、淡い灰色と紫色なんです。濃い赤は似合いません。黒髪の花奈さんの方が、まだ使いこなせると思いますよ」

「へー」

そうか、彼女に赤が似合わないならどうしようもないな。

私はサンドイッチに一口かぶりついた。そして世間話のついでとして、こう聞く。

「アジユの彼女って、名前なんて言うの？　かわいい？」

サンドイッチは思っていたとおり、とてもおいしい。脂身の少ない部分を使った塩漬けのお肉のしょっぱさと、アボカドのとろっとした食感がなんとも言えない。

そうして、塩肉とアボカドのサンドイッチをたっぶり味わいながら、私はアジユの返事を待った。

「……」

もう一口かぶりついて、待った。

「……」

ちよつと固い塩肉とパンをもつきゅもつきゅ食いちぎりながら、かなり気長に待ったつもりだ。

しかし、アジユの返事はなかった。私が口の中のサンドイッチを片づけて、机につくアジユの顔をベッドの縁から見上げたところでは、ようやく、アジユはにこやかにこう答えた。

「……言えないんです」

「……は？」

「すみません、言えないんです。とても可愛い人なので紹介したいのはやまやまなんです。彼女今ちよつとさらわれてしまっていて、どこにいるのか分からなくなってるものですから。私の知らないうちに彼女の身が危険にさらされると困りますので」

「……は？」

こういう時、 は？ 以外になんかリアクションとれる人がいるだろうか。いやいな。私も無難に、は？ って言つといた。

しかし、ボケてるんだかマジなんだか分かんない相手を、そのまま放置しとくわけにもいかない。ボケてるんならそれがどんなにつまなくても突っ込んであげるのが人付き合いつてものだし、仮にマジで言ってるんだとしたらへーちょに報告しなくちゃいけない。砂糖と塩、間違えて味付けしそうなマジのボケがいるよって。

私は順序立ててもう一度アジユに聞いてみた。

「髪の色と目の色が」

「灰色と紫」

「すっげ可愛い」

「すっげ可愛いです」

「名前言えない」

「言えないですねえ」

「会えない」

「会えないですねえ」

「何故かというと、さらわれちゃってるから」

「さらわれちゃってますねえ」

「どこにいるか分かんない」

「分かんないですねえ」

「困った」

「とっつても困ってます」

「……………まさかとは思いますが、この彼女とは、あなたの想像上の存在にすぎないのではないのでしょうか……………」

「前から思ってたんですけど、花奈さんってけっこうひどいですよね。やばい、判断がつかない。苦悩する私をアジユは苦笑いして見下ろす。彼はいつの間にか食べ終わっていたサンドイッチのくずを指からはらい、食後の紅茶を飲み始めた。

「信じてもらえなくてもいいんです。とにかく花奈さんも、それら

しい女性を見つけたら伝えてください。『アジュが探している』と」

と、言われても、私は葉介のお守りをするためにここにいるわけだし、葉介はこの駐屯地から離れる素振りは今のところ微塵も見せていない。仮にアジュの彼女が二次元の住人でなかったとしても、会う可能性は限りなく低いのだけだ。

「それだけで良いの？」

アジュはにっこりした。

「ええ、それだけで十分です」

…なんか、やっぱり嘘くさいな！

私は半眼になってアジュの顔をにらむ。アジュはにこにこ笑うだけだ。悪いやつじゃなさそうだけどつかみ所が無いというか、うさぐさいというか……。

まだ何か言ってやるうかどうしようか迷っていたその時ふと、テナントの外から、男達のざわめきと、鎧がこすれ合う金属音が風に乗って遠く聞こえてきた。第三エリア側から聞こえてくるようだ。

「……あ、みんな帰ってきたみたい」

「……ずいぶん早いですね」

アジュも同じ音が聞こえてきたらしい。アジュは軽く眉をひそめて呟いた。確かに、戦争やって相手をボコボコにして帰ってきたにしているぶん早い気がする。それにあのざわざわ、戦勝祝いでテンション上がってる、って感じじゃない。

嫌な予感がして、私は軽く身震いした。

The 3rd Attack!! 8 (後書き)

ちょっと半端ですが区切ります。ここらの伏線に関しては一カ月以内くらいでまとめて回収したいと思いますので今のところはさらっと読み流していただければ嬉しいです。

Wii-Fit……2007年、任天堂から発売されたゲームソフトです。バージョンアップ版『Wii-Fit Plus』と合わせると、国内で約571万本を売り上げた人気ソフトです。

肩立ちのポーズ……本来、生理中にはこのポーズを取るのを避け方がよいとのこと。花奈はWii-Fitでやったただけなので、このことは知りません。

クイレル先生……日本では1997年に刊行が開始された、J・Kローリング氏の『ハリーポッター』シリーズに登場する教師です。常にターバンを巻き、変な臭いをさせています。

「どうしたんだろう……様子がおかしいよね？」

ざわざわしているのは、第二、第一エリアの方だけだ。まるで、
またすぐ出かけるみたいに。

私はこっそりテントから顔を出す。やっぱり、この第三エリアに
はいつになく人気が少ない。

「どうなってるのかな、外……」

「見てきますね」

アジュは軽く請け負って、私の頭越しにひょっこりテントの外を
のぞき込む。

「あ！ だめ、アジュストップ！！」

横をすり抜けて行こうとしたアジュを、私はとっさに肘うちして
止めた。運悪く鳩尾にヒットしちゃったらしいアジュはくふ、と吸
い損ねたらしい息を吐き出しながらしばらくそのまま動かない。

「……………こういう時は意地でも痛いって言いたくないもんですよ
ね」

「しっ！ 誰か来た！！」

別に声を潜ませる必要は、よく考えたら無かったけど、このとき
はなんとなく、そうしなくちゃいけない気がした。

遠くの方から騎馬がやってくるのが見えてくる。鞍にはちゃんと
胸を張り、すつくと背をのばしたかっこうの騎手の姿も見える。

ゴルベージみたいな鎧をつけた男の人だ。よく分かんないけど、
偉そうだから多分ジュノだろう。周りを騎馬隊に囲まれ、ゆったり
とこちらへ進んでくるように見える。騎馬隊の一人には、葉介も混
じっている。

しばらくテントから顔を出してそれを眺めていたけど、ふと私は
あることに気づいた。

「……………！！」
私はスニーカーを履くのももどかしく、かかとを踏んづけて馬へ駆け寄っていく。

「…！？ 花奈さん！ 待って！ 外に出ては…」
あわててアジユも後を追ってくる気配がある。私は待たなかった。

靴がすっぱ抜けそうになりながらも騎馬の群れへ全速力で走る。
あれは、あの鎧の男の人は、ジユノだ。なにか様子がおかしい。

「ジユノ！！」
私は馬の間をすり抜けるようにして駆け寄っていく。周りを取り囲んでいたのは葉介たちだ。ナルドやミュゼ、ベルがいる。皆の表情は一樣に固い。ナルドだけはいつも通りだったけど。ジユノは軽く俯きがちにしている、私が走り寄りながら名前を呼んだとき、ようやく私がいることに気づいたようだった。

「…………… お前の謹慎はまだ解いていないぞ」
馬を並足で進ませ続けるジユノは吐息混じりに私を叱責した。しかし、いつものラスボスオーラはまるでない。相当疲労が蓄積しているみたいだ。

「ジユノ……………！！」
私はジユノの名前を呼んだきり、絶句した。

ジユノの鎧の腹部は大きく抉れ、下の胴衣は血でどろどろだった。どう考えても返り血じゃない。ジユノの血だ。ジユノの顔は青ざめて、今にもぶっ倒れそうに見える。

「へ、へーちよ……………！！ へーちよ呼ばなきゃ！ ちょっと…」
アジユに、『ちよっとへーちよとお医者さん呼んできて！』って頼もうと私は振り返ったけど、アジユはもういない。代わりに既にもう衛生兵をたくさんつれたへーちよと、黒い髪を刈り込んでいる知らない誰かが…多分軍医さんだろうけど、険しい顔をして駆けてくるのが見える。

「……大袈裟な」

ジュノもそれに気づいたらしい。彼は軽く舌打ちして、また視線を前に戻す。そんな、ツバつけとけば治るレベルの傷じゃ絶対ないのに。

「鎧を交換しに戻っただけだ。すぐにまた発つ。ベル、供を」
「わかった」

馬にまたがったままのベルがそれぞれ返事する。何のためらいもない、きつぱりといさぎよい言葉だ。

「駄目だよ！　こんなひどい怪我してるのに！　一体なにがあったの！？」

私は悲鳴を上げたけど、誰も教えてくれなかった。ベルはいつものぼんやりした眼のまま、刃こぼれした剣や折れたナイフなんかを無造作にぼろぼろ落として捨てている。後を追っかけてる主計兵たちが道々、ヘンゼルとグレーテルが落としたパンみたいになつてるそれを拾っては、新しい剣とナイフをベルに渡してあげていた。ベルの真つ赤に濡れた手に水をかけて、汚れを流している人もいる。

ジュノが自分の寝泊まりに使っているテント……つまり、第三エリアの方のジュノのテントが近づいてきた頃になると、馬が二頭、厩舎から引き出されてくるのも見えた。ミュゼはその姿を確認すると自分一人だけ馬の首にもたれかかって動かなくなる。ほんの少しでも身体を休めようとしているみたいだった。ミュゼたちが乗ってきた馬はみんな例外なく泡を吹いていて、全身にぬるぬるする汗をかいている。ミュゼも馬も、どう見てももう限界って姿だ。

心配な人たちが多すぎて、誰を重点的に心配したらいいのか分からない。ベルやミュゼやジュノの周りをおろおろぐるぐる回ってる以外にできることがない私の様子を見かねたのか、とうとうジュノは吐息混じりにこう言った。

「サンタリアの軍を押し戻さねばならない」

「……………!?!」

教えてくれたは良いけど、まるで状況が分からない。押し戻すってことは、負けたってことだろうか。こっちまで来るんだろうか。言葉つ足らずのジユノの代わりに、ミュゼがほんの少しだけ頭をあげて私に教えてくれた。ミュゼに怪我はなさそうだ。ただ、気の毒なくらい疲れている。

「今……副司令が一人で残って止めてるから。ここまで来ることはないよ。でも俺たちも……行かないと」

「一人っ!?!」

なんかよく分かんないけど一人でなんかやってるってすごいな! で、副司令って誰だっけ。

私が首を傾げてる間にジユノは自分のテントに入って行ってしまつて、姿は見えなくなる。へーちよと軍医さんもその後を追つたけど、私には入室許可が出ない。私が追っかけようとする前に、軍医さんがぴしゃつとテントの出入り口を閉じてしまう。

「ちよつとジユノ、入れてよ! 大丈夫なの? 何があつたのか教えてよ!?!」

「即刻この血を止める。手段は問わん」

ジユノは私のことを完全に無視することに決めたみたいだった。テントの中にいる人と何か話しているのは、多少くぐもっているものの聞こえてくる。

「馬鹿言つな。血はドロドロ、肋骨ガタガタ、内蔵のお寝相もひどすぎる。こっちに刺さってるカケラは鎧だろ? 俺は大工じゃないぜ」

「ならば即刻大工を呼べ」

「待て待て待てよ、やらんとは言ってるねーだろ。相変わらず冗談通じねーな!。…おい、ペンチよこせペンチ」

「何それギャグで言ってるの!?! そんなひどい怪我なの!?!」

最後の悲鳴は私のだ。大工にペンチつて、なんかもいろいろひ

どすぎる。

「ちよつとここ開けて良い!? 開けるよ!?!」

私は完全に蚊帳の外だ。というかテントの外だ。私はとうとう焦れて天幕に手をかけたけど、知らない人の声が、ジユノの代わりに返事した。

「ジユノは今治療中だつて分かるだろ? 覗くつもりか、この痴女が」

……。私は一瞬、状況も忘れてむっとした。幕からは一応手を離し、テントの外から食つてかかろうとした私の肩を誰かが引っぱる。

「おい、やめろよ花奈」

とつさに振り払おうと思ったけど、やめた。引っぱったのが馬に乗ったままの葉介だったからだ。葉介はジユノよりは軽そうだけど、やっぱり頑丈そうな鎧をつけている。

私は葉介の身体を上から下まで視線でなで回すようにして確認した。血の跡はない。あばらも内臓も骨盤も正位置だ。

「葉介!!! 葉介は無事なのね!」

「俺はね」

葉介の返事は短い。葉介はひらっと馬から下りると、まずナルドが同じように下馬するのに手を貸してあげ、続いてミュゼを馬から引きずりおろす。ミュゼは着地も失敗して、地面にたたきつけられた鎧ががしゃがしゃと耳障りな音を立てた。

ベルは馬首を返して厩舎のほうへ向けた後、馬を新しいものに乗り換える。そして冷たくも聞こえる口調でミュゼを見下ろし、こう言った。

「花奈、おれたちのことはもういい。葉介についてやって。ミュゼ、お前はのこれ。もうお前はたたかえない」

「……………」
ミュゼは悔しそうに唇をかんだけど、すぐにふつと息を吐き出し

た。

「悪い。もう奥歯に力が入らない」

「わかってる」

ベルはうなずく。そして、いつも通りの無造作な様子で呟いた。

「……それじゃあ、準備するから」

たったそれだけ言うのとベルは馬を駆け出させた。行く先はよく分からない。第一エリアのほうらしいけど。

思わずベルの後ろを追いかけそうになった私を、さっきと同じように葉介が引き留める。

「花奈。あんまり動き回らない方が良い。お前も俺も、謹慎ってことになってるんだから」

大工でペンチでミュゼがひんし状態なのに！ 謹慎なんて言うてる場合じゃないのに！ 私は葉介の手を振り払って、腰に手を当てる。

「もうっ、説明してくんなきゃ何っつにも分かんないじゃん！！」

「一体何があったの!?!」

「……」

葉介は一瞬私の顔色をうかがうような表情を見せた後、すぐにむっつりと口を引き結んだ。こういう顔をした葉介は、ここでも動かない。

「……死体だ」

葉介の代わりに返事をしてくれたのは、息も絶え絶えにぐったりしているミュゼだ。

「死体？」

「あいつら、死人の軍でシュツルクを埋め尽くした」

建前上の謹慎だろうとなんだだろうと、謹慎は謹慎だ。葉介のことを守ってくれるベルもジユノもクラージュも手が放せないし、ミュ

ぜも戦力外なものだから、私たちは早々にテントに引きこもった。引きこもり先は荷物の少ない私のテントだ。私と葉介とナルド、それにミュゼの四人が入っても窮屈じゃないテントは私のところしかない。

葉介のテントから持ってきた冷えたレモン水を、私は全員に配った後、私はずばっと聞いた。

「で、そういうのこの世界的にはアリなわけ？ ゾンビとか死人軍とか、黄泉返りとか」

葉介は机の上に腰掛けていて、ナルドはそばにお行儀よく膝をそろえて座っている。ミュゼは私のベッドを占領している。私以外の全員、武装は解いていない。そのせいか密室にいるとちよつと……いやかなり汗臭い。特にミュゼはベッドを使うなら鎧だけでも脱いでほしいけど。私はミュゼをじろつと睨みながら、ベッドの隅に腰掛けた。

「花奈ちゃんがお聞きになりたいのは、死者が甦るのか、ということでしょうか？」

ナルドはちらちらと葉介を見上げながら、まるで本でも読み上げるように答えた。

「いわゆる『まかるかえし』の術は有史以来盛んに研究されていますが、どの理論、どの説もすぐに反証されてしまいます。実用化なんて、とても」

「まかるかえし……」

まかるかえし。どっかで聞いたんだけど、よく思い出せない。あー、なんだったかな。時代物のゲームだった気がするんだけど。もやもやする。後で誰かに聞かなくちゃ。

話の腰を折っちゃいけないから、私はとりあえず適当にうんうんとうなずいていたけど、私の知ったかぶりに気づいたらしい葉介がすっと口を挟んだ。

「死反と書いてまかるかえし。つまり死者はよみがえらない。そうだな、ナルド？」

「その通りです、葉介」

ナルドはほほえんだ。この場に全く似つかわしくない笑顔だ。

「しかし死反に似た魔術は禁術扱いされてはいるものの、多く開発されています。

たとえば人一人を生き返ったように見せかけることを目的とするなら、電磁気力魔法の領域です。人体は突き詰めれば、電気信号の連鎖で動くものですから。死後もない身体に丁寧に魔法を重ねがけし続けられれば、あたかも生きているかのように動かすことは可能です。巧妙な術士の手にかかれれば、故人をよく知る人が行うチューリングテストをも突破するでしょう。そのような繊細な点に関しては、電磁気力魔法は重力魔法からは一歩も二歩も進んでいます。

しかしあのような『人の群』を動かすときに限定すれば、電磁気力魔法は重力魔法の足下にも及びません。重力魔法とは、ものごとの関係性や根本的構造、システムを支配する魔法です。死体ひとつひとつに個別に指令を出すよりも、一塊の軍団として動かすことを何よりも得手としています。死体を兵士とするならば、サンテリアほど長けた国は他にありません」

「そうか、重力魔法……それであんな、画一的なキモい動きをしてたんだな」

ミュゼがなるほど、とつぶやいた。葉介もうんうん頷いているけど、私は納得できない。ナルドの説明にはところどころよく分からない単語が混じってたからだ。

分かるところをつなぎ合わせてみると、つまりさつきジュノたちが戦ってきた敵は重力魔法で操られた死体で、それに手を焼いた結果、ジュノは大けがを負い、クラージュはまだ帰って来てない、ということになる。

……………それって、ちょっと間抜けじゃないか？

だって、私や葉介やミュゼだとか、魔法が得意でない人たちは別とするとしても、ジユノやクラージュなんかなら、サンタリアが重力魔法で「ものごとの関係性」を操る国だっことがわかってたはずだ。それなら、今日みたいに死体を使って戦争を仕掛けてくることも予想できたはずじゃないだろうか。

私がそう聞くと、今までほとんど口をきかなかった葉介がようやく口を開いた。

「こうなってみたらそういうことが言えるんだよ。考えてみるよ、今日のサンタリアを。どう考えても悪役のやり口じゃねーか。死体を辱めるんだぞ。倫理的に認められるわけがない。そういう禁忌をあえて犯すなんて、想像の斜め上ってやつだよ」

葉介は心底からうんざりしてるって口調で更に続ける。

「別に条約結んでたわけじゃねーけど、暗黙の了解つつーものがあるだろうが。ゲルダガンドはもとより他国からの大バッシングは間違いないし、そもそもゲルダガンドとサンタリアは和平交渉が水面下で進められてたんだ。今、世界中を敵に回して禁忌を犯す理由がわからん」

……………」

「確かにさっきはちょっと押されたけど、所詮はしょぼいAIの敵キャラみたいなもんだぞ。無双のモブ敵の方がまだ機敏だ」

……………」

「まあそれは大げさだとしても、ある程度やりあえば動きはすぐに読める。戦況をひっくり返すほどの力は、あの屍人兵には無いね」

……………」
私はしばらく黙って考えた。

確かに私がサンタリアだったら、生理的にゾンビなんて使いたいわけがないし、他の国の目も気になる。ていうかそもそも強くて勝てそうもないってわかってる敵と和平が結べるのに、わざわざかみ

つく必要もない。私は肩をすくめた。

「……なるほど、そりゃわかんないわ」

「お前頭の回転遅いな」

ミュゼはいつそ感心したようにつぶやいた。相変わらず私のベッドにぶつ倒れたままだ。百本単位で髪の毛を抜いてやりたくなる態度である。葉介は肩をすくめた。

「とにかく、ジュノとクラージュたちが帰ってくるのを待つしかない。今の俺たちにできることは、せいぜい足手まといにならない程度のことだ」

「葉介は私が守ります。これから先、一体何が起ころうとも」

ナルドはにこやかに言う。けど、その台詞が私を戦慄させた。

そうだ。ここにはスパイがいる。いったいいつ、何かをかぎつけてここに踏み込んで来ないとも限らないのだ。

The 3rd Attack!! 9 (後書き)

ゴルベージ：ファイナルファンタジー4の敵キャラです。ゴルベージは『毒虫』を意味する言葉らしく、それっぽい感じの鎧をつけています。

ひんし：ポケモンで、HPが0になり戦えなくなったポケモンのステータスがこう表示されます。

チューリングテスト：アラン・チューリングによって考案された『ある機械が知的であるか』を判定するテストで、相手が人間なのか機械なのか分からない状況を作り出した上で、相手に質問をぶつけ、その質問の受け答えによって相手が人間か、機械なのかを推理するというものです。このチューリングテストに合格した機械は十分に知的であるといえます。

今回ナルドが言っているのは、目の前の相手が死体なのか、それとも生きているのかを推理させた場合、見分けがつかないだろうという事です。

その日、結局クラージュとジユノ、そしてベルは夜遅くまで帰らなかった。つまり、いかにおバカ状態の屍人兵といえど、その大半を『使いものにならない』状態にするにはそれだけの時間を要したってわけだ。その数、ベルに聞いたところによれば（ベルが正確にものを数えることができるなら）およそ一万。

正規の兵隊も足したら、概算でも一万二千対六千……これで勝って言われたら、私だったら泣いてるかもしれない。しかしジユノたちはやり遂げた。……らしい。私は実際の戦況をまるで知らない。葉介もきつとそうだろう。

ジユノの怪我、ひどくないと良いんだけど。私はあの日以来、ジユノに会っていない。

あれから一週間。あの屍人兵との戦闘以降、一週間かけてこの黒曜軍の兵員は大幅に補充された。私がこっちに来てすぐの頃は三千、あの惨敗の直前には六千、現在は更に三千増やして、九千人。増強が済んだらサングリアの残党をまるごと一掃することに決まってるらしい。

気心の知れてない人が増えて危ないし、そもそもスパイもまだ見つかってない。ってことで私と葉介とナルドの謹慎処分は解かれなのまままだ。この一週間というもの、ずーっと、私たちはテントの中に缶詰である。

缶詰はどうしようもないけどすし詰めにされるのだけはまっぴらだと試しに言ったら、クラージュの号令一下、テントが更にもう一つ建て増しされた。

私たちのテントは、ナルド、葉介、そして私と三つ仲良く並んでいるのだけど、真ん中に位置する葉介のテントの真裏に新しいテントは建てられている。つまり、丁字型を成している。更に四つのテントは接続され、外に出ることなしに互いのテントを行き来出来るようにも改良された。わあ便利。外に出られたらもつと便利なのに。矛盾である。

そういうわけなので、四つ目のテントはもつぱらベルと私と葉介とが、合気道をやったり剣道やったり、組み手をやったりする運動室として使った。

最初は、葉介とナルドの部屋から荷物を移してここを倉庫にでもしようかと思っただけで、やっぱり外出が禁じられている以上、バタバタ暴れられるスペースが無いとしんどいってことで、謹慎が解けるまではこの部屋には何もおかないことに決まったのだ。

そういう風に運動できる工夫をしないと、ほんつとくに辛かったいや、工夫しても辛い。運動不足で足はむくむわ何時間眠ってもねむたいままだわ、本当につらい。いたれりつくせりの監禁生活だけど、つらい。

「もう我慢できないぞー!!!」

「そこを何とか、我慢してください」

八日目の朝、とうとうキレた私が会うなり詰め寄ると、クラージュはにっこり笑った。

「花奈さんたちの身の安全のためですよ」

しかし私はクラージュをうるんな目で見つめた。一見私たちを気遣ってるような台詞だけど、クラージュはこの前見たのと同じ、きんきらきんの魔具をたっぷり身につけていた。つまりクラージュはまた戦争やる気満々で、私たちを置き去りにする気も満々で、すなわち抜け駆けする気満々ってことだ。

「俺たちも出て良いんだろ？」

怒りにふるえる私のすぐ隣で、葉介が首を傾げる。

「その格好からするにお前らもう出陣するんだろ？」 「スパイがいる駐屯地に俺たちだけで残せない」 って理屈で、前回俺が出てったんだろ？」

そつだそつだ。正直もうここに閉じこめられ続けるのは私のメンタリテイ的に限界だ。じつとりした私たち姉弟の視線がクラージュに突き刺さる。

「そこはジユノとも意見の分かれたところで」

私たちの二人の表情がすごく似てたからか、面白そうな顔をしたあと、クラージュはため息をついた。ちよつと芝居がかった感じだ。

「ジユノは最初、お二人を連れていくと決めていたようでした。ナルドと僕、更にジユノ自身が、葉介と花奈さんのお二人の護衛に当たると言って聞かなくて。

しかしジユノの怪我は重篤です。本来なら動けるような状態ではありません。彼が今立って歩いていることも驚嘆に値することなのに、人の護衛など出来ようはずもない。むしろ彼自身が護衛を必要としている立場なのです」

「うーん」

私は曖昧な相づちを打った。そういうことなら、仕方ないかもしれない。なにしろジユノのお荷物になったら、この世界から放り出されるかもしれないからだ。

「俺の外出が禁止のままってことは、ジユノの護衛はベルで決まっただんだな？」

「ええ。ミュゼをベルのそばにつけておけば、二人で問題なくジユノの護衛を果たすでしょう」

ミュゼは頭はそこそこらしいけど腕っ節が足りない。ベルはめちやくちや強いらしいけど致命的におつむが足りない。でもこの二人

をくつつけとけばまあまあ一人前に働く、との読みだろう。割れ鍋に綴じ蓋とはこのことだ。ちなみにベルが割れ鍋で、ミュゼが綴じ蓋。

しかしいまいち腑に落ちてない私の顔を見て、クラージュは私と葉介に微笑みかけ、さらに続ける。

「とはいえ、花奈さんのお気持ちも十分理解しているつもりです。そこで、僕とナルドが葉介と花奈さんの護衛を務めます。僕がお話相手を務め、花奈さんの無聊をひとときお慰めすれば、少しは埋め合わせになるでしょうか」

……………。

私は啞然とした。一瞬なにを言われてるのか分かんなかったからだ。……まあいいスルーしよう。

「花奈は無聊が分かんないんだろ？ 暇つぶしにつきあうって言ってるんだよ」

しかし私のぼんやりした表情をめざとく見つけると、葉介はさらっと解説してくれた。そうか、暇つぶしか。なら最初からそう言えばいいのに。

葉介はまだ怪訝そうな顔のまま、話を戻す。

「で、いいのかよそれで。お前一応ここの副司令だろ？ 護衛なんてつまんねー仕事で」

するとクラージュは物憂げに答えて言った。

「副司令って呼ぶの、やめてくださいね。ミュゼの影響ですか？

……まあ、あまりよくありませんが。ジュノを手薄にするか、葉介たちを手薄にするかの二者択一よりはマシです。僕は魔導兵ですから、魔具に力をこめ終わった今は暇なんです。そういうわけです。なんら問題はありません。花奈さんと葉介には悪いと思いますけれど」

「……………」

……理屈はわかったような気がする。でも、なんだかちよつと変な感じた。頭のどこかがもやつとする。どうしてだろう。運動不足がとうとう脳味噌にまで影響を及ぼしているんだろうか。

私は知らず知らずのうちに唇をとがらせていたらしい。私の顔を見つめてクラージュはくすつと笑った。

「とはいえ確かにここが手薄になることも事実です。そこで、花奈さんにも万一に備えて武装していただきます。どうぞ、これを」
言いながら彼が差し出したのは、お盆に乗せられたアクセサリーの山だ。私は、今一瞬機嫌が悪かったのも忘れて、そのお盆の中身に見入った。

クラージュが身につけているのと同じような、金属製のアクセサリー。アクセサリーというかまあ、魔具だろう。お湯を沸かすのすらいまいちうまく行かない私が魔法を使うなら、魔具の助けを借りるしかない。

しかしクラージュが使っている魔具と比べて、私に渡されたのもっとかわいらしいデザインだった。ただの金の板だったりコインだったりじゃなくて、ところどころにルビーがあしらわれている。花みたいな形の変わったカッティングのルビーのおかげで、クラージュがつけてるののようなエジプトの副葬品っぽい重々しさはほとんど無い。

「おおー」

こつこつうのだったらつけてても恥ずかしくないし、何かあっても対抗出来るだろう。

私はクラージュからお礼を言ってそれらを受け取り、鏡の前に行った。この耳につけるらしい魔具、ピアスじゃなくてイヤリングだ。私の耳にピアスホールが空いていないのに、クラージュは気づいていたらしい。まったく、軽く引くくらいの観察眼だ。

ナルドは、私が魔具を装備しやすいようにそばにいてお盆を持つ

ていてくれた。指輪、イヤリング、てんとう虫のブローチ、腕輪にベルト、髪飾り、つけぼくろみたいな謎シルまで、お盆の身を端からどんどんつけていく私の姿を鏡越しに眺めながら、葉介は聞いた。

「クラージュのと比べてルビーが多くないか？」

「いやーじゃんいやーじゃん。葉介とおそろだよ」

三つ子だけあつて葉介も、私と同じところに気がいったらしい。私は機嫌よく返事した。あの文鎮みたいに原石をぼんと渡されても困るけど、ちゃんと使えるルビーならいくらでも歓迎だ。宝石が嫌いな女子なんていません！

「……………」

鏡越しに見える葉介の眉間には、うつすら皺が寄っている。

なんで機嫌悪いの、と聞こうと口を開けた瞬間、クラージュはかぶせるように声を張り上げた。

「…花奈さん、仕上げです」

クラージュは私の背中に歩み寄り、自分の首からチョーカーを一つとって、私の首に巻き付ける。クラージュがいつもつけているやつで、ルビーの目のうさが、体を大きくのばして走っているかわいらしい金のチョーカーだ。

「とてもよくお似合いですよ」

チョーカーの留め金をうなじのところまで止めてくれながら、鏡越しにクラージュが微笑む。私もへらつと笑い返したら、クラージュは一体何を思ったのか、私の髪の毛の先に自分の唇を触れさせる。……いやいや、おいおい。

「……………」

「おいこらー！」

あまりのことに私がぼかんとしてる間に、葉介がなんとなく険しいどころじゃない、ものすごくいやな顔になってクラージュに抗議してくれた。クラージュはにやつと笑った。……いい性格してやがるとはこのことだ。

「ほんの冗談じゃありませんか。……花奈さん、魔具はいかがでしょう?」

クラージュはあからさまに話題を変えてくる。あんまりこの話を引つ張るのはいやだったので、私もそれに乗った。私は正直な感想を口にする。

「全部つけるとちょっと重い」

めっきじゃない、全部本物で出来てるから当たり前だけど、重いとくにイヤリングだ。これ、ずつつけてると耳たぶが伸びるかもしれない。

「……魔具としての相性はどうなの? って話だろ?」

まだむっとした顔の葉介も乗ってくる。でも、どれがどういう魔具なのかすら聞いてないのに相性もくそもない。

軽い言い合いになりかける前に、クラージュが口を挟んだ。

「いえ、デザインがお気に召したかどうかをお聞きしたかったんです」

「……」

二人ともかすつてもいなかった。クラージュは一番気になっていたイヤリングをそつと外してくれる。クラージュの指は妙に冷たくて、触られるとくすぐつたい。

外したイヤリングを私の手に握らせると、クラージュはそつと私から離れた。葉介の冷たい視線をいい加減無視しきれなくなったんだろつ。

「魔具の重みが負担になるようであれば、状況に合わせて数を減らしてくださいませんか、その兎のチョーカーだけは絶対に外さないでくださいね。それは、刃返しを持つ魔具です。鉄製品をほぼ跳ね返します」

「おおすごい」

「ここが地球ならほぼ無敵の性能だ。しかしクラージュはこう付け加える。

「それをつけている間は、PSPやDSを近づけない方が良いです

よ。冷蔵庫程度なら大丈夫でしょうが、精密機械ですとどんな故障
が起こるかわかりません」

「……丁寧にもありがとうございます」

多分いの一番にはずしたくなるのがこの兎のチョーカーだろうな、
と私は思った。

しかし私の考えは読み読みだったらしく、クラージュは私の手を
とってイヤリングごと握りこみ、熱っぽく言う。

「花奈さん。これからしばらく、このチョーカーだけは外さないと
お約束くださいますね。きつと……そうですね、葉介の名にかけて
でも」

「……………」

「なんで俺の名前を勝手に使っただよ」

げっ、と思ったのは葉介も同じだったらしい。さっきからずっ
と渋い顔のまま元に戻れない葉介が抗議する。でも、クラージュは
撤回しなかった。それどころか、どこからともなく似たような銅色
のチョーカーを出してきて葉介に見せる。

「葉介。君も同じものをつけるんですよ。兎は気の毒だと思ったか
ら、蛙にしましたけど」

クラージュの手の中の蛙は、良く言うとても精巧に作られた、
手の込んだものだった。ルビーは入ってないけど、水掻き一つ一つ、
両の目玉からむっちりした後ろ足まで几帳面に彫刻されている。つ
まり、ちよつとグロかった。

「……………俺、パス」

葉介もそう思ったんだろう。葉介はなんだか、笑おうか笑うまい
か悩んでいるって感じの、何ともいえない表情でクラージュの手を
押し返す。しかし、クラージュはひるまない。もう一つ似たような
のを出してきて葉介に見せる。真っ赤なルビーをたっぷり使った、
こぼれるような花のチョーカーだ。

「仕方ありませんね。じゃあ鳳仙花を差し上げます」

「……………蛙にする」

葉介はとうとう屈服してうなだれる。私はちよつと笑った。葉介だって危ないのだ。私だけ刃返しのチョーカーを使ったってまるで意味がない。

今思えばこのとき、クラージユは色々おかしかった。今更悔やんでも遅いけど、まだ他に何か出来ることがあったんじゃないのかなって、思わずにはいられないのだ。

The 3rd Attack!! 10 (後書き)

ハンパですが、切ります

ちよっとのんびりしすぎました 全セクション10章ずつでキリよく終わるのが目標だったんですが

あの後、クラージュは普通に私と葉介とナルドの無聊を慰めてくれた。PSPもDSもiPodも使えなくて不機嫌な私に、なかなか分かりやすく魔法の勉強を教えてくれたし、私の集中力がいよいよ切れてきたと見るや一番奥のテントの床にボードゲームを広げてくれた。

その上クラージュは昼食を食べ終わるなりひどい睡魔に襲われた私たちがゲームを投げても文句一つ言わずにお昼寝させてくれる懐の深ささえ見せた。すごい、寛容さが菩薩級の人だ。

……つきあってもらつといて、悪いとは思っただけだね！ この一週間で、お昼ご飯の後はお昼寝、っていうリズムが出来ちゃってるからね！

私たちが駒を進める時、『葉介、そこで良いんですか？』とか『花奈さん、そこにその駒は置けません』とか、あげくには『ナルド、ルールを分かっていますか？』って何度も確認してたから、私たちの戦略的頭脳がまるで役に立ってないことは分かってたんだろう。クラージュは私たちがここから動くのもおっくうなのを察して、さつさとそれぞれテントから布団を持ってきてくれた。寛容さがオカシ級の人だ。

クラージュは、まるで水揚げされたマグロのようにごろんごろん転がる私たちに布団をかけてくれながら言った。

「少し、お眠りなさい。僕は少しやる必要がありますから。葉介、君の机を借りますよ」

「……おー」

葉介も、私とナルドが食べきれなかった分のサンドイッチも引き受けて満腹なせいで、めっちゃくちや眠そうだ。

「じゃ、おやすみ」

「うん、おやすみ」

「おやすみなさい」

「おやすみなさい、三人とも」

私たちはクライジユがテントを出ていくのも見送ることなく、葉介を真ん中に川の字になってぐっすり寝た。

ところで、とっさの時に大声を出すのには、日頃の練習が必要だ
ってよく言う。特に怖い思いをしている時に大きな声を出すのって、
案外うまくいかないものなんだとか。

私はおとなしい性格じゃないし、日頃から葉介たちと騒ぎあつて
て大声もまあまあ出してる方だから、練習なんかいらないうって思
つてたけど、やっぱり、練習って必要だった。心からそう思う。

そのとき私は何かの拍子で目が覚めた。まだ体は寝足りないって
言ってたけど、カンが働いたとしか言いようがない。

私になんとなくぼーっとテントの壁を眺めていると、唐突にそこ
から銀色のとがったものがつきだしてきたのだ。

「……………!?!」

夢でも見てるのかと思つたら、銀色のとがったものはじよりじよ
りっ、と小さいけれどまがまがしい音と共にテントの壁を切り裂き
始めた。

よくわかんないけど、なんかやばそうだ。

私は慌てて起きあがったけど、寝起き間もないせいで全然動けな
い。私はふらふらしながら隣で寝てる葉介を呼んだ。

「よ、葉介……ねえ、葉介っ」

自分ではあらん限りに声を張り上げたつもりだったけど、お腹にも喉にも力が入ってない。駄目だ、こんなへろへろな声じゃ、隣のテントにすら声が届かないだろう。どうしても声が出ないので、私はまだ起きる気配がない葉介を思い切り揺らした。そりゃあもう、むち打ちか脳震盪でも起こしかねないくらい。

「葉介、葉介っ」

しかし私の手は、うなり声をあげるばかりの葉介を起こしきれる前に弾き飛ばされた。葉介の手じゃない、もっと細くて柔らかい手だ。具体的に言っと、ナルドの手。

ナルドは今まで寝ていたとは思えないほど目をぱっちり開けて、横たわる葉介におおいかぶさってかばうような格好をとっていたけど、はらいのけたのが私の手だったと気づくや否や、ぱっと顔を赤らめた。

「あっ、花奈ちゃんでしたか。すみません、寝ぼけてしまいました」ナルドってすごい。熟睡してても葉介に何かあれば跳び起きるなんて。超能力でも働いてるとしか思えない。

気まずそうにしているナルドの可憐な仕草はさておき、私はおもいっきりテントの穴を指さした。刃は順調に穴を広げていて、今はもう三十センチくらいになっている。

ナルドはそれを見てとるや、寝ぼけてたとは思えない、猫のような素早い動きで穴の方へ向き直り、ぐっすり寝たままの葉介の盾になる。

じわじわと広がり続ける壁の穴がなんだか怖くて、とりあえず私は今までかけてた布団で、穴をとりあえずふたした。

………なんの解決にもなっていない。私はひそひそナルドに言った。「ねえナルド、どうしよう!？」ていうか、なんで起きないんだろ、

葉介！？」

まるで睡眠薬でも盛られたみたいだ。いや、実際盛られてたのかもしれない。さっきのお昼ご飯に睡眠薬が入ってたとしたら、私たちが食べきれなかった分まで平らげてた葉介が目覚めさせないのも無理はない。

「花奈ちゃん、クラージュ様のところへ」

ナルドは言うが早いのか、全然目を開けない葉介をさっと背中にかつぎ上げた。葉介のおなかの下に首を滑り込ませて……時代劇で、鯛売りがかついでの天秤棒みたいな支え方だ。ナルドみたいな細い肩じゃ、葉介の体、途中でずり落ちてきそうだけど大丈夫だろうか。

なにはともあれ私も慌ててナルドを先導する。先導って言うても狭いテントの中でのことだから、単にナルドの前に立ってテントの幕を跳ね上げたただけだけど。

テントの向こうに誰がいるのかわからないっていうのはものすごく怖かったけど、葉介が目覚まさないんじゃないじゃ仕方ない。お姉ちゃんには弟を守る義務がある。

天幕の向こう……つまり葉介のテントには、誰もいなかった。寝る前のぼーっとした頭で聞いた情報が正しければ、確かここでクラージュが何かしていたはずだ。葉介の机の上に散らばっている、書類をちらつと見てみると、『シュツルク』『特産品』『減少』とかの単語が目に入る。仕事してたんだな。ということは、クラージュは眠ってなかったらしい。

クラージュが無事でいてくれることを祈りながらもう一度、今度は外へつながる幕を跳ね上げ……私は啞然とした。

私たちのテントの前に、クラージュは立ちはだかっていた。その周りには、見慣れない鎧を身につけた人たち。

ほとんどの人は地面にぶっ倒れていたけど、その倒れざまがまたひどい。

落ちてる石に頼りしながらかき笑いしてる人、おしっこもらして泣いてる人、白目を剥いて泡を吹いてるくらいの人ならまだ全然かわいいほうで、中には、焦げた臭いをさせながら痙攣してる人、全身からもうもつと湯気をあげながらぴくりともしない人たちすらいる。

「……いや、ちょっと、これは、ちょっと、なんていうか、さすがに………まあいい、スルーしよう。いざというときのスルースキルが私の取り柄だ。」

クラージュはちらっとこちらを振り返って、少し笑った。足下に転がってる人たちには見向きもしない。

「花奈さん。起きてくださったんですね」

「うん……起きちゃった」

理由なく目が覚めたんだと思っていただけ、実際はこの人たちの悲鳴が聞こえて目が覚めたのかもしれない。まあぶっちゃけ、寝てた方が幸福だったのかもしれないけど………これからは、あんまりクラージュに楯突くのやめにしよう。

クラージュはさつきちらっと振り返った時、ナルドが葉介を担いでいるのも見つけていたらしい。

「花奈さん、ひとまず『へーちよ』のところに逃げてください」

「！ わかった！」

当然のことだけど、クラージュはいつも、へーちよのことをへーちよって呼ばない。ちゃんと主計兵長って呼ぶ。でもこの人たちは、へーちよが一体何を指すのか知らない。人のあだ名であることすら

たぶん分かんないだろう。与える情報は、少なければ少ないほど良い。

私はナルドの服の裾をつかんで引きずりながら走り出した。そうしながら、絶対に振り返らないと決めた。真後ろでクラージュが短く何かつぶやいているのと、多分私たちを追っかけてテントから出てきた人の、聞くに耐えない絶叫が聞こえちゃったからだ。

The 4th Attack!! 1 (後書き)

菩薩級・オカシ級……2008年、アトラスから発売されたPS2のソフト『ペルソナ4』で、主人公に割り振られる能力値のランクの名前です。主人公には勇気、根気、伝達力などのステータスがあり、そのうち寛容さには『ランク4 菩薩級』『ランク5 オカシ級』などのランク名が当てられています。

The 4th Attack!! 2

私たちはクラージュが足止めしてくれてる間に『へーちよ』のところ……つまり第二エリアの調理場をひとまず目指したわけだけど、駐屯値の一番奥である第三エリア……私たちのテントにまで人が侵入してきてるって、どえらいことだ。本当なら非常時にはエリアごとに結界で区切られるはずなのにそんな様子もない。

厩舎は一棟残らず開け放たれ、翼竜や馬は一頭も房に残っていない。残っているのは家畜は鶏と牛くらいのものだ。なにが牛はのんびり飼う葉をもぐもぐやっている。

「よく分かんないけど、これ怖いことになってるよね!? ここまでぐちゃぐちゃにされてるって、怖いよね!？」

剣と剣とがぶつかり合う音はそこかしこでするけど、これってかなり劣勢にたたされてるんじゃないだろうか。ジュノがいつたいたどのくらいの兵隊と翼竜と馬とを引き連れて戦場に出ていったのかはわからないけど。

と、突然正面からいつも見慣れてる黒曜軍の鎧じゃない……つまり、敵側っぽいやつらの鎧が目の前をよぎった。

「うわっ、うわっ、うわああっ」

あんまり意表を突かれ続けると、人間って原始に戻るらしい。言葉が出ない。

遠いところにいるからこっちは来なかったけど、なんかさっき目があったような気がする。あつてないと思うけど、あつたような気がする。

五十メートルは離れてるから、今から全力疾走すれば十分逃げられると思うけど……でも、初志貫徹してへーちよのところに逃げる

のが良いのか、とにかく目の前の敵から逃げるのを最優先すべきなのか、判断がつかない。

「……花奈ちゃん、こっち！」

思わず足が止まった私の背に向けてナルドは鋭く叫ぶ。そして、さつとそばのテントとテントの隙間を縫うように駆け抜け、そのうちの一つの陰に隠れた。私もあわててそれを追っかけると、間一髪で、私たちの脇を敵兵が駆け抜けていく。

テントの中に逃げ込まないのは、そうすると逃げ場がなくなるし、最悪火をかけられるかもしれないからだろう。

できる限り人目につかないようにその場にしゃがみ込みながら、私はうなされてる顔をしてる葉介の手を握った。薬で眠らされているところをめちやくちやに動かされているからか、葉介の唇は真っ白で、具合が悪そうだ。

「どうしよう……どうしよう、ナルド!？」

私やナルドは女だし、明らかに兵員じゃないから、サーチアンドデストロイされることは無いかもしれない。probabilityかmaybeかperhapsかで言ったらmaybe。つまり五割くらいの確率で助かる『かもしれない』。でも葉介は別だ。葉介は男だし見た目も暴れ盛りって感じだから、手加減も交渉も無くぶつ殺されてしまう気がする。葉介が見逃してもらえる確率はperhapsより悪い。『ひよっとしたら』以下ってことだ。

「やっぱへーちよのどこを指すべき？ それともここに隠れ続ける？ ジュノたちが早くこっちの状態に気づいてくれればいいんだけど、それもいつになるか分かんないし!! なんかこの感じだとへーちよのところまで逃げ切れそうもないし、そもそもへーちよのところが安全かどうかも……」

葉介を守るためにはどうしたらいいんだろう。考えれば考えるほど分かんなくなる。ナルドの肩に担がれたままの葉介はぐったりし

て動かないし……

もしかして打つ手無しなんじゃないか、という考えが頭をよぎったそのとき、ナルドは突然葉介を肩からおろした。

「花奈ちゃん……葉介を頼みます」

葉介をおろした後のナルドの肩は、文字通り『広く』なっていた。肩胛骨の上のあたりに大きなこぶが二つできていて、まるで屈強な戦士の肩だ。ほんの五分前までの、ナルドの細く華奢な肩は見る影もない。

…… 『鉾の姫の従者は、主のためならばどのようなにも姿を変えろ』 って、言ってたのはジュノだっただろうか。

「ちよつとナルド、その肩……」

軽く怯んだ私をガン無視の上、ナルドは深呼吸を一度して、うつむいた。

そして、『それ』は唐突に始まった。

ナルドの鼻と顎が伸びていく。リアルでカイジだ……とかふざける余裕もない。実際目の当たりにするとハンパなく怖いからだ。頬骨も大きく、目も大きく、背も高く、首も伸び……っておいおい。

…… べちよつとかごきつとか、かなりグロい音がナルドの全身から絶え間なく聞こえてくる。

これ、止めなくて大丈夫なんだろうか。……いや、それより、ナルドはいつたいなんで変身してるんだろう。ていうかそもそも、根本的にこういうのアリなの？ プリキユアとか仮面ライダーとかだつてもうちよつとはお子さまに配慮した感じで光に包まれながらスマートに変身するのに。私、この世界で起こることにまるでついていけない。

完全に引きまくってる私をよそに、ナルドは体をきしませながら変身し続ける。

着ている服を裂きながら巨大化していくのと同時に、腕からは細

かな赤い鱗が生え、ふわふわしてた髪の毛は全部抜けてしまい、代わりにトゲトゲした角が何本も生えてくる。五本の指は四本に、桜色の爪は大きく堅い鉤爪に、靴を突き破って踵とつま先から蹴爪が、最後に肩胛骨のところからはとがったものがつきだしてきて、薄い膜が張る。

これでやっと、変身は打ちやめらしかった。ポニーくらいの大きさの異形に変じたナルドはゆっくりとうつむけていた顔をあげる。

……おめでとう！ ナルドは翼竜に進化した！

……とか言ってる場合じゃないのに、あまりにもあんまりなことが目の前で起こったせいで、私は完全にパニックを起こしていた。

……ナルド！ せつかく美少女だったのに！ 肩胛骨は翼の名残ってか！！ あんな変身の仕方しといて元に戻るのか！！？

「……えええー」

いったいどこからつつこめばいいのか分からない。ナルドが男の娘って聞いた時以来の衝撃だ。

「……これで…葉介だけでもなんとか逃げられると思います」

私の驚きなんかまるでよそ事みたいに、ナルドの声はいつも聞いているのと変わらない。その、どこから聞こえてきているのか分からない声は静かで落ち着いているけど、元気がない。さっきの変身がものすごくつらかったんだろう。だって肉を突き破って羽根が生えてきてるんだもの。

「花奈ちゃん……葉介を」

ナルドは……赤い鱗の小さな竜は、おろおろしてばかりの私から、ぐったりして動かない葉介を受け取る。葉介のことをお姫様だっことできるぐらいにナルドは大きくなっていた。

そっだ、ここから逃げなくちゃいけないんだ。少なくとも、葉介

だけでも逃がさなくちゃ。

「すみません、花奈ちゃん。見捨てることになって」

「そんなの良いから早く行って！！ ジュノ呼んできて！！」

私が叫ぶのと同じぐらいに、ナルドは羽ばたきを始めた。しかし、なかなか飛び立てない。そもそもナルドは変身に体力を使っちゃったらしく、既にへろへろだ。

更に言うと、ナルドの羽根は、普通の翼竜と比べてどう見ても小さかった。

私は翼竜が実際に飛んでるところを見たことがないから、どのくらい立派な翼があれば飛べるのか知らないけど、はつきり言ってるまんまだから抱えていてあげなきゃいけない。

私は羽ばたくナルドのお腹の下にもぐりこんで、しょいこむみたいな格好でナルドを押しした。早く飛び立てるようにだ。

「ナルド……はやくうとうとうっ」

「もう少しです……もう少し」

ナルドも懸命に羽ばたいては地面を蹴るけど、ほんの少し体が浮くだけで、すぐに私の背中に重みが戻ってくる。多分葉介を抱えているせいで、飛び立ちやすい体勢がとれないんだろ。私は半泣きで叫んだ。

「いやっ 来る！ あいつらがこっちに来るうとうっ」

「翼竜は風を受けて飛ぶ生き物です。風さえ吹けば……」

ナルドは悔しそうにつぶやいた。私は音高く舌打ちした。ガンガんに頭に血が上ってるのを、自分でも感じる。

風。風が吹かなきゃ、ナルドが飛べない。じゃあ、吹かせなくちゃ。

お湯も沸かせない駄目魔法使いだけど、今はやるしかない。

風は何で出来てる？ 大気の流れ。

大気の流れはどうやって出来る？ 気圧の差で。
気圧の差はどうやって作る？

「……………ナルド……………息、止めててっ」

空気は、窒素と、酸素と、二酸化炭素で出来ている。それを全部、周りから追い出す。

「……………」

ほんとはもつと簡単に効果的な、いい方法があるんだろう。でも今の私の脳味噌じゃ、これが限界だ。

息が苦しい。耳も痛いし目もなんだか痛い。なんで目も痛いんだろう。お腹から何かがせり上がってくるみたいなきもちもするし、さぞんだ。

軽く意識が飛びかかってくるくらい空気が薄くなってきたところで、これ以上集中が保てないと感じ取った私は背中ナルドに言った。

「……………もうだめ、いくよナルド……………いち、にの……………さんっ……………！」

私はようやく魔法を解いた。周囲の気圧を下げるために作ってた、気持ちの壁を解いたのだ。

すると待ってましたとばかりに、周りから大気が流れ込む。

つまり、風が吹く。私の髪が吹き乱され、ナルドの翼膜が風を受ける。私たちが隠れてたテントの林の奥から、びゅうつと風が吹き込んでくる。

実際、吹いたのは私が期待してたような突風じゃなかった。扇風機で言うところの風量：中くらい。あんなに頑張ったのに、自分が情けなくなるしよぼさだ。次からはサボらなくてもうちよつと魔法の勉強を頑張ろう、と私は心に誓った。次があればだけど。

とにかく私は背中でおもいきりナルドのお腹を押し上げる。

「ナルド……行つて……」

ナルドもつらいはずなのに、両の華奢な翼を懸命に動かす。そしたら、ふっと背中から重みが消えた。重みが戻ってくることもない。馬跳びの馬みたいなたまな体勢になつたままの私の視界で、ナルドの両足が離れているのが見える。

私はとつさに叫んだ。

「ナルド、踏んでっ」

「！」

ナルドの足がぎゅっと私の背中中で踏み切つた。

我々の業界ではご褒美です……とか言つてる場合じゃないけど、とにかくナルドの足で突き飛ばされて私は何歩かたたらを踏んだ。しかしそれと同時に、ばさつと大きな羽ばたきの音が聞こえる。

さすがに人間一人＋竜一匹分の重さはハンパない。踵とつま先の蹴爪も背中に容赦なく食い込む。

衝撃に耐えかねて思わず地面にへたりこんだけど、私はすぐに後ろを振り返つた。

とうとうナルドの体が宙に舞っている。竜と化したナルドは、滑るような動きで前進と後退を繰り返して、更には左右に揺れながら空高く舞い上がっていく。

「よっしゃああっ」

私は力強くガッツポーズをとつた。

いったいどの魔具が助けてくれたのかは分かんないけど、とにかく魔法が成功したのは初めてだ。ライト兄弟が初めて飛行機を飛ばしたときもこんな気持ちだったんだろう。そう思うくらいの、くせになりそうな達成感がある。

酸欠できーんと耳鳴りがするのと、電磁気力魔法の副作用か、体が感電したみたいビリビリしびれるせいで、ナルドたちが見えなくなつた後も私はその場にへたりこんだままなかなか動けない。

しかし良かった……これで、これから先の人生で『私たち三つ子なんですけどそのうち一人は戦争で死んでるんです』ってわけわかんない自己紹介をしなくてもすむ。

……と、思ったところではたと気づく。

「……………そういえば、やばっ」

そういえば自分のこともちゃんと一人でどうにかしなくちゃいけないんだった。翼竜が人を今まさに飛び立ったのは、駐屯地のどこからでも見えただろう。すぐに逃げなくちゃいけない。でないと、自己紹介する機会が消えた上、葉介たちに『俺たち三つ子なんですけどそのうち一人は戦争で死んでるんです』って言わせることになる。

「……………」

つまり、事態はあんまり好転してないのだった。

The 4th Attack!! 2 (後書き)

カイジ……1996年から講談社のヤングマガジンで連載されている、福本伸行氏の漫画作品です。カイジに限らず、福本氏の作品はアゴと鼻筋の尖ったデフォルメの強い画風で有名です。

肩胛骨は翼のなごり……日本では2000年に出版されたデイビッド・アーモンド氏の児童文学のタイトルです。

The 4th Attack!! 3

私は一人、ヘーちよのところを目指すことにした。

何しろ生存率がm a y b eの私だ。どうにも分の良い賭けじゃない。瞬殺じゃなくても見逃してはもらえないだろうし、捕まったら死んだも同じって目に遭う気がする。それはイヤだ。死ぬの次にイヤだ。

自分が緊急事態でも冷静な判断が下せるようなタイプじゃないことはよく分かってる。ここは勝手な判断をくだすより、クラージユの指示に従うのが得策なはずだ。

メタルギアばりにこそそこ隠れまくり、危ない橋を何度も渡りながらやつとの思いでたどり着いた調理場は、しかし、まったくいつも通りだった。

……いや、いつも通りとまではいかなかったかもしれない。調理場には、お昼の後かたづけをすませた、一日で一番暇な時間帯の調理場とはいえ、ヘーちよともう一人、顔をよくしらない男の人のたった二人しかいない。きつとジユノがみんな連れていったんだろう。

でも、それにしたっておかしい。外じゃあんな大騒ぎになってるのに、なんでヘーちよたちはまるで気づいてないんだろう？

ヘーちよはファイルやなんかを前にして、食事用のテーブルで似合わないデスクワークをしているところだった。ヘーちよは血相を変えて飛び込んできた私に気づくなり、広げていたものをぱたんと閉じて、その三角の目をさらに凶悪にすがる。

「あ？ 花奈じゃねえか。お前ら、謹慎中だろ。昼飯食ったか？」

「昼飯食った！ そんなこと言ってる場合じゃない！！ 攻めてき

た！　なんか誰かきたー！！」

「……待て、落ち着いて話さなきゃわかんねえだろうが」

「多分サンテリアが、うちんとこ来て、なんか攻めてきて、今クラージュが止めてるけど……！」

「うちんとこって……お前達のテントか？」

へーちよがゆっくりしゃべってる。私のことを落ち着かそうとしてくれてるみたいだ。私もへーちよの三角の目をじっと見ながら叫ぶ。

「そう！！　あのね、私と葉介とナルドで三人で寝てたら、突然テントに押し入ろうとしてきた人がいたみたいだね？　葉介さらわれちゃうかと思っただけけど、でもクラージュが止めてくれたから、なんとか三人で逃げようとして……！」

逃げようとして、その後……その後のこと、なんて言って説明したらいいんだろう。まさかナルドが紅玉鉾脈の従者の特殊能力で翼竜に変身して、葉介を連れてここを離れたって言うていいんだろうか？　『紅玉鉾脈』に関することはトップシークレットなのに？

思わず答えに詰まった私を、へーちよと一緒にいたお兄さんが険しい顔でにらんだ。

「第三エリアに、サンテリアが突然ですか？　主計兵長、そいつ寝ぼけてるんですよ」

「寝ぼけてないよ！！　葉介はもう逃げたんだから！」

「葉介が逃げたって、どこへ？　お前を置いてか？」

「起きなかつたんだからしょうがないじゃん！　なんか昼ご飯に眠り薬が入ってたみた……！」

「馬鹿言うんじゃないぞー！！」

口げんかみたいになってた私とお兄さんの間に、雷みたいな怒声が割って入る。

「俺の作った飯にそんなものが混ざるか……！！」

「だってほんとに葉介起きなかつたんだもん……！！」

ただでさえ怖い顔のヘーちよがすごむもんだから、もう私の方だ
って半泣きだ。

「……………」
突然ヘーちよは、私の倍近くありそうな手を私のおでこの前へ持
っていく。

叩かれるのかと思って私はとっさに肩をすくめたけど、ヘーちよ
はそんなことしなかった。ヘーちよはその指にはまっていた、やく
ざのおっさんがつけてそうな金色のぶつとい指輪を指から引き抜く
そして、抜いた指輪を私の額の前にかざして手をぱつと離す。

金の指輪は、ヘーちよが指を離すなり、私の額にすこんと張り付
いた。

「……………なにこれ？」

ちよつとなにをされてるのか分かんない。私はおでこに張り付い
た指輪をひっぺがしながら眉間にしわを寄せる。

張り付けられた指輪にいったいどういう効果があったのかは分か
らないけど、しかし、ヘーちよの反応はすさまじかった。

ヘーちよは私の手の中から指輪をもぎ取るように取り返すと、そ
の場にたった一人残っていたお兄さんを顎でしゃくった。

「おい、周りと結界装置の様子見てこい。哨戒にも連絡。重力魔法
の反応を洗え」

はい、と返事したお兄さんは、私に対する態度はいったい何だっ
たかのかっていうぐらい従順に、慌ただしく出ていった。

それを見送ることもしないで、ヘーちよは私の両肩をつかんで、
でっかい体を屈めて私に視線を合わせてくる。な、なんだなんだ。

「良いか嬢ちゃん、とにかく落ち着け。あんたはサンテリアの重力
魔法をどこかで食らったんだ。俺が様子は見て来てやるから、鍋で
もかぶって隠れてろ。良いな」

言っが早いのか、ヘーちよは自分自身も身を翻し、でっかい姿から

は想像もつかないくらいに機敏な動きで調理場から出ていく。私は一人取り残された。

……………よくわかんないけど、これはただごとじゃない。私は誰もいなくなつた静かな調理場を見渡して、ごくりと唾を飲みこんだ。考えるのは得意じゃない。私はきっぱり決めた。

ここに隠れていよう。幹也や葉介がここにいたなら、きつと、とにかくここでじっとしてろって言うだろうから。

ナルド達がジュノのところにとどりつきさえしたなら、絶対に助けに戻ってきてくれる。細かいことはよく分からなくても、これ以上悪くなることはないはずだ。

早速お鍋でもかぶって隠れようと、私はそのへんを見回した。鉄の鍋は私が近寄っていくだけで、自分から勝手にずると動いて避けていく。クラージュが私にくれたウサギのチョーカーの『刃返し』の力が、私から鉄製品を遠ざけているのだ。

確か、鉄じゃなくて銅のがあつたはずだ。私一人くらいならすっぽり入れそうなくらいの大きさの。私はそれを床の上から探し当て、その中に体育座りをして、蓋をした。

お鍋の中は案外快適だったけど、体中に金属製の魔具を身につけているせいでちょっとでも身動きするとかちかち鳴った。これじゃあ相当気をつけてないと、すぐ音でばれてしまいそうだ。私は体中をこわばらせて、ただただ息を潜める。

外の喧噪がお鍋の中で反響して、わんわんくぐもって聞こえる。

私は今更、自分が今靴下しか履いてないことに今更気づいた。昼寝から飛び起きたあとそれっきりだったから、靴なんか履いてる余裕

がなかったのだ。走ってる途中で石にでも引っかけたのか、泥で汚れたつま先から血が出ている。靴下を脱いで傷の具合を確かめたいけど、また走って逃げなきゃいけないなくなった時困ってしまう。

傷を見るのは、命が助かってから。私は膝小僧の間に顔を埋めて、ただただ息を潜めた。

へーちよ達の様子は一体どういうことだろう。あれじゃ、まるで私の話を信じてないみたいだった。ゲルダガンドじゃ『お前ちよつと頭おかしいんじゃない？』っていうのを『お前は重力魔法を食らったんだ』って表現するんだろうか。

…そういえば、あの指輪で検査をされたけど、へーちよの反応からしてあれは『陽性』って感じだった。重力魔法食らってますか検査で陽性。……あれ、じゃあやっぱり私の頭がおかしいのかな。ナルドも葉介も私も、みんなまとめて重力魔法で頭おかしくされちゃってたのかな。

…まさかね。まさか。だって、へーちよはちゃんと様子を見に行ってくれたし。

クラージュだってそうだ。クラージュ本人が、ここから逃げる、へーちよのところに行けって私達に指示したんだもの。私たちだけが見た幻覚じゃない。そのはずだ。

「……………」

嫌な予感がする。嫌だな。私の予感って、けっこう当たる。

嫌だな。ジュノたち、早く帰って来ないかな。勘違いなら勘違いでそれで良いから。

お鍋の中で身をちぢこめる私に、外から声がかかったのはその時だった。

「花奈さん！」

「花奈さん？」

お鍋の中で音がくぐもってしまっただけで、声音まではよく聞き取れないけど、誰かがここに来た。それも、二人、私を捜しに。

『花奈さん?』と『花奈さん!』の二人は、お互いに気づくとすく言い換えた。

「花奈さん、隠れて!! 危険です!」

「花奈さん、出てきてください。逃げましょう!」

「……………」

どっちだよ。

…って、文句を言うわけにもいかない。どっちの声に従えばいいのか分かんなくて動けないせいで、結果的に私は『隠れて』の方の指示に従うことになった。その後しばらく経っても『早く出てこい』という催促はない。

その後、しばらく調理場には沈黙が漂った。完全にしん、として調理場の外からの喧噪が遠くの方のふわふわした雑音として聞こえてくるばかりになる。

「……………」

お互いの動きを、牽制し合っているような沈黙だ。

今は、さっき『隠れて』って叫んだ方が、『出てこい』の方よりは、今私が隠れてるお鍋のそばに立ってるらしい。ただしさっきも言ったけど、誰の声かは分からない。

「……………」

ちょっと状況を整理してみよう。

ここに、お鍋に隠れてる私と、私を助けようと思ってる『天使』と、私を殺そうと思っている『悪魔』の三人がいる。天使と悪魔はそれぞれ一回ずつ、『隠れて』『出てこい』と言っている。お鍋の中からは、どちらが天使の指示なのかは判別できない。

さて、お鍋の中の私はどうすれば生き残れるだろう？

「……………」

だめだ、全然分かん。自分の頭の回転の悪さを実感するのはこ
ういう時だ。幹也ならずぱつと結論を出してくれるんだろっけど。

止まってしまったかのような状況に、最初にじれたのは私だった。
私はそろーっと右手でお鍋の蓋を持ち上げて、外の様子をのぞこ
うとした。真っ暗闇じゃ分かるものも分からないからだ。

でも、ほんの少し作った隙間に右手を差し込んでのぞき込もうと
した瞬間、 がんっ！！とすごい勢いでお鍋の蓋が上から押さえ
つけられる。

「……………っっっっ！！！」

何か上から重いものでも乗せられたみたいだ。当然、隙間に強く
指を挟んだし頭も打った。辛うじて悲鳴はあげずにすんだ…という
か、痛すぎて声も出なかった。

私がお鍋の中で悶え狂っていると、ちょっと離れたところから穏
やかな声がした。……………アジユの声だ。

「ああ……………そんなところにいたんですね、花奈さん。良かった、無
事で」

「……………」

無事じゃない。特に指が。主に指が。

ちよつと隙間が出来たおかげで、外の音は聞き取れるようになって
たけど、それどころじゃないくらい痛い。

やばい、脂汗が出てきた。指が折れたかもしれない。心が折れる
のも間近だ。

「たった一人で、一体何をなさるつもりです？ 羽虫一匹とらえら
れないほど、こちらの間抜けではありませんよ」

もう一人……………クラージュの声は、鍋のすぐ真上で聞こえてくる。
アジユはそれに、こう返事した。

「まさか私が勝算無く動いたと思ってるんですか？ 私も、道化を演じるのもうっんざりなんです」

……状況は相変わらず見えてこないけど、会話の内容からして、スパイの正体はアジュだった、ってことで良いんだろつか。間違いだと思いたいけど……アジュもなんか、認めてみたいだ。

とにかく、何かが起こってるってことは確かだ。これで、全部私の妄想でしたオチは回避されたことになる。でも、アジュが……。

私がお鍋の底でひそかに大きなショックを受けている間にも、状況はどんどん進行しているらしい。

「……まさか電磁気力魔法に重力魔法で対抗できるとは思ってないのでしょうか？ よほど命がいらないと見える」

「……」

「投降しますか？ 今なら人道的な扱いをお約束しますよ」

「……いいえ。……ふふふ、今のあなたこそ、『鴉』の二つ名が見る影もありませんね」

「……試してみますか？ 羽虫をついばむのに、鴉の嘴も爪も必要ないんですよ」

人の言葉が聞こえたのはここまでだった。

至近距離で雷が落ちたみたいなの、耳をつんざく轟音を皮切りに、（何故か）しゅるしゅるリボンを引き抜くような音、金属と金属とがぶつかり合う音。クラージュとアジュが戦ってるんだろ。頭がおかしくなりそうだな。

蓋の重みはかかったままだ。いや、現状維持どころか増してきている。多分、クラージュが上から蓋を踏んづけているんだろ。戦争するならよそでやれと声を大にして言いたい。

空いてる左手で鍋の蓋をばんばん叩く。とにかく指を何とかしてもらわなくちゃ、本当に折れてしまう。頭がおかしくなりそうな痛みを必死に我慢していると、ようやくかかっていた重みが緩む。私

は指をひっこめた。ごつつと乱暴な音がして、鍋の蓋は閉まった。
……そのタイミングを見計らってたんだろ。アジュは突然、
声を張り上げた。

「その手口で『紅玉鉾脈』を閉じこめていたのですね。私の恋人も
そうやって暗がりの冷たいところに押し込めているのでしょうか？」

！

「なんだとおおおお!!」
「花奈さん!!」

勢いよく立ち上がったら、クラージュの体が、視界の隅っこのほ
うで軽く傾ぐ。…多分、今まで私のいたお鍋に足を乗っけていたと
ころに、私が蓋を吹き飛ばして立ち上がったから、転びかかったん
だろ。

しかし、私に転ばされるようなどんくさいクラージュでは無かつ
たらしい。クラージュは体勢を崩しつつも、私の背後から手を伸ば
す。

私は、立ち上がったとほとんど同時に間髪入れずに引きずり倒さ
れた。引きずり倒される直前にいたすぐそばを、緑色の細かい弾丸
のようなもの……いや、葉っぱだ。何故か葉っぱが飛んでいく。

私はクラージュと一緒に床に叩きつけられたけど、また間髪入れ
ずに引きずり上げられて、無理矢理立たされる。

立ち上がる時に頭のとっぺんを、引きずり倒された時に向こう臍
を、それぞれぶつけていたらしい。もはや満身創痍と言っても過言
じゃない私を抱えあげるように背後から羽交い締めにして、クラー
ジュは………

クラージュは、そこまでだった。

クラージュは私を羽交い締めにしたまま、その場に崩れ落ちる。巻き添えを食らう格好で、私の再度地面に叩きつけられた。

様子がおかしい。私はもがいて、クラージュの腕から無理矢理逃れ、クラージュを助け起こす。クラージュの体は、ぎちぎちに縛り上げられ、ほとんど身動き出来ない状態にされている。

クラージュを縛る鎖は、さっき私のすぐそばを通り抜けていった葉っぱだ。葉っぱ同士、お互いに結びつき合って、鎖の姿をなしている。それを全身にからみつかせ、クラージュは拘束されていた。……重力魔法って、こういうものなんだろうか。『世の中のマクロな仕組みを司る魔法』？

これが魔法だってことは分かるけど、話に聞いている重力魔法とも電磁気力魔法とも、雰囲気が違う。はっきり言って、グラナアーデの魔法っぽくない。

「……アジュ、クラージュに一体何したの」

葉っぱの鎖は、引っ張っても引っ張っても、ほんの一時的にたわいなくちぎれてはまた元通り結合してしまう。ほどくことが出来ない。

私が床にへたりこんだままきつと睨みつけても、アジュはまるつきりいつも通りのすました顔だ。

「……予想通りの素敵な反応ありがとうございます、花奈さん」
言って、私に優しく微笑みかけた後、私の背後のクラージュに向け、アジュは拭い去ったように表情を消した。

「……花奈さんを無理に押し込めるような真似をしなければ……あるいは、体重をかけるのをやめて差し上げなければ……。もう二三分は、ならみ合う羽目になっていたでしょうね。優しさが仇になったということでしょうか。薄っぺらい行動には、必ず報いがあるものですよ」

「……ご高説痛み入りますね」

クライジユは縛り上げられたまま不敵な態度だ。でも、クライジユが全身にまとっていた魔具は、もともとは金色に輝いていたのに、今はほとんど全てが褐色に曇っている。多分オーバーヒートを示しているんだろう。

クライジユはもう戦えない。

せめて盾になろう。私は、クライジユに覆い被さってぎゅっと抱きしめた。

「花奈さん。葉介さんとナルドさんはどこですか？」

「……………」

絶対に言わない。ていうか私が言うと思って聞いてるんだろうか。

「……………まあいいでしょう」

思っただけならいい。クライジユは私の背中に手をかける。

「……………花奈さん、混乱は重々承知ですが、時間がありません。これから、落ち着いたところで本当の事をお話しましょう。あなた自身のためにも、あなたのごきょうだいのためにも、ご同行願えませんか」

「や……………やだ！！」

私はますますクライジユを抱く手に力をこめた。確かにさっきのアジユの台詞は全面的に聞き捨てならなかったけど、でも、アジユが私に黙ってられないような言葉をわざと聞かせて、それでクライジユに隙を作らせ、騙し討った事実は変わらない。

アジユはそういう、悪賢い奴だったんだ。信じちゃいけない。

しかし、ここから梃子でも動かないつもりだった私の気持ちに一石投じたのは、アジユの次の台詞だった。

「悪いようにはしません。……………あなたを、『紅玉鉦脈』の呪縛から解放して差し上げます。いかがでしょう？」

「……………私を」

私を……？ ただの言い間違いだろうか。私を『紅玉鉾脈の姉』である呪縛から解放するって意味？ ……いや、どう考えてもそうとは取れない。

アジユは勘違いをしている。

口に出した言葉の方には辛うじて？マークを語尾につけずにすんだけど、私の頭は私の頭なりに、フル回転を始めた。

アジユは、紅玉鉾脈について知ってる。

私の関係者が紅玉鉾脈だってことも掴んでる。

でも、それが葉介だってことまではわかってない。

「……………」
…アジユの思惑と秘密を探るなら、今しかないような気がする。

「……………」いけません、花奈さん

私の気持ち動き出したのを察知してか、私の体の下でクラージユが喘ぐように言った。どういう意味で止めてるんだろう。私には腹芸が出来ないってことだろうか。それとも、私が口を滑らせてアジユに余計な情報を与えることを心配してるんだろうか。

アジユはそのまま私を熱心にくどく。

「以前の、私の恋人の話覚えていますよね？ あなたの無事は私が保証します。今度は私の恋人の無事を、あなたに保証してほしいんです」

「……………」

「どうか、お願いします。私たちを助けてください」

「花奈さん、許しません。ジユノの救援を待ちなさい。主計兵長もすぐに戻ってきますよ」

「……………」花奈さん、どうか

「花奈」

クラージユが私のことを初めて呼び捨てにした。彼は葉っぱの鎖

に呪縛され、私に見下ろされながら、裏切ったら許さないって言わんばかりの厳しい顔をしている。

でも、アジュだって困ってる。それに葉介の身の安全のためにも、紅玉鉱脈についての情報がどのくらいサンテリアに漏れてるのかも探らなくちゃいけない。……別に本当に私が『紅玉鉱脈』だってわけじゃないんだし、葉介のお姉ちゃんである私が、裏切り者であるアジュから詳しい話を聞きに行くくらい、冒して当然、むしろ冒すべきリスクじゃないか？

私が迷っていると突然、クラージュは厳しかった顔をゆるめてふっと笑った。

「わかりました、仕方ありません。…花奈さん、耳を貸してください」

「！ うん」

私は素早くクラージュの顔の上にかがみ込んだ。アジュには内緒の話があるらしい。クラージュは更に要求する。

「こちらを向いて」

「？ …！」

反射的に従ってしまった自分のバカ正直を、これほど呪ったことはない。私とクラージュの顔が近づいたその次の瞬間、

「すみません」

私の口にクラージュの口がぎゅっと押しつけられた。

「！！！！！！」

声もあげられないうちに、唇から、そして目の下につけたつけばくろから電撃が広がる。頭のとっぺんから背骨を通して、足の爪の先までビリビリしびれる。

口に口がぶつかったのに気づいた瞬間、絶叫しようとしたけど喉から漏れたのはかすれた空気ばかりだ。ビリビリのせいで、両足

はよじり合わされ、ぴたりと閉じ、びくんびくん痙攣する。

キスつて、こういうものなの？ レモンキャンデーの味とかするんじゃないの？ いやレモンキャンデーはさすがに嘘だろうけど、それなら電気ショックだって嘘でしょ。

体中のバチバチは収まるどころを知らない。…これはやばい、死んじゃうかもしれない。

「……！！ あなたという人は……！！ 下衆だ下衆だとは思っていましたが、ここまで最低……だと……思っ……い……せ……！！」

「ず……ぶんひど……言い……です……。で……！！」

アジユが私のために怒ってる。……でも、だめだ、もう我慢できない。声はつきり聞こえない。意識が遠のいていく。

「……………」

私はクラージュの上にはったり倒れ伏した。

私、クラージュに口封じのために殺されたんだ……。

二人が調理場に入ってきてから私がファーストキスを奪われて意識を失うまで、時間にしてほんの三分程度のことだった。

The 4th Attack!! 4 (後書き)

花奈が踏んだり蹴ったりです。

ちなみに最初らへんの天使と悪魔の思考実験は、『出て行かない』が正解だそうです。

守ることは相手が隠れている状態でも出来ますが、殺すことは相手が出てこないと不可能です。

一方、荒野シュツルクの空を滑るように飛空していたのは赤き翼竜ナルドリンガと、その腕に抱かれて眠る葉介である。

駐屯地から飛び立ったのは良いものの、実を言って当初、ナルドに行く当てなど無かった。ナルドは単に葉介の従者であって、黒曜軍の兵員ではない。葉介が黒曜軍の力になりたいと言うのに従っているのみだから、黒曜軍の動きであるとか、サンテリアの思惑であるとか、そういった政治向きのことに彼女はまるで興味がない。国そのもののさえ、滅びるならば滅びるが良いと思っっている。

ナルドにとって大切なのはたった一人の主と自らの使命のみであるため、今回ジュノらがいずこに布陣し、いずかたへと進軍するのか、ナルドはまるで知らなかったのだ。

ただ、ナルドは紅玉鉱脈の従者として、主を守るためにのみ発揮される超的感觉を備えていた。

空から俯瞰する白き荒野のあちこちに、染みのように布陣する者ども。それらの中から、本来風にかき消されるような金属鎧独特の摩擦音や怒号、悲鳴、汗の臭いを嗅ぎ分け、万の数の人間の中からジュノという小さな人間の男を捜し出すのは、困難ではあったが、しかし、竜の姿へと変じた彼女にとって不可能なことではなかった。

ナルドは見つけただしたジュノの気配より十分…ざっと一キロほども離れたところまでぐるぐると旋回を始めた。

地上は戦場である。安全を求めて駐屯地を離れたのだ。風無し、踏み台無しでは飛び立てぬ身であるナルドが無思慮に着陸するわけにはいかない。まだ飛び慣れない柔らかい翼は悲鳴を上げ、腕に抱く葉介の体は冷え始めていたが、慎重に慎重を期す他なかった。

シュツルクの空を舞うのはゲルダガンドの翼竜ばかりのようだ。十頭ばかりの翼竜部隊は十メートルほど舞い上がっては地上すれすれに突撃し、屍人の群を喰い荒らしてはまた舞い上がっている。サングリアの兵はみな屍人ばかりで、それを指揮する魔導兵の姿は、上手くまぎれているようで見つからない。

しかし空をじっと見ているうち、ただ一頭、何をするでもなくゆったりとその場に滞空する竜の姿をナルドは見とがめた。

部隊のように突撃を繰り返すでもなく、それを邪魔するでもなく、そしてナルドのように旋回を繰り返すでもなく、ただゆったりとその場にとどまるということは実は大変なことである。風の揚力の助けを借りず、あの巨体を自らの翼のみで支えなくてはならない。はちどりのように身の軽い小鳥ならいざ知らず、翼竜のように大きなものがあのようにして滞空できるはずがない。

ナルドは、あの竜には必ず重力魔法が働いているはずだと見当をつけた。

たった一頭で何をしているとも知れないが、異常なものを見いだしたナルドは、その場を速やかに離れるべく首を背の方へ返す。風を切って飛ぶナルドの脳裏に、取り残してきた花奈のことは一瞬たりともよぎることはない。

しかし、ナルドの羽根はか弱かった。大きく距離をとっていたにも関わらず、驚くべき速度でその翼竜は距離を詰めていく。

逃げ切れぬと見てとったナルドは、すぐさま方向を更に変え、地上のジュノの方へと一直線に進む。このままだと、傷ついたジュノが指揮する戦場に新手の敵を呼び込むことになるが、それはナルドの知ったことではない。葉介の命を救うことのみが、ナルドの至上目的である。

「騎手がGに負けて落ちたのか…？ 腕に抱いて落とさぬとは、賢

い翼竜だ。…抱いているのは、男だな」

鋼色の髪をした翼竜の騎手が後方でこうつぶやいたのを、風にかき消されて当然の音量であったが、ナルドの耳は聞き取っていた。言葉にはなぜか安堵の色が読みとれる。

敵が安堵しているなら、それはこちらの危険の合図だ。射かけられる矢から主を守るため、ナルドは腕の中の葉介へ牙の並んだ顎を寄せ、そつと囁く。

「すみません、葉介。もう少し頑張ってください」

すると、意識を失っているはずの葉介の口がほんのわずか開いて、葉介はこう言った。

「……………ナルド逃げる……………俺はいいから」
「……………」

ナルドは、胸を突き上げるような不思議な思いがした。主は、意識朦朧としていても、そして自分が姿をどのように変えていても、自分が主の従者であると悟るのだ。

むろん、ナルドに一人で逃げるつもりなど毛頭ない。確かに一人の重みがナルドの翼に負担となっていては事実だが、しよせん葉介のために得た翼である。葉介を見捨てて生きるための翼ではない。

折れるほど羽ばたいてもジュノの元に届かないのを悟っても、これまでか、とはナルドは思わない。

ナルドは翼を畳んで、慣性と重力に身を任せる。羽ばたきをやめ、空気抵抗を最小にしたナルドの巨体は弾丸のように地上を目指す。

「！ 引け、追うなっ」

十分に引き離れた…というより、翼竜の騎手がチキンレースから降りたと見えたが、もはや空中で体勢を立て直し、羽ばたけるほどの高度はない。せめてとナルドは体を反転させ、翼を大きく広げる。

むろん、葉介を守るためだ。

背中から墜落しながら、ナルドはこう囁き続けた。

「大丈夫です、葉介。大丈夫です」

「……やめろ、よせ……」

「大丈夫……目を閉じていてください、風が強いですよ。砂埃が、目に」

「……！」

ナルドの発達した胸筋に埋めこまれた葉介への言葉は、最後まで囁かれることはなかった。水気のない大地に衝突したナルドの体は、大きな衝突音ともうもうと立ち上る砂埃にいったんはその身をすっぽりと包み込まれる。

やがて土煙が収まると、ナルドは固く抱いていた腕をほどいた。

その中の葉介の骨などが折れていないのを見ると、ナルドは優しい声で言った。

「……ね、大丈夫だったでしょう」

一方あつけにとられたのは一軍を率いていたジユノらの方である。突如として墜落した見慣れぬ小さな翼竜に抱かれているのは、駐屯地で帰りを待つはずの葉介である。衝突に黒曜軍も翼竜たちも巻き込まないでいられたのは不幸中の幸いと言ったところだろうか。

「……」

さすがのジユノもしばし絶句していたが、すぐに傍のベルとミュゼに命じて赤い翼竜から葉介を引きはがさせる。ベルがぐったりとした葉介を翼竜の腕から奪う時だけ翼竜はわずかにふるえたが、それきりぴくりとも動かない。葉介は地面に引きずりおろされながら、夢心地にベルに懇願した。

「ベル……あれ、ナルドだ……助けてやって」

もちろん、ベルにはあの見慣れない赤い小さな翼竜の正体がナルドであることは分からない。

「よくわかんない。ミュゼに言って」

にべもなく葉介の言葉をはねのけてすぐ、ベルは無言のまま剣を胸の高さに構えた。今さつき赤い翼竜を追い落としたばかりの、空を舞う翼竜の喉笛の他、爛々と輝く彼の目に映るものはない。独り言の多い件の騎手が「天に唾するどころか、あの子供……」と、つぶやいていたのは、もちろんベルの耳には届かない。ベルを止めたのは、二頭立ての戦車に乗るジュノだった。

「ベル、退け。翼竜の相手は翼竜にさせる」

「ジュノさま。おねならやれる」

「聞こえなかったのか。退け」

ジュノの言葉は、この場での最高司令官の言葉である。ミュゼは、自分がベルの護衛兵である手前、ベルの悪い癖を無理にでも止めねばならないことを悟った。

「おいベル、やめとけ。剣じゃ届かない。弓かなんかじゃないと」「うるさいな」

言うことを聞かない一応の上官を再度止めるべくミュゼが口を開きなおした瞬間だった。

突然、ジュノの頭上に一条の光明が射す。か細い、ありかなきかというほどの弱々しいものだったが、その光をはしごにしたように、突然虚空から一人の少年が飛び降りてくる。

黒い髪に黒い瞳、同じ年頃の少年と…葉介と比べると、かなり細身だ。高校指定のダツフルコートの前を大きく開けて、大きな銀のブーツケースを左手に、右手にはレジ袋代わりにもらえる可燃用ゴミ袋いっぱいミカンと電動工具らしきものを詰めている。

少年が片手に握りしめるブーツケースを、ジュノはすんでのとこ

るで避けた。少年はそれに一瞬遅れてジユノの目前にぎこちなく着地すると、立ち上がって砂のついた膝をぱんぱんと払う。

彼を直接見知っているものは葉介の他にはいなかったが、その場の誰もが、少年の正体を本能的に悟っていた。葉介はうめく。

「……幹也……お前、なんでいんの……？」

やけに背の高い少年に吊り上げられるように肩を貸されてようやく立っている弟の姿をまじまじと観察しながら、たった今降り立った少年は……幹也は、おっとりと答えた。

「なんか二人ともピンチな気がしたから、飛んできちゃった。あ、これおみやげね」

「お願い幹也、もうちょつとだけ空気読んで。なんで今このタイミングでミカン？ 誰か『口ん中さっぱりさせたいわー』って顔してる？」

差し出されたミカンの袋を誰も受け取らない。結局幹也はミカンの袋を自分で持つことに決めたらしく、スーツケースの上に乗せた。そして、開いた手で校則すれの長い前髪をかきあげる。「……で、今どうなってるの？」

葉介に肩を貸すミュゼがそのままの体勢でぐったりとうなだれた。「そんなの俺が聞きてえよ……」

説明出来るものは、今ここには誰もいない。

……

こちら、地獄より花奈がお送りします。……と言いたいところだけど、まだ心臓がどくどく鳴ってるのが聞こえるところを見るとま

だ死んでないらしい。私は死んだ。スイーツ（笑）で済まないのが浮き世の憂いところだ。

……いや、落ち着こう。たかだか口と口がぶつかった程度で人生に絶望するのはまだ早い。ていうかよくよく考えたらあれ、初めてじゃなかった。幼稚園の時に済んだ。幹也とだけ。あれ、葉介とだっけ。まあいいや。とにかく今の私に出来ることは、いつまでもうちひしがれてないで、さっきのアレを人生最後のアレにしないですむように頑張ることだけだ。せめて誰かいけすかなくないイケメンにほっぺちゅーしてもらってから死のう。そうしよう。

人生の目標を決めてから、私はゆっくり目を開けた。もちろん周りに人の気配がないことを確認してからだ。

私が出たのは、テントの中だった。その中のベッドに転がされている。ただしテントと言ってもいつも私が暮らしてるテントとは違うってことはすぐにわかった。

駐屯地で使ってる折り畳み式のベッドは、粗末ながらマットレスの中にはねがしこまれているんだけど、今私が転がされているベッドは藤みみたいな蔓系の植物を編んで、その上に敷き布団を乗せているっていう、まるでゲルダガンド風じゃないベッドだったのだ。冬なんか寒そうじゃないか。……たぶん、なんとなくだけど、このベッド、サンタリアのなんじゃないかな。

私がつけてた魔具は全部外されて、傍のデスクに一個一個並べてある。

まだ体中から静電気をくらったような痺れがとれていない。私はまず、試しに指の先をぴくぴく動かした。問題なく動く。が、爪を立ててみた時の感触がどうも鈍い。私はため息をついた。クレンジユ、さつき口と口をぶつけた時に私に何か細工をしゃがったらしい。

特に舌と両足の麻痺がひどい。うかつに口を開けると歯医者に行った後みたいによだれが垂れるし、何故か声もでない。両足はよじりあわされたままぴたっとくっついて開かないし、最悪である。悲鳴もあげられないし走って逃げることもできない。

つまりこれ、口封じされた上見捨てられたんだな。私はまた、ため息をついた。

まったく、ちょっとくらい私を信用してほしいものだ。確かにアジユの言葉に揺れたけど。私が裏切らないのは葉介だけだから場合によったらクラージュユのことなんかガンガン裏切るけど。

…そういえば、アジユはどこにいるんだろう。

動きは不自由だけど縛り上げられてるわけじゃない。私は体をうねらせて、なんとかテントの外まで出ていこうとすると、ちょうどテントの垂れ幕が外から勢いよく跳ね上げられる。

「！」

やっぱり声は出ないんだけど、ちょっとびっくりした。悲鳴をあげずにすんだことを思えば、声が出なくなることも悪いだけじゃなさそうだ。

しかし、噂をすれば、でアジユが来てくれたんだと思ったけど……誰だこいつ。

男だ。薔薇色の髪に薄オレンジの目をしている。背が高く、殺風景なデザインのシャツを着ている。年はそんなにいつてない。せいぜい一個か二個上ってところだろう。

「……………」

ミルクティー色に日焼けしているせいもあるだろうけど、顔色が変だ。多分お酒を飲んでるんだろう。

そいつは完全に黙ったまま半分起きあがってた私をベッドの上に元通り転がして、何故か私の着ているもののボタンを上からぶちぶち外していく。妙に思い詰めた表情だ。

ないの？

なんで二人ともここにいないの？

なんで私、こんなところで一人なの？

何が起こってるのかわからない。恐怖感と有り余る怒りが全身を竦ませる。目が潤んで前が見えないけど、ぎゅっと両手首を握り絞められてるからそれも拭けない。

涙が一粒、ぼろんと耳の方へ転がっていった。

「……………」

黙って乱暴されてやる義理は無い。というか、絶対に許さない。

何が何でも噛みついてやるうと、私にのしかかる男から思いつきり顔をそむけて肘の先を狙っていたんだけど、ブラウスを剥いだ後の男は、ちよっぴり様子が変だった。

びくりとも動かない。

「……………」

薄目を開けて、そーっと顔を男の方に向けると、日焼けした男はさっきまで赤らめていた頬を今は蒼白にして、私の体を見下ろしていた。

一体何があつたつていうんだ……何でもいいけどどいてくれないかな。

何にせよ相手が隙を見せてきたのは確かだった。今ならいける！

と力一杯もがきまくったちよっぴりその時、事は動いた。

「……………だめだ、俺には出来……ぐがあー！」

テントそのものを揺るがすようなものすごい勢いでアジユが飛び込んできて、男の後頭部をバールのような物ですっぱーん、と殴り倒したのだ。

のっかっつてる男は奇声をあげつつこっちにくっ倒れてきて、私の

肋骨に頭突きをかます。痛い！ 私もあんまりびっくりしたので涙も引っ込んだ。元々ほとんど出てなかったけど。

「花奈さん！！」

アジュはバールのような物あらため、白い剣の鞘を構えたまま、叫んだ。私も相当ひどい格好だけどアジュもすごい格好だ。今までアジュのがつちがちにガードを固めていたターバンがほつれて、頭だけ保存状態の悪いミイラみたいになっちゃっている。アジュはそのすごい格好のまま、ターバンの隙間から良い笑顔でこう言い放った。

「……………この世界の男がいつもこいつもクスばかりだということがよく分かりました。こうなると彼女のことを心配です。早々に彼女を助けだした暁にはさっさとんずらさせていただきませう」

「待て待て待て待て待てアジュール！ 俺はまだ何もしていな……………」
「する気満々だったでしょう」

「いやなんかこの女とこのシチュエーションが気の毒すぎてぶっちやけ勃たぐぶっ」

何か言おうとしたそいつの頭が、またすっぱーーーーんっていう良い音と共に後頭部からぶっ倒される。

「言わせませんよ？」

アジュは両手に握って再度振り抜いた剣の鞘を左の腰に納めながら荒んだ笑みを浮かべた。どうでもいいけど、鞘だけで剣はない。今のアジュはその場のノリだけで剣をぶん回しそうだから、無くて幸いと言ったところか。

しかし何で鞘からスリッパみたいな音がするんだらうな……………スリッパで出来てんのかな。

男は首と後頭部をさすりながらアジュを恨みがましい目で見る。

「むち打ちになるかと思っただぞ……………」と、初対面の奴のための軽いジョークはこのへんにしといてだな！ おいアジュール、この女様子がおかしいぞ」

「花奈さん、乱暴されなかつたでしようか？」

「お茶目なジョークはこのへんにしといてだな！！！」

今まで自分がやっていたことを冗談つてことにして片づけたらしい薔薇色の髪の男を、アジユはガン無視して私を助け起こす。無事ですんだからいいようなものの、結構怖かった……怖かったぞ！！私が手首をさすりながら、改めて薔薇色の髪の男を睨みつけていると、アジユは心配そうに渡しの目をじっと見て言った。

「花奈さん、私かわかりますか？」

わかるよ。ミイラ男状態でもさすがにどっからどう見てもアジユだつてわかるよ。

私は薔薇色の髪の男からアジユへと目を移す。

そこで、やっと気づいた。アジユの髪の毛がターバンの隙間からちらちらと覗いている。私はぽかんと口を開ける。そこには、ハゲ疑惑以上に重要な、アジユの秘密が隠されていたって分かったからだ。

アジユはほどけたターバンをずるんとおでこまでひっぱりあげて、ちゃんと束ねもせず、頭にすぽんと抜いてしまう。ターバンからは今まで隠されていた、柔らかそうな髪の毛がこぼれ落ちる。

彼の左耳の下でふんわりゆったり一つに束ねられていた髪は、だいたい鎖骨のあたりに毛先がきている。髪が見えると、ターバンをしていた時よりも幼い感じの顔になった。……いや、顔の印象なんかどうでもいい。問題は髪だ。髪の毛だ。

その、薄緑色した髪の毛先からは、青いパンジーの花がちらほらと咲いていた。

The 4th Attack!! 6

アジュの正体は、人畜無害の主計兵改め、スパイ改め、お花の妖精さんだつたらしい……。いや、こんなうざい妖精なんて私は認めたくない。

私は思わずアジュの結った髪に手を伸ばし、パンジーの花がついている髪を一本選んで引っこ抜く。

……。ためつすがめつ見てみても、残念ながら、本物の髪から本物の花が咲いている。造花やファッションじゃない、こういう生態だ。しかし抜けた（抜いた）髪の毛とはいえ、花がついてるとなるどゴミ箱に捨てるのもなんかいたたまれない。私はさりげなくアジュの頭に抜いた髪の毛を返した。

アジュは黒曜軍の軍服を脱いで、白地に青のワンポイントの入った、かつちりした服に着替えている。

髪の引っこ抜かれたところが痛むのか、森ガールっぽいサイドテールの根本を……つまり左耳の後ろのあたりをさすりながら、アジュは軽く首をかしげた。

「いてて……花奈さん？ どうしてずっと黙っているんです？ どこか怪我をしましたか？」

私は喉を押さえながら口をぱくぱく開閉してみせる。それで言いたいことはちゃんと伝わったようで、アジュは、

「……分かりました、声が出ないんですね」と沈痛な顔をした。別にアジュがそんな顔をする必要はない。十中八九、クラージュの仕業だから。

「待っていてください、今治せそうな人を……」

多分私を落ち着かせようとしたんだろう、アジュはいつも通りの曖昧な微笑を浮かべて立ち上がった。いや、別に話せなくても困ら

ないから、この変態と二人つきりにしないでほしい。

声が出ないなりにアジユを引き留めようと私が膝をたてた時、

「だいじょぶだいじょぶ、今来たよー」

外から場にそぐわない、声変わり前の男の子の声が聞こえてきて、テントの幕が跳ね上がった。

入ってきたのは二人だった。

まず先に入ってきたのが、十一、二くらいの男の子だ。銀色の髪の毛、アイスブルーの目をしていて、クラージュのと同じようなデザイン、かさばる白いローブの布地にもこもこと埋もれている。その首には麻のひもがかかっていて、そのひもの先つぽにくつついている陶器の白いお皿が両肩に下がっていた。ちよっとダサイよりの格好をしていても、それがチャームポイントになるタイプの得な顔立ちだ。

彼は自分の背よりも長い木製の杖を持っていて、狭い入り口からテントに入れるのに苦労している。なんかこう……小型犬つぽいタイプのシヨタだ。多分、さっきの声はこの子のだろう。

男の子の後ろには、鋼色のくせっ毛を短く刈った、筋骨隆々の男の人がついてくる。四十歳はすぎているように見えるけど、身長は2メートルつてとこだろうか。へーちよよりは小さいかもしれないけど、どんぐりの背比べならぬ巨木の背比べで、比べるだけばかばかしい。左目に黒の眼帯をつけているのは海賊リスペクトだろうか。残っている方の右目の色は焦げ茶つぽい。彼は薔薇色の髪の変態の肌よりずっと濃い色に日焼けしていて、その体を鉄の鎧で覆っていた。

二人並べてみると、どうもそぐわない二人組だった。

「こんにちは。君がカナちゃんだよねー」

男の子は自分の杖を床に倒して置きながら、私の手をとって甲に口をくつつけながら自己紹介する。別にいやらしくない、さわやか

な所作だ。いやらしいシヨタなんて心底から嫌だけど。

「初めまして。僕はプラネタ。後ろの大きいのはバルバト。アジユールのことは知ってるでしょ？ そのヘタレはサビアンね。ほらーサビアン、さっさとどきなよ」

サビアンと呼ばれた薔薇色の髪の男は私の上から慌ててどきながらぶつぶつ言った。

「いや俺は思いとどまったのだぞ」

「私が踏み込んで来たからでは？」

「……サビアン」

バルバトって人がぼそつと呟くと、サビアンは真っ青になった。

「思いとどまっていた！ そうだろうカナー！！」

いや私に振られても。私が首を傾げるとサビアンはがっかりした顔をしたけど、どうしようもない。というか、気にしているのはサビアン一人だ。私ですらもう喉元過ぎて熱さを忘れつつある。まあ二人きりになるのは絶対にごめんこうむるけど。

「ちよつと診察させてねー」

おろおろしているサビアンに一瞥もくれず、プラネタは私の前にひざまずいて、にこつと笑った。そして瞼を引っ張ったり喉の奥を覗いたり、膝をこんこん叩いたりふくらはぎをつねったり、ズボンを脱がそうとしたりと色々やった。まあ、どういう意味があるのかはわかんないけど。

ついでにさつき鍋の蓋で挟んじゃった右手の打ち身のところに包帯を巻いてくれた後、プラネタは私の目の下をつんとつついた。

「他の魔具もざつと調べたけど、多分これのせいかなー」

私もそこに手を触れて確かめてみると、そこにはクラージュから渡された魔具が…つけぼくろが残っているのが分かった。

「これに『人魚の呪』がかけられていたんだねっ。発動すると、水中をかなり自由に動けるようになる代わりに、両足が一本のヒレのよ

うにより合い、声が出なくなる。電磁気力で脳に強い暗示をかけ、太古のDNAを一部呼び覚ます、強力な魔法なんだよ」

ブローチとかチョーカーとか、アクセサリー系の魔具は全部外されていたけど、これは外し忘れていたらしい。私も今まで存在を忘れていた。

しかし、そういうことなら剥がしちやえば解決なんじゃないだろうか。目の下のつけぼくろをペリペリひっかきはじめて私に、しかしプラネタはにべもない。

「残念だけど、剥がしても意味ないんだ。もう発動済みだからねー。脳のほうをなんとかしないと。まあ、それはおしゃれだと思ってつけておいたら良いんじゃないかな。カナちゃん、そのほくろとつても似合ってる。かわいいよ。ちゅってしたいくらい」

……………この子と私って、初対面だよな……。なんか妙になれなれしい態度をとるプラネタの様子を意に介さず、アジュは聞いた。

「暗示を解く方法は？」

「やれなくはないだろうけど、僕はやだなー。脳神経だもん。細かいとこいじるとの苦手なの。カナちゃんがやれっていうならやるけどさあ」

四人の視線が一気に集中する。私はふるふる勢いよくかぶりを振った。自信ないなーって言うてる人に脳味噌を預けるつもりには絶対なれない。

やっぱり私の声が出ないのも動けないのもクラージュの仕業ってことで確定だ。

でもこの呪いとやらを解かないままじゃあ、私はずっとクラージュに口封じされたままだ。アジュのことを助けてあげることができないし、私の元々の目標も…つまり、アジュから色々聞き出すこともままならない。

どうすんのさ、という表情でアジュを見てやると、アジュは魔具

が乗ってるデスクから、こまかい砂の敷かれたお盆と、DSのタッチペンみたいな木製の先の丸いペン、それから消しゴム代わりに刷毛を出してきて私に渡してくる。

「右手の具合はいかがですか？ 筆談させていただきたいと思うのですが…」

「……………」

私は首を傾げた。

右手のコンディショニング的なことだけなら、砂に文字を書くくらい、筆圧もいらぬし何とかなると思う。

でも問題は文字だ。私が書けるのはもちろん日本語だけだ。英語だって怪しい。グラナアーデの文字は、読めるだけで書けない。

どうしようもないぞ、という意味で肩をすくめてみせると、アジユは突然、ぽつりとつぶやいた。

「……………あの絵のタイトル……………」わたしのかんがえたさいきょうのタチコマ……………でしたよね、確か」

私は口をぽかんと開けた。……………確かにどっかで書いたぞ、そのフレーズ。

「ね。日本語、読めますから大丈夫ですよ」

アジユはウインクして不敵に言った。

アジユから聞いた事情はこうだ。

アジユはグラナアーデの人間ではない。

私や葉介みたいに、地球でもグラナアーデでもない、もっと別の世界からやってきた。髪にお花が咲いているのはそのせいだ。アジユの世界に名前はないけれど、アジユは『同盟』ということこ

るの元冒険者で、その元冒険者の力…アビリティを駆使して、私たちがこのところでスパイをやっていたらしい。

ちなみに『元』冒険者なのは、何かの理由で引退したとかじゃなく、その世界はいろんな争いごととかが全て解決されちゃったからさそうだ。

脱線ついでにアジュから説明されたアジュの特殊能力を、とりあえず列挙してまとめてみよう。

- 1、細かいニュアンスは別として、あらゆる文字が読めるし、書ける。
- 2、もし森に住み着いた場合、自分の意志とは関係なくその森を迷いの森にする。
- 3、髪の毛にお花が咲いている。
- 4、精神年齢≠肉体年齢で、寿命がない。

しかし髪の毛にお花が咲いてるって物理的におかしい。私はお盆の縁をペンでカンカン叩いて突っ込みたいてっていう気持ちを表す。アジュは肩をすくめた。

「これが、紋章術士という冒険者クラスを選択した、ドリアドという種族の特徴なんですよ。……まあ、直接関係のないことについて詳しく話しても仕方ありませんから」

不完全燃焼の私を放って、アジュは続きを話し出す。

「私は元の世界で、恋人と楽しく暮らしていたのですが、ある日私たちがデートに出かけた先で、恋人はゲルダガンドの神官に召還されてしまったのです。ある鉱物を生み出す『鋼の姫』として」

そうだ。アジュがさっき、『私の恋人も紅玉鉱脈と同じように閉じこめているのか』なんて言ったから、私も思わず我を忘れてしまったのだったな。だって、それってアジュと私が、同じ立場だって

意味だから。

「私は恋人と手をつないで離しませんでしたから、一緒に召還されました。神官達は、どちらが目的の人物が分からなくて、一時混乱したようでした。何しろその時、私は女装していたので」

カンカンカンカンカンカン！

私はまた砂盆を激しく叩いて突っ込みの意を示す。

なんでだよ。さらっと言ったけど、なんで女装なんだよ。確かにアジュはわりと女顔の方だから女装しても全く違和感なさそうだけど、アジュってそういう趣味の人なんだろうか。

私の言いたいことを表情で感じ取ったのか、アジュは答えた。

「いえ、私の趣味じゃありませんよ。彼女のリクエストだったんです。女装は同盟の文化とはよく言ったものでして」
どうという文化だよ。

「他にも同盟の冒険者には色々と独自の風習があるんですよ。死亡フラグを思いつく限りありつたけ立てて、逆に生存フラグに変えることが一時大流行だったとか、その一環で出陣前後にはパインサラダを皆で食べるとか……あの、もういいですか？」

……悪ふざけの固まりみたいなお世界だ。絶対住みたくない。

しかし、これが変に話がややこしくなっている原因だったってことは想像に難くない。

アジュは、アジュ達を呼んだ神官が『アジュとその恋人のどちらが鉦の姫か分からなかった理由』を、自分が女装していたからだと思っっているんだ。

つまりアジュは、鉦の姫は姫という名の通り、女しかいないと思っっている。

だから『紅の鉦の姫』の正体に近いところまで探り当てたのに、葉介じゃなくて私が紅の鉦の姫だと勘違いした。たぶん、葉介から渡されてたルビーの文鎮が良い仕事したんだろ。使い道がないと思ってたけど、何がどこでどう役に立つかわかんないものだ。

「私達を召還した神官達になにか良からぬ思惑がある事は歴然としていましたから、私はそのまま女の振りをして脱出の機会を待ったのですが……神官達は、何らかの方法で、目的の人物が私の恋人の方だと断じたようです。

私が男であることもその後ばれてしまいました。鉦の姫は、処女でなくてはならないのです。鉦の姫に恋人は邪魔だ、と私は命を狙われました」

なるほど。それで、暫定『紅の鉦の姫』である私の処女を取りに来たってことらしい。

まったく、ひどい話だ。私がじろつとサビアンを睨むと、サビアンは小さくなる。

……関係ないけど、葉介がコンドームを使えないのも同じ理由かもしれない。男は後ろの処女ですよとかそういうことだったら私は遠慮なく大爆笑する。

「恋人と二人で応戦したのですが、私は女装していたせいで本来の力が発揮できず、結局私達は敗北し、恋人とは別れ別れになってしまいました。全く、あの時はもう一生ネタ装備はやらないと決意しましたね！」

……ネタ装備ってあんた。お盆をたたくのはやめといたけど、本当に悪ふざけの固まりのような世界だ。

「その後、半死半生の状態で打ち捨てられていた私を拾い上げたのがサンタリアです。サンタリアは、ゲルダガンドの国力を殺ぐため

鉦の姫の……ひいては私の恋人らの解放に助力することを約束してくれ、私は恋人に関しての情報収集もかねて、まずはルビーの出所である荒野シユツルクを探っていたのですよ」

確かにこれなら兵隊の人死にも少ないだろうし有効な方法なんだろうけど、そんな理由で被害者でしかない鉦の姫が処女を狙われたんじゃ、たまつたもんじゃない。

特に私は人違いだ。こんな状況でまた襲われたりなんかしても、誰も得しない最悪の結果しか待ってない。アジュが来たからにはもうそんなことは無いだろうけど、後でもっとちゃんと抗議しとかなくちやいけないな。

…おつと話が逸れた。今、アジュは重要なことを言ったぞ。私と葉介が無事に家に帰るために大事なことを。

つまり元々、黒曜軍にまぎれこんだスパイは、戦争を有利に進めるためじゃなく、最初から紅の鉦の姫が目的だったってことになる。それなら、鉦の姫うんぬんの秘密がバレないために謹慎してたのに、無駄だったんだな。

そういう事情なら、超超極秘の『鉦の姫』の秘密がサンテリアにだだもれだった理由も納得がいく。だって、鉦の姫召還事件の被害者本人がスパイなんだもの。

今、私が紅の鉦の姫だと思っ込まれている状態でも、アジュは私を助けに来たし、サビアンも無理に抱いたりしなかった。ということとは、サンテリアという国の方針はまだよく分からないけど、少なくとも鉦の姫たちを狙っている現場の人間は、鉦の姫たちを傷つけるつもりはないってことだ。

ざっとした説明を終えると、アジュはちよっぴり安心した私をひたと見据えた。

「そこで、花奈さんにお聞きしたいのです。神官達はなぜ、私の恋人が鉦の姫であると断じたのでしょうか？ もちろん何かそのような目印になるものがあることは間違いないでしょうが……」
なるほど。私の方も色々教えてもらったし、このくらいなら教えても大丈夫だろう。

私は砂のお盆にまず、『かんじょうとうつわ』と走り書いた。

『鉦の姫は、みんなそれぞれ器が用意されてる。その器から、鉦の姫の感情に合わせて宝石が出てくる。うちは『熱情』だから、怒ったりすると箱の中からルビーが出る』

狭いお盆いっぱい、私は文字を書いていく。書いた文字は、アジユがその通り音読して三人に聞かせてあげている。

たくさん書くから何度も消し直さなくちゃいけない。さつさと書いてはさつさと消していく私の手を、アジユ達四人は頭を突き合わせて見守った。私の文字が読めるのはアジユだけだから、覗き込んだって意味ないのに。雰囲気ってやつだろうか。

『だからその神官達も、アジユだけ怒らせるとか、その彼女だけ悲しませるとか、そういう風の実験したんだと思う』

こう書いたところで私がいったんペンを置くと、アジユは砂盆を見つめたまま呟いた。

「感情とリンクしているとは……。では、彼女を助ける際にはその器も探し出して奪取するか、最低でも破壊しなくてはならないということになりますね」

破壊はまずいんじゃないかな。クラージュの見せてくれた紅の小匣、ものすごい値打ちものっぽかったから。

MOTTAINEIスピリットってものが、日本人どころか地球人ですらないアジユには備わってないのか、アジユはそれきり興味を失ったようにさつさと話題を変えてしまう。

「花奈さんは、他の鉦の姫が皆どこにいるかご存じですか？」
これは……。うーん。私は首を傾げた。

本当は、一人だけ知っている。首都に、『黄金鉦脈』っていう人がいるって、前に葉介が言ったのを覚えてるのだ。

ただ、金を出す黄金鉦脈が、ゲルダンガンドの財政のかなりの部分を支えてるってことは想像に難くない。

紅玉鉦脈はそんなにすくなくないから処女のままでもいいさせてやるけど、黄金鉦脈は別。……とか、そういうことになっちゃうかもしれない。

結局私はこう書いた。

『鉦の姫たちがどこで暮らしているのか、全員分知ってる人なんて誰もいない』

「というの？」

『隠されている。鉦の姫の誰か一人が危険な目にあったりしても、芋蔓式に鉦の姫全員が危険な目にあったりしないように』

「なるほど。では、花奈さんは他の鉦の姫のどなたかで、居場所をご存じの方はいますか？」

「……しらばっくれきれなかった……」。

『知らない』

「知っついそうな反応ですね」

アジユは苦笑した。

『乱暴されると困る』

「返す言葉もありません」

アジユはちらつとサビアンを見やった。サビアンは小さくなる。

「面目ない。しかし俺も王太后の……」

「サビアン」

バルバトが名前を呼ぶだけでたしなめると、サビアンはますます

小さくなる。この人さつきから「サビアン」としか言っていないけど。アジユは、焦れているだろうに、優しく優しく、私の目をのぞき込んで聞く。

「では、これだけ教えていただけますか。花奈さんが居所を知っている鉦の姫は、何の鉦の姫なのでしょう？ 花奈さんの居場所を知っている方が私の恋人なのかどうなのか、それだけは確認したいのです」

アジユだって必死だ。彼女を見つけたさなくちゃいけないんだから。ここが落としどころとして妥当なのかどうか、バカの私にはいまいち判断つかないけど、今ここに葉介も幹也もない。私が一人で判断するしかない。

結局私はこう書いた。

『黄金鉦脈』

アジユが私の書いた四文字を静かに読み上げると三人は同時に息を呑んだ。

「感情に合わせて、金を出す……！？」

「どーいう仕組みなんだろ？ 研究してみたいなー、魔法使的に
はー」

「……やはりこの戦、長引かせてはならんか……」

ほらやっぱりこうなった。後悔の波が打ち寄せてくるのに耐えながら、私は四人の顔をぐるっと見回す。何でもない、って顔をしてくれているのはアジユだけだ。

「ありがとう、やはり私の恋人ではありませんでした。鉦の姫の処遇についても少し聞かせてください。紅玉鉦脈や黄金鉦脈は自らの意志でゲルダガンドに仕えているのでしょうか？ 脅されたり傷つけられたりはしていませんか？」

私は少しほつとした。別に答えても問題なさそうなことを聞いてくれたからだ。

紅玉鉾脈である葉介はノリノリで、戦後処理までおつきあいする気満々だ。ルビーを出す段階でちらほら擦り傷は作ってるけど、脅されてはいない。葉介の話じゃ、黄金鉾脈も頑張ってるらしいし。

『大丈夫。不自由は多少あるけど平気』

「不自由とは？」

私は悲しくなっってちよつと俯いた。

『家に帰れない。帰りたい』

葉介と一緒に、家に帰りたい。今でもちゃんと、葉介も私達の家に戻りたいって思ってくれてるだろうか。

紅玉鉾脈（つていう設定）の私が弱音を吐いたせいで、アジユもなんとか鉾脈をやってる彼女のことを心配になったんだろう。ぎゅつと拳を握りしめた。

「……閉じこめられているだけで傷つけられていない可能性が高いと分かったただけ前進だ。そうだろう、アジユール？」

「そうですね」

気休めを言うサビアンに、アジユはぎこちなく笑い返した。

しかし、ある意味ではサビアンの言うとおりだ。なんとか鉾脈であるアジユの彼女は処女でなくてはいけない、なんて理由で、アジユは殺されかけたのだ。残された彼女がひどい目に遭ってないって分かっただけでもちよつとほつと出来るんじゃないかな。

頃合いを見計らって私はペンを砂盆に滑らした。

『私も聞きたい』

「どうぞ」

『屍人兵のこと』

アジユを含む三人は顔を見合わせた。なんとなく気まずそうな顔だ。ただ一人ポーカーフェイスを保っている寡黙だったでかい人……バルバトが、しゃがれてかすれた声で言う。

「というのは？」

『ジユノ達は和平するためにいろいろ準備してたのに、なんで屍人兵なんて使ったの？』

戦いは何も生まない。戦争中は常に劣勢に立たされてたっていうサンテリアが、和平する気満々のゲルダガンドにあんなものを持ち出してきた意味が分からない。

「さて、おかしなことを言うものだ。戦とは、どちらか一方のみがするものではない。和平を目前にしても黒曜軍は兵を揃え、進軍した。この事実を無視するのか？ 黒曜軍が駒を進ませなければ、衝突は避けられたのだ。屍人兵に関しては、打った策が成就した。それだけのこと。とやかく言われる筋合いはない」

バルバトに静かに言われて、うっと私は言葉に詰まる。まったくもって正論だったからだ。とっさに、

『でも、』

って書いたけど、その後は続かなかった。反論の余地がない。

屍人兵を使っていなかったら、ジユノ達が生きたサンテリアの兵隊をめちゃくちゃに蹴散らしてただろう。

屍人兵なんて死んだ人を冒瀆する行いだってことは分かるけど、だからって打てる手があるのに生きてる人を危険に晒すのはよくない。……っていう考え方があることを、否定しちゃいけない。私の脳味噌じゃ、正しいのか正しくないのか、ちゃんとした判断はくだせない。

私は『でも』を刷毛で消して書き直した。

『おっしやるとおり。ごめんなさい』

……そしてちょっと考えてから、私はこう書いた。

『それとは別に聞きたい』

「答えるとは限らんぞ」

多分答えてくれないだろうな、って思いながら私は書いた。アジユは私の書いた通り読み上げてくれる。

『バルバトはさっきの質問、半分しか答えてない。屍人兵の意義は分かった。でも、使った事情が分からない。他の国に嫌われてもよかったの？ 和平なんかどうでもよかった？』

屍人兵は強かった。動きが鈍いとか単調だとかぼろくそに言われていたけど、確かに一度、黒曜軍は敗走した。

有り余る財力を武器に今まで勝ちまくってたゲルダガンドが、上から目線で和平を取り結んでやるうと思ってた矢先のことだ。そのサングリアに一度でも負けたりなんかしたら、ゲルダガンドは意固地になる。というかゲルダガンドの偉い人たちは皆そう思うだろう。

『本気を出せば』勝てる相手だ。もう一回痛めつけてやれ。

ジユノ達は和平を結びたかったとしても、そう思う人がいっぱいいたら、和平は遠のく。

『屍人兵はずっとは通用しないって、ジユノ達は分かってた。サングリア側はもつとよく分かってたと思う』

サングリアも意地になつてんだらうか。終戦間際の日本みたいにみんな意地になって、戦争をやめるにやめられなかったんだらうか。ずっとは効かないって分かってても、他の国にどん引きされるって分かってても、屍人兵を使いたくなっちゃうくらいに？

アジユが砂盆の文字を読み上げるのをやめるなり、テントの中は

しんとなった。バルバトは、やがて意味ありげにサビアンへ視線をやる。サビアンは口をへの字にしていたけど、彼もやがて口を開く。

「……………あれらは、我らの指揮下にある軍ではない。現在サングリアの政治は二つに分かたれている。王弟である俺を慕ってくれる者たちと、お体のお弱い王を擁する王太后に率いられる者たちとにな。今までそなたら黒曜軍と交戦していたのは我々『花菱』だが、屍人を率いるのは『濔標』……………王太后の軍だ」

わあそなたとか言い始めたこの変態。……………とは、思っただけで書かなかったから、サビアンはむっともせず説明を続ける。喋れないのも善し悪しだ。

「王太后は王族の誇りとやらを守ることに汲々としておられ、この勝ち目のないいくさにおいても、ゲルダガンドに一矢報いることだけを考えておられるようだ。

先ほどまでこのバルバトが濔標と黒曜軍との戦場を偵察していたが、濔標が率いる屍人の数はほぼ、倍に……………黒曜軍の数も大きく数を増やしたそうだな。

これでは和平はとうてい不可能だ。我がサングリアも、そなたらゲルダガンドも、落としどころを失った。

……………悔しいことだが。今の我らには王太后を止めるだけの力はない。いくさはまた、続くだろう。今度は、サングリア全土を焦土に変えるやもしれん」

「……………」

サビアンが歯ぎしりした耳障りな音も、どこか遠くに聞こえる。戦争が終わらない。

それってつまり、葉介も日本に……………私たちの家に帰れないってことだ。

一気に重苦しくなった雰囲気の中、アジユは追い打ちをかけるようにこう聞いた。

「……………花奈さん、もう一つ、聞かせてください」

なあに、と聞き返す暇もなかった。

アジユは、よりにもよって、最後の最後にとんでもない質問を隠し持っていたのだ。

「花奈さんは、紅玉鉾脈ではないのではありませんか？」

The 4th Attack!! 7

ジユノは結局、駐屯地にとって返すことはしなかった。

花奈には『常にゲルダガンドが優勢であった』と伝えさせていたが、これは、クラージユとは正反対にできる限り花奈に偽ることをしなかったジユノの、たった一つのうそである。

実際の戦況は、ほとんど五分と五分、拮抗している。戦場に立たせるつもりがなかった花奈に対してのみ常勝を騙ったのは、家族思いの彼女を落ち着かせる以上の意味はない。

花奈以外のすべてのものが分かっている。

この戦は長引く。そして、どちらかが勝つことも負けることもないだろうと。

だからこそ、反古になった和平が惜しまれた。もしゲルダガンドに花奈に騙ったような力があれば、この戦はそもそも長引かなかつたろう、とジユノは一人、黙想する。

尋常の戦争では敵軍の三割も殺せばほぼ潰走と言われるが、屍人の群は恐れも撤退も知らない。せめて五割は削らなければ戦果が得られないこの状況で、元々の数で劣る手勢を更に分かつのは下策中の下策であるし、ジユノには、サンテリアは駐屯地を落とせないといい確信があった。

そも、魔法というものは複雑な術式を用いれば用いるほど防御や解呪も難しくなる。ジユノらは知らぬことであつたが、花奈を縛つた『人魚の呪』をプラネタが解きたがらなかったのも、人魚の呪が人間一人の細胞内に作用するのみの、ごく小規模かつ複雑な魔法だったからに他ならない。

しかし城や地域、国といったものを攻撃できるような大魔法となれば話は別だ。大きなエネルギーを操作する際に複雑な術式を経れば、むろん制御は困難を極め、暴走の危険も大いに高まる。

よって大エネルギーを操る際の術式は、考えられる限り簡略化されるのが常だ。そして、そういった簡易な魔法は、同じく防衛も容易である。

なにより駐屯地にはクラージュを残してきている。クラージュは数多の魔導士の中でも指折りの頭脳と精神をあわせ持つ希代の大魔導士だ。その彼を出し抜き、重力魔法あるいは電磁気力魔法で駐屯地をどうこうすることは、現実的にほぼ不可能であるはずだ。

更に仮説を一步進め、クラージュが既に何らかの方法で（それもまた、通常想像し得る方法では困難であるが）暗殺されていたとする。しかしこの場合も、駐屯地は落とせない。

駐屯地からは少し離れた高台に、彼の頭上に空いている時空の穴と同質の『虚』である『転移門』があるからだ。

転移門はゲルダガンド国内の各所に設置された巨大な建造物だ。だがその実体は門とは名ばかりである。

転移門には、通常の門が擁する内部も、隔絶する外部もない。ただ二次元的にそびえ立つその門をくぐり抜けるだけで、人は遠く離れた他の地の門へ瞬時に移動できるのだ。

『ものごとのマクロな構造を支配する力』である重力魔法をかけられた特殊な門は、各地からこのシュツルクへ兵員を集める際にも大いに役立ったが、逆に言えばこのシュツルクから兵員を撤退させることも容易にしている。

本来駐屯地など、あってもなくても変わらない。戦いのその都度軍を転移門から送り出せばいいものを、あえて駐屯地などという面倒なものを置き、維持しているのは単に示威的存在に他ならない。

今駐屯地を落とそうと、兵員のほとんどは出払っているのだから、戦力を殺ぐことにすらならない。

更に、更に仮説に重ねてみて、サンタリアが転移門そのものを落とそうとしたとする。しかし、そうしようとするならば、一が全と繋がっている転移門の性質上、すべての転移門を同時に落とさねばならない。

現実的困難および戦略的妥当性の無さから見て、駐屯地は安全だ。しかし、妙と言えば妙でもあった。

現実には、ナルドリングは竜の姿に変じてまで、葉介を駐屯地から逃がしてきているのだ。

ジュノはここで、ちらとだけ（手段はともかくとして）駐屯地が落ちている可能性を考慮した。だがジュノはやはり、軍を割ることはしない。

紅玉鉾脈である葉介と、その従者ナルドリングは生き延びている。たとえ副官であるクラージュが死のうと、紅玉鉾脈の妹である花奈が傷つこうと、そして留守居を任せた兵たちが散り散りになろうとも、紅玉鉾脈である葉介を、億万が一にも危険に晒すことはできない。たとえ、葉介から憎まれたとしても。

とはいえ、葉介はいまだぐったりとしたまま、背の高いミュゼにつり上げられるようにして肩を貸されている。

そも葉介が状況を理解できるようになるまでは、少し時間がかかりそうだった。

色々支度をすませて池に飛び込んだ時、ある程度高さのあるところに放り出されるだろうということは予想していたから（花奈が投げ返してきたミカンの角度と勢いからして）地上2メートル以上のところで投げ出されても、俺はちつともビビっていなかった。

別にやせ我慢じゃない。俺はそのへん、凶太く出来ている。ビビらされると逆ギレするクセのある葉介や、『遠い目』になって現実逃避し始める花奈とは違う。

その証拠に着地にはミスったが、心臓は通常運転だ、息も切れない。おみゃのミカンも無事だ。誰も受け取らなかったが。田中さんがくれるミカンはうまいのに。

異世界は想像してたより荒れたところだった。地球で例えるなら、温暖化の影響をモロに受けたモンゴルの元草原地帯に中世ヨーロッパの軍隊がごちゃごちゃ……ってところか。葉介も花奈も、ちゃんとメシ食わせてもらえてるのかな。危ない目に遭わされてたら許さない。

と、そこでやっと俺は葉介の顔をまじまじと見た。葉介は、キリンによく似た同い年くらいのやつに肩を貸されて、しんどそうにしている。

俺が食おうって言ったミカンを全力で拒否してたところからして、具合が悪そうにしているも、話せないわけじゃないらしい。

「ねえ葉介、花奈はどこ？」

「……………あれ。なんでいないんだ」

葉介は顔をしかめて周りを見回した。

「一緒じゃないの？」

「そりゃさつきまで一緒だったよ。……………気絶してる間に、ここまで運ばれてきたみたいだ」

「軟弱だな。一年の時みたいだ」

「あれは剣道部のしごきだから根本的にちげえんだよ！」

懐かしい。葉介は一年の時、家に帰るなり飯も食わずにばったんばったん気絶していた。気絶した葉介を布団まで引きずっていくのも、夜中に起きてきて一人で飯を食う葉介の世話をしてくれるのも、俺と花奈の仕事だった。

「もうやらないの、気絶」

「やらねーよ」

「じゃあいいや。」

「そんなことより花奈はどこにいるのか探さない」と

「そんなことよりも何も話逸らしてきたのは幹也のほうじゃねーか」

「で、花奈は？」

「……さあ」

「さあじゃないでしょ」

俺がちよつとイラつとし始めたのを感じたのか、葉介は調子悪そうに、キリンに担がれてない方の手でこめかみをぐりぐり刺激している。こめかみのツボはあんまり強く刺激しすぎると逆によくないと、葉介は知らないようだ。

「……いるとしたら、駐屯地。……だと思いたい」

「駐屯地？」

「今住んでるとこ」

「じゃあなんで葉介だけここにいんの？」

「だから知らねーってば」

「じゃあ花奈がどこにいるかわかんないじゃん」

「だからわかんねーんだってば」

「……ってば、じゃないでしょ。軽く眉間に皺が寄ったのが分かる。」

「だめじゃん」

「だめだな」

駄目に決まってる。俺はとげとげしく葉介を見上げる。キリンの肩から葉介の腕をはずさせ、俺は葉介をまっすぐ立たせた。そんな

タラタラした姿勢でするべき話じゃなかったからだ。断じて別に見上げる姿勢が癪だったからじゃない。葉介は運動部のくせにそのへの礼儀つてものが理解できてない。

「あのね葉介。これ、言つとくけどヤバい状況だよ。分かってる？」

どういう戦いを繰り広げてる場所は知らないが、葉介本人も自力で立っていられないほど体に不調をきたし、向こうで俺には既にもう一瞥もくれずに軍を指揮してる黒い男は手負いのようで、あそこでぐったりして動かないのは赤い竜だ。

こんな世界で行方が知れなくなってる花奈の無事を、一体どこのだいつなら保証してくれるっていうんだ？

しかし、葉介は打つても打つても響かない。西郷隆盛を見習えと言いたい。葉介はしんどそうに（というか眠そうに）目を細めながら、かろうじて座り込まないで立っているという感じだ。葉介はガリガリ頭をかきむしって歯ぎしりした。

「分かってるよ。確かにヤバい。何で俺はこんなところにいるんだ？」

それはこっちが聞きたいよ。イライラピリピリし始めた俺たち二人の家族の会話に、突然、さっきまで葉介に肩を貸していたキリンみたいなのがおずおずといった感じで口を挟んでくる。

「あのさ……花奈なら今どこにしようと思ってるよ」
「どこにいようとクソも今まさにここで戦争やってんじゃん。そのキリンは戦闘地域で邦人誘拐のニュースにも心を痛めないクズ野郎なの？」

「……………」
葉介は、目を開けている幅をほんの少し広げて、俺をまじまじと見る。

……………いかん、口調が崩れた。本来俺は、あんまり悪い言葉は使

わないことにしている。花奈が周りにものすごく影響されやすいからだ。影響元は基本的にマンガとかゲームとかだけだ。

麒麟みたいなのはさらに言い募る。

「誘拐されたって決まったわけでもねえだろうが。駐屯地に戻ってみたら案外一人で昼寝してるかも。ていうかその可能性の方が高くないか？」

「じゃあ何で花奈をおいてきてるのさ。誘拐されたのは葉介の方ってこと？」

「だーから！ 誘拐っていう考えをまず捨てろって。葉介が寝ぼけてここまで来ただけかもしれないじゃん」

誘拐という考えを捨てるのは恐れ入る。葉介と花奈が家に帰ってこない時点で、既にこいつらは誘拐犯ってことになるって自覚がない。

無為を承知で麒麟に似てる奴に噛みついてやろうかどうかどうしようか考えていると、葉介が口を開いた。

「分かってるよ、ミュゼ。花奈はたいていのことは自力で『帳尻を合わせる』。でも、俺たちが花奈を心配するのも勝手だろ？」

葉介はそう言いながら、ふらふらと赤い竜の方へ歩み寄っていく。葉介は、根本的には花奈なら無事だって信じてるみたいだ。俺の見解は違う。

俺と麒麟男は何となくそれについて行った。整地されてるわけじゃないから、キャリアバッグが転がりにくくて荷物だ。

「葉介は見解が甘いね。花奈がゴジラなら自力で何とか出来るだろうけど」

あいにく花奈はゴジラじゃない。東京タワーもぼつきり折っちゃうような、そういう破壊的パワーが花奈にあるなら俺だって多分心配しないけど、ここは戦場で、花奈は普通の（しかもちょっとバカ

寄りの（女子高生だ。こんな舗装されてない荒地を歩いたら一時間もしないうちに靴擦れしちゃうだろうし、寂しくなったら泣いちやうかもしれない。

葉介は赤い竜のそばに座り込んで、鱗の流れに沿って撫で始める。竜はそうされると気持ちがいいようで、たまに尻尾やまぶたをぴくりぴくりとさせた。

二重誘拐の可能性についてまるで検討しようとしぬ奴らをほつとして、俺は葉介に聞いた。

「で、駐屯地つてどっち？」

「いつの間にかここにいたって言っただろ」

つまり分らないらしい。俺はキリン男に向き直ってもう一度聞きなおした。

「ね、駐屯地つてどっち？」

「え？ え？ あ、えーと……あっちだな」

キリン男が指さした方に向けて、俺はコートのポケットから磁石を取り出した。方角は南南西。正確かどうかは知らないが。葉介が下から口を挟んでくる。

「幹もお前、馬乗れる？　なんか足がねーと駐屯地に着くまでに日が暮れるぞ」

「馬？　うーん、多分」

多分、駄目だろう。別に俺は運動神経がいい方じゃない。軍馬にまたがって振り落とされないうでいられるか、そもそも俺の行きたい方向へ進んでくれるかはちょっと未知数だ。

葉介ははあ、とため息をついた。俺と同じ危惧にたどり着いたらしい。葉介は言った。

「……おいミュゼ、悪いけど」

怪訝そうに答えたのはキリンだ。以後ミュゼと呼ぼう。

「悪いけども何も話が見えねー」

ミュゼというのは察しの悪いやつだ。葉介は辛抱強く繰り返した。「花奈の様子を見に駐屯地に戻りたい。幹也のこと送ってやって」

するとミュゼは目をむいてあからさまに引いた。

「俺がかよー!」

「やっぱ誰か直接様子を見に行くべきだろ。クラージュからの定時連絡あつたのか？ ジュノの護衛なら知ってるはずだよな？」

「ないけど……いや、二時間おきのがそろそろある。多分あと十分くらいで」

「……幹也、十分待つってみる？」

「待つわけないじゃん」

葉介が一応、つて感じで聞いてくるけど、俺は即答した。一分くらいなら待たないでもないけど、十分なんて論外だ。葉介もこう返事した。

「だよなー」

「ミュゼ、馬乗れるなら早く連れてつて。あと三十秒だけ待つ」

「ちよっ……ちよっと待てー!」

ミュゼは更に後ずさつた後、一目散にかけだした。駆けていった先は黒い鎧の偉そうな奴のところだ。俺はそれ以上ミュゼを見なかった。さっさと話をつけてくれればそれでいい。

「で、葉介はなんでこないの？」

葉介は俺についてくるつもりがないようだ。手間を省くためになんかそのことを前提にして俺が聞くと、葉介は赤い竜の首を抱いて暖めてやった。

「この翼竜、ナルドっていうんだ。悪い、幹也。こいつのことほっ

とけないから」

「オツケー」

竜なんかより花奈を優先しろよと言いたいところだが、無理強い
は出来ない。第一、足手まといになりそうだ。

ただし色々聞いとかなくちゃいけないことはある。

俺が持ってきたキャリアバッグを葉介に託し、色々この世界に
ついて質問責めにしてる間に、ミュゼは栗毛の馬を一頭引っ張って
くる。時間切れだ。残りは花奈と合流してからってことになる。

「おい、幹也！ …… 幹也だよなお前！？」

「幹也だよ」

ミュゼがなんで俺の名前を知ってるのかは知らないが、確かに俺
の名は幹也だ。

ミュゼは先にその栗毛の馬にまたがった後、俺を馬上に引っ張り
あげる。

「お前さつき多分馬に乗れるって言ったか！？ 幹也は馬乗ったこ
とあるのか！？」

「ラクダなら動物園のふれあい広場で一回」

「つまりまるで駄目ってことだな！？」

「まるで駄目かどうかはやってみないと分からない」

「その根拠のない自信はどこからくるんだよ？ …… いいか、たて
がみをつかんでろ。絶対に離すんじゃねーぞ」

俺は言われた通りたてがみをつかみ、宣言した。

「よし。じゃ、出発」

「てめーが指図すんじゃねー！！ 連れてってもらっつー謙虚な
心を忘れんなよ！」

そうだ、一つ葉介に言い忘れていたことがある。背中ミュゼが
ぎゃーぎゃー騒いでいるのを聞き流し、俺は葉介を見下ろした。

「葉介、無事でよかった。後は俺に任しといて」

「……………」

葉介は俺の目をじつと見る。俺もじつと見つめ返す。

やがて葉介は、俺が安請け合いしたのを承知で、ふっと軽く息をついた。

「……………悪い、任した」

「うん」

俺は軽くうなずいた。

よし、行くか。

駐屯地とやら言うところは、高い石垣に囲まれていた。どこかが破損しているという感じはない。

しかしミュゼは血相を変えていた。馬に乗ってる間に駐屯地からの定時連絡を受け取った葉介から、こつちにもその内容が転送されてきて、駐屯地が襲撃を受けたのはほぼ間違いがないと分かったからだ。何でも、副司令とかいう男が刺されて重傷らしい。花奈については情報が回ってこない。

騎馬のまま俺たちは石造りの塀の中に飛び込んだ。すると石でできているのは塀だけで、中では生成色のテントを建てて生活していることが分かる。セキュリティ的にどうなんだ。

訓練施設のようなものを一気に突っ切ったところで、俺たちはやっとなとねとした汗をかいている馬から飛び降りた。ちなみに汗がねとねとしているのは汗の中に馬特有の成分が含まれているからだ。まったくどうでもいい知識を実証してしまった。

ミュゼは岩のようにでかいおっさんに対して、噛みつかんばかりの勢いで叫んだ。

「主計兵長！ 副司令はどこっすか！！ 生きてますか！」

主計兵長と呼ばれたおっさんもミュゼの倍くらいの声でがなる。

「おお、ミュゼじゃねえか！ クラージュ様は中だ！ あっちは無事なのか！？」

「いいわけねーでしょ！ まだ押し戻しきれてません！」

ぎゃーぎゃー騒ぎ合いながら二人はテントの林のうちの一つに飛び込んでいく。俺も着地に失敗したせいで出遅れたが、一足遅れてそれに続く。

そのテントは、医務室として使われているようだった。得体のしれない茶色や緑の瓶、丈は長いが寝返りが打てるかどうかは不安な細長いベッドなんかがたくさん置いてある。そのベッドの一つに、ゴルドンレトリバーによく似た毛並みの人形めいた顔をした男が青ざめて横たわっていた。

その男が件の刺された副司令であることはすぐに分かった。別に副司令っぽいオーラが出たからとかじゃなく、そいつの腹には銀色の長剣が突き刺されたままだったからだ。

「副司令ー！！」

ミュゼは寝ている男に飛びついていますます騒ぎ立てる。

「副司令！ 副司令！ 生きてますか！ 息してますか！ 副司令が死んだら俺実家になんて報告すればいいんですか！！」

「騒がないでください、ミュゼ。ここは病室ですよ」

副司令は手首のスナップを利かせてミュゼの額をはいたが、その仕草には力がこもっていない。剣が刺さったままなんだからそれも当然だ。むしろこれだけぺらぺら喋っていることさえ、驚異的にも思える。早くその剣抜けよ。せめて気絶しとけよ、って感じた。

副司令はふつとミュゼの背後に視線をやった。言わずもなだが、そこには、主計兵長の体に隠れるようにして、俺が立っている。

「君は……もしかして、幹也君でしょうか？」

「まあね」

知らない奴に幹也君呼ばわりされる筋合いはなかったが、ここを認めとかないと話が進まない。俺は軽くうなずいた。

すると副司令は、少し苦しそうな顔をした。腹が痛いんだろうか。「口元が葉介に似ています。花奈さんとは、目元と……耳の形がよく似ているんですね」

「……………」

口が葉介に、目が花奈に似ているっていうのはわりとよく言われることだが、耳の形まで指摘されたことはなかった。他人に妹の耳の形まで記憶されてるって、いやな気分だ。俺は返事をせず、ただこう聞いた。

「花奈はどこ？」

「……………」

副司令はすぐには答えなかった。副司令は一瞬眉をひそめ、耐えがたい、っていう表情をしたので、俺は何となくその意味を察する。短い沈黙の後、副司令は言った。

「浚われてしまいました」

「うわー、聞きたくなかった。ミュゼも息を呑む。」

「申し訳ありません。すべて僕の責任です」

「そういうのいいから。花奈は、誰に、どこに、連れてかれたの？ 本当は腸が煮えくり返っていたけど、そういうのを責めてる段階じゃない。俺が内心を抑えてこう聞くと、副司令は答えた。」

「花奈さんをさらったのは、サンタリア…我々ゲルダガンドが戦っている敵国です。おそらくサンタリア側の駐屯地にいるはず」

「だめじゃん」

戦争中の敵国にさらわれたって、それ、めちゃくちゃ危ないじゃ

ないか。なんでサングリアとかいう国が花奈を狙うのかはさておいて。

「しかし、花奈さんを連れ戻す方法はいくつもあります。転移門をご存じですか？」

それを最初に言え、と思いながらも俺はうなずいた。もちろん、本当は転移門なんてものを俺はご存じなかったが、それらしきものはミュゼとここに来るまでに見ていた。

「花奈さんには、ジユノという男が魔法的な印をつけています。その他、魔具と呼ばれるものをお渡ししていますので、花奈さんがそれを脱いでさえいなければ転移門を通ってこちらへ無事帰還出来るはず」

それを聞いても、俺はまだほつとはできなかった。生きた花奈に会うまでは、帰ってこれるなんて聞いてもおためごかしにしか聞えなかった。

俺は言った。

「じゃあ、早く帰還させてやってよ。なんでそのままほつといてるの？」

「……………」

俺がこう言うと、副司令の目の色が少し、濃くなった。その様子を見ていて、ふと気づく。そういえば、花奈だけでなくこいつも襲われていたのだと。自分の腹の剣も抜いてないのに、花奈のことを連れ戻しに行けるわけがない。

「……………あんたが動けないなら俺が行くけど」

ちよつとだけ悪いことを言ったなと思った俺がせつかくこう提案してやっても、副司令はまだ、迷っていたようだった。

「……………早く」

だんだんじれてきて、俺はもう一度催促した。

「あのさ。花奈の死体と対面するのなんて絶対ごめんなんだよね」

さすがに、他人の腹の傷一つと妹の命一つを比べてみる気にはならない。

「……………全くその通りです。重ねて謝罪申し上げます」

ようやく副司令も、俺の言いたいことを分かってくれたらしい。彼は俺に転移門の使い方を教えてくれ、胸から茶色く酸化した記章を一つ取り、俺にくれた。これが印籠みたいな役割を果たすらしい。これさえあれば、この駐屯地で見慣れない顔の俺がうるついでいても、しょっぱかれることはないそうだ。

「……………えーと……………花奈のことはまあ、幹也にまかしくとして……………とりあえず抜きませんか？ それ」

「……………そうしたいのはやまやまなんですが……………」

副司令の腹に刺さった剣を指さしたミュゼと副司令ががやがややってたが、俺はもうそれを聞いていなかった。俺はさっさと医務室を離れ、花奈を捜しに出た。

誰も彼も、花奈や葉介のことなんて気にかけていないみたいだった。

たぶんさらわれたということすら知らない人も多いんだろう。いったいなにが起こったのか、把握できてないという感じだ。襲撃を受けたというわりにはどこも荒れてないし、それも当然かもしれない。

どいつもこいつも信用ならない。俺は渡された記章を右手に握りしめ、とにかく一直線に転移門を目指した。

「花奈さんは、紅玉鉞脈ではないのではありませんか？」

「……………！？おい、アジュ！！ ということだ!？」

その質問のあと、ずーっと唾然としていたサビアンがやっと我に返ったようにアジュに食ってかかった。アジュはただ静かな口調で話し続ける。

「……………気になっていました。クラージュは、花奈さんに口封じと処女を奪われないための細工を施したとはいえ、結局は私に花奈さんを奪わせました。」

クラージュは有能な軍師です。癪ではありませんが。本当の紅玉鉞脈であれば、クラージュたった一人であなたを守るような手を打つでしょうか。この世界には存在しない力で襲われ、隙をつかれたとしてもです」

……………確かに、葉介にはナルドがいる。ナルドは絶対に、葉介に敵を近づけさせない。だから、そういう意味ではクラージュも油断したんだろう。私の身の安全まで念を入れるほど、暇じゃなかったのかも。

しかし、そこんところを突っつかれて、見捨てられたって再確認するの、私まだちょっと辛いんだけど。

「何より、今日の花奈さんの装飾品にはやけにルビーが多く使われている。我々の狙いにクラージュが気づいていたとは思えませんが、念には念を入れていたようにも見えます。花奈さん、あなたは、誰かの身代わりを務めていたのでは」

「……………」

そうか、身代わりにされていたのか……………。
アジユの言葉でようやく気づかされ、私はちよっぴり落ち込んだ。

別に葉介の身代わりになるうと思っただけじゃないけど、確かにアジユの言うとおり、クラージュはいざという時の目くらましにするために私にあの、ルビーをたっぷり使った魔具を纏わせただろう。そう思えば、全部説明がつく。

あの時クラージュのポケットから出てきた『刃返し』のチョーカーは二つだった。カエルのデザインのと、鳳仙花のデザインのと。一つは葉介の。もう一つは？

私に魔具をまとわせたとき、クラージュはわざわざ自分の首からウサギのチョーカーをはずして、私につけさせた。

同じ刃返しの力を持っているんだから、わざわざ自分のを使わせる必要なんてなかったのに。

たぶん元々は、葉介にルビーが一つもついていないカエルのチョーカー、私にルビーがたくさんついた鳳仙花のチョーカーをつけさせるつもりだったんじゃないのかな。そう考えれば、つじつまが合う。

葉介が『私の魔具にはルビーが多い』って不思議がった時、クラージュはわざわざ自分のチョーカーを私につけさせて私にべたべたして、しかも私の髪にキスなんかして、葉介の注意を無理にそらした。

私を、もしもの時の葉介の身代わりに使うつもりだったから。そしてそれを、葉介に悟らせるわけにはいかなかったから。

私に危険が迫るかもしれないって思ってたから、あの『刃返し』のチョーカーを絶対にはずすなってあんなに念を押した。

……身代わりか。

あのルビーの魔具、かわいくて、紅玉鉱脈の葉介とおそろいで、気に入ってたのに。

私はしゅんとなった。

あの時のうきうきした気持ちも、クラージュのことを信じてた気持ちも、全部踏みつけられたような気分だった。

クラージュがあの時、ちゃんと葉介のために身代わりをお願いしますって、正面から言うてくれてたなら、私だって絶対、拒まなかったのに。

葉介を思う気持ち。そして、それよりは弱いとしても、ゲルダガンドのみんなを思う気持ち。そういう私の真心をクラージュは信じてなかったんだ。

「……………」

……いやそれよりも。私の気持ちよりももっと具体的に、優先されるべき、差し迫った問題がある。

私は自分の首に手をやって、チョーカーの形を確かめた。ウサギがぴょんと身をのばして跳ねているデザインのチョーカーで、いつもはクラージュがつけていたものだ。

クラージュも、ちゃんと他の『刃返し』の力を持つ魔具をつけていただろうか。クラージュの喉元には、少なくとも鳳仙花のチョーカーは下がっていなかった。

ああしてアジュに動けなくされたところを、ひどいことされたりしてないだろうか。

「……………」
辛いことと心配ごとが多すぎる。私はじんわり浮かんでくる涙を両手でこすった。唇がとんがってるのが自分でも分かる。

しかし、アジュは私の涙がひくのを待ってはくれなかった。私の両手首を握って無理矢理顔からどかさせると、アジュはその体勢のまま私の目をひたと見据える。

「花奈さん、『うなずいてくださいね』。紅玉鉱脈の正体は、花奈さんではなく、あなたのお姉さんなのは」

「……………」

……………な、なんだって……………？

う、うん……………？ 私は軽く顎を引いて、アジュをまじまじ見つめる。

なんていうか、うなずいてくださいね、を妙に強調されたな……………。迫力に吞まれてうっかり頷いちゃった私を、アジュはほっとした顔で見返した。

「ありがとう、花奈さん。やはり、そうでしたか」

……………いや、違うけど。こいつ、またなんか勘違いしてやがる……………。両手をつかまれてるせいで、いや違うよなんて書けたもんじゃない。

アジュは啞然としているサビアン達を振り返って、（間違った）
推理を披露し始める。

「黒曜軍の駐屯地で情報収集している中、どうも解せなかったのは花奈さん達の家族構成です。お二人がごきょうだいであることはわ

「……」
しかし、これは、ぶっちゃけ私のチャンスかもしれない。こんな風に動けなくなっちゃって、これからいつたいたいどうなっちゃうか分からない私に与えられた起死回生のチャンスかも……。

「花奈さん？」

「……………」

この際だ。私はアジュの勘違いにのつかることに決めた。

私はペンをとり、砂の敷かれたお盆にこう書き記す。

『美樹』

アジュが私の書いた文字を読み上げると、サビアンは苦々しげに繰り返した。

「……………ミキ。それが、そなたの姉の名か」

とっさに考えたにしては良い名前だなと思った。花奈、葉介、そして美樹。表意文字である漢字をがんがん読んじゃうアジュも、この名前なら不審がることはないだろう。ましてや、サビアン達がこの名前に違和感を持てるはずがない。

どうせ幹也はグラナアーデにいない。いない人を傷つけることはできない。幹也だってこういう事情なら、名前を使ったことも絶対許してくれるはずだ。

アジュだって大事なことは私にまだ話してない。

彼女の名前とか、彼女が一体何を産み出す鉱の姫なのか、とか。彼女を特定するような情報を出して、彼女がどこか自分の手の届かない場所へ隠されてしまうのを恐れているんだろう。

だったら、私だって大事な情報はちょっとくらいごまかせてもらったって良いはずだ。

アジユ達が本当に『紅の鉾の姫』に危害を加えるつもりがないのなら、『紅の鉾の姫』の正体が、実在しない私の姉であるうが、実在する私の弟であるうが、関係ないはずだもの。目の前にいる私が、鉾の姫の血のつながったきょうだいだってことには変わらないんだから。

だって、サビアンさっき襲ってきたもの。途中でやめたけど。葉介の処女が奪われたら、もしかしたら葉介、立ち直れないかもしれない。B L的な意味で。

心の中で山のように言い訳を重ねていると、ふうと、プラネタがため息をついた。

「……そっか、カナちゃんは紅玉鉾脈じゃなかったのか。カナちゃんしかいないと思ってたけど、こうなるとちょっと手も足も出ないって感じだね……」

「まったくだ」

サビアンも渋い顔だ。私は砂地にこう書いた。

『手も足も出ないってどういうこと?』

アジユは私の書いた文字を読み上げてくれたけど、誰も答えない。だから、説明してくれたのもアジユだった。

「……この際ですからはっきり申し上げます。我々は、紅玉鉾脈を人質にとり、私の恋人ととの人質交換を持ちかけようと計画していました」

「!」

人質交換。それってつまり、紅玉鉱脈自身には特に用がなかったことだ。つまり、鉱の姫なら誰でもよかつたってことか。

葉介本人が恨まれてるんじゃないかって、ほっとしたような、当て馬扱いでなんだかむかつとくるような、なんとも表現しがたい気持ちだけだ。

「おい、アジュール!!」

サビアンが血相を変えてアジュの言葉を止めようとする。でもアジュの表情は固いままだった。

「隠し立てしても意味がないと思いませんか？ この際、花奈さんから紅玉鉱脈へ働きかけてもらうほうが早いと考えます」

「失敗したのはアジュだったのに、よく言ううー」

ぶくつとほっぺを膨らました。それをたしなめたのはバルバトだ。

「言うな、プラネタ。カナが紅玉鉱脈であるはずと結論づけたのは我々の総意だったろう」

さすが、伊達に渋いオーラ出してない。渋いオーラが伊達だったら、伊達メガネなんかメじゃないくらい興冷めだけだ。

でも、なんで紅玉鉱脈……葉介だったんだろう。別に他の誰でもよかつたはずだ。

そのことについて『なんで?』と砂盆に書くと、アジュは一応、という感じでそれを読み上げてから、自分で説明してくれる。

「私の恋人は、我々の手の届かないところに隠されていて、我々独力での奪還は困難が伴います。そのため、我々はゲルダランド国内の宝石の流通ルートから鉱の姫の居場所をおおまかに割り出しました。そして比較的サンテリアからも狙いやすい位置に居住し、しかも価値の高い鉱物を生み出す紅玉鉱脈に目を付けたのです」

「……………」

ほんつつとに、当て馬扱いだな……。いつそすがすがしいほどだ。

アジユも、言いながら『あんまりだなー』と思ったのか、更にこ
う付け加える。

「そのことで花奈さんや紅玉鉾脈ご本人には、ご迷惑をおかけした
と思っています。しかし、もし望みうるならば、私の恋人を取り戻
すため、更には戦争を止めるためには、他に方法が考えられなかつ
たという点もどうか斟酌していただきたいのです」

「……………」
しんしゃくってどういう意味だっけ……………。笑って許してみたい
な意味だったっけか。

とにかく問題はそこじゃない。

「いかがでしょう、花奈さん。どうかあなたから、紅玉鉾脈へ働き
かけてはもらえないでしょうか。『鉾の姫たちを異世界からさら
集めるのをやめさせて』と」

「……………」
まさしく。まさしく、そこが私の最初の目標で、最大の目標だっ
た。

私は『葉介を返せ』ってずーっと思ってたけど、つまり、目的は
アジユと同じだ。人を異世界から誘拐してまで、自分の利益を求め
ようとするなっただことだ。

でも、私にそんな力があるわけじゃない。

私はただの葉介のお姉ちゃんではない。紅玉鉾脈本人がもうや
めろって言っても聞いてもらえそうにないのに、私なんかが叫ぶだ
けで本当に、国一つが動かせるわけなんか、ない。

だからアジユの言うとおり、誰か手近な鉾の姫を人質に取って、
外部勢力から圧力をかけてもらう以外、もう誘拐を止めてくれる方
法が無いように思える。

でもだからって、葉介を人質としてサンタリアに渡すのは、本末
転倒もいいところだ。

戦争を止めないと葉介は帰れないのに、戦争を止めるには葉介が必要だっていう。

砂盆になにも書けないまま、凍り付いてしまつて動けない私に痺れを切らしたのか、プラネタがふう、とため息をついた。

「……だいじょぶだよカナちゃん。一般人には無理なお願いだつてことは分かつてるから。だからこそ、ちよつと無理して紅玉鉾脈にここまでゆーかいされてもらう計画が立つたわけなんだしねっ」

「九割九分九厘、お前が紅玉鉾脈であろうと結論づけたのは我々だ。成らなかつた策に固執しても詮無いこと。また、別の策を練らねばならない」

バルバトも、プラネタに続けて言った。浮かない顔のままなのはサビアンだ。

「……しかし、犠牲は払つた。バルバト、ゲルダガンドと屍人たちの戦況はどうだった？」

サビアンに促されるまま、バルバトは静かに答える。

「屍人兵の軍団……『溼標』は、三割がた削られていた。ゲルダガンドはまだ余力があるように見える。駐屯地で起こした騒ぎも、黒曜軍を攪乱するまでには至っていないようだったな。駐屯地方面から翼竜が一匹舞い込んだが、さて……」

「……………」

その翼竜つて赤かつた？ つて聞きたいとこだけど、さすがに我慢しなくちゃいけない。

むずむずしてる私をよそに、プラネタはうにゃああ、と変な声をあげてじたばたする。

「やつぱ溼標がダメになるのも早かつたなあ。だから、お手上げなんだよねえーっ。あのさあ、いっそカナちゃんを媒介にして、そのミキちゃんつて子をゲルダガンドから召喚する方法を考えたほうが

「……」

「……………!!」

子供っぽい動きは計算だろうかと思えるほど、腹黒いことをプラネタは言う。

やめて。召喚はやめて。私が青ざめたのに気づいたのか、アジユはほんのりほほえんでくれた。

「……………いいえ、プラネタ。花奈さんはゲルダグンドへ返して差し上げましょう」

「アジユール!!」

とがめるような悲鳴をあげたのは、プラネタじゃなくてやっぱりサビアンだ。アジユは取り立ててそれに気を止める風もなく、プラネタに話す体裁をとりながら、私に言った。

「花奈さんからゲルダグンドへ働きかけていただけにしろ、いただけないにしろ、このサングリアで、紅玉鉱脈ではない花奈さんをお預かりする理由はありませんよ」

「しかしだな……!!」

「だって、大切な人と引き離されるのは辛いでしょ?」

「……………」

そりゃ、辛い。もちろん辛い。私だって葉介と一緒にいたい。

でもアジユはそれでいいの? 私が……紅玉鉱脈が、彼女につながるたつた一本の蜘蛛の糸だつたんじゃないの? 私が紅玉鉱脈じゃなくて、がっかりしてるんじゃないの?

いや、がっかりしてなかったら嘘だ。私だったら絶対がっかりする。勢いに任せてぶん殴ってるかもしれない。なのにサビアンですら、アジユに優しく諭されたくらいのことで黙り込んでる。私に話しかけてくれたら、アジユに優しく諭されたくらいのことで黙り込んでる。

私は唇をとがらせた。

だって、こんなんでいいのか? この人たち、何をしてでも戦争

を止めて、とらわれのお姫様を助け出そうって覚悟で、クラージユに蒸し焼きにされてまで、紅玉鉾脈を誘拐しようって計画立ててたんじゃないのか？

確かに情報不足だったせいで、クラージユに踊らされてたことが分かったんだから、気落ちするのは分かるけど、でも、だからって私のこと素直に帰しちゃっていいのか？ むしろ私のことを（できるかは知らないけど）ガンガン利用してくぐらい、愛と平和のためにながつかなくちゃいけない立場なんじゃないのか？

アジユは二重の意味で頭にお花が咲いてちゃってるのか？ これじゃこっちの方が心配になってくる。

でも結局、私にアジユ達をお説教してる時間は残されていなかった。『それ』は突然に訪れる。

私がおか言おうとして、ペンを握ったり離したりしていた時、突然髪の毛がふわーっと浮き上がった。静電気が発生しているんだ。

「……電磁気力魔法でどこから、花奈さんの居場所を検索されているようですね。花奈さん、お迎えですよ」

何故かアジユはほっとしてるように見えた。あわて始めるのはやっぱりサビアンだ。デスクの上のルビーの魔具と、うかつに触るとビリッとする危険物と化した私とを交互に見比べる。

「探知だ！？ 目印になりそうなめばしい魔具は外して解呪したはずじゃなかったのか!？」

「……あ、多分これだあ」

プラネタが首に引っかけてた、ひも付きのお皿を天秤みたいに私の体の上でぶら下げている。

手でぶら下げているだけの簡易的な天秤は、私の足の上……もっ

と詳しく言つと、くるぶしのあたりで傾いていた。

ぐぐぐつと何かに押さえつけられたような、あるいは引つ張りつけられているような感じた。

もちろんビリビリして気持ち悪いけど、人魚の呪とやらで足がよじりあつて戻らないので、脱ぐことはできない。

プラネタが感心したみたいにならず。

「なるほどお。人魚の呪は口封じ兼、強姦対策兼、マーキング保護だったわけだねっ。一石三鳥をねらうなんて、芸が細かいなー。見習わないとなー」

そうか。そういえばこのズボン、私がこつちに来たての頃にクラージュが用意してたものだった……。

あんな頃からいろいろ画策していやがったのか。もう今更引いたりはしないけど、ただただ呆れる。

示し合わせたみたいに、よじり合わされた足がばりばりっ、とマジックテープでも剥がしたみたいな大きな音を立てた。

「おいつ、冗談を言っている場合かっ！」

サビアンがあわてた声を上げたのに応えるように、今までじつと黙っていたバルバトが腰から短刀を抜いた。ぎらつと光る短刀が、私のズボンの裾に当てられる。

「……………！……！」

ちよつと、冗談でしょ。そんなことされたら、パンツ見えちゃうじゃないか。

ぎよつとした私が身をよじる。アジユがあわてたそぶりでもバルバトの肩を押さえた。

「いけませんよ、バルバトさん。花奈さんは返してさしあげましょう。元より、花奈さんの身柄と引き替えに『彼女』を帰していただけるとも思えません」

バルバトは、アジユがせつかく止めたのにへのかっぱ、って感じ

で涼しげに言った。

「どうする、サビアン。お前はこうしてやりたいのか？」

「……………」
サビアンはむすつと黙りこくった。私もみんなも、サビアンの顔色をうかがっている。

しかし、そろそろ静電気のバチバチがほんとに痛くなってきた頃、サビアンはそっぽを向いて私にルビーの魔具を押しつけ、つぶやいた。

「……………」カナ、これも忘れずに持って帰れ。もうさらわれたりなんかするんじゃないぞ」

「……………」
私は呆れてサビアンの顔をじつと見た。さらったのはそっちだったというのに、よく言う。私はますます呆れた。いろんなことに。

しかし、これで私の無事の帰宅が決定したってことになりそうだな。ええ、それでいいの？ それで世界は平和になるの？

なんとか言ってみようと思って、私は口を開く。
でも、やっぱり声は出なかった。口がきけないのって、なんて歯がゆいだろう。こうやって、もしかしてこの後一生会えなくなるかもしれない友達と挨拶をかわすことも、根性の座らないヘタレ野郎に何か一言言ってみようと思ってもできない。

私がおかしく吹っ飛ばされたのは、電気のビリビリが一番強くなったのと同時だった。

目の前がぐわつと歪んだか歪まないかのうちに、一瞬にして目の前の風景がテントの中から、見慣れたシュツルクの荒れ地に変わり、私の体は空中に放り出された。

陸揚げされたイルカみたいなのたのたしている私の上半身をぎゅつと抱きよせる。

「お帰り、花奈。よく、がんばったねえ」

.....。

私は幹也にぎゅつとされながら、声は出ないけど、わんわん泣いた。

The 4th Attack!! 9

私が誘拐された次の日からの話をしよう。戦争が激化し、私たちが襲われ、ナルドが翼竜に変身し、アジュが裏切り（表返し？）、サングリアの事情とやらを聞かされた次の日の話だ。

駐屯地の中はぐちゃぐちゃだった。まずは私がどうなったかから話そう。

幹也のおかげでアジュたちのところから労せず帰ってこれた私だけど、人魚の呪のせいで足が開かないから、裸足じゃなかったとしても歩けないし、おぶってもらうことすらできない。

幹也は頭脳派だから、私のことをお姫様だつこで運ぶのは無理だ。というわけで、私は幹也に靴を借りて（幹也は靴下があるから大丈夫だって言った）転移門から駐屯地までウサギ跳びで帰った。おかげで筋肉痛だ。

幹也は今は、この世界について情報収集してるそうだ。地図を何種類も何十枚も集めたり、顔見知りになったらしいミュゼを質問責めにしたりしている。

幹也は、私が口も利けない、歩けない状態にされたことをものすごく怒っていた。なんでそういうことになったのかを、口と口がぶつかったことだけを隠して話したら、もっと怒った。クラージユを暗殺する計画を何時間もたてていたけど、たいへん丁寧な計画書を書き終わるとそれで満足したらしく、また情報収集に戻っていった。幹也は実行力に欠けているから、まあ、平気だろう。

……………口と口がぶつかったことがバレたらどうなるか分かんないけど。

気の毒なのはナルドだ。あのグロい変身シーンからして何となく察せられるけど、ナルドの変身は自由自在なものじゃないらしかつた。つまり、ナルドはまだ竜の姿をしたまま、人間に戻っていない。このグラナアーデでも人間が翼竜に変身するってことはまず信じられない事態らしく、ナルドは隠れて休まなくちゃいけなくなつた。でも一応、元々謹慎処分つてことになつてたから、外へ一歩も姿を見せなくても不自然では、まあ、ない。

肝心なときに寝こけていて、私をまんまと誘拐させてしまった上、ナルドを『あんな風』にしてしまったことで葉介はものすごく落ち込んだらしい。

スペース的な問題で、ナルドが寝ているのは一番真ん中の奥、なんにも置いてないテントのところだけど、葉介もそこに毛布を持ち込んで、夜も朝も竜の姿をしたナルドに付き添っている。付き添っているからって何ができるってわけじゃないけど、ナルドはうれしそうだ。

問題はクラージュだ。いつもならこういうことが起こつた場合、すぐさまこっちへ駆けつけてきそうなものなのに、彼はウサギ跳びで帰宅した私の人魚の呪を解いた後、たった一言「本当に、すみませんでした」と謝つたきり、一度も姿を見せなかつた。

駐屯地に敵兵が忍び込んでいるわけだから、事後処理とかが大変で、こつちに顔を出してる暇もないんだろうけど、これじゃ幹也の暗殺計画もまるで意味を成さない。

ふとした時に、今はもう自由になつた足をばたばたさせると、『咳をしても一人』つていう誰かの俳句が思い出される。別にひとりじゃないけど、心境的にはそんな感じた。

人魚の呪のことは、そりゃあ最初はムカついたし悲しかつたけど、でもそれは、身動きのとれないクラージュが私をどうにかして守る

うとした苦肉の策だったんだから、今ではしょうがないって分かってる。

もう怒ってなんかいないんだから、ちょっとくらい様子を見に来てくれたって罰は当たらないんじゃないかと思う。そのくらい思ってたって、わがままにはならないはずだ。

でも、クラージュは来ない。

ベルは謹慎中だ。私たちがみたいに身を守るために謹慎の体裁をとってるとかじゃなくて、マジの謹慎だ。

何でも、前回の負け戦が相当腹に据えかねていたらしく、ジユノの護衛の仕事を放り出して、強いやつと戦うために単身前線へ飛び出して行っちゃったらしい。バトルマンガか。

ミュゼも（そうは見えないけど）書類上はベルの直属の部下扱いだったそうで、とばっちりを食って始末書を書かされたとか。

忍び込んできたあのサングリアの敵兵たちは、黒い袋に入れられて、倉庫みたいなところに置いてあるらしい。忍び込んできた人数と、袋の数があるのかどうかは分からない。体中から湯気を立てていた人はどう考えても助からなかったんだろうし、おしっこを漏らして笑ってた人くらいなら、もしかしたらアジユが私をさらう時、一緒に助けてつれて帰ったかもしれない。

とにかく、侵入者の目的は『不明だが、阻止された』ということになった。

謹慎中のため自分のテントに閉じこもっていた私が、何故誘拐されたかという説明をしようと思うと、当然紅玉鉾脈について説明しなくちゃならなくなるせいだ。……と、ミュゼが言っていた。

しかし、いつもこういう事情を説明してくれていたのは、クラージュだったはずだ。なんでミュゼなのか。

考えなくちゃいけないことも多いけど、ふくらはぎぱんつぱんになつててしばらくは動きたくない私を、ジユノがわざわざ呼び出したのは、誘拐事件があつた次の日の朝だつた。

幹也に付き添ってもらいながら、唇をとんがらせてやってきた私を、ジユノは、見た目にはいつもと変わらない様子で出迎えた。いや、出迎えてはいない。私たちがテントの幕を跳ね上げたとき、執務室代わりのテントの奥に鎮座した、執務机の向こう側からちらつとこつちをみただけだ。

「花奈、こいつ誰？ 花奈と葉介の何？」

その反応が気に入らなかつたらしく、私の後ろに立っていた幹也が、聞いた。幹也が白々しい笑顔を浮かべているだろうつてことが見なくても想像できる。

「ジユノ。ここで一番偉い人。葉介の上司。私の知り合い」

幹也だつて、家の池からこの世界へ落下してきた関係上、ジユノとは初対面じゃないはずだけど、そのところをつっこむとややこしいことになりそうだったので、私は端的に答えた。

ジユノも小事にはとらわれないと決めたらしく、幹也の暴言も無視した。

「説明を受けよう」

「はあ……………」

ジユノのこの言い方だと、私が説明したくて仕方ないみたいな風に聞こえる。偉い人はこういうところ癪に障る。

しかし黙りこくつても仕方ない。私は話し始めた。もちろん、話していいこと、悪いこと、取捨選択して。

戦いの行く先よりもアジユの彼女よりも、優先されるべきなのは、

葉介の身の安全だ。

サンタリアが鉦の姫の秘密を知ってるってことはもう隠しておけない。でも、鉦の姫の全員が女の子だと思ってるってことを踏まえ、葉介の正体は隠し、紅玉鉦脈は『ミキ』っていう実在しない女の子だと思ってるはずだってことを私は言った。

……しかし、あの時は殊勲ものだと思ってたけど、今となってみるとやっぱり『ミキ』はまずかったかもしれない。まさか、幹也がこっちに来ると思ってたからだけど、私が説明しながら左手で幹也の手を握ると、幹也は軽く握り返してきてくれる。私はそれに勇気づけられて、話し続けた。

屍兵の軍団『濔標』と正規の軍団『花菱』は別の人が指揮していて、私が浚われたのは『花菱』の方。『花菱』はわりと、愉快的な仲間たちって感じだったけど、『濔標』の方はサンタリア側としても持て余しているということ。

アジュの正体について。アジュが異世界人だったことはなんとなく察せられていたらしく、ジユノもことさら驚いたような表情は見せなかったけど、『日本語が読めた』ことを伝えると、さすがに考え込むそぶりを見せた。だって、アジュがいるとこっちの暗号か何かがあっけなく解読されちゃう危険性があるってことだものね。

葉介とアジュの彼女との人質交換をもくろんでいたあたりは、悪いけど隠させてもらった。アジュだってクラージユに彼女が鉦の姫だって暴露してたから、ちょっとカンを働かせればすぐバレちゃうかもしれないけど、少なくともこの件に関しては私はアジュの味方だ。葉介がさらわれさえしないなら。

捕まってる間はサンタリアのテントからは一步も出なかったから、私が提供できる情報ってせいぜいこんなところだ。

私が見たいのところが話し終えた頃、ジユノはちらっと目を私

たちの足下に向けた。さりげない仕草だったけど、私たちもジユノの視線を追う。

「……あれ、剣だ」

ジユノと私たちの視線の先には、一本の白々と光る銀の長剣がある。両手で使うものらしく、柄が長い。一点の曇りもない、鏡のような刀身を持つ剣だ。どっちかっていうと、実用品というより、儀礼用という感じだ。

「何これ？ 鞘がないね」

だしっぱなんてお行儀が悪い。その剣を手に持って、私は首を傾げる。わー重たい。ジユノは簡潔に答えた。

「クラージユの腹に刺さっていた」

「へー………つて、え？」

今、ものすごいことを聞いちゃった気がする。気持ち悪いものをさわってしまった時みたいに、私の手から力が抜けていく。

「え？ え？ なにそれ、ふつう死ぬんじゃない？ ねえ幹也」

落とすと危ない。私はあわてて手の剣を握り直し、幹也を振り返ると、きよとんとした顔の幹也が頷いた。

「あー、そういえばそうだったね」

「ええー！！！？ なにそれ、いつ！？」

「さあ？ 俺が花奈を迎えに行くときには、既に刺さってたけど」「ちよつとー！ー！！？」

そういうことは言つといてほしい。私が非難をこめて見やると、幹也は照れ笑いをした。

「ごめん、興味なかったから」

「ああ…幹也つてほんとに天然だよね」

幹也はせつかく頭がいいのに、ちよつとぼんやりしてるところがある。

それはともかく、なにはともあれ、クラージユが刺されたなんて、

それは一大事だ。私に会いに来てくれない、なんて言ってる場合じゃない。

「それ、クラージュは大丈夫なの？ 無事なの？」

「無事だからお前の人魚の呪を解いたのではないか」

ジュノは心持ちうんざりしたような口調で答える。……そういえば確かにそうだ。

「刺したのはアジュなんだよね……」

私はその抜き身の剣をぎゅっと抱いてため息をついた。ほんとに、嫌になることばかりだ。

葉介は家に帰ってこられない、ナルドは動けないし、アジュとクラージュ、私の友達が互いに殺し合い、目の前のジュノだってまだ包帯がとれていない。

「ねえジュノ、何かみんなが傷つかないですむ方法はないの？ まだ戦いは続くの？」

「……いや、もう終わる。あくまでもこの地での戦いは、だが」「え！？」

すぐるような思いでつぶやいた私の言葉は、一応の形で肯定される。私の望んでいた形ではなかったけれど。

「シュツルクはまもなく水期に入る。我が黒曜軍はこの駐屯地を放棄する」

「放棄っ！？」

声を裏返らしてしまった私に、この世界のことについて勉強済みの幹也が説明してくれた。

このシュツルクの大地の地下には巨大な空洞があって、そこに水がたまり、地底湖を形成している。その地底湖の水が、様々な要因

によって温められて膨張した空気に押し上げられ、一気に地上へ噴き出してくる季節があるのだそうだ。

多分に石灰質を含んでいる白い水は、シュツルクの大地を3メートル以上の水深で埋めつくし、水期の間、荒野は汚れた死の湖になる。

駐屯地の巨大な壁と高台の転移門以外、石でできた建造物がなかったのはこのせいだったのだ。

世界ふしぎ発見で特集されそうな土地だなあと思いながらふむむと聞いていると、そんな暢気にしていいお話じゃないことが分かってくる。

「荒野シュツルクが湖シュツルクと化している間は、我々はサングリア側の国境地域『ラプリア』へ戦線を押し戻す任務に当たることになるだろう。この地での戦いは激化する。」

リユーナでは一人、鉦の姫が脱走したと聞くし、首都の真珠鉦脈も状態が思わしくないそうだ。この上紅玉鉦脈の身に危険が迫ったとなれば、もはや我々のみの手に委ねられる問題ではない」

「……………」

うわあ、聞きたくない。嫌な話されるに決まってる。

でも、遮れるわけがない。私は右手でアジュの剣を握りしめ、左手で幹也の手をぎゅっとなつかみながら、死刑宣告を受けた。

「お前たちは日本へ帰れ。葉介の身柄はこの俺が責任持って信頼出来る場所に預けようが、もはやお前たちまでは身柄の安全を保障しきれない」

左手に幹也、右手にアジュの剣を握って、私はふらふらとジユノのテントを出た。

帰れって言われちゃった。うかつだった。こっちに来たばかりのころはちゃんと警戒してたのに、つい油断した。私はこの黒曜軍にとつて単なるよそのものだったのだ。クラージュの制止も振り切つて好き勝手に動いた私が、追い出されないわけがない。

「花奈、大丈夫？」

私と手をつないだままの幹也が気遣わしげにうつむく私の顔をのぞき込むけど、私はかろうじてうん、と頷くのが精一杯だった。シヨックが大きすぎたのだ。

私、何の役にも立てなかった。

ナルドは人間やめちゃうし、ジユノもクラージュも怪我をしていて、アジュは裏切り、アジュの彼女は捕まっている。多分他の鉾の姫たちだってそうだろう。サビアンたちだって、自分たちとは全く別の権力者に好き勝手にやられて、これからいつたいどうなるんだか分からない。戦争は終わらないし、葉介も家に帰れないまま、私と幹也は二人だけで日本に帰らなくちゃいけない。

このまま物語はバッドエンドなの？ もう出来ることなんかないの？

一瞬頭をよぎった怖い予感に、しかし私は首を勢いよく振った。

いや、そんなのだめだ。絶対にだめだ。このまま葉介や、この世界で出来た友達たちを見捨てなくちゃいけないなくなるなんて。なんとかしなくっちゃいけない。でもどうすればなんとかできる？

「何とかしなくっちゃいけないねえ」

テントに戻ってからもうじつと考え込んだままの私に、私のベッドに並んで座った幹也ののんびりした声が呼びかける。

「そうなの。何とかしなくっちゃいけないの。でもどうやってすればいいか……」

何となく握ったままにしていた幹也の右手を両手でもてあそびな

がら、私はぶつぶつつぶやく。私の手をぎゅっぎゅっとりズムをつけて握り返して、幹也はますますのんびり言った。

「まずは問題を洗い出してみようか」

「問題点？ そんなの問題ばっかりだよ！！ 葉介は帰れないし、ナルドは人間に戻れないままだし、クラージュはひきこもり、ジユノもおなかに穴があいてて、ミユゼは頼りになんなくてベルはサイヤ人化、サングリアの人たちだってもう戦いたくないって行ってるのに、なぜか戦争は終わんない！」

アジユの彼女だけじゃなくてさらわれて捕まってる人はいっぱいいるみたいなのに、私たちは葉介すら助けられないまま帰んなくちゃいけないんだよ！！」

聞き終わると幹也はうんうんとうなずいた。

「なるほど。葉介は帰れない、戦争は終わらない、俺たちは帰らなくちゃいけない。この三つが問題なんだね」

「ええっ！？ なんで！！」

挙げた問題点のほとんどをばっさり切り捨てられて、私は目を白黒させた。幹也は無邪気に首を傾げる。

「だってそうでしょ？ ナルドのことも、ジユノもクラージュもミユゼもベルもアジユってやつも、それぞれ大変かもしれないけど、ゼーんぶ自己責任か、他人事じゃん。花奈が気にかけてやる必要ないよ」

「いや、だって……少なくともナルドは葉介のために人間やめたわけだし……」

それに、ナルドは仮に人間に戻れたとしても、男の娘化しているっていう問題は棚上げされたままだ。私に何か頼みごとがある風なこととも言ってたし。

「その分葉介が面倒見てるし、ナルドだって恩着せがましいことは言っていないでしょ。いいんだよ」

いいのかな……。釈然としないまま、私は幹也の言葉の続きを聞

く。

「俺たちが解決すべき問題は三点に絞られた。このうち、戦争さえなんとかしてしまえば他の二つの問題点も解決しそうだ」

「ええっ!!?　なんでなんで!?!」

そんな簡単に話が進んでいいの?　私の声は裏返る。

「葉介は『戦争が終わらないと帰れない』。俺たちは『戦争が終わらないから帰らされる』。じゃあ、戦争終わらせちゃえばいいじゃん」

「そうかもしれないけど……でも、戦争をどうにかすればって、それが一番難しいんじゃない?」

爪をかみだす私に、幹也は突然とろつとした声でこう言った。

「ところでその前にさ、幹也大好きってゆって」

「え?　幹也大好き」

まあ確かに大好きだけど、こんな言わされてる感ありありの大好きで幹也は満足なんだろうか……

「戦争を終わらせよう。目的と手段を入れ替えよう。アジユの彼女を奪還するのに一口乗らせてもらう。その彼女を人質にして、ゲルダガンドに和平の締結を約束させるんだ」

満足だったらしい。幹也は自信満々の笑みを顔に浮かべ、こう宣言した。

「ちょっと……ちょっと待ってよ!!　アジユは、アジユの彼女が見つからないから紅玉鉾脈をねらってきたんだよ?　アジユの彼女を利用して葉介を助けるなんて、まず前提から成立しないじゃん」
幹也は啞然とする私の手をぎゅーっと握り返しつつ、幹也はここにこした。

「それが成立してるんだな。いい?　順序よく考えてみなよ。花奈

が紅玉鉾脈じゃないって分かった後さ、アジュが帰してやるうって
言ってくれたんでしょ？」

「ああ……言つてた言つてた」

あれは、聞いてるこつちが心配になるような無造作っぷりだった。
「どうして簡単に帰してやるうなんて言つて、引き下がったのかを
考えてみようよ」

「え？ それはアジュとサングリアの人らがたまたまいい人たちだ
つたから……」

「あはは、花奈のおバカ。いつまでも頭空っぽのままにしとくとハ
ムスターかなんかがティッシュ詰めて住み着くかもよ」

「えっ!？」

幹也はたまに、なに言ってるか分からなくなるときがある。今一
瞬ひどいこと言つてたような気がするけど……多分気のせいだな。

幹也は何事もなかったかのように解説した。

「アジュは多分、目的を果たしてたんじゃないかな。わざわざ敵国
の軍隊にまで潜り込んで手に入れたかつた何かを、既に手に入れて
いた」

何かつて……何だ？ 私はきよとんと首を傾げた。幹也はあき
れた声を出すけど、顔は笑いつぱなしだ。

「ちよつとは考えなよ。アジュがほしいものなんて一つに決まつて
るでしょ。サングリアでは論外で、ゲルダガンドの軍隊に潜入しな
きゃ手に入らない、アジュには絶対必要なもの」

「うん……?」

いや、わかんない。私が照れ笑いを浮かべると、幹也はふう、と
うれしそうにため息をつく。幹也はなんだかんだ言つて、私がバカ
な方がうれしいのだ。

「地図だよ。それも、この上なく正確なのがね」

「地図？ なんでそんなもの。どこにでもあるじゃん……」

「敵国に流れるような地図が、ちゃんとしてるわけないでしょ」

私の疑問はすっぱり切り捨てられた。幹也は私の手を離さないまま、よっこいしょと体を伸ばして、手の届くところにあった手帳を一冊手に取る。私は幹也からそれを受け取って、中をばらばらめくった。

中身は地図だった。分厚く、ちよつとしつとりとして吸いつくような感触の不思議な紙に、黒と青緑色の二色刷りで精緻な地図が記されている。

「さすがの花奈も、伊能忠敬くらいは覚えてるでしょ」

「失礼な。ギャグマンガ日和で読んだよ」

「わあよかった。花奈の頭にもセンマイ程度の価値のものは詰まっていたんだね」

「えっ」

今度こそひどいことを言われた気がする……。

「いい？ 伊能忠敬が初めて日本全国の正確な地図を作ったのが十九世紀初頭。ほんの二百年前だ。それも、作成には十年以上の時間がかかっている。最近の話为例にするなら、旧ソ連には普通の地図には絶対載せない秘密の都市が1994年まで存在したんだって。人工衛星がびゅんびゅん宇宙空間を飛び交っているこの時代にだよ。地図って、花奈が思うより重要で、作成も難しいんだ」

幹也は丁寧に説明してくれた。よかった、ひどいことを言われたような気がしたけどそうじゃなかったみたいだ。

「アジュにも、彼女がどこに捕まっているか、おおかたの目星くらいはついてはいるはずだ。だってアジュとアジュの彼女、それぞれ召喚されたのは同じタイミングなんだものね。」

でも、じゃあそこへ改めて行こうとしたとき、十あるうちのどの山なのか、百あるうちのどの入り江なのか、千あるうちのどの家なのか、それをアジャー人の記憶だけで特定するのは多分、難しい。

やっぱり、できる限り正確な地図を手に入れて、絞り込まないと」「なるほど……それで、わざわざ敵地潜入してまで……」

私はやっと納得いって、深々とうなずいた。

そりゃもちろん、紅玉鉱脈のことも何とか手に入れられればうれしいなって思ってただろうけど、紅玉鉱脈はあくまでオマケ。本当の目的は、地図だった。

それは、紅玉鉱脈との人質交換のためだけに何ヶ月もこの駐屯地に潜伏したというよりも、よっぽど納得できる理由に思えた。わざわざ、あんな目立つ髪の毛をターバンで隠してまで、アジュが単身乗り込まなくちゃいけなかった理由もこれで説明が付く。アジュは、ありとあらゆる文字が読める。もし地図が暗号化されていたとしても、アジュなら苦もなく読みとけるはずだ。

「これで地図が手に入ったんだから、アジュも動き出すはずだ。アジュの彼女を取り戻すためにね。そこに俺達も便乗する。それも、手みやげを持って」

「手みやげ？」

「さつきジュノが言ってたやつ。リユーナから一人、鉱の姫が逃げ出したっていう情報だよ」

「あ！ それってもしかしてアジュの彼女?!?!？」

「…と、言えるかどうかは分かんないけど」

私の早とちりをやんわり否定して、しかし幹也はなおも続ける。

「少なくともアジュは飛びつくだろうな。それに、逃げ出したのがアジュの彼女じゃなかった場合もやることは一緒だ。脱走した鉱の姫をゲルダガンドよりも先に捕獲して、人質にとつて、和平締結のカードにしてやれ。コトがすんだら、サンタリアに、アジュと彼女を送り帰すののついでに、その脱走した鉱の姫もその子の故郷に帰してもらっちゃおう」

「……………」

話がとんとん拍子に進みすぎて、なんだかついていけなくなってきた……………」。

「……………幹也ってお兄ちゃんなんだね……………」

なんとか無言になるのだけこらえて、しかし何言ってるのか分からない私に、ふふん、と幹也は得意そうな顔で一言言った。

「当然」

方針が決まった後、幹也の行動は早かった。というか、幹也はこの世界の事情を知った時点で、これからどうするかも決めてあったんだろう。

「どおおおおしても必要なものだけ、この中に入れな」

どおおおおしても、と思い切り強調しながら幹也が差し出したのは、

「……ランドセル……」

私は目の前の赤いランドセルを前にして、ぐったりした。

幹也が差し出したのは、こともあるうに小学校の時の私のランドセルだ。……埃をかぶっているし、ミッキーマウスのシールも貼つてある。もつとかわいい鞆、どっかにあっただしょ……。ていうかちょっと、これは犯罪でしょ……。もう後が無くなって、衣装を選べないグラビアイドルみたいになっちゃう。

いや……ランドセルのことは、まあいい。スルーだ。だって考えたってランドセルのことはどうにもならないし。

私はふう、と一息ついてから、幹也の旅行鞆を開けた。とってとキヤスターがついてて、がらがら引きずるタイプの旅行鞆だ。正式名称は知らないけど。

これは幹也が改めて持ってきた荷物だ。

勢いだけでこっちに飛び込んできてしまった私とは違って、幹也は万端準備を整えてこっちに来たはずだから、何か役に立つものが入ってるはずなんだけど…。

わくわくしながら中を確認すると、鞆の一番上側には、『葉介君、花奈ちゃんへ』と宛名されているハローキティの封筒が入っていた。

お母さんの字だ。

「さすが幹也だ……」

本当に幹也は、的確に必要なものだけを選んでグラナアーデに持ち込んだらしい。私は神妙に、その手紙を開く。

中にはこうあった。

「花奈ちゃん、葉介君へ

二人とも元気にしてるかな？ 幹也君が拾いに行ってくれるから、

お母さんは心配してません（*^ー^）

お母さんも行きたかったけど、ダメって言われちゃいました（Ｔ

^Ｔ）残念！

一緒にいる大人の人の言うことをよく聞いて、三人仲良く、元気に帰ってきてください（^・^）／

あなた達のお母さん、英恵より（^ ^）

「……………」

「バカにしてんのか！！」

私は思わずキティちゃんの便せんをすっぱーん、と足下にたたきつけていた。

幹也も結構天然だけど、うちのお母さんときたら天然通り越してお花畑だ。なにが『（^・^）／』だ。なにが『ダメって言われちゃった（Ｔ^Ｔ）』だ。子供が誘拐されてるんだからもうちょよっとシリアスになれ。

「……………」

しかし私は改めてお母さんからの手紙を拾い上げ、埃を払い、丁寧に机に置いた。内容がどうあれ、お母さんの手紙ってというのは心強いものだ。葉介にも後で読ませてあげないと。

私は気を取り直して、改めて鞆の中身を確認にかかった。

私の下着類が入っている！ 下着だけじゃない、ちゃんとふつうの、パンツに挟む型の、生理用品まで薬屋さんの濃い色のレジ袋に包まれて収まっていた。

さずがお母さんだ。歯ブラシも、動きやすい普段着も、裁縫セツトも、必要になりそうなものは全部入っている。

それらをさらに厳選してランドセルに詰めると、空きスペースにはペットボトルを敷き詰めた。これから行くのは荒野だ。飲料水は要る。特に、これから駐屯地を離れたらもう、私たちでも飲める水を作って冷やしといてくれるナルドはいないんだから。

「……よし、行くか！！」

三人そろって、家に帰ろう。お母さんに手紙のことを突っ込もう。

私はぺちぺちと両方のほつぺたを叩いて気合いを入れると、最後にランドセルの肩紐を伸ばすことに専念した。

私たちは、誰にもお別れは言わなかったけど、堂々と正面から駐屯地を出ていった。こそこそ隠れると逆に目立つ、って幹也は言っていたし、実際その通りだった。

地球での普段着に着替えた上にランドセルをしょって、ランドセルと背中の中に布で巻いたアジュの剣を挟みこみ、さらにジュノの上着を羽織ってランドセルを隠す。

そういつ、ちよつと観察すれば明らかに不審とわかる私が、葉介の原付を引きながらとことこ歩いてても、そして私と幹也が試運転として（燃料計では完全にメーターが空っぽに振り切れていたし、

私も幹也も免許がないから運転に自信がなくて、念のため二人乗りして駐屯地を十周もしてても、そして十一周目に、さりげなくそのまま出ていっても、誰もとがめなかった。謹慎処分がもはやうやむやになってしまっていることと、クラージユが大人しくなっちやっつてることが原因かもしれない。

原付は冷蔵庫と同じく魔改造がほどこされてたらしく、燃料なしでもよく動いた。信号も道路標識も法定速度もないけど、道路舗装もされてないため、時速30キロを保ちながらそーっと運転していると、やがて日が暮れかかった頃、サングリア側の国境地域『ラプリア』、その地の軍隊の駐屯地のすぐそばたどり着いた。

そのサングリアの軍隊が、アジユ達のいる『花菱』か、それとも屍人兵の『濤標』かは、駐屯地からもくもくとのぼるお料理の煙で区別できた。屍人兵はご飯なんか食べるはずないからだ。

「しかし問題は、どうやってアジユのところまでたどり着くかな」
「そうだねえ」

原付にまたがったまま疲れた体を曲げ延ばししながら、私たちは首を傾げた。

一応私たちは、ゲルダガンドからやってきた異世界人だ。アジユか、それともサビアンか、私たちの顔や事情が分かっている人たちにすんなり接触できれば良いけど、なんにも事情を知らない兵隊に見つかった場合、『わーあやしいやつだーころしちやえー』ぐらいの軽いノリでやられちゃう可能性だってあるのだ。

幹也はのんびりしてるけど、時間的な猶予はあまりない。荒野の夜は厳しい。なにせ寒いし、風と埃もしのげないし、なによりも暗い。このまま駐屯地に入れてもらえないままここで夜を明かすのは心細い。

でも、肩を回し終わった幹也は、こともなげにこう言った。

「ま、正面突破しかないでしょ」

「え？」

「はっしーん」

「うわっちよっと待ってっ」

私はあわてて幹也の背中にしがみついた。葉介の原付は、ぱるぱると気の抜けたエンジン音と一緒に動き出す。

「幹也！ どうすんの！？ なんか考えてあんの？」

「大丈夫、何とかなるって。小細工弄したっていいことないよ」

「ちよ、ちよっと……！！」

大丈夫だろうか……。あんまり難しいことは考えないたちの私も、さすがに不安になってきた。三人兄妹がこれから一気に一人っ子になるなんてことはないだろうな……。

サングリアの駐屯地は、真っ赤に燃えるようだった夕焼けをすぎた薄暮の中、風の音しかしない荒野の真ん中にずっしりと根を下ろしていた。ゲルダガンドのような威圧感のある壁はなく、飾りのように杭が囲んでいる。埃がすごい吹き込んできそうさ。それとも、重力魔法かなにかがかけてある魔法の杭なんだろうか。防衛上、その可能性の方が高そうさ。

ここから見る限りでは、シュツルクにあるゲルダガンド側の駐屯地とさほど変わらない規模のように感じられる。

ヘッドライトを煌々とつけて走る私たちの乗る原付は、当然駐屯地の方から見えていたらしく、三人一組で立っていた見張りの人のうち、一人がどこかへ走っていく。人を呼びに行ったらしい。

「……………」

大丈夫かな。

幹也の服の背中を握る手に力が入る。それに気づいた幹也が、あきれた口調で言った。

「あのね。ここの仲間になりきたんでしょ、花奈」

「そうか……そうだよね……」

言われてみれば確かにその通りだ。アジユやサビアンと直接の面識があるのは私だけで、幹也は私から又聞きの情報しか持っていないのだ。その幹也がこんなに落ち着き払ってるのに、私がおびえてるなんてへんだ。へんだし、無責任だ。

「ほら、停めるからいったん降りて」

幹也は私を促し、原付の後部座席から降ろさせた。そして、原付のエンジンも切り、わざわざヘルメットまで外して、入り口らしきところに立っていた兵隊さんのところへ寄っていく。

「ほら、花奈。ご挨拶して」

幹也の後ろを追いかけてた私も同じようにヘルメットを脱いで、ぺこりとお辞儀する。

「すみません、アジユという人に会いに来たんですけど、取り次いでもらえませんか？」

……と、お願いしつつも、取り次いではもらえないだろうな、と思っていた。だって怪しさ満点すぎるもの。いったいどうやって私たちが信用してもらえばいいのか、考えても答えが出ないので、私は実際のところ、困っていた。幹也には考えがあるみたいだけ。

しかし、心配は無用だったらしい。

兵隊さんたちは私と幹也を見比べて不思議そうな顔をしただけだった。そして、若いほうの兵隊さんはこう聞き返す。

「ええと……名前を聞かせてください」

「……」

何で、私たちの目的じゃなく、名前を聞いたんだろう？ これじ

やまるで、『普通に來客の応対をしてる』みたいだ。

幹也は、ゆつくりとこう返事する。

「…花奈と『美樹』です」

「ふむ。……分かりました、こちらへどうぞ」

兵隊さんは二人して顔を見合わせると、そのうち少し年かさの方が私たちをうながして背中を向ける。

……私たちが敵かもしれないのに、この人、こんなに無防備に背中なんか見せちゃって良いんだろうか……それとも、これは『斬るなよ!？ 絶対斬るなよ!？ 絶対だぞ!』的な前振りなんだろうか……。ちようど、劍は持っている。アジュのだけだ。

私はひそひそと幹也にささやいた。

「すんなり入れちゃったね!」

「うん、そうだね」

幹也はおざなりな相槌しか打たない。幹也には分かってるみたいだけど、私にはさっぱり分からないままだ。

だって、私が今着ている上着はジュノのものだ。黒曜軍を率いている人の、軍服の一部だ。ちっこいランドセルをむき出しにしたくなかったし、幹也も脱げとは言わなかったからそのままにしていたけど。

薄暗いから、よく見えてないだけだろうか。それとも別に、私の着てる上着くらいどうでもいいんだろうか。アジュやサビアンに代表されるように、サンテリアは暢気なものの考え方をする天然ボケ国家だとか？

他人事ながら心配になっちゃってる私をよそに、原付を引きずりながら幹也がすったかすったか歩く。私もとぼとぼと隣を歩いた。もう駐屯地の奥の方まで来てしまっていて、引き返すのは無理そう

だ。

今謝れば許してもらえらるうか。それとも逆に、もっとちゃんと警戒しなさいってお説教すべき？

どうやら無防備なのは、案内の兵隊さんだけじゃないようだった。周りの他の兵隊さんたちも、原付や私たちを物珍しそうに見てるけど、敵意のようなものはあまり感じられない。

悶々としてる間に、案内の兵隊さんはあるテントの前で立ち止まった。

外観はゲルダガンドのテントとだいたい同じだ。でも、内装はちよっぴり違っていて私には知っている。

「お入りください。中にたぶん、どなたかいます」

まったく適当な案内もあったもんだ。幹也がテントのそばに停めた原付のスタンドを下ろすのに四苦八苦してる間に、私は勢いよくテントの幕を跳ね上げた。

中には、アジュがいた。ついこの前、寝食をともにしていた黒曜軍と決別したばかりとは思えないほど、静かでゆったりとした居住まいで、彼はテーブルについていた。

ハゲ疑惑を醸すほど怪しさ満点だったターバンはもう巻いていない。白っぽい薄緑色の髪から咲いている、パンジーの花を隠していない。

ついでに花は、普通のパンジーよりも色が少し淡い。ただの青でも紫色でもない、複雑な色だ。私の語彙の中では、コーンフラワーってというのが一番近い。

アジュが目の前にしているのは、地図だ。幹也がジュノからパクってきたのと、ほとんど同じ地図に見える。

「お邪魔してます」

なんていつて挨拶していいか分からなかったから、結局無難にこう言った。幹也もすぐにテントの中へ私を追って入ってくる。アジユはにっこり笑った。

「いらつしゃい、花奈さん、そして『美樹』さん」

私はきよとんとして、幹也とアジユとを見比べた。幹也もアジユも落ち着き払って、まるでお互いに前々から知り合いだったみたいだ。

幹也はにこつと笑って、テーブルのアジユの向かい側に勝手に座る。

「ほんとに幹也って言うんだ。花奈と葉介の兄だよ」

「なるほど。偽名だったんですね」

「悪いね」

「いえ。むしろ当然のことです。それにしても、ずいぶん早かったですね。ここまで道が悪かったでしょう？」

「まあまあかな。覚悟してた程度だね」

「しかし失礼ながら、『美樹』さんが男性だったとなると、本当の紅玉鉾脈はどなただったのですか？ 花奈さんのお身内であることだけは、確信していたのですが……ナルドさんでしたか？」

「あ、あれね。実は葉介だったの。鉾の姫っていうのは名前だけで、男もいるらしいね。ナルドは、ただの鉾の姫の従者」

「……なるほど、それはそれは。思いつきもしませんでした。ところで、鉾の姫の従者とは？」

あげく、ふつうに世間話まで始めた……。ナルドの話で盛り上がる幹也とアジユにととうとう私はたまりかねて、テーブルを握り拳で何度か叩いて自分をアピールした。

「ちょっと、アジユ！ なんでびっくりしないの!？」

アジユはきよとんとして、眉を軽くあげる。おどけた顔が憎たら

しい。

「これでも十分、驚いてますよ。まさか美樹さん本人までいらつしやるなんて夢にも思っていませんでしたから」

「幹也だつてば」

幹也はまた、同じことを繰り返す。

しかしそれじゃまるで、幹也のことはともかく、私が来るってことは予想済みだったみたいな口振りだ。

……いや。アジュはいつもの、無表情以上微笑未満のアルカイツクスマイルを浮かべて、こう言った。

「花奈さんは来てくださると思ってましたよ。きつとね」

アジュが言ったのは、こうだ。

私が紅玉鉾脈でなかった時点で、すでにもうアジュは、私や葉介、『美樹』も含めて、紅玉鉾脈を直接利用することをあきらめていたそうだ。

紅玉鉾脈は、荒野から遠く離れたところに隠されるだろう。戦争のための外交カードにも、アジュの彼女を取り戻すためのカードにもなり得ない。そして、私を拘束していたとしても、人質としての価値がないばかりか、何の恨みもない私の憎悪を、募らせるだけだと気づいたのだ。

むしろ一度私を泳がすことで、私が何らかの手がかりかなにかを握って、自発的にゲルダガンドを離れ、こっちにくることを期待していたらしい。

アジュは、私の良心に賭けてくれたのだ。あの一瞬で、そこまで判断して。

しかし、私の感想はたった一つだった。

「……そんなの、非合理的だし博打すぎるよ。ほんとに私が来たからいいようなものの……バカじゃないのアジユって」

冷たい私の言葉にも、アジユはひるまない。アルカイックスマイルをふつうの微笑に切り替えた。

「でも、来てくださったじゃありませんか。貴重な情報を携え、幹也さんまで連れて」

「いやだからそれは……結果論じゃん！ だめだよそんなに人を信じちゃ！」

「いや」

本格的にお説教に入ろうとした私の服の裾を、つんつんと引つ張って幹也が私を止める。

「別に、それほど分の悪い賭けでもないよ。花奈をゲルダガンドに戻したら、ジユノの性格上、花奈だけ元の世界に戻らされる可能性はきわめて高かった」

「ジユノの……性格……!？」

私は戦慄した。あのカリスマラスボス野郎に性格なんて高等なものが備わっていたとでもいうんだらうか……。

「情の厚い花奈が、自分だけ元の世界に戻るなんて、するわけないじゃん。でも、この世界での居場所は、ゲルダガンド側にはない。」

自然、アジユを頼ってくるだろうって予想をつけるのは簡単だよな「全部、お見通しなんですな」

アジユはまた、にこつとした。幹也も同じように、にこつとした。「あなたが勝負強いってことは認めるよ。花奈だけじゃなくて、俺のことも確保できたんだからね」

「……………」

そして私は、蚊帳の外だ……。

私のもじもじしながら幹也のそばに寄り添って立つ。

「でも…どうしてアジュは、私がサングリアに来るって期待しててくれたの？」

…幹也はともかく、私は頭もよくないし、葉介みたいに機転もきかないし、何か特別なことができるわけじゃないから……」

「そうでしょうか？」

私が最後まで言い終わるのを待たず、アジュは口を挟んだ。

「え？」

「私は、花奈さんこそ、このグラナアーデ中で一番頼れる味方だと思っっていますよ」

アジュはにっこり笑った。いつもみたいなの、うさんくさくも、力なくも、ムカつきもしない、初めて見るような笑顔だ。

「私は情報収集のため、黒曜軍にいる間、花奈さんをよく観察してきましたと思います。それこそ、花奈さんがあそこにやってきた当初から、そして最後まで」

「はあ……」

「花奈さんは、ジユノのことも、クラージュのことも、ベルとミュゼという少年たちのこと、主計兵長のこと、そして私のことも、一度は嫌いだ、と思っただけをぶつけたことがありますね」

確かにそうだった。

葉介をさらってきたくせに上から目線のジユノ、私一人を帰そうとして悪口をぶつけてきたミュゼ、決闘することになったベル。クラージュは私にお説教までした。へーちよは私のことを薄汚いって言ったし、アジュは人を食ったようなことしか言わないから、見るとイラっとした。

アジユは続ける。

「でも、花奈さんはそれで終わりにしなかった。敵意を憎悪に変えることも、嫌悪を軽蔑に変えることもしなかった。ぶつけられた敵意やトラブルを受け止めて、上手にいなしてしまった。あとあとまで恨みの気持ちや、禍根として残すことをしなかった。

これから私は、この一生にただ一人と決めた恋人を取り戻しに行きます。

私の恋人はきつと寂しがつていることだと思えます。こんな世界にたった一人にされて、心細く思って泣いているかもしれない。

私は、恋人の涙を見てしまったとき、何もかもを憎んでしまわない自信がないのです。

でもたとえば、花奈さんが近くで落ち着いた様子で見ているとしたなら、私は年長者として、取り乱したりは出来ないでしょう?」

私は啞然とした。いや、さつきから啞然としっぱなしだけど。

「そ、そんな理由で……!??」

「いえ、大事なことです。花奈さんのような年下の頼りない女性がちゃんとして立っている以上、私が憎悪に囚われることは絶対にあつてはならないことだ、と私のプライドが…いわば、精神の根幹が認識していますから」

それに、とアジユは続けた。いたずらっぽい笑みで、軽くウインクする。

「花奈さんさえ協力してくれるなら、何事も、何とかなってしまうような気がするのです」

幹也の脳みそがいったいどうなっているか、みたいな感じの番外です。

読まなくても完全に支障ありませんし、ちょっとサイコで俺TUE EEですので、いやな予感がしたら逃げてください。

ハンニバル・レクターは創作上の人物だ。精神科医で、悪魔的だが紳士的でもあり、最先端の科学、古今東西の歴史文化にも造詣が深く、動物的とまで言ってよい驚異的嗅覚を持ち、精神的動揺からはかけ離れ、香りや、音楽や、ナイフや、ワインなんかに対する自分の美意識に著しい誇りを持っていて、美食のついでに人を喰う。

レクターは心の中に記憶の宮殿というものを持っていて、そこで自分の記憶を整理する。そして、その宮殿のどこかに妹の記憶を大切に閉じこめている。

たぶんレクターは、その閉じこめた妹の、宮殿中に散らばる残骸、残滓のようなものを無意識になでたりさすったりしているうちに、人を虐げたくなるのだろう。小説でそう書かれていたかどうかは記憶にないけど、そういうことだろうと俺は思っている。

実を言うと、似たようなものを俺も生まれながらに持っている。宮殿ではないけれど。

俺もレクターも、心の中に世界を持ち、その世界を好きなように飛び回ることができる。記憶術としての側面はその際に起こる副産物でしかない。重要なのは、心の中の世界が確固としているならば、その世界に大切なものをそっくり自分の好きなようにしまっておけるという点のみだ。

俺の世界は、家の和室に三つ並んだベビーベッドから始まる。ベビーベッドの脇をすり抜けていくと、トルコ調の白いタイルのアーチがあつて、その先は海だ。二歳と七歳の時の海が広がっている。

波の音、汐の匂い、砂の熱さ。十年以上前の体験も感覚として残せるってことは、ちょっととした能力らしい。たとえば花奈は、体験

する端から忘れていく。あれはあれですごいと思つてくらの速度でだ。

真つ白な太陽が照らす、世界中の国旗が描き込まれた卵ボーロの砂浜を翔ぶように駆けていくと、いくらもしないうちに灯台にたどり着く。真つ白くて、十メートルくらいの高さがあつて、ほっそりとして優美な、自慢の灯台だ。

内壁を伝う螺旋階段が昇っていった先には、角のない丸い部屋が一つある。というか、その白い灯台にはその部屋一つきりしかない。

その部屋には天井の高さまである、壁沿いにめぐらされたどっしりした本棚と、すてきな出窓があつて、出窓には昼夜を問わず、羽根のない天使が二人腰掛けている。

もっと具体的に言うと、天使は幼稚園の時の鼓笛隊の格好をした葉介と、七五三の赤い振り袖を着た、花奈の姿をしている。現実の弟妹の成長に合わせて天使も成長するけど、着ている服だけは変わらない。

思考実験のお約束で言えば、天使じゃなく悪魔がセオリーだろうけど、ここは俺の心の世界だ。文句を言うやつなんていない。

「こんばんはなんだね、幹也」

開け放たれた出窓から入るお日様の光と潮風に吹かれながら、振り袖を着てる方の天使が首を傾げた。

「そう、こんばんはなんだ、今日は」

俺はうなづく。

鼓笛隊の天使が出窓から慣れた仕草でぴよんと飛び降りて、出窓に銀色のすばらしいレースのカーテンを引く。すると、みるみるう

ちにカーテンの向こう側の世界は黄色く照らされ、やがて赤い夕焼けに包まれ、夜の闇が広がっていく。

心の中でなら気候や時間も操れるのだと気づいたのは、中学の頃だ。理論上は当たり前の話かもしれないが、慣れるまではけっこう骨が折れた。しかし苦労しただけあって、なかなかの効果がある。

灯台で夜を呼ぶときは、俺が悩んでいるとき。そういう定義付けをした。その甲斐あって、世界が夜になると同時に、俺は気持ちをクリックにして、薄暗い中でじっと考えに耽ることができる。そういう癖がついた。心の中の世界だから、ほんの少しシステムを組んでやるだけで自分のなにかもをコントロールできるようになる。

あつと言う間に星くずが散らばった夜空を眺めながら、本棚の一番右の一番上の方の本……つまり、俺が重要と認めた記憶の中で最新のものという意味だが、本棚から抜き出して積み上げたそれらの記憶を椅子にして、まず俺達は甘い紅茶を飲んだ。甘いものは脳の働きを活発にする。それは心の世界でも同様だ。

俺が紅茶を飲んでいるあいだに、天使は口々に言った。

「花奈はグラナアーデの連中も助けてやりたいんだな、幹也」

俺はうなずく。

「葉介もそうなのよね、幹也」

またうなずく。

「じゃあ、助けてやったほうが手っとり早いな」

「ちよつとした手間だものね。花奈と葉介をがっかりさせてしまうことに比べたら、ほんとにちよつとした手間だもの」

また、うなずいた。

「でも、そうするとゲルダガンドの連中も助けてやる羽目になる」

「そうね、それはしゃくだわ」

「なによりも、ちょっとヤバイやつがいる。クラージュだ。あいつはだめだ」

「あまり花奈と葉介に近づけてはだめよ、幹也」

まあ、ムカつくことは確かだけど、大丈夫だと思うけどな。

「いいや、危ないね。これを見るよ」

鼓笛隊の天使は自分が座っていた本の山から一冊辞典を取り出した。中には駐屯地中をめぐって情報収集をした時にまとめた記憶が入っている。

呼び起こされたのは、クラージュの様子を見に行っただけの記憶だ。

医務室にいたクラージュは、その人形めいて整った顔を青ざめさせて、震える声を絞り出すようにして俺に聞いていた。

『花奈さんは……………』

それきりだった。花奈の名前だけ呼んで、それ以上はなににも、口に出すことはできないとでもいうような態度で、しかし確かに、俺にすがっていた。ほぼ初対面の俺に。

記憶の俺は『別に、元気だよ』と答えている。するとクラージュのまなざしがますます揺らめいた。実際対面していた時にはなかなか観察できなかった表情だ。

「変な目だ」

「うん、変な目ね」

振り袖の天使が相槌を打つ。

「やっぱりあいつはもう近寄らないでおこう。君子危うきに近寄らずというし。幹也と葉介と花奈の中で、君子と呼べるのは幹也だけなんだから、気をつけてやる義務が幹也にはある」

「どうせ戦争を終わらせてしまえば、深くつきあうこともなくなるものね」

結論がでると、もう天使たちはクラージュに固執しなくなった。立ち上がっててきばきと本を床中に並べて、時々指さして互いに相談しあったり、俺に話しかけたりした。

「ここにいってもすることはない。さっさととんずらさせてもらおう」

「行く先は？」

「もちろん、サングリア」

「アジユは信用していいんじゃない。だって私たちと敵対する理由がないもの。」

でもサングリア側に肩入れするなら、ゲルダガンドにも少し気を使っただけでいいとだめだわ。鉦の姫はゲルダガンドがしている犯罪行為の証拠なんだから」

「犯罪になるかは分からない。異世界から人をさらってきてはいけませんなんて法律、この国にはないんだから」

「悪かったわね、言い換えるわよ。ゲルダガンドがしている、倫理にもとる行いの証拠なんだから。」

もし鉦の姫の秘密をばらすことになった時も、サングリアは敵国が異世界から人をさらっているっていう罪を暴き、捕らわれている女性を救おうとしただけって大義名分ができてる。それを暴露されて困るのはゲルダガンドだけ」

「財力で大きく勝るとはいえ、これじゃゲルダガンドが危ういな。」

平和的に和平を取り結ぼうとするなら、ちょっと立場が弱すぎるかも」

「じゃあサングリア側で多少パワーバランスを調整してやる必要がある」

俺たちがゲルダガンドをかばってやらなくちゃいけないの？ なんだか癪に障る。

「確かに癪だけど」

「そのへんの調整は花奈に任せよう。幹也じゃ無理だ。花奈はいろんなことを恨みに思ったりしないタイプだから。適当な落としどころを作ってやれば、花奈がそこへゲルダガンドもサングリアもまとめて突き落としてくれるさ。幹也は、花奈の気が逸れないように見張ってればそれでいい」

「和平の話がある程度進んでたつてことは、多分ほかの問題は解決済みか、折り合いのつけようがあったつてことのはず」

「とにかく花奈には鉦の姫関連のことだけ任せておけばいいね」

アジユの彼女っていったいどこにいるんだろう。目星くらいはつけときたいな。

「一つ、サングリアが方々にスパイを忍び込ませているはずなのに成果が得られないつてこと、二つ、わざわざ紅玉鉦脈を誘拐する計画を立てなくちゃならなかつたこと、三つ、半殺しにされたアジユ

が、どうやって誘拐犯たちからとどめをさされる前に逃げ延びたかを想像して重ね合わせると、その状況が成立する条件がそろってるのはたった一カ所、このへんだけになる」

「つまり、南のリユーナが怪しい。ゲルダガンド国内じゃ、荒野シユツルクを除いてはほぼ唯一の無法地帯だ。

ほら、典型的なリアス式海岸だ。身を隠せるような岩場と小島と入り江の宝庫になっていて、多くの海賊がここを根城にしている」

「ここまでは事実ね。ここからが私たちの想像」

「つまりゲルダガンドの目も、隅々までは行き渡っていないってことだ。瀕死になってたアジユが、ゲルダガンドの追っ手を振り切れるのは、リユーナぐらいだろ」

「確かリユーナは海賊が多いんだったわね。サングリアの私掠船がその中に紛れ込んでいて、アジユがうまくそれに取り入れたとしたら、アジユがサングリアに身を寄せた理由にもなるわ。考えてみたら、この世界になんらのコネクションも持たないアジユが、サングリアの軍隊でスパイをやっていること自体、不自然ともいえるわ」

「まあ、そこらへんはアジユ本人に聞けばいいことだ。ほっとこう」

「まって、まって。アジユとアジユの彼女がリユーナで召還されたってことは分かったかもしれないけど、今アジユの彼女がここにいる証拠にはならないわ」

「それはそうだな。どうしよう」

それは、葉介のことがヒントになるんじゃないかな。葉介はこの

半年、ずっと荒野シュツルクで暮らしているけど、何か理由があるはずだ。

駐屯地にスパイが忍び込んでいると分かっても、花奈をおとりにしたとはいえ、葉介をテントの中にしまいこんで隠すだけだった。葉介をシュツルクから動かせなかった理由がきつとある。

「理由って？」

わからないけど。

「サンタリアまで出かける前に聞いておかなくちゃいけないわね」

重要な手がかりだもんね。

「そういえば、葉介はどうする？」

しょうがない。ここに置いていく。紅玉鉱脈である葉介をサンタリアに連れて行って、もし和平がご破算になって、その勢いで命がねらわれたりなんかしたら俺と花奈じゃ守りきれない。

「アジュとアジュの彼女は戦士なんだから自分の身くらいは守れるはずだしね」

「自分の身が守れなかったから半死半生の目にあつたわけだけどね」

そこらへんは俺たちが気にかけてやることじゃない。アジュがなんとかするでしょ。

「そりゃそうか。ところで、この駐屯地のうまい抜け出し方だけど

……………」

『幹也？ ねえ、幹也』

そのとき突然、ずーっと遠くの方で花奈の声がした。天使たちはすぐに姿を消し、俺の意識も心の深いところからみるみるうちに浮上していく。

「ねえ、幹也ってば」

「うん……」

俺はゆっくりと目を開ける。

目の前には、ベッドに横たわる俺の目の前に膝をつくようにして、三つ子の妹が心配そうに首をかしげていた。

「もうお昼ご飯なんだけど……どうしたの？ 寝てた？ 怖い顔してたよ」

「うん。ちょっと……夢見てた」

おばかの花奈には説明するのがめんどくさくて、俺は、寝ぼけて悪い夢を見ていたことにする。

花奈はそう、とちよっと心配そうな顔になって、俺の頭を「いいこいいこ」と撫でる。葉介ならいやがって振り払うところだが、あいに俺はそこまでタマが小さくはない。甘んじてそれを受けた。

「じゃ、お昼食べよう。葉介は食べるかな。あんまり気落ちしてないといいんだけど……」

「そりゃ無理でしょ。今落ち込まないなんて人として以前に男として俺はどうかと」

「人以前に男なんだ……」

「そりゃそうでしょ」

目とこめかみをこすりながら、俺はゆっくりと身を起こす。

俺は目を開けたまま夢ばかり見る、内向的な子供だった。

今でもそうだ。夢ばかり見ている。

いつか……たぶん近い将来、必ず離れることになる俺たち三つ子を、少しでも長くつなぎ止めておく夢を見ている。

あの白いきれいな灯台の出窓に、ほどなくして天使が小さな灯りを灯してくれるだろう。俺はそれを目印に進むべき道を見定められる。

俺は花奈の頭を撫で返した。

「お兄ちゃんに任せときな」

Single Attack of M " 灯台の天使 "

伏線だった部分の解説と、幹也の頭のおかしさの説明でした。

登場人物及び世界観（前書き）

サングリアの人々編です

登場人物及び世界観

アジユ

銀の両手剣を持つ異世界人。薄緑色の髪の毛に、パンジーの花が咲いている愉快なお兄さん。

全ての文字が読める、年をとらない、よく似合う女装、ポケ被せなど、様々な特技があるが、謙虚なので褒められても自慢はしない。アジユが元住んでいた世界は、ありとあらゆる敵を力を合わせて打ち倒してしまった、『ハッピーエンドを迎えた後のヒロイックサーガの世界』であるため、まじめに受け取るのがバカみたいな強さを誇る。チートというよりはカンスト。（もちろんアジユも元の世界に戻れば、中堅程度の実力なわけだが、そんなことはどうだっていいことである）

しかしネタ装備のネタ具合（彼女の強い希望でやっていた女装）には勝てず、うっかり召還された後、恋人をゲルダガンド人にさらわれ、以後はサンテリアに拾ってもらい、スパイとして黒曜軍の主計兵として潜り込んでいた。

回りくどい手段が好きで、さわやかに策を練り、まずなにことも外堀を埋めていこうとする堅実なタイプだが、妙なところで賭けにも出たがる。

ちなみにサンテリアではアジュールと呼ばれているが、これは人の名前を四文字に揃えたいがため。我々が「ペ」という名に違和感を覚えるのと同じ理由で、深い意味はない。

サビアン

薔薇色の髪、薄オレンジの目、ミルクティー色に日焼けしている男。年齢は19歳。

ヘタレ野郎ではあるが、それは高い倫理観念や思いやりの深さの現れとも言える。理想の王子様像が心の中であり、それに自分を当てはめて行動する。もちろん理想のお姫様像も存在するので、花奈ががさつなことをするとちよつとがっかりする。男女交際は清く正しく交換日記からやりたい派。

実を言うとサングリアの正統の王子で、王位継承権も第一位だが、現在、元側室の王太后が、サビアンにとっては異腹の弟である自分の息子に皇位を与えようと様々に画策しており、人望はあるが味方は少なく、政治的には『ほぼ』終わつた存在。

初対面で花奈を犯そうとしたのも王太后からの命令だったが、お酒の勢いにも任せられなかった。「シチュエーションがかわいそうだと勃起しない」との台詞の通り、ノーマル嗜好で、ロマンチストの、気のいい童貞である。

サビアンの名前の由来は「savior」つまり救世主。

プラネタ

銀色の髪、アイスブルーの目をした、十一歳のシヨタで小悪魔でスペシャルなお子さま。ダサイ寄りの格好をしているが、それをチャームポイントに変えてしまふ、得なタイプな顔立ち。

子犬属性で人なつっこく、特に女相手だと0歳児から100歳のおばあちゃんまでスキンシップを欠かさない。各地に現地妻が何人もいる。しかも現地妻同士、とても仲がよい。

優れた重力魔法の使い手であり、もともとはまつろわぬ民族としてジプシーのように各地を転々としていた一族の出だが、見ていて飽きないという理由でサビアンにくつついて手助けをしている。

花奈に生理用の薬品を用意した、『シエーラ・ゲルダガンディアお抱えの薬師』とは遠い親戚関係にあたるが、この設定が生きる予定はない。

プラネタの名前の由来はそのまま「planet」惑星。その名

前通り、占いも得意で、女の子を口説くのに使う。

バルバト

鋼色のくせつ毛を短く刈り込み、焦げ茶色の目をした隻眼の男。四十代で、サビアンの教育係。

ちなみにナルドと葉介を黒曜軍の上空で追い落とした、独り言の多い騎手とは同一人物だが、たぶん花奈もナルドも気づかない。多分作中でも二度と言及されないだろう。

バルバトの名前の由来は「barbarity」粗野という意味だが、これはもともと賤民だったため。

奴隷として働いていたバルバトを王太后が戯れに召し上げ、サビアンの教育係につけたという過去がある。その後、なかなかいい男だと後から気づき、王太后が改めて傍に置こうとした際、にべもなく断ってしまったため、左目を抉りとられてしまった。そのせいでいうわけではないが、サビアンはバルバトに頭が上がらない。

奴隷だった過去により、独り言が多い。周りに人がいると寡黙になる。あえて喋らないと言葉を忘れてしまうが、人前で話すとむち打たれたため。

グラナアーデと地球、アジュの世界と地球など、それぞれ世界同士、少しずつ影響を及ぼしあっています。

そのため、作中ではグラナアーデと地球に共通の文化が散見されます。

例1 ゲルダガンド人の中で特に身分の高い者には名前に「ジュ」

「シユ」の音がいること

これは漢字の「珠」の影響があります。ゲルダガンドは石の国なので、宝石を表す「ジユ」「シユ」の音を名前に入れることで、自らの身分をそれとなく知らしめるのです。

意味合いとしては日本での「宮」にちよつと似た感じでしょうか。平民が「ジユ」「シユ」を使うことは、禁止こそされてはいませんが、変な目でみられることは確実です。

平民であるベル・ラグランジユの名字にも「ジユ」の音が入っていますが、名字であれば問題になりません。ニュアンスは宮島さん、といった感じでしょうか。

なお、ゲルダガンドでは漢字の影響をうつつすらと受けているので日本人名も『花奈、葉介、幹也』などときちんと呼べますが、サンテリアではカタカナで『カナ、ヨースケ、ミキヤ』となります。

例2

サンテリア人の名前

サンテリアでは、ゲルダガンドの貴人が「珠」の音を尊んで名前に使うの以上に、名前に英語の影響を濃く受けています。

サンテリアでは英語は日常使うグラナーデ語とは別に、名前の由来としてのみ祝福の意味合いをこめて使われる、おめでたい言語として使われています。

名前をきれいに四文字にそろえたがるのは（アジユですら勝手にアジュールに名前を変えられちゃうくらい）、単なる感覚的な問題です。

例3 サンテリアの軍隊の名前『花菱』、『澁標』

ゲルダガンドにある東洋文化の影響は文字文化にうつすらと現れています。サンテリアでは紋章やシンボルなどの美術分野に現れています。

花菱と澁標は、日本での家紋と全く同じマークを旗頭に掲げた軍

隊です。

ゲルダガンドとサングリアの国風

ゲルダガンドはどことなく西欧風、サングリアはなんとなく東欧風です。が、様々な部分でごたませです。

ゲルダガンドは豊富な宝石を有するため、貴金属を惜しみなく使う華やかな装飾文化が発達し、サングリアはゲルダガンドと仲が悪く、宝石を手に入れにくい為、織物や木の彫刻やガラスなどで身を飾るシンプルなスタイルが流行です。が、いろいろごたませです。

Single Attack of Y 1 & quot 体の一部がなくなっ

しばらく葉介のターンです

朝だ。あの事件から二日経った今も、ナルドは相変わらず竜の翼姿のまま、狭いテントに身を縮め、俺の腹にその広い額と狭い頬を寄せて眠っている。

俺の貧相な審美眼を通して見ても、ナルドはきれいな竜になった。まだ子供の竜だが、小粒の鱗は一枚一枚つやつやと光り、なめされたようにしなやかだ。背筋にはつんと立った子供の翼竜に特有の、とがった小さな角が一行に並び、鼻筋はすつと通っていて、こめかみには立派な二本の白い角がぐねりと曲がって頬へ垂れ落ちているが、このうち右の角は一昨日、地面に衝突した時に折れてしまったらしい。

このきれいな竜は、元は人だった。俺のそばに付き従っていた、女の子だった。

俺がそう言っても、たぶん誰も信じないだろう。人間から竜の姿に変わったナルドが俺の眠っている間にまた苦しむんじゃないかと思うと、ほとんど一睡もできなかった。

背骨が歪んで引き延ばされた時、きつとどこか神経を傷つけただろう。竜の小さな頭蓋骨に押し込められた脳味噌に、何の影響もないとは思えない。真珠のようだった歯を食い破って突き出た牙は、口の中に血溜まりを作ったかもしれない。あんなにしつとりとなめらかだった手の甲が、逆撫でるとぱりぱり鱗に引っかかるようになって、辛くないわけがない。

なぜだ。何故、ナルドがこんな目に遭わなければならなかった。

俺の怒りに反応してか、ナルドの臉がわずかに震えた。俺は慌ててナルドの鱗を撫でてやる。翼竜は、一枚だけ逆さまについている喉元の鱗を、真に信賴する者にしか撫でさせない。

「あ…悪い。寝てていいぞ、ナルド」

ありがとうございます、葉介。と、ナルドはつぶやくと、また元通り緩やかな寝息を立て始める。俺はほっと息をついた。

何故ナルドがこんな目に遭わなければならなかったか。

簡単だ。俺が、利用価値の高い弱者だったからだ。俺のせいだ。

困っているらしいからと人の力になりたいなんて甘ったれたことを思い、家族を悲しませ、あげくには一昨日の事件だ。花奈を危険な目に遭わせ、ナルドもこの姿だ。俺はその間どうしていたか。眠り薬をかつ食らって熟睡していたのだ。花奈とナルドが食べきれない分を受け持ってやっただけ、なんて、上っ面だけの善意が、守つてやらなきゃいけなかった二人を傷つけた。

もつと警戒すべきだった。もつと意志を強くもつべきだった。もつと人の気持ち进行を思いやり、もつと人の悪意に敏感になるべきだった。幹也は俺を一言も責めないが、言いたいことはきつと山ほどあるに違いない。

「コンコン、葉介？」

そんな風に思っただけだからというわけじゃないはずだが、そのとき突然、花奈の声がこのテントよりも一つ手前のテントから聞こえてきた。テントの柔らかい布の壁じゃノック出来ないから、口でコンコンと言っているらしい。

「花奈か？」

俺が返事すると、花奈はドア代わりの垂れ幕を跳ねのけてテントに入ってくる。幹也も後に続いてきて、花奈の隣に立った。

「どう、ナルド、寝てる？」

ノックのときよりも少し声を抑え気味にして、花奈は首を傾げた。

「今は、熱も下がってる。そろそろ起きるかもしれないけど、もうしばらく寝かしくしたい」

「そっか」

花奈は痛ましそうに顔をゆがめた。

ナルドが変身したところは花奈だけは目撃している。相当痛そうだったけど、ナルドががんばってたよ、としか花奈は言っていないが、いつもうすらぼんやりとしている花奈が相当痛そうだった、とまで言っているのだ。ナルドが受けた痛みは、想像を絶する。しかし、ナルドはそのとき、悲鳴もあげなかったのだらう。ナルドはそういう奴だ。

重苦しくなった空気を振り払うように声を出したのは、やはりというか、花奈だった。花奈は、えへっ、ときこちない笑いを浮かべながら、拜む形に合わせた両手をくねらせる。

「あのねえ葉介、実はそのお、原付をですねえ、貸してほしーなー、って思ってますねー」

俺はすげなく言った。

「語尾を伸ばすな」

花奈は素直に改める。

「葉介様原付貸してくださいっ」

「鍵は俺の机にあるから勝手に持ってけ」

何か含みがある様子だが、深く追求するつもりにはなれない。

花奈一人で原付に乗るだとか言い出したんなら、絶対に鍵は貸さ

ないが、花奈の隣には幹也がいる。たぶん二ヶツして駐屯地を巡って遊ぶのだろう。

「ありがとう」

眠っているナルドに遠慮してか、花奈は目的を果たすとさっさとテントを出ていこうとした。が、それを幹也が引き留める。背を向けた花奈の手を握って、幹也は口を開いた。

「葉介に言つときたいことがあるんだけど」

「……………なに？」

とうとうなじられるのだろうか。家族から離れ、花奈を巻き込んだことを。

しかし、身構えた俺に降り懸かった言葉は、予想だにしないものだった。

「『体の一部がなくなっても、全身が地獄に落ちない方がましである』。俺はそういうつもりでここ三日くらい色々がんばっている」

「……………は？」

いったい何を言わんとしているのか量りかね、首を傾げる俺をよそに、花奈がわくわくしたような声音で口を挟んだ。

「そういうえばハンターハンターのさ、幻影旅団がそんな感じのノリだよ。そういうえばハンターハンターはいつ連載再開するの？」

「花奈の脳味噌ってさ、どうしていつもそうなの？　なんでそういうばをワンセンテンスごとに使うことができるの？」

そのままどんどん話は右へ左へ逸れていく。あっけに取られている俺のことなどおかまいなしにだ。

そのうち幹也は花奈の相手をまともにするのを諦めて、俺の方に再度向き直った。

「そういうことだから、まあ葉介もがんばって」

「……………おう」

俺はよく分からないなりに一応返事する。幹也はそれだけで満足そうにうなずいて、更に続けた。

「ついでにもういつこ言つときたい」

「……………いいけど」

「『第一に、忍耐と寛容をもってすれば、人間の敵意といえども溶解できるなどと、思つてはならない。第二に、報酬や援助を与えれば、敵対関係すらも好転させうると、思つてはいけない』」

……………ますますなんだか分からない。俺はとうとう素直に聞いた。

「……………なにそれ？」

「マキアヴェリの政略論」

「何だかおどろおどろしいな」

俺は薄く笑つたが、幹也は笑わなかつた。

「ここで重要なのは、じゃあ『敵を御するにはどうしたらいいのか』ってことを考える際、怒りや敵意や暴力をぶつけることは、論外すぎてマキアヴェリも書いてすらいないっていう事実だと俺は思う」

「じゃあどうすればいいの？」

きよとんとした顔の花奈が俺の代わりに聞く。幹也はちらつと隣に立つ妹の顔を見た。花奈と幹也の背は拳一つ分くらいしか違わない。

「花奈はどう思う？」

「……………勢いと根性！」

「まあ、答えは人それぞれあるよね」

幹也は花奈のどや顔と回答をまとめて無視したが、花奈はめげない。

「じゃあ私からもなんか良い言葉を」

「いやお前はいいよ」

俺も幹也と同じく冷たく言った。アホの花奈が突然『子曰く……………』なんてやり始めたらこのシュツルクに隕石が降り注ぐだろう。

しかし、やっぱり花奈はめげない。俺が聞いているのか聞いてないのかも確認しないうちから、勝手に叫ぶ。

「私は、私の弟は、出来る子だと思っている！」

「誰が弟だ」

俺のつつこみも何のそのだ。花奈は寝ているナルドに遠慮しつつ、小声で、しかし力強く言った。

「葉介は、追いつめられてからパワーを発揮するタイプだと思いません！」

「そりゃどうも」

「葉介は、出来る子です！！」

「……………ああ、そう」

「ファイト葉介！」

「うん……」

「大好きだよ葉介！」

「いや、もういいよ……………」

そう返事するのが精一杯だった。何が言いたいのか一から十まで分からないが、アホの花奈なりに、一応、俺を励まそうとしているということだけは分かる。

「たとえば君が傷ついて！ くじけそうになったときは！」

「いやもう十分でしょ」

まだ何か言おうとしている花奈を押しとどめ、幹也はもう一度繰り返した。

「そういうことだから、頑張れ」

「……………おう」

「じゃ、私たち行ってくるから。ナルド、お大事にね」

そういう風にやりながら、花奈と幹也はぐだぐだとテントを出て

いった。

ぐだぐだと締めり無く出ていったものだから、そのまま一人が俺の原付に乗って駐屯地を出ていったと発覚したのは、俺と二人が別れてから、四時間も後のことだった。

Single Attack of Y 1 & quot; 体の一部がなくなっ

体の一部がなくなっても、全身が地獄に落ちない方がましである…
『マタイによる福音書（05：29 - 30）』が出典ですが、姦淫を戒める意味合いで使われた言葉（もし、右の目があなたをつまづかせるなら、えぐり出して捨ててしまいなさい。体の一部がなくなっても、全身が地獄に投げ込まれない方がましである。）なので、よくわかんないことになっています。つまり幹也は、聖書とはまったく正反対の意味でこの言葉を使っています。

主のいなくなったテントの机は、珍しくきれいに片づけられていた。いつもは髪をとめるゴムみたいなやつやら、ハンドクリーム、日焼け止め、その他ごちゃごちゃしたもので埋め尽くされているのだ。

机の上にはメモが一枚ぺらつと乗せてあった。まりもつこりのムカつく顔の真ん中に、『冷蔵庫の中をチェック！ 花奈&幹也』とだけ書いてある。

俺は仕方なく冷蔵庫を開けた。真ん中の一番目立つところに、プッチンプリンが置いてある。幹也が日本から持ち込んだものらしい。そういえばプッチンプリンは三連のはずだが、ここにあるのは一つだけだ。残りの二つは花奈と幹也が既に食ったのだろう。『ボクヲ プッチン シテ タベテネ オイシイヨ』という花奈の字のメモが貼りつけてある。

もちろんプッチンなんかするわけがない。そんなテンションじゃない。俺は上下左右からプッチンプリンを観察して、三枚目のメモを発見した。

メモはプリンの裏底に貼りつけられている。プッチンするための小さなトゲのすぐ脇に、『ハズカシガラスニ プッチン！ プッチン スルマデ モンハンノ ハコハ ミチャダメヨ』とあった。

俺は迷わずプリンを元あったところに戻し、ベッドへ行っ出て出しっぱなしになってたPSPソフトの箱を開けた。中にはモンハンじやなくダンガンロンパのソフトとメモが入っていて『プッチン……(´・`・´)』という見透かしたコメントの下に、『ナルガクルガを討伐した後、古文の教科書の314ページを開け！』とある。

めんどくせえ。俺はさらに、次のメモを探した。教科書をパラパラめくると、314ページは巻末付録の百人一首一覽であることがわかる。

今度は、『立ち別れ いなばの山の みねにおふる まつとし聞かば 今帰り来む』という中納言行平の歌の隣に、『待つててね 待つててくれれば すぐ帰る 写真の裏は 要チエックだぞ』と走り書かれていた。

「……………」

だんだん萎えてきながらも、俺はふらふらと丁字に並べられた四つのテントのうち、中央のテント……つまり自分のテントへ戻り、その机の上に置いてある写真立てを手に取った。写真立てのそばには見慣れないハローキティの封筒も置いてあったが、まずは写真立ての裏をチエックだ。

木製フレームの写真立てに入っているのは、家族の写真だ。背景はうちの庭で、死んだじいちゃんと、母さんと父さんが後列に、俺と幹也を両脇にとっつかまえて機嫌よさそうにしている花奈が前列に、三人ずつ並んでいる。

この半年の間に細部まで記憶してしまったその写真を、俺は改めてしばらく眺めた後、おもむろに写真立てをひっくり返した。

まず目に付いたのは、貼りつけられていたメモ用紙よりも、そのメモに描かれていた奇怪な何かだった。俺は写真立てからメモ用紙を引きはがし、じつくりとその何かを観察する。

縦方向にぎたぎたに切り裂いて伏せた紙コップに少しだけ似ている何かの下に、むっちりした何かがあつて、むっちりした何かから爪を持った腕らしきものが伸ばされている。つまり、なんだかさっ

ぱり分からない。

というか、花奈がいったい何を描きたかったのか、俺だから多少分かるようなものの、よそ様では特徴をとらえることすら困難だろう。

のっぺりした謎の怪物らしきものの下に、「コメントとごちやごちやした文字が書いてあった。

」「『楽しく解読せよ。 ヒントはコレ！』……?」
書いてあったのは、以下この通りだ。

ちよくつとわくへいくくのたくめにさくんぐりあくまでいくつ
くてきまくすく。くひとくりくでくくおるくすばくんできくる
くくよくね?」

くあくじくくゆくのくかのかのくじくよをくだくつかくんくして、
くげくるだくがくんくどくとくさんくぐりあくのくこくうたく
くいくくうくにぎくやくぶんくとくいくくわせるくよくくてく
いでくすく。こくうくきくたくいく。

くくらくーじくゆもくだけくどみくなくなぐげくんきくなく
いくらしくいくのでくしくんぱくいでくす。おくみまくいくくにく
いくつてくあくげくてくね。

ぜくつきたいくさくんにくんでかくえくろくくうくね。
くかなく みくきやく

」「……まあ『く』がやたらと多いし避けて読むか」

鉄板だ。』く』をひたすら頭の中で削除しながら、小さく声を出して読み上げる。すると、一行目はこうなった。

「ちよつとわへいのためにさんぐりあまでいってきます。ひとりでおるすばんできるよね?」……?」

意味がまるで分からない。俺はさらに読み進めた。すると、最終的な内容はこうなった。

ちよつとわへいのためにさんぐりあまでいってきます。ひとりでおるすばんできるよね？

あじゆのかのじよをだっかんして、げるだごとさんぐりあのおうたいごうにぎゃふんといわせるよていです。こつごきたい。

くらーじゆもだけどみんながげんきないらしいのでしんぱいです。おみまいにいつてあげてね。

ぜつたいさんんでかえろつね。 かな みきや

「……………バカか!」

読んでるうちに、描かれていた謎の怪物はもしかして『くとりふ』なのではないかと思うに至り、俺は思わずメモを床に叩きつけていた。

フザけるのにも程度というものがある。なにがくとりふだ。程度の低い暗号なんかつかって、お茶目な感じを演出しやがって。クラージュがらーじゆになつてるじゃねえか。ツメが甘い。行き当たりばったりすぎる。

何より、ちよつと和平に、だと？ まるで醤油買いに行くみたいに、サングリアまで？

そして…………一人で留守番？ 幹也と花奈は本当に俺を置いて二人だけで行ったのか？

その事実は、俺の心を多少ではあるが傷つけた。

花奈と幹也にとっては一瞬の出来事だったかもしれないが、俺に

とっては花奈と幹也に無事再会するまで、半年間のブランクがある。その間それなりに心細かったし、会えたときにはそれなりにほっとしたのだ。

俺は仕方なく叩き捨てたメモを拾い、机に置いた。そして、置いてあったハローキティの封筒を開けて、中の手紙を読む。

手紙はうちの母さんからのものだった。隅っこの方にぼつんと家の実印が押してあるのは、父さんが押したものだろう。父さんも何か一言書けとか何か言われて、でも書けなくて、苦し紛れに印を押している姿が目につかぶ。

プリンは好物だ。贅沢を言うなら、味はパステルのなめらかプリンの方が好きだが、母さんは俺たちに三連プリンを与えたり、俺たちの方も文句を言わずにむさぼった。いわゆる思い出の味というやつである。

モンハンだって好きだ。幹也がヘイボウガンか狩猟笛、花奈が片手剣でサブが弓、俺がメインを太刀に時々ハンマー、この組み合わせでよく狩りに出かけた。

一学期の期末テストも近かったはずだ。俺は古文が苦手で、なかなか試験勉強もはかどっていなかった。日本を離れて半年たった今は、もう、助動詞のことなんか忘却の彼方だ。この世界にとどまり続けるならば、もはや必要のない知識。

そして、家族の写真。母さんの手紙。全て、俺の郷愁を誘う罠だ。

「……………」
俺はその場にうずくまり、さざなみを立てる心が静まるのをひたすら待った。

こんなむごい真似をするのが、何故俺の兄妹なんだと、筋違いな恨みの湧きあがるのが収まるまで。

もちろん分かっている。むごい真似をしているのが、俺の方だとは。育ててくれた恩も忘れて、こんな埃っぽい、雷と重力と血で荒れに荒れた土地に住み着いて、何も言わないまま、この時間で半年も戻らない俺が悪い。

もしたとえば、紅玉鉾脈に選ばれて池に吸い込まれたのが花奈か幹也だったとしたら、そして花奈か幹也かが、俺と同じように帰りがたがらなかったとしたら、俺だってこんな風に相手の弱みにつけ込んででも、家に帰らせようとするだろう。だが。

言われるまでもない。俺だって、帰りたくないわけがない。

だがここでの知り合いを、見捨てることなど出来ない。花奈は誘拐犯呼ばわりだが、今まで何度も亡命を考えた俺が結局実行に移さなかったのは、こいつらが根本的にいいやつらばかりだったためだ。

俺だって帰れないのは辛いのに、兄妹は容赦なく俺の感情に訴えかけてくる。状況が許さないとって事情は、毛ほども考慮に入れてくれない。しかし感情と現実の板挟み、棒の引き合いになっては、この俺だっていつかは参ってしまうだろう。

いや、既に参りかけている。苦難にある一国の財政を直接に左右するこの紅玉鉾脈という能力を、何故この俺が得たのか……何故俺が、俺の意志に反して、他人の国のために尽くしてやらなくてはならないのか。

……………いや。

俺は拳を作り、目を閉じて一度深呼吸をした。そうして、俺のどす黒い被害者意識を封じ込める。

まずは、理性的になるべきだ。

何故俺だったのか、紅玉鉾脈とはそもそも何なのか、それについて

て思いを馳せるのは後でも出来る。

今はただ、『紅玉鉾脈に選ばれたのや、一人残されたのが俺でよかった』と思うべきだ。

年齢不相応に幼いところのある花奈や幹也では、たとえナルドが支えてくれたとしても、一人で過ごさなくてはいけなかった半年間に、ぼつきり心が折れていただろう。俺でよかったのだ。

大丈夫だ。俺は孤独に耐えられる。何より俺には、既に半年耐えた実績がある。俺以上に俺を知っている花奈と幹也が、俺が孤独に耐えきれると思ったから、二人とも俺を置いてここを離れたのだ。今更、兄妹の顔を見て、無益な里心をつけている場合ではない。

それよりこれから俺はどうすれば良いか考えるべきだ。どういう意図で花奈と幹也はサングリアまで突っ込んでいったのか、花奈と幹也のサポートをしてやれる方法はないのか……。

立ち尽くしたままじつと考えていた俺の耳にふと、隣の一番奥に位置するテントから細かい声が聞こえてくる。

「……………葉介」

俺は慌てて奥のテントへ飛び込んだ。

「ナルド？ 目が覚めたのか」

ナルドはこの二日、寝たり起きたりを繰り返して、食事も満足に摂れていない。

「水くらいは飲めるか？ なんでも良いから腹に入れとけ」

俺は主計兵長からもらってきた、二つのでっかいピッチャーの蓋を開け、ナルドがそこへ顔を突っ込めるようにした。

片方は八チミツとリングとバナナとレモンのどろっとしたミックスジュース、もう一方には普通の湯冷まし（つまり俺でも飲めるた

だの水が入っている。

本来翼竜はふつう、清潔な木製の桶に鼻を突っ込んで水を飲むが、そんなことをナルドにさせるわけにはいかない。というか俺が見たくない。

俺はミックスジュースと水のピッチャーをそれぞれ指して、

「どっちが良い？」

と、ナルドの上顎の上まで持ち上げたが、ナルドはゆっくりと首を左右に振る。

「水分だけでも摂つとかないともたないぞ」

また話しかけたが、それでもナルドは答えなかった。俺は多少、意外な気分になる。たかが返事をしなかっただけ、とは思わないでほしい。ナルドが俺の呼びかけに返事をしないことなんて、今まで一度もなかったのだ。

ナルドは前々から、俺にとってはものすごく従順な『従者』だった。それこそ半年前、孤独感と不信感のあまりに粗野な態度をとった俺に対してすら。

「ナルド？」

「何かがあったのですね」

ナルドの大きな背を撫でてやると、ナルドの瞳の色が、光の加減か、わずかに昏くなる。そしてナルドの鉤爪が俺の胸へ伸びていき、肋骨のちよと真ん中に触れた。

「……………葉介の心が、風いでいくのが分かります。今までにないほど」

「分かるの？」

ずっとナルドの目が閉じられる。ナルドの瞼の上には鱗がない。縮緬のような皺の入った、赤く柔らかい表皮が露わになる。

「分かりません。分からないから、分かります。」

私は、葉介の従者ですから、今まで葉介が悲しいのも、怒っているのも、嬉しいのも、楽しいのも分かりました。

でも、今は分からない。今のあなたは、悲しんでも怒ってもおらず、嬉しくも楽しくもないから。だから、葉介、あなたがもう決めてしまったのが分かる」

そこでナルドは一度、息を吸いなおした。

「葉介は、この戦争が終わったら地球へ帰ってしまうのですね」

俺は、息を呑んだ。ただの一言もごまかしの嘘を言っただけはいけなし、ナルドを傷つけてもいけないのだと直感したからだ。

俺はナルドリングガへ……俺のための従者という名前しか持たない、健気な女の子へ、心をこめてこう言った。

「そつだ。俺は家に帰る」

受け身も無気力も卒業だ。状況に流されてるだけの自分を、善意の人間だと勘違いするのも金輪際、やめだ。本当に善い人間っていうのは、まず何よりも自分を想ってくれる家族を大事にするものだ。自分の尻も拭けないような人間が、誰かを守るなんて思っっちゃいけない。

俺はナルドへ向かって深く頭を下げた。

「今まで悪かった。俺、お前に甘えてばかりだった」

「葉介」

俺の言いたいことがほとんど言えていないうちから、ナルドは悲鳴をあげ、俺の言葉を遮る。

「いいえ、葉介。私には葉介以外の主人はこの世にいません。私は紅玉鉱脈の従者です。私は葉介にただ従属するためだけのもの、葉介と共にあることだけが喜びなのです。お願いです葉介、私から葉介を取り上げないで」

ナルドの声が泣いている。涙こそこぼれていないが、長い鼻先をぎゅっと俺に押しつけて、ナルドはすすり泣いた。

このままじゃまずい。俺の言いたいことが伝わらない。

俺はナルドの顔を自分の胸から引き剥がし、大きな顎を両手で支えて正面からナルドの目を見据える。

「前から思ってた。ナルドお前、その従者っていうのほんっとーにやめろ」

「葉介？」

「俺とお前は、その、なんつーのか……………」

何と言ったものだろう。ここで口ごもらずにいられば良かったのだが。あーとかうーとか唸った末、俺はこう言う。

「友達だろ」

「ともだち……………」

ナルドはぼんやりとした返事しかしない。

まさかこの年になって、友達のなんたるかについて語り合わなきゃいけなくなるとは思わなかった。こういうのは花奈向きであって、俺向きでは断じてないのだ。若干気恥ずかしいのをこらえるために、俺は少し大声になって言う。

「友達は例えどこにいようが友達のままだ。世界を隔てて離れようと、あつちからこつちへ移動するだけで半年も時間が過ぎ去るうと、友達は友達のままだ。なんでお前はそんなにビビってるんだ。」

お前女だろ。俺は男だから何とでもなる。そんな風に人間やめてまで俺のためになるうとしなくていい」

こんなに言葉を尽くしても、ナルドはまだ、茫洋としていた。翼竜の目には、白目がない。光を吸い尽くして、今度は変に明るい色をしたナルドの瞳からは、感情はまるで読みとれない。

「男だったら…なんとでも？ ……私が、女だから、葉介を守れない。…でも、男だったなら…私が人間の男だったなら」

「ナルド、食いつくところが違う。いいか、俺とお前は…」

「葉介と私は、お友達…」

俺は更に言葉を重ねようとしたが、それはかなわなかった。

俺が手を添えていたナルドの下顎から、真つ赤に輝く鱗が突如ばらばらとこぼれ落ちたからだ。

唸然とする俺の耳元で、さらさらと何かが崩れる音がした。重たく実つてうなだれた稲穂が風に揺れるような音が。そして立て続けに、根雪の上を踏んで歩くような軋みの音、太い枝に強く力をかけて、乱暴に折り取ったような音。

「ナルド！！」

俺はナルドの名を高く叫びその巨体を両腕に捕まえたが、ナルドの変化は止まらない。

ナルドの頭蓋骨と尾が縮み、鉤爪は抜け落ち新たに爪が生え、発達していた筋肉も見る間に痩せ落ち、皮膚を突き破りそうに張り出していた痛々しい太い骨と翼も縮んでいく。頭部の鱗の隙間からナルドの赤いくせつ毛が飛び出し、髪に押し退けられるように鱗が剥

がれ落ちた。それと同時に鱗の下から白く丸い頬が現れ、俺にも見慣れたナルドの顔が形成されていく。鱗は、身じろぎするたびぼろぼろとこぼれ、床に真っ赤なガラス片のような鱗の円が出来る。

やがて、ナルドの変身は終わった。ゆったりと白い臉を上げ、ナルドはこちらを見る。

服は着ていないが、ぎよっとさせられるようなことはなかった。赤い鱗がナルドの顔を除いた全ての部分、薄い身体をきれいに覆い尽くしているからだ。しかし指の関節のところでは鱗が剥がれ、その下から陶器のように白い皮膚が現れる。俺は慌てて着ていたTシャツを脱いでナルドの身体にかぶせる。

胸の膨らみが見えてしまいそうだ、と思ったのが杞憂だった。ナルドの胸は、まったく平らで、『ほとんど男と同じように見えた』。平らだからと言って見て良いということにはならないが。

「大丈夫か、ナルド！ 痛いところはないか？」

ナルドはやはり答えない。しかも、少しも慌てた様子がなかった。裸を見せることに抵抗がないのかもしれない。ナルドは、軽く眉間に皺を寄せ、不安そうに俺を見上げる。

「葉介。これで私たち、お友達でしょうか？」

『これで』というナルドの言い方が何故か心に引っかかる。俺はナルドの手をとって握りしめた。

「前から友達だったろ」

これでよかったのだろうか。何か俺は、大切なことを見落としているのではないか。何かナルドの事情の中で、俺がすくいあげきれないものはないだろうか。

「幹也が帰ってきたら、幹也とジユノに相談してやる。俺が家に帰

つても、ナルドとしょっちゅう会えるようにしてくれって。お前がこの世界に身よりが無いなら、いっそ一緒に連れて帰ってやる。家は広いからお前一人くらいどうとでもなる」

俺がどんなに言葉を尽くしても、ナルドの表情はあまり変わらない。わずかにナルドは目を伏せて、つぶやいた。

「ありがとう、葉介。私、少しもつらくありません。むしろ暖かいのです、葉介」

俺は失敗してしまった、という、根拠もない直感に怯えていた。

Single Attack of Y 2 & quot; 恋せずは人の心もな

恋せずは人の心もなからまし 物のあはれもこれよりぞ知る（藤原
俊成・長秋詠藻）

あの書き置きを信じるなら、花奈と幹也は一度破り去られた和平の条約文書を接ぎ合わせに行ったのだ。

それも、セロハンテープで貼ってそれでおしまい、というわけにはいかない。

いま糊を必要としているのは、一度きっぱりと離れてしまった人の心だ。

ゲルダガンドとサングリア、どちらの国にも縁のない二人が、和平を改めて取り結ぼうというのだ。花奈お得意の、愛と勇気と時の運で和平が締結されるなら世話はない。

正直言つて、花奈と幹也がいったいどうやってサングリア側のこたごたを片づけるつもりなのかは全く見当もつかないが、何にせよ俺はここからは動けない。俺に出来ることをするだけだ。

俺に出来ること、その1。ジュノとの交渉である。

正直言つて、気が重い。なぜか。約束を果たしていないからだ。

言っておくが、ジュノ本人ではない。和平を結ばせ、外貨を稼ぐためのルビーの特需に終わりを告げさせる。それまでは、ゲルダガンドの人々のために、おとなしくルビーを生み出し、平和のために尽力するとの、死んだ人間との約束だ。

ナルドと手をつないだ俺がジュノの執務用テントへ滑り込んだと

き、ジユノは相変わらず机に向かって何か書き物をしていた。クラージユの魔法のペンが5本もジユノの周囲を踊り狂い、同時に何通もの手紙だか書類だかをしたためている。

俺は、言うならジユノの気がそれている今のうちだ、と思い、挨拶もないまま単刀直入に宣言した。

「……………俺、帰るから」

しかしジユノの返した言葉は、俺以上に端的だった。

「そうか。いつだ？」

…いつかは俺も分からない。幹也と花奈の都合次第だ。現時点で言えることは、これだけ。

「……………近いうち」

「和平はどうする？」

聞きはしても、ジユノは何事もなかったかのように、羽ペンの指揮を進めている。俺に、何も求めていないようだった。

俺は奥歯を噛みしめた。ここから俺の戦いと言ってもいい。泥臭いまねをするのは、多分花奈にも幹也にも出来ない。

和平成るまでは、俺は帰らない。だからなんとかしてでも成らせる。

俺は両手を机について、天板に頭突きするほど勢いよく頭を下げた。

「和平のことは、サンタリアで花奈と幹也が何とかする。だから、

ジユノもこっちで根回しを頼む」

「……………」

ジユノは俺の頭のとっぺんを見つめているようだった。

「和平を結ばせるのは、お前ではなかったか？」

「俺じゃ無理だった」

俺は短く答えた。俺では無理だが、花奈と幹也なら何とかするだろう。そう感じた末での申し出だった。

自分が無力だと認めることほど、辛いことはない。

花奈は多分知らないだろう。幹也はもしかしたら誰かに聞き込んだかもしれない。

ありがちな話だから、詳しくは語らない。家族から引き離されて荒れる俺を辛抱強くなだめ、人並みに戻してくれた優しい戦災孤児の密かな死の話は。

戦争で人が死ぬのは当たり前のことだ。その人の死を悼み悲しむ人間がいることも。

死んだのがあいつで、泣いてるのが俺だということではない。

あいつはゴーグルとグローブを与え、翼竜にまたがる楽しみを生懸命に教えてくれた。

抱卵をやめてしまった、ステイルという名の親竜の代わりに大切に温めていた卵を、俺にだけ預けてくれもした。

多分あいつの死は記憶と歴史の砂に埋もれていく、とるにたらない出来事ではないのだろう。

『俺のために、戦争を終わらせてくれ』と。あいつの死をきっかけに俺が立ち、俺が戦争が終わらせるなら、あいつの死は意味あるものになる。

和平は、あいつの望みだったのだ。

俺はいいわけがましく言葉を選びながら俯いた。

「俺も、本当は、和平結びたかったよ。あいつとの約束だったからな。」

でもやっぱ、俺じゃ駄目だった。直接屍人兵を見た俺じゃ、もう無理だ。恨みが募って、憎むことしかできない。このままじゃ、和平は結べない。花奈と幹也に任せたい。

花奈と幹也なら絶対なんとかすると思うから、悪いけど、俺じゃなくて二人を信じて」

「葉介」

くどくど言い連ねかけた俺をさえぎるように、ジユノは短く俺の名を呼ぶ。

椅子にかけたまま手を伸ばしたジユノが、俺の額に指を当て、下げた俺の頭を上げさせる。

出会った頃……半年前には剣だこでこわついていたジユノの指だが、今は薄らぎ、代わりに染み着いたインクで汚れている。

ジユノの手は、この半年の間で急速に戦うための手ではなくなってきた。

ジユノは、慣れないうちは相手を萎縮させるだけの、いつもの冷やかなまなざしで俺を見つめる。

「お前に頼みがある」

「……………なに」

いつもジユノは決めたことを命令するだけだった。頼みがあるなんて言い方はしない。

言われたのは、予想外のことだった。

「黒曜軍の士気は落ち、不安要素が多い。このままではサングリアがどうでも和平は成らない。サングリアで花奈と幹也が動くなら、お前はここで和平が成るよう皆に説いて回れ」

「……………」

和平が成るまでは帰らない。

和平が行われるなら、ルビーが溜まり次第すぐにも帰る。

俺はそのつもりでこの半年間、耐えていたつもりだった。

「今までよく耐えた。こうとなったら成らせて見せる。

人には自分が代わりに憎むからお前は恨むなと言え。」

そうして、自分の憎しみも、他人の恨みも、心の内に吸い取って石に変えてしまえ。お前はそれを許された、世界でも希有な存在だ。花奈も幹也もお前ほど辛抱強くはないと見える。お前は艱難辛苦を呑み込める男だから、紅玉鉱脈にも選り出されたのではなかったか。

花奈も幹也もない今、やがては異界に去り、憎しみも悲しみも持ち去れるお前がゲルダガンドの正面に立つほかないと俺は信じる」

ジュノはいつになく饒舌になっていた。言葉は力強く頼もしかったが、こういうときのジュノはただ、相手が自分の言葉に同調するか、それとも反発するか、様子をうかがっているのに過ぎないのだ。それを知っていたから、俺は拗ねたことを言う。

「俺じゃなくてもジュノかクラージュで十分だろ」

「俺では成らん」

だがジュノは短く答えた。

「人の恨みを買いきすぎた。俺の力では、国を動かすことは出来ようが、人の心は動かない。クラージュでも成らん。というより、成らせてはならん。クラージュは心が冷えている。クラージュの結ぶ和平では、いつか忘れ去られる口約束にしかない」

ここでジュノは息を継ぐ。

「サンテリアでは花奈と幹也が力を尽くすと請けあうなら、俺はここに残ったお前に期待をかけよう」

「……………」

俺はジュノに背を向け、テントを出かかった。

花奈と幹也のことにふれられると、俺は弱い。……と言うのは逃げだろつか。とにかく、なかなか訴えかけてくるところのある演説だった。

「……………」とりあえずクラージュの様子見てくる」

「ああ」

ジユノの表情は確認出来なかった。あまりにも気恥ずかしい。

「……ステイルの卵はとりあえずミュゼとベルに預ける。もついい加減、孵化してもいい頃のはずだ。ナルドのことは、悪いけどちょっと考えさせてくれ。二人で相談して決める」

「お前に任せよう」

「……………」

俺はちらっとだけジユノを振り返る。ジユノはいったん止めていた五本の羽ペンの指揮を再開し、もはや俺には目もくれていなかった。

ジユノって、前からこういう奴だっただろうか。お前に任せるとか、頼むとか、そういう委ねるようなことが出来るような男だったか？

それとも、剣を振るうのからペンを滑らすのに仕事を切り替えたら、嫌でも人に頼ることが身についてしまったのか。

しかしジユノの変化について考えていても仕方ない。俺がジユノの彼女かなんかだったなら話は別かもしれないが。

そうしていよいよ、俺と、俺と手をつないだナルドがテントを出かかったとき、ジユノは突然引き留めた。

「ナルドリंगा、お前は残れ」

「……………」

ナルドは俺とつないだ手を離さないままほえんでいる。まったく聞く耳持っていない。相変わらず、いつまでたっても、直せと言ってもどうも直らない、ナルドの悪癖だ。

俺はため息混じりにナルドを促した。

「……………ナルド。なんかジユノが用があるんだってよ」

「……………はい、葉介」

ナルドは無念そうに、しかし素直にうなずいた。

羽ペンの指揮をやめないジユノの様子を見るに、きっと大した用件ではないのだろう。

「じゃあ、先行くわ」

俺がナルドと離れた片手を肩の位置まで軽くあげると、ジユノは一つうなずいた。ナルドは深々と頭を下げる。ジユノは最後に、一言言いおいた。

「なかなか退屈しない半年間だった」

「……まだしばらくは残るけど。……ジユノ、お大事にな」

俺はジユノのテントを出た。

葉介が出ていくと、ジユノは五本の羽ペンを文箱におさめ、ナルドに向かって、執務机を挟んで置かれた小さな椅子を視線で指した。

「座れ」

「はい」

ナルドは座った。腰掛けるとナルドの小さな体は、うずたかく積み上げられた書類に埋もれてジユノとは顎より上しか見えなくなる。ナルドはテントのそばから葉介の気配が完全に消えたと感じるや、うつむきがちに口を開いた。

「ジユノ様、お願いがあります。私も葉介と日本へ行きたいのです。それにはどうしたらよいか、教えてくださいませ。それでなければ、

あちらとこちら、自由に行き来できるようにしていただきたいのです。

そのために必要なものがあるならば、なんなりとおっしゃってください。強力な重力魔法の使い手が必要なら、サングリアからさらって参ります。財が必要なら、いかようにも工面いたします。人の生き血が必要なら」

「ナルドリング」

「……………」

ナルドは黙った。

ジユノは眉間に濃い皺を寄せて、強く力をこめて目を閉じた。

男としては脂の乗り切った頃だが、さすがに体力的には衰えが見られ始めている。ほんの半年ほど前まではほとんど三日も不眠不休ですんだが、今は一日少しでも目を閉じないと、頭痛がとれなくなっている。

「男体化したな」

「はい」

ジユノが眉頭をおさえたまま短く問うと、ナルドも短い言葉ではつきりと認めた。

「葉介とは結ばれないからか」

「はい」

『ナルドリング』はそっくりそのまま、『紅玉鉾脈の九十八番目の従者』を意味する言葉だ。ナルドリングは、紅玉鉾脈の九十七番目の従者……………ナルドリンナを父に生まれた。

いつかはナルドリングも、ナルドリングを…紅玉鉾脈の九十九番目の従者を、産むか作るかしなくてはならなくなる。次代の鉾の姫のために、どうしても必要な作業だ。

鉦の姫の従者は、自らの鉦の姫をしか愛せない。

鉦の姫は、処女を失えない。

鉦の姫の従者は、次代の鉦の姫のため、次代の従者を産み出す本能的義務がある。次代のとはいえ、愛した姫と同じ種類の鉦の姫だ。その姫を孤独にすることは、紅玉鉦脈の従者に限らず、すべての従者がおそれることだ。

カタルシスが発生する。

葉介と元々のナルドのような例外も中にはあるが、本来鉦の姫は女で、対の従者は男である。従者はそも、性別などあつてなきがごとき生き物だ。異界に喚び出されてよるべなく心細い鉦の姫を包み込めるよう、鉦の姫と対になる性別へ次第に分化する。

当初ナルドも葉介にあわせて様子を見ながら、女の姿をとっていた。しかし葉介はナルドに女性を求めなかったから、ナルドは男になることを決めた。それだけにすぎない。

花奈は、ナルドが男になることを、ずいぶん心配していたようだが。

そのことを思うと、ナルドの心がほんの少し和む。自らの主以外は塵か芥かのようにしか思えない従者にとって、これは驚異的なことだ。

男と違って女では、妊娠しなくてはならない。数十年の後、死した葉介のそばによりそいながら、他の男に身を委ね、次代の従者を十月十日腹で育み、産み落とすことは、おそろくきつと、辛いことだろうと思われた。

射精の他することのない男の方が、まだきつと楽だろう。従者た

ちが好んで男の姿をとるのも、その理由も含まれていたのではと、今のナルドは思う。もちろん、対となる鉱の姫にかたちよく寄り添うためもあるだろうが。

「ナルドリンドは、花奈ちゃんに産んでもらおうと思っていました」
「……………」

ジユノはまた、頭痛をこらえるそぶりを見せた。

「……………花奈には言ったか」
「いいえ、まだ。次会ったとき、お願いします」

ナルドは、よい方法を見つけたと思っている。

ナルドの父親は、愛する鉱の姫を裏切ることに耐えきれなかった。74の齢を数えた、先代の紅玉鉱脈が処女のまま死んだのを見届けした後、同じく歳を重ねた父親が、たった一度だけ牝馬とつながり産ませた子がナルドリングだ。父は牝馬が妊娠の兆候を見せるのすら待たず、愛しい紅玉鉱脈の後を追って自ら死を選んだという。

ナルドリングも、そのはずだった。愛しい主が生を全うするまで髪一本にいたるまですべてを捧げ、主が命終えた後は次代の従者の種を蒔き、後を追って死ぬという、父と同じ運命をたどるはずだった。

ほんの数週間前、葉介の姉だか妹だか、花奈が異世界からやってくるまでは。

ナルドはわずかにほほえんだ。まだあまり発達していない、小指ほどのペニスだが、今ナルドの足の間に生えている。

これがナルドにとって、一番辛くない選択だったのだ。ナルドはこうつぶやいて、締めくくった。

「葉介の妹の子供なら……………花奈ちゃんの子供なら、私にも愛せると

思っています」

ジユノはしばらく黙りこくっていて、何の返事もしなかった。

「……………好きなように通えるようには、おそらく出来る。が、日本の方から『はしご』をかけさせ、固定する必要がある。そのあたりは幹也と協議した。まずは幹也の戻るのを待て。

そして、お前が日本へ行けるかどうかだが……………」

Single Attack of Y 3 " to be or

To be or not to be, that is th
e question. (ハムレット シェイクスピア)

『濔標』とかいう屍人の兵に挽き潰されるように敗北し、黒曜軍全体の士気は落ちている。ジュノは怪我を隠して今まで通り振る舞っているが、いつまでも続けられるものではない。クラージュも、腹に剣を刺されたというなら、普通の人間とは別の意味で心配だ。

俺は幹也みたいに詰め将棋みたいに人間を動かすことも出来ないし、花奈みたいに流れに任せとくだけで何とかなるみたいな、要領の良さもないが、少なくとも幹也よりは人間に興味があるし、花奈よりは注意力がある。地道にやることも、まあまあ厭わない。

サンテリアだけでなく、ゲルダガンド側にも和平のために心の準備が必要だ。それが出来るのは……というか、する気があるのは、多分この駐屯地中でも俺くらいのもものはずだ。

これ以上ここをずたずたにするわけにはいかない。

ジュノのテントを出ると、人の視線が突き刺さるようだった。

皆、花奈と幹也が出ていったことを既に承知しているらしい。物言いたげな顔をしている。さっきまであまり気にならなかったのは、それだけ周りが見えていなかったということか。

生憎、エキセントリックな兄妹のおかげで、周りの視線が痛いのは慣れている。俺はさっさと気持ち切り替えて、まず今後どうするか計画した。

クラージュに会いに行かなくては。俺の考えたのはそれだった。勢いに乗せられて安請け合いしてしまったが、駐屯地中を回って一人一人説得して回るのは相当骨が折れるだろう。

だからまずは、特に思い詰めてそうな奴から片づけていくべきだ。そういうやつはほとんど暗いほうへ物を考えるから、時間の経過ごとに刻一刻と手に負えなくなっていく。

ぶっちゃけ一番ヤバそうなのは黒曜軍のベルセルクことベルだが、ベルは現在謹慎中だ。混乱しているだろうベルに言葉が通じるかはわからない。ベルだけは後回しにするのが賢いやり方だろう。

噂によれば、クラージュは今まで何度もうちの軍医に、診察を受ける診察を受けろという呪言にも等しく諭されていたらしいが、それがうつつとうしくなったのか、それともさすがに具合が悪くなったのか、とうとう今日、医務室には顔を出さないまでも、軍医が自分のテントへ往診にくることを認めたらしい。

うちの軍医なら……タランテラなら、やっと診察を受ける気になったクラージュをすぐに解放することはないだろうが、急ぐに越したことはない。俺は足早にクラージュのテントへ向かった。

クラージュのテントは第三エリア、高官の寝起きに使われるエリアにある。

俺がクラージュのテントの垂れ幕を跳ね上げて中に入ると、クラージュは、薄手で白い療養服からいつもの軍服に着替えているところだった。

俺たちや一般の兵士が使っているものとさして変わりない、小さなベッドに腰掛けたクラージュは、裸の腕にシャツの袖を通しかけたところで俺に気づき、凍り付いたように動かなくなる。その反応で、やっぱり俺たちを避けていやがったな、と分かる。

「……葉介。久しぶりですね」
動かなくなっていたのは、ほんの3、4秒のことだった。真つ青な顔をしたクラージュが唇の端をほんの少しあげるだけの笑みとも呼べないような曖昧な表情を俺へと浮かべて見せ、また着替えを再開する。

驚いたことにクラージュは、あの襲撃の日、刺された剣を抜いた後すぐに医務室から姿をくらまして仕事に戻ったらしい。それも、夜明け前から深夜過ぎまで、一体いつ休んでいるのかも定かでないほどの勤勉さを発揮してだ。

俺はジュノのテントを出てすぐ、そこらへんを歩いていたいるんな奴にクラージュが今どこににいるか知らないか聞き回ったが、クラージュの行方を知ってる奴も知らない奴も、口をそろえて言ったのはこう言った。『あれは、異常だ』。『自分を追いつめたがついてるみたいだ』。『死に支度をしているみたいだ』とまで言ったやつもいた。

「待て。まあ待て。葉介もこいつ止める。ぶん殴ってもかまわん俺が許す」

クラージュが軍服を着込むのを止めようとしているのは、軍医タランテラだ。黒い髪を短く刈り込んだ、この黒曜軍で一番オーソドックスな髪型に倣っており、ほどよく高い背、白衣で包んだほどよくがっしりした体格、ほどよく日に焼けた腕など、前線には出ないくせ、この黒曜軍でおそらく一番軍人らしい格好の男だ。ごつい体型のわりに目がとろんと垂れているから人相悪く見える。腕は良いらしい。

酒量のことなどいちいち細かいことを言うといつので煙たがられている面もあるが、今回の場合、明らかに細かいことを言っているとか、タランテラが大げさだとかいうレベルの話ではない。なにせ

相手は腹に剣が刺さってた男だからな。

クラージュの体はちよつと特殊だ。内臓を一部、金属と置き換えられている。サイボーグみたいなものだ。

『鵲』と呼ばれる電磁気力魔法使いは（クラージュは特に『鴉』と呼ばれているそうだが）、金属製のアクセサリーを山ほど身につけて武装するが、それだけでは飽き足りないマッドな野郎だとそういうことをやるという。

今回クラージュが刺されたのがまさにその部分だったおかげで、傷そのものは大事には至らず、刺された直後もちよつと動けなくなつたぐらいでぴんぴんしていられたそうだが、逆に金属部分が血液に触れたせいで、ショートの危険が発生している。それで、検査をやれとか、この際摘出してしまえとか、タランテラが騒いでいるのだ。

クラージュは着替える手を止め、タランテラをうつとうしそうに見やる。

「血もほとんど出ていないし、結局ショートもしないで済んだんですから。まったく支障ありません。僕なんかよりジュノこと、ほつといていいんですか？ 彼は一応生身ですよ」

「バカ言えジュノもご同様だ。お前を医務室のベッドに乗っけたらすぐさまジュノも隣に並べてまとめて子守歌を歌ってやる」

「それはとびつきりの悪夢が見られそうですね」

ほつとけばいつまでも、良い大人が二人でぎゃーぎゃー騒いでいそうだった。俺はさっさと割って入った。

「俺、クラージュの見舞いに来たんだけど」

「それはどうもありがとう。ごらんの通り、元気ですよ」

クラージュはすげなく言い返した。……明らかに様子がおかしい。

性格はともかく、愛想はいいはずなのに。俺は様子を見ながらさらに言い添えた。

「……………花奈からも、伝言。『クラージュに『人魚の呪』をありがとうって言っというて』だと」

この伝言は嘘だ。実際に花奈が言っていたことを要約すれば、『クラージュの『人魚の呪』でひどい目に遭った。『人魚の呪』のおかげで助けられたのは確かだけど、一言詫びが欲しい』となる。もちろん伝言も頼まれてなんかいない。ここらへんは駆け引きというやつだ。実際に花奈の言っていたことを知れば、クラージュは一言の弁解も説明もしないまま、うわべだけ謝って見せてはぐらかしてしまうだろう。

「花奈さんが……………ありがとうと…?」

クラージュは一瞬目を丸くしたが、すぐにひきつった笑みを浮かべる。俺に向けられたものではないようだ。視線が俺の胸のあたりをさまよって、そのまま下の方へ下がっていき、とうとう床まで落ちる。

俺が確かめたかったのは、『俺が眠っている間に一体何があったのか』だ。

クラージュはいつ、何をきっかけにして、花奈を避けるようになったのか。少なくとも、花奈がクラージュに何かやらかしたのか、それともクラージュが花奈に何かしたのか、そこがはっきりしなければ何の対策もとれない。

……………本当は、薄々ながら察しがついている。

花奈は紅玉鉾脈としてサングリアの駐屯地へ送られたのだ。男の俺はどうだか知らないが、少なくとも女の『鉾の姫』は、処女でな

ければならないとされている。そして、『足が閉じ合わされて開かなくする魔法が役に立つ状況』なんて、俺の思いつく限り一つしかない。

この俺の推測が正しいなら、俺はクラージユに感謝してもしきれない。花奈だって同様のはずだ。あいつはバカだけど、物の道理が分からない奴じゃない。

その花奈が、それでも『一言詫びが欲しい』と言うような何かを、きつとクラージユはしたのだ。それは何か。そして、その何が、クラージユを傷つけているのか。そこは、是非ともつまびらかにしておかなくちゃならない。

沈黙は短かった。全く関係ないはずのタランテラが脇から口を挟んだためだ。

「……ちよつと来い葉介」
「は？」

俺はぎよつとしてタランテラに向き直る。花奈とタランテラに面識はほとんどなかったはずだ。そのタランテラから、何かネタが絞れるとは思っていなかったのだが……。

「葉介は俺と楽しい二者面談のお時間だ！ クラージユ、お前はここで昼寝でもして待ってる！ いいか、出るなよ！ 絶対出るなよ！ 絶対だぞ！！」

タランテラは俺の二の腕をひつつかむと、クラージユを空いてる方の手で指さした。

「……それ完全に振りだろ」
思わず俺は呟いていたが、この世界にダチョウ倶楽部を知ってる奴はいない。

「……勘弁してください」
クラージユはかすかに苦笑めいたものを浮かべ、ボタンをぷつぷ

つと留め直す作業を再開する。タランテラは舌打ちしたが、やはり俺をテントから引きずり出す。

「おいなんだよ……タランテラ！ うぜーから手え離せ！」

テントから出てすぐ5メートルほど歩いたところで俺はやつとタランテラの手を振り払う。俺は他人にべたべた触られるのが嫌いだ。タランテラは俺の怒りなどどこ吹く風という風で、着ていた白衣のポケットから金属製の小箱を出して、俺に向かって突き出す。受け取ると、手のひらに乗る程度の重さのくせ、ずしりと重い。鉛で出来ているらしい。

箱をあけると、中には爪ほどの大きさの金属製の差し歯がころころと二粒、転がっている。真っ黒に錆びきっていて、元々どんな金属で出来ているものだったかは判断できない。一方は茶味がかっていて、もう一方は黒ずんでいるから、別の素材で出来たものだろうと想像できる程度だ。

ゲルダガンドでは、錆は二種類ある。金属が水に触れたために出てくる通常の錆、そしてチャージされた魔法が使いきられたために一気に腐食して出来た錆。多分これは後者、使用済みの魔具だろう。タランテラは錆び付いた差し歯を顎でさした。

「クラージュの隠し武器。『鵲』の中でも特にイカレてるやつらが使うものだ。主な用途は自爆用。」

でも俺は、クラージュは花奈にこれを使ったんじゃないかと思ってる。というか期待している」

「……………期待？」

俺は眉をひそめた。

タランテラの解説を、日本人向けにまとめるところなる。

虫歯を治した痕を金属で埋めてる奴がアルミホイールなんかを噛むと、ギリつといやな頭痛を感じるだろう。しばらく前にテレビ番組で流行ったやつだ。

この、口の中で2種類の金属と電解質とが触れ合ったために発生する電流をガルバニック電流という。電気が発生することそのものの仕組みは中学校理科で学習した通りなので、思い出してみてほしい。

『鵲』と呼ばれる電磁気力魔法使いは、この現象を利用する。電位差の大きい二種類の金属を皮膜で包み、奥歯の上下に仕込むのだ。いざとなったら奥歯を強くこすりあわせて金属表面の皮膜を剥がす。そして電解質である唾液をまぶし、金属同士を強く噛み合わせれば電流が発生する。つまりこれは、発電装置なのだ。

しかし、デメリットは大きい。

皮膜を剥がした後はとても腐食しやすいし、奥歯が触れ合う度にひどい頭痛もする。常用には適さない。

それにこれは魔具ではない。単なる発電装置だ。

魔具はそもそも、複雑怪奇な魔法式をあらかじめ金属にインプットしておいたものを言う。そうしておけば、後からわざわざ脳内で魔法式を構築しなくても、電流を流すだけで魔法が発動するというアイテムだ。

しかし、この差し歯は趣旨として普通、奥の手に用意されているものだ。魔法式などインプットしておく、用途が限定されてしまうからそれはまずい。結局、魔法発動に必要な発電の助けにだけ使い、肝心の魔法式は用途に合わせて、脳内でいちいち構築しなくちゃならない。それも、ひどい頭痛に耐えながらだ。それが出来る『鵲』は多くない。

発生するエネルギーそのものもさほど強くないし、唾液を介して

発生する電流のため外へは放出できないから、他人相手の攻撃手段にはならない。あくまでも自分の体にしか使えない電気エネルギーだ。タランテラが自爆専用と言ったのはこのへんの事情が多分に影響している。

タランテラは舌打ちした。

「この発電装置で何の魔法を使ったのかクラージユは白状しないんだ。体内にそれらしき魔法の痕跡もない。

しかし、クラージユは腹を刺されている。血液と体内金属の接触は一応なかったようだが、この腹を刺された時のショックで奥歯を噛み合わせ、無意識的にこの発電装置を使ってしまった場合、他の体内金属とショートを起こしていた危険がある。その場合、クラージユを縛り付けてでも、体内金属の摘出手術を強行しなくちゃならない。というか、強行する予定だった。

だが、確かにクラージユがおまえの妹に人魚の呪をかけたんなら話は別だ。お前の妹が人魚の呪なんてコアな魔法、使えるはずがない。十中八九、クラージユがこの歯で人魚の呪を発動させたんだろう。つまり意図的に、ってことなら、ショートの危険はないから、摘出手術も必要ないわけだ。

お前の妹には悪いがな、葉介、戦いが激化するだろうことを予想して、体内金属を摘出されないために空元気で仕事してんのか、それともお前の妹に気兼ねして仕事ばかりしてんのか、どっちなのかを確かめなくちゃならん」

長い説明を終えると、タランテラは途方に暮れたような顔をした。聞き分けのない患者にほとほと手を焼いているようだ。

「発電装置のショートならさっさと新しいのに入れ替えるところだが、人間の心がショートするのはどうにもならん。……なあ葉介、

お前の妹はクラージユに何をしたんだ？」

………そんなのこっちが知りたいところだ。

Single Attack of Y 4 & quot; 心情はそれ自身の道理

心情は理性の知らないところの、それ自身の道理を持っている 『
パンセ』 パスカル

俺はタランテラと別れ、一人でクラージュのテントへ戻った。

クラージュのテントは、雑多な物で満ちている。金の靴、銀の鎖、銅の剣、青い水を満たしたガラスの杯、その他の呪物が机の上にごろごろと無造作に置かれたままになっている。杯の水面には埃がうつすらと浮かんでいた。

クラージュはジュノが駐屯地中をうろつき回って仕事していたのは、ジュノの代わりとして駐屯地を見回っていたのだと思っていたけど、どうも、理由はそればかりではないかもしれない。この机じやあ、座って仕事をする気にならないのも当然だ。

天井からはランプがいくつもつり下げられている。ランプの上には箒が乗せてあり、その箒では錆び付いた魔具が黒色の粉末に埋め込まれて炙られていた。

一抱えもある大きな宝宝箱の蓋は開け放したままにされ、錆びて黒ずんだ宝飾品が山積みになっていた。これも、今焼かれている魔具の錆が取れたら、ランプの火で手入れされるのだろう。

入り口そばには透明の正座早見盤によく似た計算尺が立てかけられている。さすがにこれだけは手に取りやすいところに置いてあるらしい。

俺はその計算尺を蹴つとばさないように気をつけながら、そろりそろりとテントの中へ歩みを進めた。青ざめた表情のクラージュはシャツだけ身につけ終わっていて、ぐったりとベッドにその体を横たえていた。上着は椅子の背に二つ折りにひっかけられている。

「……………具合悪そうだな」

もつと何か、気の利いたことが言えたら良かったんだが、あいにく俺にはこれが精一杯だった。クラージュは薄目を開けて俺を見た。

クラージュの片手は自分の腹の、ちょうど怪我したあたりに乗せられている。

「いえ、体調は悪くないんです。ただちょっと……」

「ちょっと?」

「……いえ」

クラージュは俺から顔を背けてそれきり黙った。俺は、椅子に引っかけられていた上着を散らかった机の上に放り出すと、空いた椅子に腰掛ける。

嗚咽の一つも漏らしていないが、自分が弱っていると告白するのは、クラージュには疲労の大きいことらしい。

「言えよ。聞くから」

俺は長期戦を覚悟しつつ、クラージュを促した。

タランテラからはこう聞いた。

唾内の発電装置は自殺用。だが、どうしても他人に使いたいと言うなら、方法はある。

奥歯を噛みしめた状態で唾液と相手の体液を触れ合わせ、直接通電させれば良いのだ。

花奈の人魚の呪がクラージュの口の中の発電装置を使ったものなら、つまり、そういうことになる。

俺は握っていた手のひらを少し開いて、隠し持っていた鉛の箱をテーブルの隅に置く。ごとんと小さな見た目に反した重い音がした。その音が呼び水になったのか、クラージュはゆっくりと口を話し出す。顔は背けたままだ。

「……………タランテラから…なにか、聞きましたか…?」

「ほとんど何も。発電装置の使い方を聞いたただけだ」

俺は鉛の箱を爪で叩く。

「この発電装置で花奈を助けてくれたってほんと？」

まさかキスなんかで『人魚の呪』をかけていたとは思わなかったが、花奈が『詫びを入れる』と言った理由はこれで解決だ。俺の方に不満がないことには変わりない。たかがキスだ。知ったのが幹也だったならどうなっていたか分からないが、そこらへん、幹也と違って俺はドライだ。その程度のことでは花奈の身の安全が守られたんなら安いもの。ちゃんと説明すれば、花奈も納得するだろう。

クラージュは俺の問いには答えなかった。代わりに聞き返す。

「ねえ、葉介、さっきの話ですけど……花奈さんがお礼を言っていたなんて、嘘でしょう……？」

俺は一瞬、言葉に詰まらざるを得なかった。……嘘ではない。本当でもないが。本当でもない関係上、仕方なく俺は言った。

「……助かったって言ってたよ。……多少、むっとはしてたみたいだけど。でもお前、花奈のことを助けるつもりでやってくれたんだろ？」

「……それどころか……」

「……それどころか？」

俺は眉をひそめる。随分な言葉だ。こいつは一体何を言おうとしているんだ？ クラージュは寝返りを打ってこちらを向く。

次の瞬間にクラージュの口から出たのは、場違いなほど不穏なせりふだった。

「助けるどころか。ねえ葉介、その発電装置、花奈さんをずたずたにしてやるうと思っただけですよ」

クラージュは強く息を吐いた。勢いをつけるようにそうした後、

堰を切ったように話し出す。

「……ねえ葉介、僕があのととき、何を考えたか分からないでしょう。既にサンタリアの工作兵がエリア3まで乗り込んできていて、君とナルドは行方不明。花奈さんも含めて居残りの兵はほとんど重力魔法に頭をやられていて、敵が来たことすらも気付けなくなっていました。」

やっと追いついた花奈さんはよりによって銅鍋の中なんて、わけの分からないところに隠れてる。あれじゃ逃げ場がないどころか、外から軽く50Vも流されたら一卷の終わりじゃありませんか。

その後も、せっかく庇っていた花奈さんが無思慮にも、相手の口車に乗って敵軍へ乗り込んでいくって言うんです。紅玉鉾脈であるという誤解を解かずですよ。自分は動けなくて、使える魔具も底をついている。僕に取れる手は限られていた」

「……そりゃそうだ。身動きとれない状況でよく花奈をかばってくれたと思うよ」

俺は認めた。クラージュの言うとおりだ。むしろ、味方なし、打つ手なし、足手まといは自覚なしという敗北要素しかない状況で、よく花奈の最低ラインを防衛する方法を考え出してくれたと思う。口の中の発電装置は奥の手中の奥の手で、これを使った後、完全に無防備になった自分の身に何が起こるかも分からなかったというのだ。実際、クラージュが剣で刺されたのは花奈と別れた後、発電装置が使えなくなった後のことだ。

「……かばったなんて、そんなじゃないんです」

しかし、クラージュは皮肉げに唇をゆがめた。そして、心臓の上あたりを、手のひらで覆うようにする。

「『人魚の呪』がどれほどのものでしょう。あの時花奈さんを行かせた時点で、それはもう見捨てたも同然なんです。僕と別れた後、乱暴されるかもしれないと、気づいていたんですから。」

ねえ葉介、分かりますか？ 目の前の女性が、ひどく踏みにじられることを予感しながら、ろくな打つ手もないときの人間が、一体何を感じるか。

多分、絶望感とか、焦燥感とか、悲嘆とか、無力感とか、そういう感情なんじゃないかな。少なくとも僕の理性は、そういう感情が沸き上がってしかるべきものだ、そう言っています。

でも僕が感じたのは、怒りだった。それだけだった。怒りの火炎が僕の胸を舐め上げていて、それをコントロールしようとも思わなかった。それとも、思えなかったというのが正しいのでしょうか。

葉介。僕はね、こう思ったのです。『裏切らせない』と。

……足を固くよじり合わせ、声も堅く封じていれば、花奈さんが僕を裏切ることはない。そうやって最低限、僕だけは傷つかないように細工しました。花奈さんはサングリアで怖い目に遭えば良い気味だし、しばらくしてから助けに行つてやれば、花奈さんは十分後悔して、もう僕の意に添わないことはしないだろうと思った。

ほんの一瞬前までいじらしく僕を守ろうとしていた彼女が、葉介、君という他の男のために、他の男のところへ行くのが許せなかった。こっちの気も知らないで、無邪気に、無防備に、賢しらに、拙い計算なんか働かせて、僕から離れるのが我慢ならなかった。

嫉妬とも独占欲とすらも呼びびがたい、僕のおこがましい妄執が、花奈さんを守るといふ使命を放棄させました」

情けないことだが、俺は絶句していた。

人間の深淵というか、制御できない天変地異みたいな感情を初めて見せつけられたせいももちろんあるが、その凶器めいた理不尽な怒りが自分の妹へ向けられていたことに戦慄していたのだ。

俺の戸惑いを感じ取ったらしく、クラージュはますます露悪的で自虐的な、笑みめいたものを顔に浮かべる。

「何か言い交わしたわけでもないのに、花奈さんが他の男と去ると思っただけで、僕の心は荒れ狂いました。」

僕自身が花奈さんを裏切ったことなど数知れないのに、花奈さんが僕の意に沿わない選択をしただけで、僕は、花奈さんをずたずたに引き裂いてやろうとしたのです。

…あのとき、花奈さんを守ろうとか助けようとか、そういう人間らしいことはちらとも考えなかった。心を灼く火炎に身を任せて、僕は僕のことだけに躍起になって、花奈さんを見捨てました。

剣も自分から刺されてやったんです。僕の体の金属部分に強く差し込めば、なまじな力では抜けません。怪我さえしていれば、花奈さんをみすみすさらわれたことも、助けに行かないことも、言い訳が立つと思っただけから。僕は本当に、二三日は花奈さんを怖い目に遭わせておこうと思っていたんですよ。

状況はすべて僕の味方でした。花奈さんのために、人魚の呪いをかけた。あの長剣を触媒にして魔法らしきものを使っているアジュの武装解除をするために、敢えて刺された。みんなそう思っている。誰も僕の凶暴性に気づいていない。花奈さんさえ、僕の善意をちらとも疑っていないんです。

…花奈さんのそばにいと、気が変になりそうなんです。いえ、もう狂ってるのかも。なのに誰も僕という異常者の犯罪に気付かない。…このまま花奈さんの顔なんか見られるわけ、ないじゃありませんか。もしかしたら今度は、取り返しのつかないことをするかもしれないのに」

クラージュはとうとう話し終わって、それ以上話さなかった。俺は、何から言葉にすればいいか、なかなか思い当たらなかったが、沈黙はクラージュを孤独にするだけだ。

自分が選べる手段の少なさに、ほとんど舌打ちが出かかる。それを俺はこらえた。

「……おいクラージュ、お前さ、まさかとは思うけど……」

「いいえ、大丈夫、ありがとう。今のところはまだ正気のようにです。花奈さんを傷つけてはいけないという理性が戻ってきています。平気です、大丈夫。ずっとは保証できないけど」

「いや、そうじゃなくて」

俺はかぶりを振った。違う、俺が聞きたいのはそこじゃない。クラージュは確かに正気だ。気違いは自分を、誰よりもまともだと思ってるものだから。そうじゃなくて、だから……。

「……お前……花奈が好きなの？」

俺の口から、言葉がぼろっとこぼれてた。

まさか。そんなそぶりは全く見せていなかった。俺の知らないところでは二人でたまにじゃれあっている、というようなことはミユゼから聞いてはいたが、それだって恋愛沙汰に発展するような、色っぽいものじゃなかったはずだ。

クラージュもわずかにかぶりを振った。

「……どうかな……。僕には、それすら茫としてはつきりさせることができないのです。好きになる理由もないし、好きかも、とすらあの時まで思わなかった。ころころとおもしろいように踊らされてくれるから、好ましいとは思ってましたけど」

クラージュはふうつと息を吐いた。それだけで、クラージュの体が一回り小さく縮んだように見えた。クラージュは弱っている。それも、俺が今まで見たことがないくらいに。

「……でも、好きでないならいいな、と思います。」

僕が花奈さんが好きで、嫉妬のあまり花奈さんを危険な目に遭わせたのだとしたら、それはつまりこれからも、花奈さんを、花奈さんだけを、手段を問わずに傷つけるかもしれないということになる

でしょう？

僕が単なる自己中心的な発想の男で、ただ意に添わない選択をした人間を排除しようとしただけなら、僕が唾棄すべき男であるというだけです。僕が花奈さんとは二度と会わないようにすれば、花奈さんを傷つけずにすみませう。……あれ、どちらにしてもこれじゃ、まるで告白ですね」

クラージュは苦笑いした。

「……ああ、そのことに早く気付けばよかったな。そうすれば、花奈さんを傷つける前に理性が戻ったかもしれないのに。」

葉介、お願いだから、早く花奈さんたちをサンタリアから連れ戻してください。そして、日本へ帰って。もう二度と、僕の手の届かないところへ。

また僕が、花奈さんが僕を裏切っただなんて、被害妄想を抱く前に。君が日本へ戻る条件の、和平さえ駄目になれば、花奈さんも君と一緒に僕の元へ戻るだろうなんて、狂気を現実にしようとする前に」

……クラージュは、グラナアードと日本の間で自由に行き来ができるように、うまい方法を探しているところだということを知らないらしい。

それとも、和平を取り結んで俺たちが日本へ帰ったら、そのまま永久に会えない、もしくは会わないと考えていて、それでもクラージュは俺たちに帰れと言っているんだろうか。

こんな、気が変になりかかってまで。

びつくりした次にはだんだん腹が立ってきて、俺はため息をかみ殺した。

Single Attack of Y 5 "嫉妬は堅くして陰府

其の愛は強くして死のごとく 嫉妬は堅くして陰府にひとし(ソロ
モンの雅歌八章六節

クラージュを何とかしなければ和平は危うい。俺はそう計算していた。

クラージュは、執務室からほとんど出ないジュノの代わりに駐屯地中を巡り歩き、大小さまざまなめ事を仲裁しては、兵達の従軍中の苛立ちをなだめていた男だ。

ただでさえ屍人兵の件で、黒曜軍のサンテリアに対する感情は今までにないほど悪いものになっている。

和平の調印が行われるとすれば、その警護にあたるのもおそらく黒曜軍であるはずだが、和平を結ぼうというそのとき、敵意に満ちた黒曜軍と、サンテリアの軍隊『花菱』に取り囲まれながら、クラージュの手助けなしで無理矢理和平を結ぼうとすればどうなるか。ジュノが言った通り、和平が空虚な、無意味なものになることは間違いないだろうし、最悪の場合、黒曜軍の誰かがサンテリア側の要人の暗殺を企てたり、クーデターでも起こるかもしれない。

しかし、俺はもともと、誰と誰をくつつけてやろうとか、そういうお節介は粹じゃない。そもそも相手は花奈だ。後先考えずにお膳立てしても、後々もつと面倒なことになる。

俺が何を悩んでいるのかを感じ取ったのか、クラージュはまだふらふらの顔で付け加えた。

「……………清すぎる泉に魚は住めません。僕が花奈さんに触れたら、きっと花奈さんは花奈さんでなくなってしまう。花奈さんをずたずたにしてまで、思いを遂げようとは思いません。少なくとも、今のところは」

「……………」

確かに、クラージユが言う意味で大切にされている男はいない。花奈の心は幼すぎる。恋愛ことが出来るような、そんなところまで成長していない。クラージユみたいなやつを彼女をやるなんて、なおさら荷が重いだろう。

でも花奈は、自分の保身のために困ってる奴を見捨てて逃げたりは絶対にしない奴だ。

だから、最後にこう言ったのには我慢ができなかった。

「…だから、本当に逃げてください。僕が辛うじて正気であるうちに。和平なんて悠長なことを言っている暇はないかもしれませぬよ。僕が本気で狂ったら、多分君たちには止められない」

「……………」

俺はそれを聞くなり椅子から立ち上がって、クラージユのベッドの縁に座る。

「……………言いたいことはそれだけか？」

俺の冷たい視線を浴びながらも、クラージユは何の痛痒も感じていないようだった。その人形めいた顔は青ざめて、ほとんど表情というものが消えている。

「……………これでもまだ怯えていただけじゃないようなら、もっと心と言葉を尽くしますけど」

「いや、もういい」

俺は左手で、横になったままのクラージユの襟首をひつつかんで持ち上げた。右手では拳を作ったが、ぶん殴るのもなんだか変だ。俺はそのまま右手も襟首にやり、おもむろにがつくんがつくん揺さぶった。

「……………何が清すぎる泉だ寒いんだよ！！ 一人でぐるぐるすんなバカ！ ちゃんと花奈と話し合え！」

「くっ…よ、うすけ…っ」

さつきから言いたかったことをひとしきり言ってしまうと、俺は苦しげにせき込みながらも目を丸くしているクラージュを無理矢理引っ張り起こす。

「おまえに言われなくても俺たちは帰るよ。でもそれは、ちゃんと和平を結んでからだ。おまえがそんな状態じゃ、和平は結べないだろ？」

これだから頭の良いバカは手に負えない。俺は強く力を込めて叫んだ。

「お前が何で悩んでるかは知らん。それはお前と花奈の間での問題だ。でも俺は、お前を見捨てない。花奈もだぞ、花奈もお前を見捨てたわけじゃない。花奈は絶対サングリア側で、ちゃんと和平をやり直せるようにがんばってるはずだ。花奈はすぐ帰ってくる。そして、ちゃんと話し合って、仲直りして、いさぎよく玉砕しろ。悩むのはその後だ。本人のいないところでぐちゃぐちゃしててもしょうがないだろ。今はすべきことが他にあるんじゃないのか？」

「でも…」

「なんだよ」

俺はクラージュを睨んだ。彼は軽く視線をさまよわせている。

「……もう間に合わないのかもしれない。花奈さんは今、サングリア側にいます。花奈さんが無事に帰るとは限らない。いえ、きつと無事では戻れない。僕の悪意はもう僕の手には負えないところで蠢いていて、最後には花奈さんを殺すかもしれない。」

第一、和平のために働くと言っても、花奈さんは一体、何をすることがもりなんです？ 花奈さんが気持ちのまつすぐな人だということには分かっています。でも、話は二国間の戦争です。ただでさえサングリアは危険な国なのに花奈さんと幹也君の二人きりで働きかけるなんて、はつきり言って無茶だ…。やはり僕さえあんな事をせず、

花奈さんを守ってれば、花奈さんはあんな極端な行動をとらずに……くはっ」

最後まで言わせる前に、俺はもう一回クラージュを揺さぶった。苦しそうにうめいたクラージュの襟を更に締め上げながら凄む。

「良いか、お前が全然聞いてないからもう一回言うぞ。方法は分かんらん。分かんらんが、花奈と幹也は絶対、和平が結べるようにサングリアを片づけて、帰ってくる。そのために俺はゲルダガンド側の、お前らみたいなどうしようもない奴らをとっつかまえて更正させて回ってるよこなの。オーケー？ お前がしゃんとしないと、和平も出来ないし花奈も俺も幹也も、家に帰れないの。これもオーケー？」

「葉介……」

「花奈を帰らせろって言うばっかじゃ何の解決にもならないだろ。」

お前がそんなことした理由が『花奈のことが好きだから』だろうと『お前が自己中だから』だろうと関係ない。今直さないといつか絶対また花奈以外の誰かに同じことをする。

仮に俺たちを帰らせて、それでその後、お前どうするわけ？ 花奈程度の人間から逃げたお前が、今まで通りやれると思ってるの？ 無理だろ。サングリアとの和平なんか、ただでさえ難しくなってるのに、やれるわけない」

俺はひたりとクラージュの目を見据えたが、クラージュとはどうしても視線が合わない。俺を見ると念じながら、俺は更にきつい口調で続けた。

「怒りに身を任せないですむようになれ。俺にとっては花奈も大事な妹だけど、お前も大事な友達だ。見捨てて帰ることは絶対にしないし、精一杯支えてやるから、まずやってみろ。逃げるな」

「……………」

クラージュは目を泳がせる。俺は襟首をつかんだまま……締め上げるというよりはむしろ、クラージュを支えるようにしながら続け

る。

「ジュノが言った。恨んだり憎んだり、そういうネガティブな感情でぐちゃぐちゃしてる奴がいると、和平は上手くいかないって。

言い方悪いかもしれないけどさ、やっぱり和平を結んだ後も、サングリアは敵だ。それは変わらない。

もう戦わないから和平するんじゃない。和平は、戦わないですむようにする、ただの下準備だ。

だから和平するなら、まずこっち側の憎しみを全部集めて回って消せないまでもコントロール出来るようにしなきゃいけない。それが出来ないなら、和平なんかしない方が良く。じゃなきゃ、今まで以上に余計な血が流れるだけだ。

クラージュ、最初はお前もそれが出来るつもりでいたんだろ？

サングリア相手に、憎しみと怒りを飲み込んで、信じてやることに。それをどうして花奈にもしてやれないんだ？ どうして花奈にだけ逃げ腰になるんだよ」

「……………」

クラージュは目がうつろだ。聞いてるんだか聞いてないんだかも分からないような顔色をしている。こいつを、何とか現実へ引き戻してやらなくちゃならない。言葉に詰まりそうになりながらも、俺は必死だった。

「和平を本当の和平にするためには……………敵意を溶解させ、敵対関係を好転させるためには……………クレバーにならなくちゃいけないんだと俺は思う」

「こっちは幹也の受け売りだ。……………人の受け売りばっかの自分に軽く嫌気が差さないでもないが、今はそれどころではない。

「目の前の怒りに振り回されんな。賢く立ち回れよ。クラージュはそういうの、めっちゃくちゃ得意だったじゃねえか。どうして花奈にだけ出来ないなんて思いこんじゃうんだよ。花奈に対して出来ないことが、サングリアに対しては出来るってどうして言える？ サングリアに対してやるつもりだったことを、花奈にもしてやれよ。花

奈には出来ないって思いこんでるんなら、それは単に……」

最後まで言ったら、友達を失うかもしれない。俺は最後の最後で怖じ気付き、口ごもった。

花奈にだけ手加減してやれないって言うならそれは、単なる妄執だ。花奈が好きなんでもなく、クライジユが自己中心的な奴だっていうんでもなく……。

もしそうなら、俺に出来ることはない。クライジユの言うとおり、和平も放り出し、花奈を抱えて、幹也と日本へ逃げ帰るしかない。日本へ続く道を守る門番という孤独な役目をジユノに託して、ナルドを置き去りにして。

ジユノは狂ったクライジユを止められるだろうか。多分全精力を傾けなきゃいけないだろう。もしかしたら、殺すしかなくなるかもしれない。クライジユは、シュツルクに血を流せば、あわてて花奈が戻ってくるかもしれないから、とはつきり言葉にしている。

話し終わっても、クライジユとはとうとう視線が合わなかった。

クライジユの襟首をつかむ手からも、力が抜けていく。

クライジユの首をゆっくりとベッドに戻し、俺もその目の前でうなだれた。どんなに言葉を尽くしても、クライジユの心には届かないんだろうか。俺ではやっぱり、役者が不足なのか？

無力感で死にそうになりながら、俺は、最後に絞り出すようにこうつぶやいた。

「……頼むよ。逃げないでやってくれ。幹也はともかく、花奈はお前のことも助けてやろうと思ってサングリアに行ったんだぞ。お前達ゲルダガンドの人間が、もう戦わなくてすむように。これじゃあまりにも、花奈が報われない」

しばらく俺たちは黙って、微動だにしなかった。動けなかったという方が正しいのかもしれない。俺は息を殺してクラージュの様子を窺い、クラージュもまた、自分が今何を考えているのか、耳を澄ませて感じ取るうとしていようだった。

やがてクラージュは、静かに俺の方を見た。まだ目を見る勇氣はないようで、俺のつむじのあたりに視線がある。

「……瞋恚の焰に抑え込むには、どうしたらいいんでしょう」

「……そういうことは坊さんにでも聞け」

やっと前向きになってきたらしいクラージュだったが、まず俺はすっぱり切って捨てた。そこまでのカウンセリングは俺には難しい。「でも花奈に関しては、全面的に俺がフォローしてやる。」

花奈を傷つけるのが心配なら、俺が四六時中横に張り付いて見張ってやる。お前が何かマズいことをやりかけたら全力で止めてやるし、止めて駄目ならそのときは、必ず世界の果てまで逃げてやる。だからもううじうじするな。そんなことよりこれからどうしたら、この前みたいな気分にならないですむのか考える。じゃないとそれこそ花奈と幹也がサンテリアから帰って来らんないだろ」

……と、ここまで言ったところで、俺はふと不安になった。

「……一応聞いとくけど……両思いになりたいんじゃないんだよね？」

クラージュは薄ら笑いらしきものを浮かべる。

「……とてもじゃないですけど、そんなの無理です。花奈さんを見ていると、つらい。自分があまりにも救えない、まともでないと思いが知らされます」

またこれだ。いい加減うんざりしてきた俺は、あからさまに顔をしかめて言った。

「お前がまともじゃねーのくらい自分でも分かってたんじゃねえのかよ」

「ああ、そういえばそうでした」
クラージュは皮肉っぽく口元をひきつらせた。しかしさっきまでよりは断然、まともな笑みに見える。

「僕はまともじゃない。意地悪で、気まぐれで、子供っぽくて、感情を制御することもできなくて、もう何人もこの手で殺しているのに気の毒なその人たちを夢に見ることもないし、好きな女の子まで傷つける悪人で……」

自虐的なことを言い連ねていくうちに、クラージュの顔がくしゃつとなる。

「僕は……」

それきり、何かをいいかけたままクラージュは黙りこくった。この上何を言うつもりなのだろう。辛抱強く待つべきか、こっちから何か働きかけてやるべきか迷っていると、クラージュはぽつりとつぶやいた。

「葉介、僕は、善人になりたい」

その台詞は、シンプルで、あまりにも真に迫った、切実な響きを帯びていた。なによりも、あのクラージュが助けを求めているのだ。あの、人を助けたり手玉に取ったりし続けたせいで、自分自身が誰かに頼ることが出来なくなっていたクラージュが。

「……いいよ、クラージュ。俺がお前を善人にしてやる。どこに出しても恥ずかしいくらいの、桁の違う善人にな」

俺が出来る限り柔らかく、冗談めかして請け負うと、とうとうクラージュは、手のひらで目元を覆い隠してしまった。

指の間から一滴、水が漏れる。

「……僕は、花奈さんが好きかもしれないと、思っただけでも良いでしょうか?」

「……せいぜい上手に失恋しろよな」

慰めの言葉も浮かばなかったが、俺はもうしばらくの間だけ、こ

いつの側にいてやることにした。あの襲撃の日以来、一番心細い思
いをしていたのはこいつであつたに違いないんだから。

Single Attack of Y 6 "愛とは何か、とお前

愛とは何か、とお前はたずねる。たちこめる霧に包まれたひとつの

星だ。『新詩集』ハイネ

海に浮かぶマングローブの密林に、日が昇るより前にソワレは目を覚ます。

夜の暗闇にほんのり白みが射してきたころ、突然ぱつちりと目を開けた、ヒトの女の子ソワレは、マングローブの気の上で自分をくするみながら休む、黒い狼の柔らかい毛の間から抜け出す。この二週間、この相棒の毛の中がソワレのベッド代わりだ。

木から降りないまま、器用に眠っていた間に凝った体をストレッチしている、その気配で大狼も大あくびをしながら目をさます。

「ふわああ、おはよう、ソワレ」

「おそようラグル」

狼の名はラグルリングという。

あのいけすかない迷宮の、一等いけすかなかった神官の一人と同じ名前の気がするが、この地方ではよくある名前なのかもしれない。舌をかみそうなので、ソワレはラグルと呼んでいる。

ストレッチをすませるとソワレは下着や火付けの道具など、旅の道具が詰まったリュックサックを背負い、ラグルと共に川に向かった。いさぎよく革鎧などの装備を外し、すっぱんぼんになったソワレはきれいでも汚くもない川へ裸の体をどぶんとつけ、すぐに上がる。その後、ラグルの体に全身をなすりつけるようにして水滴を拭う。清潔なタオルを温存するためだ。

そして服を身につけた後、肌の露出しやすい部分に、臭いのきつい香草を口でくちやくちやくと噛んでペースト状にしたものを、あたりの土の粘土質なところと混ぜ、全身に塗りたくる。虫除けと日除

けのためだ。そうした後によやく衣服を身につけ、ソワレの身支度は終わる。

そうしたら腹ごしらえだ。追っ手を避けるために目立ちやすい川のそばから場所を移した後、ソワレがマングローブの木の上で小さな小さな火を起こし、金属カップ一杯分の少ない水を沸かして飲んだり、毒のない熱帯植物の葉や実をかじったり、マングローブの根本に棲む小エビを掬って炙ったりなどしている間に、ラグルは狩りに出る。

ラグルの持ってくる獲物が、小鳥などであればごちそうだが、クモなどの昆虫であることもある。そういうものであっても貴重な栄養源だから、ソワレは軽く火で焦がしてありがたく食べる。エビと葉と実だけの食事では、腹の底から力を出すことができないのだ。

食事が終われば、さらに追っ手を避けるために場所を移す。その繰り返しだ。この地域はマングローブ林がただびろく広がり、入り江も岩場も多いくせ、目印になるものはほとんどない、とても複雑な地形をしているので、マッピングは困難を極めている。

ソワレは元々、ラクシアという世界に住んでいて、六面ダイスを二つ持つ、ぼさぼさ頭のフェンサー（軽戦士）兼スカウト（斥候）だった。まだ十歳にしかならない女の子だが、いっばしに大人たちとパーティを組み、そしてパーティの火力として頼りにされていた。セッション帰りに仲間達と浴びるほど飲むエールが、ソワレの何よりの楽しみだった。

彼女の生きざまは大変シンプルである。分かるか、分からないかが彼女の行動原理であった。

いつものように仲間たちと依頼をこなしていたところ、何かのト

ラップにはまったのか、突然彼女一人、妙な石造りの建物にワープした。そして、そこにいた妙な神官に、妙なことをまくし立てられ、妙にかしずかれた。よく分からなかったので、たった一人で逃げ出した。

飛び出した先はマングローブの密林だった。彼女の持つ地図とはまるで一致しない。

元々、ソワレが住むのとはまた別の世界というものが存在するとは知っていたが、飛ばされたときの対処の方法までは知らない。さすがに困ったソワレの元に、逃げ出した翌日に現れたのがこの狼だ。この狼のおかげで生きるのには苦労しなくなったが、しかし元いたところへはまだ帰れそうにない。ソワレは困ったままだった。

しかし、今朝は一つ事件があった。

支度がすんで一番に振ったサイコロが、6のゾロ目を出したのだ。6のゾロ目は自動成功といって、この上ない吉兆の証である。

それからほどなくして、この世界に来て以来初めての、まともそうな人間の姿を目撃したのである。

まともそうなのというのは、頭のいかれた神官連中でもなく、髭面の海賊たちでもない人間という意味だ。

人間たちは、若い男が一人、それよりまだ若い男：少年が一人、更にそれと同じ年頃の少女が一人、の三人連れだった。カヌーのような木彫りの細長い舟に乗っている。

しばらく隠れて観察した結果、三人とも、あまり旅慣れてはいないようだということが分かった。

若い男は、火の熾し方などは知っていたようだが、ぞろっとした魔法使い風の装備のせいで湿気と蒸し暑さにだいぶ参っていたようだった。脱げばいいのとは思わない。装備品とはえてしてそうい

うものである。

若い男と少年はそれぞれ地図を一冊ずつ持っていたが、少年の方は、読めないのか、ほとんど地図を取り出さなかった。その上、船酔いしているらしく、たまに胃液を海へげろげる吐き出ししている。その背中をさすってやっている少女も、不相应に大きな黒いマントをかぶっているせいで体力の消耗が激しいようだった。

ソワレは傍らの狼へ囁いた。

「ラグル。あいつら地図を二冊持つてる。一冊いただいちゃってもいいよっていう神様のお告げだよな？」

「うん、ソワレ。早速『キャスト』だ」

キャストとは、ソワレの世界の人間が誰しも持つサイコロを振る行為をいう。

サイコロはだいたい、いついかなる時でも振ることができる。たとえ戦闘中でも、平らな場所が確保できなくても。そのサイコロの出目によって、行動の成果が決まる。この特別なサイコロが導きだすものは、占いなどではない。文字通り、成功と失敗が決まるのだ。

シンプルに言えば、二つのサイコロの出目を足しあわせた数が12に近ければ近いほどよい結果が出る。6のゾロ目、つまり合計が12ならば自動成功、絶対に失敗することはない。逆に1のゾロ目なら自動失敗、結果は推して知るべしだ。こうして振り出した数に固定値と呼ばれるステータス値のボーナス点が更に加算される。

今回のキャストは『知識判定』だ。ソワレは、舟の上の三人組にじっと目を凝らしながらダイスを振る。彼ら三人が、どの程度の能力を持っているのかを確かめるのだ。

出目は、少年が4・6の10、少女が6・3の9、そしてちよつと年上の男が2・2の4というものだった。年上の男の判定は、まず通らないだろう。ソワレはバカだから、知力ボーナスが一点しかないのだ。これはけっこうすごいことだ。もちろん逆の意味で。

「えーとなになに、あのちっこい男がセージ（学者）レベル5、女はセージレベル2のグラップラー（拳闘士）レベル1か。レベルとステータス的にはわりとゴミだな。

で、ちよつと年寄りがよく分かんないぞ。見た目からすると魔法使いだけど」

「がぶつ、ずきつ、ばたーんでいけるかな？」

「数で負けてるからなー。セージ5は無視してもいいだろうけど、それでも2対2か。ちよつと年寄りは判定通らなかつたしなー…」

結局ソワレとラグルは、もうしばらく様子を見ることに決めた。寝込みを襲ってセージ5から地図をこっそりとスリとる方が危険が少ないと判断したのである。

ソワレは胸に取り付けられたバッチをマントごとにぎりしめ、ラグルに囁いた。

「神は、乗り越えられない試練を課すことはしない。それがお約束だぞ」

ソワレの『隠密判定』のキャストはまあまあうまくいった。4・6の合計10点、スカウト技能のボーナスが4点、更に敏捷度ボーナス点が4点あるから、合計18点。足場が悪いためにマイナス2点されて、正味16点。まあまあうまく隠れられた方だろう。

セージ5は、船酔いしていたが、グラップラー1は、虫さされに

悩まされているようだった。あたりを飛び回る蚊や蠅や、もう少し夕チの悪い虫から肌を守るため、真っ黒いマントの内側で蒸し焼きにされながらもマントをとることができないようなのだった。

露出しているところに泥を塗ればそれですむのに。泥はひんやりとしていて気持ちがいいし、虫もよってこなくなるのに。

グラップラーがあまり辛そうにしているので、仕方なくソワレは助けてやることにした。自分が使っているのと同じ泥団子を作って、グラップラーの顔面をねらってぶつけてやることにしたのである。

再度隠密判定を行った上、マングローブの木立を避けて、ソワレは作った泥団子をグラップラーに投げる。ソワレのサイコロは勝手に転がって判定を行った。2・3の微妙な出目だったが、相手はレベルが高くない。

狙い過たずソワレの泥だんごは、グラップラー1の顔面に吸い込まれていった。

「むぎゃっ」

グラップラー1が濁った悲鳴をあげると同時に、判定の通らなかった男がグラップラー1とセージ5をカヌーの底へ突き倒して覆い被さった。

「伏せなさい！」

「花奈！？ 無事っ！？ 顔面無事っ！！？」

3人が混乱している間に、ソワレとラグルは急いで、マングローブを飛び移り、しかし音をできるかぎり立てないようにその場を離れた。そういつたことのコツは、ここ数日で十分得ている。

十分離れたところで再度隠密判定を行い、ソワレはこっそりと3人の様子をうかがった。男があたりの様子をうかがっているのがなんとなく分かったが、ソワレの隠密判定が勝つたらしい。

しばらく3人は警戒の体勢を崩さなかったが、もちろん、それ以上の危険はなく、時間は過ぎていく。

やがて、拍子抜けしたようにゆっくりと警戒の体勢をゆるめていく3人に、ソワレはふふんと鼻を鳴らした。

「このくらいはサービスだぞ！」

「ソワレはやさしいなー」

ラグルが追従した。

グラップラー1は、泥のついた自分の顔を手のひらでぬぐっている。グラップラー1は、自分の顔より泥しぶきのかかったマントのことを気にしているようだった。

「うわー！ どうしよこれ！ ジュノからの借り物なんだけど！

えっ、この泥だんご、どっかから飛んできたよね！？」

グラップラー1はきよきよと周りを見回すが、ソワレとラグルは抜かりなくマングローブの林に、巧みに身を隠している。見つかるようなマヌケはしない。

セージ5は、ソワレの気遣いも知らず、周りの水でグラップラー1の顔にぴちゃぴちゃとよけいなことをやりながら言った。

「動物園のゴリラは気が立ってるとうんちを投げてくるらしいよ」

「えー！！」

グラップラー1はあわてて更にあたりを見回したが、やはりソワレとラグルが見つかることはなかった。

「ゴリラって怖い生き物だなー」

「ほんとだなー」

ソワレが腕組みしてうんうんうなずいていると、隣で狼も真似してうんうんうなずいた。

私たちは三人はリユーナにやってきた。もちろんアジュの彼女を見つけて助け出すためだ。

でも、アジュの記憶はかなりあやふやだった。

彼女と一緒に呼びだされた神殿の内部構造はかなりきちんと覚えていたけれど、出入り口がどこであるかとか、どういふ感じのところにあったかだとかはほとんど覚えていないらしい。

それも当然かもしれない。そこから出たとき、アジュは意識どころか命も危ういような状態だったらしいんだから。

シユツルクには目印になるようなものがろくになかった。一応、アジュがサングリアに拾われたポイントはきちんと記録されていたから、そのへんを中心に、潮の流れも考慮しつつ（それはとても難しい、と後でわかるのだけど）しらみつぶしに探し回ることにした。

……ところで、マングローブ林にゴリラは住めるんだろうか。

私、幹也、アジュの三人組の、目下の疑問はそれになった。

ゴリラのうんこもとい、ぶつけられた泥だんごにはすりつぶされた草が混じっていた。その草はミントよりも強い芳香がある。ぶつちやけくらつとするほどだ。

とにかく、あの泥団子を投げつけられた場所から距離を取る。狙われても気づけなかった、投げた相手が見つけれなかったことが原因だ。そんな場所にとどまるのは、とにかく危なっかしくて仕方ない。

幹也は私の顔面からこそげとった泥と草のかけらを指で確認したあと、船の外へぴんとはじきとばした。

「この草なんだと思う？ 明らかにわざと混ぜこんであるよね。毒草かな？」

「ええー！ やめてよー！」

うんこの次は毒だという。私は慌ててもう一度、顔をよく洗う。「大丈夫ですよ花奈さん、ハーブの一種のようです。毒ではありません。泥も、ただの粘土です。糞でも何でもありません。害はありませんよ」

フオローを入れてくれたのはアジユだ。幹也は目つきを険しくした。ただでさえ船酔いで顔色が悪いから、ちよつと怒った顔をするだけでかなり人相が悪くなっている。

「害？ 害がないって？ アジユ、それ本気で言ってる？」

どこのどいつが意味もなく泥だんごを一個だけ投げつけて、それだけで満足してその場を離れるの？ 理解できないね。何らかの他意があるでしょ、絶対」

「…これ以上、鉦の姫に関して探るなという警告である可能性は？」
「だとしたらさういぶん生ぬるい」

そこで私はすつと片手をあげて発言した。

「ねえ、ほんとにゴリラが投げてきた可能性は？」

「すみません花奈さん、今真面目な話をしているんです」

「うめん…」

私は仕方なく黙った。

ややこしい話は苦手だ。指のささくれたところをひっかきながら、私はぼんやりと、今いるマングローブのトンネルの先を見つめた。

私たちが今いるのは、マングローブ林のまっただなかだ。

マングローブの細い根っこはぐねぐねうねり、水面と泥へ突き刺さって、複雑に絡み合っている。

どこからどこまでが一本の木なのか分からないほど鬱蒼と茂ったこのリユーナのマングローブ林には、実は細いトンネルがいたるところに作られている。

もつれたネックレスのようなマングローブの枝や根を、折ったり切ったり縛ったりして、どうにか小舟が通れるように作られたトンネルだ。太くても幅4メートルくらい、細ければ舟が一艘かろうじて通れるくらい。たぶん海賊がぐいぐい押し通って作った『道』だろう。

複雑にうねり、枝分かれするトンネルは、どこへ続くかも分からない。どこにも続いていないこともある。マングローブの枝葉をはいながらやつとのことでも、どんどん細くなっていつて、いつの間にかトンネルが終わってしまうのだ。そういうときは、引き返すのにも難儀する。

まっすぐ舟を進めているつもりでも、マングローブの道はわずかに蛇行していたりしている。道を造った海賊の、方向感覚を失わせる工夫なのか、それとも生きた迷路が自然に生み出す効果なのか。

サンゴリアの技術の粋を集めたという重力魔法系の魔具……地図上の現在位置を正確に指し示すという針をアジユは持たされていたけど、これがなかったら間違いなく、遭難していただろう。

そういう現実的な問題をまるっと差し引いてしまえば、きれいな場所だ。マングローブが茂りに茂っているせい、水はそんなにきれいじゃないけど、ぷりぷり太って分厚いマングローブの葉の隙間から真っ青な空が透けて見え、目にまぶしい。

こんな、水上の迷いの森と呼ぶのにふさわしい場所であれば、森林浴を思いっきり楽しむところなんだけど。

私は大きなあくびを一つした。幸い、幹也もアジユも気づいていない。

アジユが持つてる方の地図は、アジユの魔法の針がひっかいた傷がある。

もちろん地図にはマングローブの道がどうなってるかまでは書いてないから、現状、さほど役には立たない。もっとよくこの迷路を巡ってみればだんだん使える地図になっていくだろうけど、それにはかなり時間がかかるだろう。

しんどい旅になりそうだ。

私は船縁にもたれかかり、揺れる水面へ目をやった。あんまりケンケンガクガクと議論を戦わせて息を荒らげると、またげろげる吐く羽目になるって幹也もたぶん忘れてる。

と、そのときだった。私の視界の端の水面にふっと、黒い影がよぎる。

「！」

私は慌てて顔を上げた。あたりには葉擦れの音と、幹也とアジユの声しかない。あの水面に映った鏡像の実体はどこにもない。

でも、間違いない。にごった水面に映った影しか見えなかったけど、あれは真っ黒い獣の毛並だった。

私は興奮して幹也の服をぐいぐい引っ張った。

「幹也！！ 今、ゴリラ！！ ゴリラが通ったよ！！」

「ごめんね花奈、おやつあげるからちよっと黙っててね」

「ほんとだってば！ ゴリラが今！！」

「花奈」

「……………」

幹也のポケットからキャンディーが一つ取り出される。私は仕方なく、キャンディーの包み紙を剥がして口に入れた。

幹也はまたアジユの方へ向き直る。

「……………なんで泥だんごなんだろっね？」

あんなものを投げつけるより狙撃でもした方がよっぽど簡単だし、犯人の安全も確保されるよ。

ただの泥だんごじゃ長い距離は飛ばないし、そもそもこれだけマングローブが密集している。あの泥団子はよっぽど近くまで近寄ってきて、ぶん投げたってことになる」

「……………狙撃するほどの、悪意はなかったのでは。……………むしろ、よかれと思って忠告したとか……………」

「…警告じゃなくて、忠告ねえ……………そうだね、その線ならまだ目がありそうだ。」

……………でも、誰が、何のために？ 仮に鉦の姫の関係者がやったことだとしたらよ、鉦の姫のことは機密扱いで……………たとえば葉介にしたって、直接の世話係とその土地の責任者、後はゲルダガンドのトップしか知らない。アジユの彼女のことについて、警告できるような人間がいる？」

「鉦の姫とは無関係の人物のしわざ……………と、おっしゃりたいのですか？」

でも、鉦の姫とは無関係の人間が私達に、いったい何を忠告するんです？」

「……………。……………仕方ない、心配ではあるけどこの件は保留にしよう。とにかくさっきの場所からもうちよつと離れて、警戒も怠らないようにして……………」

で、アジユの彼女を探そう。とにかくアジユの彼女が捕まっている、神殿の入り口さえ見つけてしまえば、こんなゴリラもどきが潜む森からも脱出できるんだし」

今後の方針が決まったらしい。

私はふてくされるのをやめて口の中のキャンディーを噛み砕いた。アジユがうなずいて、話しだす。

「分かりました。では、とにかく体を伏せ気味にして…」

「神殿の入り口？」

それを遮ったのは、小さな女の子の声だった。

「…!？」

私は反射的に顔を上げた。そして私のすぐ目の前に、私をじつとのぞき込む、逆さまの、泥まみれの生首が…

「ぎゃああああああ!!!!!!!!!!」

認識した瞬間、身も世もなく私は絶叫した。なんとというか、脊髓反射的な絶叫で、止めようがなかったけど、生首もびっくりしたらしい。生首もぎゃつと小さな悲鳴をあげ、ごどんと重たい音をたて、カヌーの真ん中へ胴体ごと転がり落ちてくる。

「ぎゃあああああ……ああ？」

私の悲鳴は尻つぼみになっていく。落ちてきたのは生首じゃなかった。普通の、生きている女の子だ。背中に剣を二本さして、体中泥だらけだっただけを除けばだけど。

「うぐう……受け身判定失敗……」

どうも、マングローブの枝に両足首をひっかけて、体だけずるつとおろしてきていたみたいだ。背中をしこたま打ちつけたらしいその女の子がうめくと、もう一つ絶叫が上から振ってきて、汚れた女の子に覆い被さる。

「ソワレええええ!!」

どすんと落ちてきたのは真っ黒の獣で、舟は定員オーバー、転覆寸前のありさまだ。

「……えーと」

突発的な事態に弱い幹也が、一生懸命状況を整理しようとしている中、とりあえず、という感じでアジユが、あのクラージユを縛り上げたアジユの故郷の魔法、葉っぱの鎖を出してきて一人と一匹を拘束する。

何にせよゴリラは自ら正体を現したのだった。

「やー、さつきは悪かったぞ。おまえ達があんまりいっしょーけんめー的外れなこと考えてるから、つい油断しちゃってなー」

葉っぱの鎖から解放された女の子はてれてれとはにかんでみせた。正体は、よく見てみると小学生くらいの小さな女の子で、年齢は見た目十歳くらい、言葉遣いはそれよりもっと幼い。

うす茶色の髪をショートカットにしている、泥の隙間から見える肌は日焼けして赤くなっている。まどつているのは胸と首、太股を覆う革の鎧とかざりけのないシャツとごわごわのスボン、背中には剣が二本、背中にはマント、腰にはベルト、ベルトにはずらっと、小さなナイフやなんかのツールが取り付けられていて、指には紫色の石の指輪、腕には緑色の石の腕輪がはまっている。

背負っているのが剣じゃなくて銃なら、そのまんま少年ゲリラと言ってもなんら問題ないような、ものすごく怪しい格好だ。もう慣れてきたけど。

ちなみに伴っていた動物は、ゴリラではなく狼だった。狼とはいっても、この女の子ぐらいなら乗せて走れそうなくらいの大きな狼だ。ほかの動物に例えるなら、熊ぐらいってところだろうか。

女の子は葉っぱの拘束から解かれると、細長い小舟の真ん中で、狼と自分の紹介をした。

「ソワレだ。こっちは、ソワレの相棒のラグルリング。ラグルって呼んでるぞ」

「ラグルリング……………」

私と幹也は顔を見合わせた。リングの音には聞き覚えがある。ナルドの本名、ナルドリングだ。ナルドについているリングは『九十八番目の』という意味だったはずだけど……………。

そういうのも踏まえて、ソワレのとりとめない供述内容をまとめるところとなる。

ソワレは、『ラクシア』という世界の『冒険者』だった。ある日突然、この世界にワープしてきて、変な神殿で変な奴らに取り囲まれ、訳の分からないことを要求された。

不気味だったので逃げ出してきた、目下潜伏中である。ラグルリングという名の狼は、逃げ出して来てから知り合って、友達になった。ラグルリングと同じ名前のおかげときわ変な神官はいたが、そいつは知らない。

「…ねえ、幹也…」

「……………うん…」

「……………」

聞き終わると私たちは顔を見合わせた。

典型的パターンとっていい。異世界から拉致、無茶な要求、不気味なやつら。そして人の言葉をしゃべる狼を伴っていて、その名はラグルリング。

ソワレが、リユーナで逃げ出したという鉦の姫の正体と思っただけで間違いないだろう。

ただソワレが葉介ともアジユの彼女とも違うのは、ソワレは自力で逃げ出してきた、という点。

アジユが半殺しにされた上、アジユの彼女も自力で脱出してこないあたりから考えるに、相当警備が厳しいんじゃないだろうか。

そこらへんの疑問点をつつくと、ソワレはこともなげに、どこからともなくサイコロを取り出して見せた。

「それはソワレが、もともと隠密に向いてたからだ。『達成値』も高かったし」

「達成値……？」

「『隠密判定』の達成値は、この六面ダイスを振って、スカウトボーナスと敏捷度ボーナスをプラスして算出するんだ。この値より高い『危険関知判定』の達成値を出されなければ、どんな相手から見つかるとはないんだぞ」

「……………」

実は、私にはソワレの言っていることが少しだけ分かる。『クトウルフの呼び声』だとか、『LAST NIGHT on EAR TH』だとか、ダイスを使って遊ぶゲームがあるとは知っているのだ。

ソワレが言っている、判定方法なんかのややこしい理屈はさておき、ざっくり言ってしまうえばダイス目で行動の可否が決定するということは一致している。

よく分かんないって顔をしている幹也のために私はソワレに確認してみる。

「……………えーと、要するに、運任せの魔法みたいなもの、ってことだよな？」

「ソワレがしてるのは魔法じゃなくて単なる判定だけだな。想像を越えた結果があるところは、お前から見たら、魔法

かもな？」

つまり想像を越えた結果を出しまくり、サイコロ二つの結果に頼って逃げ出してきたということらしい。

分かったような、分かんないような、微妙な顔をしている私たちに、ソワレは首をこくと傾げて見せた。

「なあ、ソワレの話はこくらへんにしていいか？」

お前らは、神殿で捕まってる奴を助けに来たんだよな。その方法って、ソワレも助かるか？ 元の世界に帰れるか？」

アジユはすぐにも話したそうとしたけど、幹也が手を出してすと止めた。私は幹也の服をつんつん引つ張る。幹也もうなずいた。

黒い狼ラグルリングはソワレの『 鉦脈の従者』だ。

私と幹也は、従者が鉦の姫に対して示す異常な執着を知っている。ソワレの話が正しいなら、既にラグルは人間の姿のときに一度、ソワレに拒絶されている。そのためラグルは自分を狼の姿に変え、改めてソワレの元に姿を現したのだろう。

そうまでしてソワレのそばにいようとしたラグルが、ソワレが元の世界に帰ろうとするのを素直に見送るだろうか。

私は、鉦の姫の従者は『主人の命令には逆らわない』けれど『主人の意に沿わないことをしない』わけではないと、ナルドを見ていて知っている。

ここは様子を見ながらちよつとずつ、こっそり伝えるのがいいだろう。

私と幹也の様子を見ていて、含むところがあるのをアジユは察し

てくれた。アジュは注意深くこう答える。

「……少なくとも私の場合に関しては、帰る当てがあります。その手がソワレさんにも使えるかどうかは運次第、というところですが、ひとまず話を聞いてもらえますか？」

この続きは幹也に託してくれた。幹也は一つうなずいて、ソワレに話し始める。私はじっとラグルの様子を観察することにした。

「単刀直入に言うと、ソワレは君のある能力を利用するためにこの世界に呼び出されたんだ。なんとか鉦脈、って言葉を聞かなかった？」

「……百銅鉦脈……ってなんとか言われたような気がするぞ……」

「なるほど。じゃあ君は、銅を生み出す能力があるってことだ」

ソワレは目をまん丸くした。

「ええー！ ソワレそんなこと出来ないぞ！」

「出来るようになった、というのが正しいかな。君がこの世界にいる間だけ、君の気持ちにあわせて、君の知らない容器から鉦物を湧き出させるという力だから。ここまではいい？」

「……………たぶん」

「たぶん見たと思うけど、君を呼び出した人間はとても大きな刺墨を入れていたはずだ。これが目印になる。そいつは世界と世界をつなぐパイプの入り口みたいなもので、君が自分の世界に帰れるかどうかは、そいつとの交渉次第ということになる」

「……………なるほどなー」

ここは分かっただらしい。ソワレはじっと考え込むそぶりを見せた。ラグルはしっぽをゆったり振りながらソワレをじっと見つめている。獣の表情は読めないけど、少なくとも取り乱している感じではない。

幹也は続けた。

「俺たちは、まあ……平たく言えば、アジュの彼女を取り返しにいこ

うと思つているところだ。でも、この通りの迷宮だからね。探しあぐねているところ。なにか質問は？」

「いっこ」

ソワレは挙手した。

「お前たちは、入り口が分からなくて困つてるのか？ それとも戦力的に強行突破できなくて困つてるのか？」

きた。

私たちはいつせいに息を呑む。ぶっちゃけ、ソワレがこれを出すのを待つていたのだ、私たちは。

アジュが、期待しすぎて後でがっかりしすぎないように、でもどうしても期待してしまう、というような、感情を殺しきれない無表情でゆっくりと言った。

「……もちろん、入り口が分からないので、困っています。戦力のことには心配していません。あちらに何らかの不確定要素さえなければ十分勝てる敵です」

なら、とソワレは言った。

私たちが待つている台詞がすぐそこまで出かかっていると分かる、満面の笑みで。

「アジュの女が捕まつてるとことは違つかもしんないけど、ソワレが元々いた神殿の入り口なら、ソワレ、ちゃん覚えてるぞ」

The 5th Attack!! 3 (前書き)

大変お待たせしました。再開します。

交渉は成立した。

ソワレは神殿への道を私たちに教える。

アジュはソワレが元の世界に帰れるように手助けする。

ソワレが知ってる神殿が、アジュの彼女が捕まってる神殿じゃないくつても、文句は言わない。

条件はこんな感じだ。

私たちは舟をそのへんにくりつけていったん捨て、ソワレたちと同じようにマングローブの木をよじのぼった。

というのも、ソワレが独自に作っていた地図というのが、樹上専用のものだったのだ。

元々ソワレが、木登りが得意じゃないラグルでも通れるような、太くてもがっしりした枝ばかりを使っていたから何とかなったけど、そうじゃなかったらたぶんアジュや幹也は体重オーバーで使えない道だっただろう。

ソワレは身軽に前へ後ろへ飛び回り、私やアジュに道を教えたり、運動神経がぶつつん切れてる幹也が、最後尾でもたもたするのを助けたりと大活躍だ。ソワレの目はきらきら輝いていて、めっちゃくちゃ生き生きしている。

「ソワレ、なんか生まれたときからここに住んでみたいだね」

私がいじみいじみそう言うと、ソワレはにこっとしてこっちを見た。

「そうかもなー」

自分の膝を枝から枝へ渡し、ラグルの足場として使わせながらソ

ワレは、んーと、と何事か思い返すそぶりを見せた。

「ソワレ、山で育ったんだ。だからサバイバルはなれてるぞー」

「……山で育ったからサバイバルに慣れてるってすごい理屈……」
幹也が息をせえせえさせながら、もの言いたげにソワレを見つめる。小学生くらいの女の子の方が元気いっぱいにしているので、なかなか弱音が吐けないんだろう。

ソワレはくるっとこちらを振り返って、きよんとした表情を見せる。

「だって、誰かがいつも食わせてくれるわけじゃないだろ、山じゃ。二日にいっぺん、牛乳を届けてくれるオババがいたけど、ほかは全部自分一人でしてたぞ。猪を狩ったり、野草摘んで食ったり、盗賊と、それを討伐しにきた冒険者をもろともに罠にかけたり」

「……それ、私の知ってる山と違う……」

「ソワレがちいさーい頃は、村のやつらが何度も連れ戻して村で育てようとしてくれたらしいんだけど、ぜんぜん記憶にないんだ。ちよっと目を離れたすきにすぐ山に戻ってるもんだから、あきらめたって言ってたなー」

「……サバイバルに慣れてるってレベルじゃないだろ……」

「……帰りたいなー」

隙間隙間でぶつぶつ入れた私と幹也のつつこみなんか物ともせず
に、ソワレはふと遠い目をした。

「ソワレ、きほん一人で生きてたけど、一人じゃつまないぞってことを教えてくれたやつらが、元の世界にいるんだ。あいつら、ソワレがいなくて絶対困ってる。早く戻らないと……」

戻らないと、と言いかけたソワレは、突然下を見下ろして、しっ、と小さな息を齒の隙間から押し出す警戒音を発した。

どきっとした私が思わず身を固くしていると、ソワレ一人がする

するとマングローブの木から降りていき、音もなく着水した。水かさはいつのまにか減っていて、今はソワレの膝の少し下程度だ。

「ソワレ？」

「到着だぞ」

アジユがソワレの後を追って、水面に足を浸す。ソワレはすつと手を伸ばし、ひときわ大きいマングローブの根本を指し示した。私も木を降りてのぞき込む。

一見、大きさ以外、他のマングローブとどこも変わらないように見える。だけど、じっと見つめていないと分からないくらいの流れが、根本の奥のよく見えない方へ滑り込んでいた。

「まず、ソワレから行くぞ。一人ずつ順番に來い」

ソワレは言うが早いか、まず自分のマントを肩から外して小さくまるめて抱え込むと、素早く根本へ滑り込む。するとすぐ、小さな水音と同時に姿が見えなくなった。ラグルも当然のように根本に身を沈め、消える。

そして、戻ってこない。

「……………どうする？」

まだもたもたして木の上にいる幹也が、ちらっとこっちを見る。

私は一瞬だけ考えて、決めた。

「私が行くよ。で、次が幹也で最後がアジユ。これでいい？」

別に危険はないはずだ。この奥が少しでも危ないんだったら、ラグルがソワレを止めていただろうから。でも念のため、運動系がダメの幹也を真ん中にする。アジユは大人だから、精神的に一番しんどいところを負ってもらおう。

「……………まあ、妥当かな」

幹也は小さくため息をついた。ここで、俺が先に行くって駄々をこねちゃよくないって、幹也はちゃんと分かっているのだ。アジユも

文句を言わずにうなずいた。

「ソワレさん達が先に行きましたから何事もないと思いますが、どうかお気をつけて」

私はマングローブの根本へずるずる這いずり込んだ。ジユノから借りたマントが、べしゃべしゃに汚れていく。舟に置いてくればよかった、と思っても最後の祭りだけだ。

ちなみに、黒曜軍の駐屯地から持ってきたランドセルは、サンゲリアの花菱の駐屯地へ置いてきてある。花菱へ繋がる携帯用の転移門をアジュが持ってきているから、身軽なものだ。何か必要になったら、取りに戻ればいいんだから。

だから元々、野宿するつもりすらなかったのだ。こんなところで塩水まみれになるなんて思いもしていなかった。

ソワレとラグルがどこに消えたかは、その後すぐに分かった。

木の根っこの奥は、落とし穴があったのだ。はいはいしていた私の手がすこんと滑り落ち、続けて私自身も、悲鳴をあげる間もなくどぼんと穴へ落ちる。

一瞬パニクリそうになった私を穴の中から引っ張ったのは、ラグルの大きな口だ。ラグルはにごった水の向こうでさらに私をぐいぐい引っ張って、穴のさらに深い方へ誘導する。もしかして、このまま水死させるつもりなんじゃないかと疑いながらも、私はなす術なく穴の奥へ引きずり込まれていった。

水中移動にはものすごく邪魔なマントに妨害されながら、やっとのことで息が通ったのは、それから三十秒後くらいのことだろうか。ラグルはにわかには浮上して、私をぐいぐいと水面へ押し上げた。

「……………ぶはっ」

生臭い空気が胸一杯に吸い込まれる。せき込みながら見回した世界は、もうマングローブ林じゃなかった。真つ暗い、なにも見えない世界だ。ただ、私の足下……今通ってきたばかりの落とし穴のトンネルの方から、かすかに光は漏れてきているけど。

ちょうどそのとき、マッチを擦る音がして、ぼつと小さな明かりが灯った。その明かりが、ソワレの顔とその手元のランタン、そして周囲をほんの少しだけ照らす。ここは、泥と、岩に囲まれた、暗い地下洞窟だ。私はその洞窟の小さな池にぶかぶか浮いていた。

小さなランタンに火をつけ終わると、私と同じようにびしょぬれの姿をしたソワレは私を見て、一言つぶやいた。

「だからマントはしまっとけて言ったのに」「言つてないっ!!」

私は間髪入れずにつっこんだ。そこは嚴重に抗議しとかなきゃいけない。

濡れたマントはのけぞるほど重かったけど、私は苦勞して水たまりから洞窟へ這い上がる。

ラグルは既に、もう一度水たまりの向こうへ潜水している。次の人を迎えに行ったのだろう。狼の姿だけあって、肺活量は人とは比にならないようだ。

池の上でぎゅうぎゅうマントを絞っていると、下からぶくぶくあぶくが浮いてきて、その後すぐに幹也とラグルが浮かび上がった。た。

「……ぶはあつ、げほつ、ぐほつ」「大丈夫？ 幹也」

私は幹也のベルトをつかんで、幹也が水から上がってくるのを手伝った。少し水を飲んだらしい。きつと、私と同じように不意をつ

かれて、なす術なくラグルに引きずり込まれたんだろう。どんくさいとはとても言えない。ラグルはほんの少し息を吸い直ただけで、また水中トンネルへ戻っていく。

ひとしきりせえせえ息を荒らげ終わると、幹也はちょっと困った顔をソワレに向けた。

「ねえ、何でラグルは落とし穴の中に潜んでたの？　まるで理解できないんだけど」

「びっくりさせてやろうと思ったんじゃないか？　ラグルってけっこうおちゃめだぞ」

その茶目っ気のせいで、こっちは生きた心地がしなかったんだけど。

ソワレはまるめてあった自分のマントを広げて、軽く水気をきると、いさぎよくパンツ一枚の姿になった。あわてて幹也が背中を向けたのも間に合わないくらいの早業で、ソワレはマントを体に巻き付ける。

「花奈、お前もこーしとけ。体が濡れてるのはよくないぞ」

「そーだね……」

もうつつこむのも面倒になってきた。

アジユも池から飛び出してくる。

「こんなところに、こんなものが……」

地下水路の秘密にじゅうぶん驚き終わった後は、水をぼたぼた滴らせる自分たちの顔を見合わせた。まずは全員服を乾かさなくちゃいけないことに気づいたのだ。

私は幹也にジユノのマントをカーテンみたいに広げておいてもらって、その陰で服を脱いだ。下着も一回絞ってからまた元通りつけ直し、上からマントを羽織る。

もちろんただただ待っていてもなかなか乾くものじゃないので、

久々にレンジでチン魔法を披露した。思い出したのはなかなか偉いと思う。ずっと使ってなかったし、勉強もさぼっていたから。水分中の電子をぐるんぐるん動かして対象物を加熱するという、私が唯一使えるあの魔法だ。

水じゃなくて『湿っているもの』を温めたのは初めてだったけど、まあまあうまくいった。まあまあというか、魔法自体はかなりうまくいった。減点だったのは、生乾きの洗濯物をパワーアップさせた臭いと、焦げ臭い臭いがしたこと。この魔法じゃあ雑菌を何とかできるわけじゃないから、これはさすがに仕方ない。焦げ臭いのもまあ、どうしようもないし。

とりあえず自分の着てた服で練習したあと、私は他の人たちの服も乾かしてあげることにした。あいかわらず、生臭いし、焦げ臭い。

私が一生懸命電子の小刻みなダンスを応援している間に、ソワレとアジユ、幹也は作戦会議を始めた。ソワレはいち早く水気を飛ばしたラグルで暖をとりながら、アジユは剣の水気を拭いながら、幹也は濡れた髪をうざったそうに引っ張りながら、の作戦会議だ。

「どうだ、アジユ？ お前のいたこと合ってるか？」

「いえ……今の時点では何とも言えませんね。私の放り出された記憶のある場所からして、だいたいの位置はあっていると思うのですが……」

「でも、こんな地盤の緩そうなところに行くつも作ったりしないでしょ、神殿なんか」

「……確かに。本当に神を祭っているなら別ですが、ここは神殿とは名ばかりの、女性を閉じこめておくための施設です。いくつも作る必要はないでしょうが……」

横で聞いていると、幹也の説はお気楽すぎ、アジユの説は私怨が

混じりすぎのように思える。が、実際に私の勘も、ここがビンゴだ、
と言っていた。ソワレはにこつとこつとして言う。

「ま、人がいることは確かなんだ。いざとなればそいつをゴーマン
してやればいいぞー。こことアジュのところが別のところだったとして
も、さすがに近所にある神殿の位置と内情くらい、わかってるだろ
ーからなー」

「ゴーマン？ ……拷問？」

さすがに私は、疑問符付きで話に割って入った。いくら少年ゲリ
ラ風であるとはいえ、小さな女の子であるソワレの口からあまりに
も非日常的で不穏な言葉がでてきたので、聞き流せなくなったのだ。
集中が途切れたせいで、電子のダンスはあつという間に止まって
しまった。暴走するよりは遙かにマシだけど。

ソワレはこともなげに頷いた。

「釘があるからなー」

そして、彼女にとってはほんとに何てことない話だったのか、さ
つさと話を元に戻してしまう。 ……追及するのはやめておこう。た
だの比喻表現かもしれないし。

ソワレとアジュは地面の泥に、内部の地図を描いて互いに見比べ
てうんうん二人でうなずき合っている。それが終わると、ぱつと私
と幹也の方をみてソワレはにやつと笑った。

「ここまでおつかれさんだぞ。じゃ、ここで二手にわかれよーな」

The 5th Attack!! 4

幹也と、アジュ。私と、ソワレと、ラグル。

これが二つのグループの組み合わせだった。

アジュとソワレ、それぞれゲットしなきゃいけないアイテムも目的地も違うから、二手に分かれるのは、戦力は分散しちゃうけど仕方ないことだ。

運動神経の切れてる幹也は、それをフォローできるアジュに。鉦の姫について多少知識のある私は、何にも分かってないソワレとラグルについて、ということになる。

アジュは、アジュの彼女と器、それに異世界への出入りを司る神官をゲットしなくちゃいけない。ソワレは、器と神官だけでいいけど、アジュはちょっと大変だ。生きてるはずの人間を、生きたまま奪還しなくちゃいけない。

それを思えば、私たちのミッションはまあまあポッシブルってところだろうか。メンバーの脳味噌の皺が、揃いもそろって少なめなのが不安だけど。

なぜか……というか、たぶん鉦の姫の従者が持つ特技なんだろうけど、進むべき方向がばっちり分かってるラグルの案内に従って、アジュチームとソワレチームは別々の道を行った。

私たちが進むのは石造りの神殿だ。とはいえ、たとえばパルテノン神殿みたいな綺麗な神殿じゃない。

右も左も上も下も、ゼーンぶ灰色の石造り。壁に彫られている女

の人のレリーフが、かろうじてちよっぴり神々しさを演出してるだろうか。天井は低くてせいぜい2メートルちよっとしかないし、道幅はせいぜい私とソワレが並んで歩くのに支障がない程度。灯りも壁がぼんやり光っているだけで暗いし、じとじと湿っぽいし、とにかくやな感じだ。ソワレやアジュが神殿だって言うから、私たちも神殿と呼んでいるだけで、神殿っぽさはほとんどない。アジュが『女性を閉じこめておくだけの施設』なんて言ってたのは、もしかしてこのせいだったんだろうか。

何もかも、ラグルの言うとおりにすればよかった。

ラグルは今神官がどこにいるかも、器がどこに保管されているかも全て分かっていた。たぶん狼に変身したおかげで、嗅覚が発達しているからだろうと思う。元々住んでいただけあって、良い隠れ場所も知り尽くしていたし、人の足音にも敏感だ。一応スニーカーキングミッションだけど、はっきり言ってかくれんぼより緊張感はない。すっごく楽ちんだ。

だからこそ、怪しかった。

ラグルは鉾の姫の従者にしては、あまりにも物わかりが良くソワレをサポートしている。こんなに私たちをナビしても、ラグルにとってはまるでメリットがないにも関わらずだ。

だって、仮にここで捕まってしまうえば、私やソワレは困るけど、ラグルにとっては願ったりのことのはずだ。ソワレは自分の世界に帰らずに、ラグルと一緒にいることになるんだから。

葉介に対するナルドの様子を見ると、どうもそこらへんがしっくりこない。鉾の姫の従者は……少なくともナルドは、自分の鉾の姫のことをとっても大切に思っていて、一分一秒も離れたくない

って思ってるはずだ。それは、他の鉦の姫の従者も同じなんじゃないかな。

元々は人間の姿をしていたらしいラグルが、狼の姿になってまでソワレのそばにいたのに、どうしてソワレを元の世界に帰す手伝いをしてるんだろう。

それがどうにも怪しく思えてならなくて、私は結局ラグルに直接聞くことにした。まさかとは思うけど、ソワレもろともに罠にかけているという可能性も、なくはないからだ。

「ねえラグル、ほんとにいいの？ 神官と器を見つけたら、ソワレは自分の世界に帰っちゃうんだよ？」

廊下の先頭を歩くラグルに、ひそひそ声で話しかける。

でも、返事したのはソワレだった。

「ラグルはソワレと一緒にラクシアへついてくるんだもんない」
「ない」

ラグルも軽く振り返って、犬歯をむき出しにした。……………こわいんだけど、これって笑ってんのかな。

「ついてくるって……………大丈夫なの？」

私はますます心配になって、今度はソワレにひそひそ聞いた。

確かに私も、ナルドと知り合ったばかりの頃は、ナルドが葉介のお嫁さんになってくれれば、かわいい義妹ができて良いな、って思ってた。でも、今の考えは少し違う。

鉦の姫の従者は、人間とは根本的にどこかが違う。千変万化の变身能力を持っていて、男にも女にもなれるし、人間でも竜でも、狼の姿だって、たくさんある形態の一つにすぎない。従者は、その姿を変えることに何のこだわりも持っていない。

そういう生き物である鉱の姫の従者を別の世界に連れて行っただとして、その世界に従者の生きる場所はあるのだろうか。

少なくとも、私はもうナルドを日本に連れていこうっていう気持ちは無い。ナルドと葉介が結婚するとしたら、葉介の方がゲルダガンドへお嬢に行くしかないと思っっている。

だって日本には、ナルドの考え方を理解している、ジュノみたいな存在はない。

ただでさえ自分の見目形すらかなぐり捨てられる従者を自分の世界に引き連れてなんて行ったりしたら、それこそ鉱の姫は、従者に対してお返しできるものがなくなってしまう。従者の気持ちは重すぎる。

葉介にナルドの愛情を受け止める度量があつたか。答えはノーだ。ソワレにラグルの愛情を受け止める度量がありそうか？ この答えもノーだ。

ただでさえソワレは、ラグルを一度拒絶している。ラグルはソワレを愛してるのに、幼女のソワレはラグルを全く意識していない。このままラグルだけが我慢し続けたら、ソワレもラグルも不幸になる。

そういう私の考えを、ソワレもラグルも全く汲んでくれなかった。「俺とソワレはずーっといっしょなんだ！」

「なー」

ラグルのしっぽが、目にも留まらぬ速さでぶん回されている。

「でも……」

私は言いかけたけど、それをラグルの声が遮った。

「何かを返してほしいわけじゃない。どうなったってかまわない。

俺はソワレと一緒にいる」

「……………」

だからそれがまずいんだと、どういふ風に説明したらわかってもらえるんだろう。

これは勘だ。ここしばらく葉介とナルドを見ていて、十七年間女の子として生きてきた私の勘だ。だから確かな言葉にして、説得する術がない。

今、こんなに無邪気にしているソワレだっていつまでも子供のまじじゃない。もう一年、二年もすれば、胸が膨らみ始めるだろう。三年、四年したらもう恋だつてする。その相手はきつと、人間の姿を捨ててしまったラグルじゃない。そしたら、ラグルはいつたいうなっちゃんだろう？ そのときラグルにはもう、なにも残っていないのに。

絶句した私をよそに、百銅鉾脈ソワレとその従者ラグルは、目的地にたどり着いてしまったようだった。

ラグルがあるドアの前で立ち止まり、ソワレを見上げた。心得たソワレはドア側の壁に張り付いて、まずは鍵穴にポケットから取り出した小さな鏡を当てた。鍵はかかっていなかったらしい。ソワレは音も立てずにドアを薄く開く。そして、その隙間にも鏡を差し込み、室内の様子をうかがう。

鏡の角度を何度か変え、部屋全体を見渡した後、ソワレは一言もしゃべらないまま、私に鏡を顎で示して見せた。そつと私も鏡をのぞき込んでみる。

ランプの灯りしかない薄暗い室内に、だぶだぶした服を着た男が一人いた。男は机について何か書き物をしているらしい。皮膚の露出は少ないが、彼の右頬を、ジユノと同じように、黒い文様が覆っているのがちらっと見えた。

私は頷いた。たぶん、これだ。

ソワレもうなずき返す。そして、喉は使わずに口をぱくぱく動かすだけで私に指示を出す。

『花奈は最後に入ってドアを閉める』

言うが早いのか、ソワレの二刀流が火を噴いた。

先頭のソワレはまずドアを大きく開き、疾風のように室内へ駆け込んだ。

そして、隙は多いが機敏で力強い動きで、神官に飛びかかる。そのときソワレの小さな体は二倍ほどに膨らんだように見えた。

遠心力と引力とを加速に使い、ソワレは抜き放った剣で神官の腹を殴りつけた。血しぶきは上がらない。剣って実は鈍器に近いらしい、みたいなことを幹也が言っていたのを、私は思いだしていた。

ソワレのサイコロが転がる音は、合計四回聞こえた。ソワレの右手で一撃、左手の一撃が立て続けに神官を吹き飛ばし、壁にたたきつける。聞くに耐えない、大きな音と共に神官が崩れ落ちたところへ、ラグルが飛びかかった。唸りもせず忍び寄った狼は、神官の頭に噛みついて、やっと悲鳴を上げ始めた彼を激しく揺さぶった。

ここまでが、私が部屋に入ってドアを閉めるよりも早く、行われたことのすべてだ。

あまりの手際よさにあっけにとられるしかなかった。ソワレは更に剣を油断なく神官に向けながら、厳しい声音でラグルに問いかける。

「ラグル、もっかい確認だ。ほんとにこいつで合ってるか？」

「うぐ」

ラグルは頷いた。噛みつかれたままの刺墨の神官がまた悲鳴をあ

げる。

ラグルの答えを聞くや否や、ソワレは石の床に突き飛ばされた神官に素早く歩み寄り、神官の唇を上下につまんだ。そして、ポツケから取り出した細いもので、そのつまんだ上下の唇を突き通した。

「うごおお」

体を覆う黒の刺墨と、さながらアフリカの方の原住民っぽい感じになっている。痛みあまり、うめき声すら上げられないようだ。

痛そうだし暗いしでよく見えないけど、どうも彼の唇にピアスされたのは、長さ7センチ、太さが2ミリくらいの、何の変哲もない、ありふれた釘らしい。意表をつかれる釘の使い方だった。

床に突き倒されているせいで、唇からあふれた血が込み上がってきたらしい。鼻からも黒いものを少量吹き出させながら、神官は必死に呼吸している。唇はほとんど動かせないようだ。くぐもったうめき声が聞こえる。

「ここらへんで、私はさすがに目を背ける。スルーだ、スルーしよう。」

「よおし、一言もしゃべるんじゃないぞ。ソワレはおまえの刺墨に用があるんだ。ソワレにとっておまえの生き死には、刺墨が自分で歩くか、歩かないか、その違いしかないんだからな。」

「いいか？ わかったか？ ならよし。ソワレが家に帰ったら、おまえは用無しなので解放してやる。いやがった場合は用無しなので殺す。わかったか？ 復唱はしなくてよし」

ソワレのいつそほがらかな言葉が耳に痛い。

「ソワレ、けっこう大きな音がした。もしかしたら人が来るかもしれない」

ラグルの小さな声に急かされて、ソワレはうなずいた。そしてかわいそうな神官の鳩尾に一撃入れ、とうとう動かなくなった彼を、

明らかに自分の体重よりも重たいのに、小さな両肩に担ぐ。

そして、機敏に私を見上げてソワレは言った。

「よし、このまま巻いてくぞー！」

この手口でソワレとラゲルは手際よく、『百銅鉞脈』の器である赤銅のゴブレットも奪取した。

彼女を奪還したアジュと幹也が私たちとあのマングローブの根本の洞窟で合流し、サンテリアへ転移したのは、神殿に進入してから一時間も経たないうちのことだった。

「助けてくれてほんとにありがとう。幹也君、花奈ちゃん、ソワレちゃん、ラグル君。それにサビアンさん、バルバトさん、プラネタ君」

はにかみながら私たちの名前を一人一人呼んで丁寧に挨拶してくれたのは、鎖骨くらいまでの灰色の髪を行儀よく巻いていて、濃い董色の瞳を持っていて、すっげかわいくて今まで会えなくて名前も言えなくて、もしかして想像上の存在にすぎないかもしれないかったアジユの彼女こと、メイロウだ。

歳は23歳だそうだけど、メイロウにはほつぺたにかかっている髪の毛方を、くるくる指でいじる癖があつて、その幼い仕草がメイロウを若く見せている。髪と目の色さえなんとかしたら、うちの高校の在学生って言っても十分通じるくらいだ。

手には小さな刃のパーツを何枚も組み合わせた、鞭みたいにしなる不思議な剣。ついたばかりの血しぶきが目にまぶしい、真っ白の全身鎧。

もじもじしている仕草があまりにも初々しいせいで、余計に、変な形の武器や血しぶきがガチなものだと伝わってくる。

幹也の話によれば、メイロウは神殿のある一室で死んだように眠っていたそうだ。仰向けのお腹に乗せたアメジストのボウルからは、小粒の同じ貴石が、ゆっくりとした速度で湧き出ていたという。

目を覚まして、適正な装備を身につけたメイロウに敵はなかった。

もしかしてメイロウに『鉾の姫の従者』がいたんなら話はややこしくなっていたかもしれないけど、『紫晶鉾脈』の従者は、歴史の中で絶えてしまっていたそうだ。

彼女は起き抜けとは思えないほどの大活躍で、ソワレと同じように刺墨の神官を見つけ、悠々と拉致ってきたんだそうだ。ちなみにその拉致ってきた神官は二人とも、顔面にずだ袋をかぶせて簀巻きにし、刺墨を隠した状態で捕虜部屋に転がされている。

「えへへ、アジュさん。アジュさんアジュさんアジュさん。アジュさんアジュさん。私のアジュさん？ ……私のアジュさん！ うへへ」

アジュは意味もなくアジュの名前を呼んでは幸せそうにしているメイロウの手をにぎにぎしてあげて落ち着かせながら言った。

「メイロウさん、まず着替えましょう。プラネタさんがお湯を用意してくれています。積もる話はそれからでも」

ときどきメイロウが血染めの戦装束のまますり寄って甘えているせいで、最初は血がついていなかった彼の聖衣もつつすら赤く染められてしまっている。いやな光景だ。

「ソワレは積もる話より山積みメシがほしいぞ！ あったかいスープ！ ふかふかの白いパン！ 冷たいレタスのサラダ！ 絞めたてのコンビーフ！」

絞めたてのコンビーフって表現がよくわからないけど。必要以上に赤そうでイヤだそれ。

「ソワレさん、食事は服を着替えて手を洗ってからです。

女性は隣のテントで服を着替えてきてください。…ソワレさん、着替えは持っていますか？ メイロウさんの着替えは用意がありますから…」

「私はアジュさんのシャツを着るから平気だよ！ アジュさんのシ

「ヤツくんかくんかえへへいやん照れちゃう」

「あの、メイロウさん？　お願いですからそういうの、二人きりのときにしてもらっていいですか？　発言内容もどうかちよっと控えめにしてもらって」

「ソワレ知ってるぞ。こういうのをダメな大人って言うんだ」

勝手気ままにやり始めた鉦の姫たちは、水びたしの装備を解くためにテントを出ていく。私も二回に渡る潜水で水びたしで、生臭い着替えるついでにお湯を使わせてもらうことにし、二人の後を追おうとすると、アジユはふと私を呼び止める。

「あ、花奈さんは少し待ってください」

私はうんざりして立ち止まる。パンツまでじとじと湿っているのに、それを無視しても解決すべき問題が、今ここにあるとは思えなかった。

と、口で言っても分かってもらえるかどうか微妙だったので、私はただ黙って、ソワレたちの方を指さす。隣のテントへ入っていくソワレ、メイロウの後ろを、ラグルが当然のような顔をしてついていくところだ。

「うわ。……ラグルさんやめてください。うちのメイロウさんもいるので」

「わー！　やめろーはなせー！　……うわーんソワレー！　アジユがいじめるー！　！」

アジユが慌ててラグルを、あの葉っぱの拘束魔法で取り押さえている隙に、私は隣のテントへ滑り込んだ。テントの中には清潔そうな白いシャツの着替えが畳んで置いてあって、隣に私の古いランドセルが転がしてあった。部屋の中には薄青い陶器のたらいが重ねて積み上げられ、白いタオルがたくさんと、石鹸。その側には大きなポットが五つ。どれも口から湯気を細く吹き上げている。

私は、まずたらいを山から一つとり、どんどん水浸しの服を脱いで積み上げていった。べたべた肌に張り付いて脱ぎにくいことこの上ない。ブラをはずすと、その隙間から藻がまざった水がだばーと落ちる。万事そんな感じだった。

そのうちメイロウとソワレも、ラグルのさみしげな泣き声をBG Mに、テントへ入ってくる。

メイロウは入ってくるなりまっさきに着替えを確認してつぶやいた。

「あつ、これアジュさんのシャツじゃない！ ……わーん期待してたのにー」

「……………」

私やソワレとは違った意味で、メイロウもちよつとおかしいらしい。私とソワレは顔を見合わせて、さつさと着替えに戻った。先にすっぱんぼんになってしまった私は、たらいへ三本タオルを広げ、上からお湯をたっぷりかける。熱い湯気を頬に感じたとき、私はやっと、自分の体がすっかり冷えきっていたのに気づいた。

「あー、さむかった」

タオルをぎゅつと絞りながら私がつぶやくと、ソワレもしみじみと返事する。

「ちゃんとお湯が使えるの、何日ぶりだろうなー」

「ソワレちゃん、背中拭いてあげるよ。花奈ちゃんもこつちおいで。ダメな大人モードから戻ってきたらしいメイロウが、素肌にタオルを巻き付けた姿でソワレを呼んだ。

「髪も洗わないとね。この石鹸、髪の毛洗ってもいいやつかな？」

お姉さんぶつた口調でメイロウが石鹸のにおいをくんくん嗅いでいる。においじゃ分かんないと思うけど。

「ソワレが試してやるぞー」

つるつるぺったんこの全裸をいさぎよく晒したソワレが、お湯を

たらいにどぶどぶ流し込む。そして、もうもつと湯気をたてるお湯のたらいへ勢いよく頭を突っ込んだ。

「うぎゃっ、熱い！ 熱すぎだー！！」

「あ、ちよつと待って待って」

私は慌ててソワレのたらいの、お湯の電子運動を抑えた。レンジでチンする魔法のときの反対だ。電子の動きが静かになると、熱はどンドン冷めていく。

軽くやけどして赤くなった顔と首に、今度は注意深くお湯をつけたソワレは、石鹸を直接こすりつける。

「うひゃー、きしきしする！ すっごいきしきしするぞー！！」

「でも、洗わないわけにいかないもんね。どうしよう、あとでなにか髪の毛につけるものを貰えると良いんだけど……」

「あ、ゲルダガンドまで行けばシャンプーもトリートメントもあるよ。私、自分の世界から持ってきたの」

お湯につかれたら最高なのに、と思っただけど、さすがにそこまで贅沢は言えない。

日本へ戻ったら久しぶりに幹也と葉介と三人で、お風呂に入ってみようかなと思しながら、私は髪をたらいへ垂らし、お湯を髪へ注いだ。

私たち三人がさっぱりした服を身につけて、靴も借りて、元のテントへ戻ったのは、一時間くらいした後のことだ。そこでは、誰かがこそこそした声で何か話していた。

『……………?』

『……………』

『絶対にお断りだね!』
くぐもってよく聞き取れないけど、幹也が珍しく声を荒らげているのはよくわかった。

前に立っていたソワレを押し退けて慌ててテントに飛び込むと、いつも温厚な幹也が目をらんらんと光らせて、アジュやサビアンを睨みつけていた。怒り狂っているときの幹也だ。幹也は着替えもまだ全部すんでいなくて、新しく着ているシャツのボタンが、一つかけ違えられていた。

「幹也!」

私はすぐに飛びついて幹也をぎゅっとして、幹也をアジュたちの視線から隠す。そうすると、幹也はほんの少しだけ落ち着きを取り戻したようだった。

押し殺した声音で幹也は忌々しげに言った。

「……………俺と花奈の仕事はここまでだ。そこまでアジュやサングリアに肩入れしてやるつもりはない」

「なに? 一体どうしたの!?!」

私が幹也を抱きしめたまま肩越しに振り返ると、サビアンが軽く視線を落としているところだった。

「……………確かに出すぎた事を言った。今の話は忘れてくれ」

「いやだ、絶対に忘れない。絶対に絶対に死んでも忘れない」

「どうしたの、幹也? 何か言われたの?」

「花奈は知らなくて良い」

私はそーっと幹也の顔をのぞき込む。何か屈辱的なことを言われらしい幹也の目には、うっすら涙が浮かんでいた。

一体なにが起こっているのかわからなかったけど、なによりもまず、幹也をなだめてあげなくちゃいけなかった。幹也が知らなくていいって言うんなら、それはほんとに、知らない方がいいことだ。

私はもう一回振り返って、アジユやサビアンに言った。

「よく分かんないけど、幹也に謝ってよ」

「申し訳ありません、幹也さん。あつかましいお願いでした」

すぐ、アジユが頭を下げた。サビアンも、どこか悔しそうな顔をしながらもこう言う。

「………すまない、ミキヤ。どうか怒りを収めてほしい」

「やだ」

幹也の返事はすげない。

「やめなよ幹也。……ごめん、アジユ、サビアン。幹也ってわりとこういうところがあって」

幹也の数多い欠点の一つだ。幹也は賢すぎて、自分の理論で動きすぎるところがある。自分が腹を立てていても、また、自分のせいでも他人が腹を立てていても、おかまいなしになって自分の殻に閉じこもってしまう。心が狭いのだ。

それでも、私が丁寧に幹也のかけ違えたボタンを留めなおしてあげると、幹也は少し落ち着いたみたいだった。

「あんた達がこれ以上むちゃくちゃを言わなければ、これでひと段落ついたってことになる」

幹也は言った。

サングリアは、ゲルダガンドの豊富な宝石の在処の秘密と、アジユの彼女……『紫晶鉱脈』を手に入れた。サングリアは戦争のせいで、今まで宝石の輸入に支障があったらしいけど、これからメイロウ達が自分の世界に帰るまでの間、今までゲルダガンドが握っていたアメジストに関わる利権のすべてを奪い取れたことになる。それにメイロウが帰った後も、鉱の姫の秘密の対価に、葉介のルビーを含む宝石の何パーセントかを与えられることになるだろう。

こうしてサビアンは十分な利益をあげ、サングリアの皇太后に対する顔を立てながら、戦争をとりやめることができる。

ゲルダガンドは、サンタリアが使った『屍人兵』のことを、世界中に黙っていてあげることにしたらしい。

たとえばゲルダガンドの『鉦の姫』云々のことは、異世界人である私たちからしてみれば確かにひどいことだけど、このグラナアーデの国々には少しも迷惑をかけていない、無関係のことだ。ゲルダガンドが、この世界の国々から責め立てされるいわれはない。

でも、屍人兵のことは別だ。死人を重力魔法で無理矢理動かして戦わせていたサンタリアは、このことが知られたら世界中の国々から大バッシングを受けるだろう。そうなったら、もうゲルダガンドとサンタリアの、二国間の争いにはとどまらない。サンタリア対グラナアーデの、大戦争に発展する。

互いの弱みを握りあい、腹の底をさぐり合いながら、血の流し合いは終わり、その後徐々に、何十年もかけて関係がよくなっていく。それが戦争の終わりというものだ。

…と、というようなことを、ぐすぐす泣きながら幹也は言った。よっぽど言われたことが悔しかったらしい。

私たち…というのは、私とソワレ、メイロウって意味だけど、この三人は別れ別れになる前に、たくさんおしゃべりをした。

自分達の世界のこの話が、一番楽しかった。

ソワレの世界では、色とりどりの鱗を持った陽気な竜人が闊歩していて、ソワレのパーティーメンバーにも、一人、竜人がいるのだという。『トカゲ先生』というのがそのあだ名で、竜人にしては陰気だけど、賢く、優しく、なによりも『堅い』んだそうだ。ソワレはそのトカゲ先生の体によじのぼって、あたりを見回すのが好きだと

いう。

メイロウの世界にも竜人はいる。同じく色とりどりの鱗を持っていて、ほんの数年前はある誤解のせいで彼らとメイロウ達は戦争をしていたけれど、今ではとても仲良しで、いったいどうして戦争なんかしていたのか、覚えていない人も多いという。

私も、戦争がそんな風にして終わればいいと思う。

ちなみに日本には竜人がいないので、私はPSPの自慢をした。実物を見せられないのが残念だ。

ソワレはサビアンから、履くと水の上でも歩けるようになる靴とか、いろいろ面白いものをおみやげにせしめて、一足先にラグルと一緒にソワレの世界へ帰った。ソワレを待っている人がいるのだ。ラグルのことは心配だけど、ラクシアでソワレを待っている『トカゲ先生』達が、ラグルの理解者にもなってくれることを祈るしかない。

「あの神官の皮を、刺墨がついてるところだけうすく剥いで、絨毯にしちゃえばいいんだ。そうすれば、ソワレも花奈もメイロウも、サングリアを中継地点にしていっだって会えるぞ！」

なんてソワレは言っただけで、さすがに人間の皮の絨毯はご遠慮だ。いつまでも神官を縛り上げておくわけにはいかないし、ソワレとはこれですつと、お別れかもしれない。

アジュとメイロウは、もう少しの間サングリアに残ると言う。アジュはサングリアに対して返さなくちゃいけない借りがあり、メイロウはアジュがいるならどこだって天国なんだそうだ。

アジュ達のいる『同盟』は、仲間を殖やすことに心血を注ぐ国風で、殴りあってでも友達を増やすのが大好き、というところだそう

だから、ゲルダガンドとサングリアの仲立ちも、うまいことやってくれるかもしれない。……そうだといいんだけど。

私たちはゲルダガンドへ帰ることになった。幹也がもう、サングリアにはいたくないって言ったからだ。幹也は言い出したら聞かない。

ソワレとラグルを見送ると、私と幹也はサングリアの駐屯地、ラブラリアを後にした。

来た時と同じように原付にまたがって、サビアンの手紙を携え、行きよりはすこしスピードを出して、何の目印もない荒野を何時間もかけて走る。するともう水浸しになり始めたシュツルクが見えてくる。ジュノのマントを風にはたはためかせ、メイロウのアメジスト、ソワレの銅鉱石をポケットに入れて、私は幹也の肩から行く手をじーっと見つめる。

私たちは葉介のところに帰るんだ！

The 5th Attack!! 5 (後書き)

花奈はランドセルをラブラリアに忘れて行きました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4186m/>

66% Attack!

2011年12月11日00時47分発行